



競輪補助事業

平成22年度

シニアネット構築研究会

シニアネット・フォーラム21 in 東京 2011

◇シニアネット・さらなる飛躍を目指して◇

【報告書】

平成23年3月

財団法人ニューメディア開発協会

はじめに

今や65歳以上高齢者の人口が2,946万人、全人口の23.1%を占めるに至っております。これが、25年後、2035年になりますと33.7%になるということで、3人に1人が高齢者という時代がやってくるということになります。

こうした高齢社会にあつて、旧通商産業省は長寿社会対策及び情報化施策である「メロウ・ソサエティ構想」を提唱し、高齢者が情報技術（ICT）を活用して、いつまでも生き生きとした生活を送るとともに社会のために活躍できる『高齢者自立型・参加型情報化社会』の実現を目指して参りました。

当協会は、「メロウ・ソサエティ構想」を実現するため、長年にわたつて様々な事業に取り組んで参りましたが、この「シニアネットフォーラム 21」は「シニア情報生活アドバイザー養成事業」等と共に、同構想実現のための当協会が取り組んでいる主要事業であります。

高齢者が数の上でメジャーとなる時代では高齢者のパワーが社会を変えていく、と言つても過言ではありません。高齢化がますます進む今後は、まさに「高齢者こそ新しい文化を創り」、社会の主役として様々な形で社会を牽引していくことが求められて参ります。

世の中が急激に、かつ大きく変わろうとしている今こそ、高齢者の方々も、ご自身の意識や生活様式等自らの生き方を見つめ、自ら変革していく中、まさに「新しい公共の担い手となる」ことが肝要です。

そうした中、自己実現の場を求め得意のICTを駆使して社会のお役に立ちたいとする高齢者同士が集い、高齢者へのICT講習はじめ様々な社会参加活動を活発に展開している「シニアネット」が全国諸地域で活動しております。その高い理念や活動実績等を見るにつけ、「シニアネット」こそ、まさに「メロウ・ソサエティ構想」実現の担い手であり、高齢者の新しい生き方や新しい文化創出を具現化する担い手であると確信致しております。

シニアネットは、高齢者に“地域デビュー”を促し、多くの仲間と共に実り豊かなシニアライフを送るとともに、これまで培ってきた知識・技術・経験等を活かして再び社会に参加出来る機会をもたらしております。また自治体等との協働（コラボレーション）も積極的に展開し、地域の情報化促進や街づくり、地域振興等に欠かすことの出来ない強力なパートナーとなっております。高齢者にとって、地域社会にとってなくてはならない、極めて意義深いものであります。

当協会は、こうした「シニアネット」が全国津々浦々にあつてシニアが生き生きと活躍している姿を創出していくことが急務と考え、経済産業省や財団法人JKA、全国のシニアネット諸団体のご協力を得て「シニアネットフォーラム 21」を開催して参りました。

そこで、昨年に引き続き「シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011」を東京・神宮外苑の地で開催し、シニアネットの一層の普及と更なる活動の飛躍を図りました。

統一テーマ「シニアネット・さらなる飛躍を目指して」のもとに、基調講演、特別講演、パネルディスカッション、ワークショップ、特別セミナー、シニアネット交流広場で構成し、激しく変化する社会にあつて、高齢者の生き方、シニアネットのあるべき姿そしてシニアネットの更なる飛躍と普及拡大について参加者全員で考える場と致しました。

定員を上回る多くの方々のご参加を得、熱心な議論と深い交流がなされるなど、お陰様で大変

有意義なものとする事が出来たものと思っております。

この事業の成果を皆が共有し、広く活用し、シニアネットの普及、発展に貢献できることを願っております。そして、これらの活動を通して地域の振興に貢献できれば幸いです。

平成 23 年 3 月

財団法人ニューメディア開発協会



目次

はじめに

1. 開催の主旨	1
2. 実施要項	2
3. プログラム構成のポイント	2
4. 実施状況	9
5. まとめ	9
6. プログラムの詳細	
主催者挨拶	11
来賓挨拶	13
基調講演	
講演1「シニアの更なる飛躍を期待する」	15
講演2「テクノロジーの進化と新たな展開」	33
特別講演「シニアネットの2010年代の飛躍に向けて ～10年の節目に将来を展望する～」	42
パネルディスカッション	51
ワークショップ	
テーマ1「社会に目を向けた自己実現へ」	82
テーマ2「ICTを学び地域を活性化させる」	91
テーマ3「コミュニティ・ビジネスを創出する」	99
テーマ4「企業・行政との協働で地域に活力を」	110
テーマ5「シニアネット間の交流による相互支援」	118
特別セミナー「進化するICTを安全につかっていただくために」	125
シニアネット交流広場	138
クロージングセッション	144

付属資料

1. 開催の主旨

<高齢化社会の到来>

現在、我が国は65歳以上の老年人口が約2946万人、人口比率で23.1%となっており、71歳以上が11.2%を占めています。さらに20年後には、65歳以上の人口が31.8%を占めるであろうと予測されており、高齢化が進みつつあります。

高齢者が数の上でメジャーとなる時代になり、高齢者が社会の主役として、新しい文化形成の担い手としてさまざまな形で活躍されることがますます重要となって参ります。そこでは、高齢者の方々自身の意識や生活様式等自らの生き方を変えていくことが大切になっていくのではないかと考えられます。

<シニアネットの活躍>

そうした中、好きなICTを生かして充実したシニアライフをおくりたい、そして少しでも社会のために役に立ちたいとする高齢者同士が集う「シニアネット」が各地にあって、高齢者へのICT講習を行い、長年培ってこられた知見・ノウハウやICTを駆使して地域に還元し、仲間と共に楽しく、生き生きと、地域に根差したさまざまな活動を展開しております。

シニアネットは、高齢者に“地域デビュー”の機会をもたらす、シニアライフを豊かで楽しいものにするなど、高齢者の生きがいの創出に大きな役割を果たしております。そして、少子高齢社会にあって、高齢者の持つ豊かな知識・技術・経験等は、自治体等と協働（コラボレーション）することで、地域の情報化促進はもとより、街づくり、地域振興等に大きく貢献するものであります。このようにシニアネットは、高齢者にとっては勿論、自治体・企業の方にとっても重要な組織であると言えます。

<「メロウ・ソサエティ構想」の実現を目指す>

当協会は、旧通商産業省（現経済産業省）が提唱された「メロウ・ソサエティ構想」の実現を目指すにあたり、こうしたシニアネットの活動は極めて重要で、欠くべからざるものと認識し、シニアネットを強力なパートナーと位置づけ、連携を強化して参りました。さらに、シニアネットが全国津々浦々、至る所にあつて、高齢者が生き生きと活躍している、そうした姿を創出していくことが急務と考えております。

その為、シニアネット普及・拡充を図るべく、これまで経済産業省や財団法人日本自転車振興会（現財団法人IKA）のご指導、ご支援を得る中、シニアネット諸団体等と協力しあつて「シニアネットフォーラム21」を全国で開催して参りました。

<「シニアネットフォーラム21」を東京で開催>

この度は、シニアネットの活動10年目の節目をむかえるにあたり、「シニアネット・さらなる飛躍を目指して」と題し、「シニアネットフォーラム21 in 東京 2011」を東京で開催することにし、シニアネットのより一層の普及と活性化を図ることに致しました。

既にシニアネットに加わつて活動されている方々は勿論、「地域デビューをしてみたい…」 「シニアネットに参加したい…」 「何か地域のために活動してみたい…」 等々お考えの高齢者や団塊世代の方、そして「高齢者と協働して施策や事業に取り組みたいが…」とお考えの自治体や企業の関係者の方など、幅広い分野の方々にご参加頂き、熱い議論と交流を通して、シニアネットのあり方を考え、活力ある高齢社会の創出につながる有意義なものにしていきたいと切望しております。そして、参加された皆様の今後のご発展につなげて頂ければと思います。

このフォーラムがきっかけとなって、シニアネットの普及・拡充と活性化が一層加速され、高齢者の充実したシニアライフや豊かな高齢社会の構築に貢献できれば、これに勝る喜びはありません。

2. 実施要綱

(1) 日時

1 日目：平成 23 年 2 月 17 日（木）10：30～17：15

2 日目：平成 23 年 2 月 18 日（金）10：00～16：15

(2) 会場：日本青年館

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町 7 番 1 号

(3) 主催：財団法人ニューメディア開発協会

(4) 後援：経済産業省

(5) 協力：(五十音順)

株式会社シマンテック

NPO 法人自立化支援ネットワーク

株式会社デジブック

日本マイクロソフト株式会社

(6) 定員：約 200 名

(7) 参加費：無料

(8) 参加対象：

- ・シニアネットへの参加や新規設立等シニアネットに関心のある方
- ・シニアネットのメンバーの方・団塊の世代の方
- ・シニア情報生活アドバイザーの方
- ・自治体で高齢者問題やコミュニティ・ビジネス、NPO 活動推進をご担当の方
- ・企業で社会貢献、シニアマーケティング、バリアフリーなどシニア向け商品・サービスの企画開発等に携わっておられる方
- ・コミュニティ・ビジネスやNPO 活動に取り組んでおられる方等々

3. プログラム構成のポイント

開催の趣旨に即し「シニアネット・さらなる飛躍を目指して」というキャッチフレーズのもとに、プログラムを、基調講演、特別講演、パネルディスカッション、ワークショップ、シニアネット交流広場、特別セミナーの六本立てとし、高齢者の、そしてシニアネットの一層の飛躍を図る内容とした。

(1) 基調講演 1

テーマ：「シニアの更なる飛躍を期待する」

講師：秋山 弘子氏（東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授）

我が国の高齢化は急速に進み、2055 年には総人口の 41%が 65 歳以上になると見込まれています。シニアのあり方がこれからの社会を変えていく、と言っても過言ではありません。シニアが主役になって社会で活躍することがますます重要となって参ります。

そうした中、多くのシニアが「シニアネット」に集い、ICT 講習などをはじめボランティア活動に邁進し、豊かで充実したシニアライフを目指しております。シニアネットは、このようなシニアの生きがいづくり、地域の振興に重要な役割を果たしています。「シニアネット」は、大変

有意義な組織であり、シニアが主役で活躍するために、その普及拡大が急務であります。

高齢化社会におけるシニア個人の人生設計というミクロな課題や社会システムに関するマクロな課題に取り組んでおられる学識経験者に、シニアは今後、どう生きるべきか、シニアの社会参加・市民活動の意義などについて語っていただいた。

(2) 基調講演 2

テーマ：「テクノロジーの進化と新たな展開」

講師：加治佐 俊一氏（マイクロソフト ディベロップメント株式会社 代表取締役社長
兼 日本マイクロソフト株式会社 業務執行役員 最高技術責任者）

高度情報化社会が進展する中、ICT はますますシニアの生活に深く関わってきております。シニアにとって、パソコンをはじめとする情報機器、インターネットや電子メールの利活用は今やシニアライフを実り豊かにするものとして日常生活に欠かせない存在になってきております。

そこで、ICT の最前線でご活躍されている専門家より、テクノロジーの進化と新たな展開を紹介していただき、急速な発展を続ける ICT がシニアの生活にいかなる影響をもたらすのか、そしてシニアライフにいかなる夢をもたらすのかを展望していただいた。

(3) 特別講演

テーマ：シニアネットの 2010 年代の飛躍に向けて～10 年の節目に将来を展望する～

講師：吉田 敦也氏（徳島大学 大学院 教授、地域創生センター長）

：大熊 勇雄氏（NPO シニア SOHO 横浜・神奈川 副代表理事）

多くのシニアネットが創立 10 周年を迎えました。この間、シニアへの ICT 普及等地域の情報化や活性化に大きな成果を挙げて参りました。これからはシニアパワーが社会を牽引し、変えていくことが期待され、このような状況の下に、シニアネットもまた進化することが求められております。

そこで、シニアネット等市民活動に大変造詣が深く、自らもシニアネットの責任者としてその設立や運営に関わるなど実証的な研究活動も行ってきておられ、この分野の第一人者であります学識経験者より、この 10 年を振り返り、新しい時代に相応しいシニアネットのあり方について展望し、この後に開催されるパネルディスカッションに対する問題提起をして頂いた。

また、シニアネットが今後進展してゆくことを支援するために必要とされるツールとしての「ポータルサイト」のあり方について提案していただいた。

(4) パネルディスカッション

テーマ：シニアのパワーアップとシニアネットの更なる飛躍を！

（コーディネーター）

吉田 敦也氏（徳島大学 大学院 教授、地域創生センター長）

（パネリスト・五十音順）

井上 文雄氏（NPO 法人仙台シニアネットクラブ 理事長）

臼倉 登貴雄氏（NPO 法人イー・エルダー 理事）

斎藤 富士夫氏（NPO 法人湖南ネットしが 理事長）

佐々木 敏夫氏（NPO 法人あびこ・シニア・ライフ・ネット 理事長）

高橋 克司氏 (NPO 法人とかちシニアネット 理事長)

我が国にシニアネットが誕生して以来、10年余が過ぎ、この間多くのシニアネットが全国に誕生し、各地で地域の活性化や情報化促進等有意義な活動を展開し、大きな成果を収めてきております。少子高齢社会だからこそ、シニアが主役となって地域を盛り立てて行くことが求められている中、多くのシニアが集う「シニアネット」が、その牽引役を担うことが期待されております。

この時期に、過去の10年を振り返り、これからの10年におけるシニアネットのあり方について議論することは極めて意義のある重要なこととであります。

今回は、長期間にわたって各地で活躍されているシニアネットの代表者にお集まりいただき、これまでの経緯を振り返り、次の10年に向けて、シニアは、そして「シニアネット」はどう変わり、どう進化すべきか大いに論じてもらった。

(5) ワークショップ

ワークショップは、以下の通り、テーマ1(自己実現)、テーマ2(ICT普及)、テーマ3(コミュニティ・ビジネス)、テーマ4(行政とのコラボレーション)、テーマ5(シニアネットのネットワーク化)の5つのテーマで構成した。

テーマー1:「社会に目を向けた自己実現へ」

多くのシニアは、地域での活動を通して、シニアライフを豊かで実りあるものにしたいと切望されております。それを実現する場としてシニアネットは大きく期待され、その役割を果たして参りました。

多くのシニアがシニアネットに参加し、生き生きと活動できる魅力あるシニアネット像を皆で考え、実現させていくことは意義深いことと思います。

そこで、我が国のシニアネットの老舗であり全国ネットで活動を続けております「メロウ倶楽部」の元代表より、団体として、また個人としてのお話いただき、シニアが喜んで参加する魅力あるシニアネットとはどのようなものか、今後の姿を探った。

テーマー2:「ICTを学び地域を活性化させる」

シニアネットは、シニア情報生活アドバイザーの養成やICT講習をとおして、地域社会の情報化、とりわけシニアの情報リテラシー向上を促進し、社会に活力をもたらしております。

これまでの様々な活動によりシニアのICT人口は年々増加しているとは言えるものの、残念ながらまだまだ十分とは言えません。シニアネットならではのきめ細かな教え方や仲間同士で楽しく、気楽に学び合える雰囲気をつくるのが、ICT普及に必要な不可欠な存在であります。

シニア情報生活アドバイザーの養成を軌道に乗せ、自治体との協働をはかり、活動を展開しようとしている、「シニアネット水戸」および「茨城NPOセンター・commons」の活動の実情を紹介していただき、シニアへのICT普及はこれからどうすればよいか、より良いICT講習の方法等も含め、全員で考えた。

テーマー3:「コミュニティ・ビジネスを創出する」

永年培ってきた知識・経験・ノウハウや知恵を生かして社会の役に立ちたい、出来る限り生涯現役でいたいというシニアの期待があります。そうしたシニアの強い意向を反映して、コミュニティ・ビジネスを迫及する「事業型」のNPOが増えつつあります。厳しい世情のなか

で、こうした「事業型」NPO への関心はますます高まっていくものの、その実現に高い壁を感じているシニアネットも多くあります。

そこで、「事業型」NPO として多方面の活躍をしておられる「横浜コミュニティデザイン・ラボ」の具体的な活動をとおした問題提起と実践に向けた提言をお話しして頂き、参加者全員で「事業型」NPO やコミュニティ・ビジネスへの取り組み方について考えた。

テーマー4：「企業・行政との協働で地域に活力を」

多くのシニアネットは自ら持てる力をシニアのために、地域のために何かお役に立ちたいと活動を展開しています。シニアネットがその活動をとおして社会に貢献しようとするとき、関係自治体や企業等と協働（コラボレーション）して事業を展開することは極めて重要であります。

一方、自治体にとっても、電子自治体や地域の情報化促進等の諸政策を進める上で、シニアネットやシニアの豊富な経験や優れたノウハウを活用することは重要な要素となってきました。シニアネットの提案を政策として実現することも増えてきており、協働による相乗効果は計り知れないものがあります。

そこで、自治体として積極的に協働に取り組んでおられる「宇治市」から課題を提供していただき、参加されているシニアネットの皆さんと、コラボレーションを一層促進するための方策等を討議した。

テーマー5：「シニアネット間の交流による相互支援」

シニアネットの活動がシニアを元気にし、地域に活力をもたらすものとしてこの 10 年間活動を継続してきました。この間、各シニアネットはそれぞれに努力を重ね成果を生み出してきました。

これからも、各シニアネットは当該団体のネットワーク化をはかり活動を活性化させることは重要であります。これからの 10 年を展望するとき、シニアネット間のネットワークが重要になると思われます。また、このネットワークを介してシニアネットを支援する仕組みを構築することもシニアネットの活性化と進展に有効かと思われます。

「おおさかシニアネット」から課題を提供していただき、コメンテーターの意見もいただき、参加者全員でシニアネットのより良いネットワーク化のあり方について議論をした。

(6) シニアネット交流広場

全国各地で活躍しているシニアネットの活動状況を展示しあい、参加者同士がフェース・ツー・フェースで意見交換し相互交流を深め、お互いの活動の向上に役立てる場とした。また、これまで多くの参加者から大変好評を得ている協力企業のお役立ちコーナーも設けた。21 のシニアネットや協力企業等が出展していただき、参加者同士の熱い意見交換や相互交流が行われた。参加された方にとって今後の活動の参考になることを期待したい。

(7) 特別セミナー

テーマ：「進化する ICT を安全に使っていただくために」

講師：風間 彩氏（株式会社 シマンテック コンシューマー事業部門

リージョナル プロダクト マーケティング、シニアマネージャ）

高度情報化社会が進展する中、ICT はますますシニアの生活に深く関わってきております。シ

ニアにとって、電子メールやインターネットの利活用は今やシニアライフを実り豊かにするものとして日常生活に欠かせない存在になってきております。

しかし、情報機器におけるウイルス、インターネットや電子メールを利用するときに外部よりの攻撃にさらされる機会も増加してきています。

そこで、日々、パソコンやインターネットの安心と安全に取り組んでおられる専門家から、セキュリティに関する最新の情報を提供していただき、今後の技術動向を踏まえながら、安全にユビキタス時代の ICT ライフを送るための示唆をいただいた。

プログラム

2月17日(木) 日本青年館

10:00～10:30	受付	
10:30～10:45	開会 オープニングセッション	<ul style="list-style-type: none"> ・主催者挨拶 岡部 武尚(財団法人 ニューメディア開発協会 理事長) ・来賓挨拶 杉浦 秀明氏 (経済産業省商務情報政策局情報政策課 情報プロジェクト室長)
10:45～12:00	基調講演 1	<p>「シニアの更なる飛躍を期待する」</p> <p>秋山 弘子氏 (東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授)</p>
12:00～13:00	休憩(昼食)	
13:00～14:00	基調講演 2	<p>「テクノロジーの進化と新たな展開」</p> <p>加治佐 俊一氏 (マイクロソフト ディベロップメント株式会社 代表取締役社長 兼 日本マイクロソフト株式会社 業務執行役員 最高技術責任者)</p>
14:00～14:40	特別講演	<p>[シニアネットの 2010 年代の飛躍に向けて ～10 年の節目に将来を展望する～]</p> <p>吉田 敦也氏(徳島大学 大学院教授 地域創生センター長) 大熊 勇雄氏(NPO 法人シニア SOHO 横浜・神奈川 副代表理事)</p>
14:50～17:15	パネルディスカッション	<p>シニアのパワーアップとシニアネットの更なる飛躍！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーター 吉田 敦也氏(徳島大学 大学院教授 地域創生センター長) ・パネリスト(五十音順) 井上 文雄氏(NPO 法人仙台シニアネットクラブ 理事長) 臼倉 登貴雄氏(NPO 法人イー・エルダー 理事) 斎藤 富士夫氏(NPO 法人湖南ネットしが 理事長) 佐々木 敏夫氏(NPO 法人あびこ・シニア・ライフ・ネット 理事長) 高橋 克司氏((NPO 法人とかちシニアネット 理事長)

プログラム

2月18日（金） 日本青年館

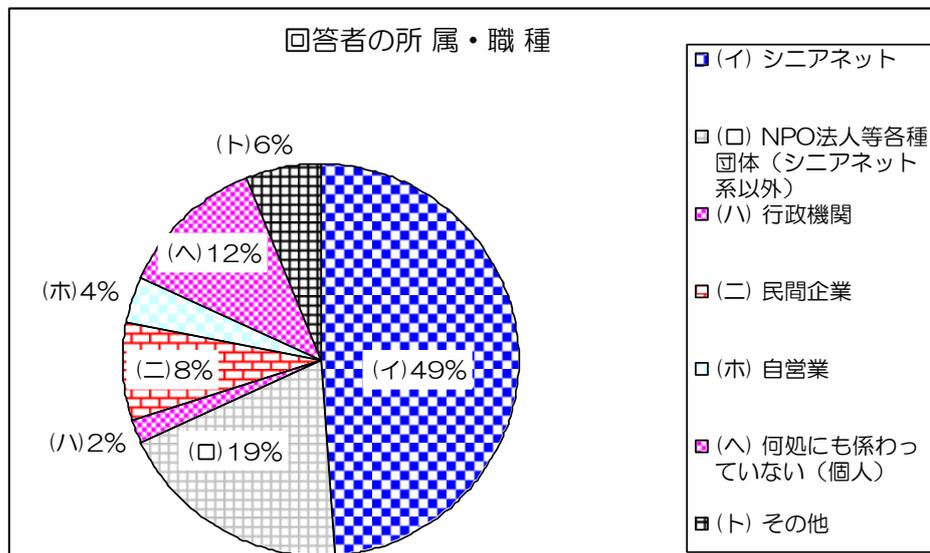
9:30～10:00	受付	
10:00～12:00	ワークショップ	<p>【テーマ1】 「社会に目を向けた自己実現へ」 課題提供者:小池 達子氏(メロウ倶楽部 元会長) コメンテーター:斎藤 富士夫氏 (NPO 法人 湖南ネットしが 理事長)</p> <p>【テーマ2】 「ICTを学び地域を活性化させる」 課題提供者:森田 出氏 (シニアネット水戸 会長 茨城 NPO センター・コモンズ) コメンテーター:金田 和友氏(ダイヤネット 副代表)</p> <p>【テーマ3】 「コミュニティ・ビジネスを創出する」 課題提供者:杉浦 裕樹氏 (NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ 代表理事) コメンテーター:吉田 敦也氏 (徳島大学 大学院教授 地域創生センター長)</p> <p>【テーマ4】 「企業・行政との協働で地域に活力を」 課題提供者:中村 俊二氏(宇治市総務部次長 兼 総務課長) コメンテーター:井上 文雄氏 (NPO 法人仙台シニアネットクラブ 理事長)</p> <p>【テーマ5】 「シニアネット間の交流による相互支援」 課題提供者:中西 建策氏 (NPO 法人おおさかシニアネット 理事長) コメンテーター:高橋 克司氏 (NPO 法人とちぎシニアネット 理事長)</p>
12:00～14:00	シニアネット交流広場 休憩(昼食)	シニアネットの成果展示による相互交流の場
14:00～15:00	特別セミナー	<p>「進化するICTを安全に使っていただくために」 風間 彩氏(株式会社シマンテック コンシューマ事業部門 リージョナル プロダクト マーケティング シニアマネージャ)</p>
15:10～16:10	ワークショップ発表	各テーマの討議内容発表(発表者:各コーディネーター)
16:10～16:15	クロージングセッション 閉会	<p>「総括」 生部 圭助氏(NPO 法人自立化支援ネットワーク 理事長)</p>

4. 実施状況

(1) 参加者

2日間で延べ約320名もの参加があり、定員を大きく上回る結果となり、盛況裡に終えることが出来た。参加者の熱心かつ活発な意見交換や質疑応答がなされるなど、大変有意義なものとする事ができた。

参加者の年齢構成は例年同様61歳以上の方が76%と主力を占め、昨年より4%増加した。本フォーラムの高齢化が進んだ。60歳以下の方の参加が24%あったことは、若い世代にもシニアネットへの関心が高まってきていると見ることができる。



また、今回も自治体関係者の参加は昨年と同じく2%程度と、昨年と同じだった。企業よりの参加者は、昨年の2%から8%に増加している。男女比率は男性84%、女性17%だった。今回初めて質問項目に加えたが、参加者の中でのシニア情報生活アドバイザーの比率は62%だった。

(2) プログラムの実施概要

今回は、基調講演1、同2、特別講演、パネルディスカッション、ワークショップ (5つのテーマについて、5つの分科会に別れて実施)、シニアネット交流広場、特別セミナーの6本柱で行った。

我が国でシニアネットが誕生し約10年が経過したことを一つの節目として、これまでの10年を振り返り、これからの10年に向けて、これからのシニアネットはどうあるべきか、シニアの生き様はどうあるべきかを中心に、皆で考え、議論出来るよう、全員参加型の内容で実施した。

各プログラムの内容については、その骨子を別項に記すこととする。

5. まとめ

① 大変盛況のうちに活発な議論や質疑応答が行われた

当初計画を上回る多くの参加者を得、大変盛況のうちに終えることが出来た。我が国でシニアネットが誕生し約10年が経過し、新しい節目を迎えつつある今日、これからの時代に合った、新しい時代の主役になるべきシニアの生き方やシニアネットのあり方を探る2日間となった。

シニアが日頃抱えている共通する諸問題等について参加者全員が一緒になって考え、全員参加型の内容で実施した。2日間に亘り熱の籠もった活発な議論や質疑応答が行われ、更に深い交流がなされるなど、参加者の積極的な参画により充実したフォーラムになった。

③フォーラムに参加した参加者の意識が高まった

アンケート結果に見られるように、参加した動機としては「シニアネットの活動に生かしたい」、「シニアネットの参加に役立てたい」と答えた方が78%であり、93%の方が参加した結果シニアネットについて理解できた、95%の方が今後の活動や設立・参加のために役立ったとの回答を得た。このフォーラムをきっかけにして、参加者の意識が高まったと見る事が出来る。

④シニアネットは「交流の場」であり「自己実現の場」として期待が大きい

シニアにとってシニアネットが如何なる存在であるかを尋ねた。自分の退職後の活動選択肢の一つ、社会や世界を覗く窓、人的交流の場づくり、他の団体との交流の場、生活環境の一部、今後の社会参加へのツール、自分の持っているスキルを伝えることが出来る良い機会を提供してくれる場、社会貢献の意欲のある人たちのグループ、など、たくさんのシニアが多様なとらえ方をしており、多くの期待を持っていることが分かった。

⑤行政や企業とのコラボレーションへの期待が大きい

シニアネットと行政とのコラボレーション（協働）は地域振興のために、地域の円滑な運営のために、これから益々必要不可欠になっていくものと思われる。自治体等行政側も、諸施策の企画・遂行に当たりシニアの豊富な知見やノウハウ等を必要としてきている。

今回も、フォーラムに参加された自治体等の方にアンケートで問うたところ「協働したい」、「出来れば協働してきたい」と回答された方が76%であった。自由回答の中でも必要性が述べられているが、シニアネットと行政と企業の連携と協働へ期待したい。

⑥全国からシニアネット交流広場への出展があった

シニアネット交流広場の出展数が会場のスペースの制限いっぱい21ブースの参加申し込みがあった。「各団体の実際の活動を一目で見ることが出来、活動の様子が解った」と好評であった。「説明もあったので多くの情報を得て他団体との交流が出来て良かった」との感想も頂いた。良い企画であり「もう少し展示期間を長く、両日開いて欲しい、もう少しスペースが欲しい」とのご要望も頂いた。

今後とも、より充実した深い交流が出来るよう、事務局として参考にさせていただきたいと考えている。

⑦シニアネットおよび「シニアネットフォーラム21」の今後への期待

今回は、シニアネットおよび「シニアネットフォーラム21」に対する期待についてたくさんの自由回答をいただいた。全国的にシニアネット組織の連携が重要、次の世代の育成の為にも、40代や50代への告知も必要、企業でシニアサービスに従事している人とシニアの交流の場づくり、各団体が抱えている悩みなど事例発表のセッションがほしい、フォーラムに一度も参加されていない会の方やシニアネットを名乗っていない同種団体にも目を向ける対策が必要、シニアネットの周知PR・パブリシティへのアプローチし活動の認知度（存在）を広める、地方都市に拠点を作り、このフォーラムに参加できるようにしてほしい。

これらの意見を、これからの「シニアネットフォーラム21」の企画などに生かしたい。

■オープニング・セッション

主催者挨拶

岡部 武尚

(財団法人ニューメディア開発協会 理事長)

「シニアネットフォーラム21 in 東京」の開催に当たり、主催者を代表して一言ご挨拶申し上げます。本年も（財）JKA 殿のご支援をいただき、「シニアネットフォーラム」を開催致しましたところ、この様に大勢の方々のご参加いただき、まことにありがとうございます。また、今回の開催に当たり、経済産業省様からのご後援を頂くとともに、ご多忙のところ商務情報政策局杉浦秀明情報プロジェクト室長様のご出席を賜り、厚くお礼申しあげます。

さて、日本は今、一部で景気に若干の回復機運が見られるとはいえ、全体的には長引くデフレ不況から脱却できずに、国民全体も大きな閉塞感の中にあります。一方、世界の68億人の人口が40年後には90億人へ増加するといわれる中で、日本だけが急速な人口減少と「高齢化」が進んでおります。今や、65歳以上の高齢者の人口は2,946万人と全人口の23.1%に達し、25年後の2035年には33.7%、3人に一人を高齢者が占めるという、世界のどの国も経験したことがない「超高齢社会」を迎えるといわれております。

また、「少子化」の進行と共に、15歳から64歳までの生産年齢人口が今後50年で46%減少するといわれ、今後の経済成長、日本の発展を支えるためにも、シニアがまだまだ第一線で活躍し、社会を牽引していくことが必要です。

このような社会の大きな流れに対応すべく、（財）ニューメディア開発協会では、シニアが、情報技術を活用し、円熟した、生き甲斐のある、豊かな老後を送れ、社会に貢献できるような「高齢者自立・参加型情報化社会」を創り上げるという目標を達成するために、「シニアネット」構想を平成12年以来、進めており、既に10年を超えるまでになりました。既に、「シニアネットの数」は全国で、129団体、シニアネットで養成されている「シニア情報生活アドバイザー」は、資格取得者が4,227名に達し、そのうち、およそ3,000名の方々が全国で活躍しておられます。

シニアネットの活動も10年が過ぎ、既に多くの成果が上がっております。今や、「シニアがメジャーな時代」になりつつあります。シニアの方々が、これまで培ってきた「知識」、「技術」、「経験」を十分に活用して、地域コミュニティの活性化、地域の新しいサービス・需要・産業の創成など、地域の発展のために貢献して頂いております。また、高齢化時代を迎え、多くの高齢者の方々の生き甲斐作りに貢献をされており、シニアネットの活動が今や、しっかりと社会に根付きつつあるといえましょう。



この10年を区切りに、私どもは、シニアネットの役割が次の新たな段階に入り、時代に相応しい社会基盤としてのシニアネットの新しい概念を作ることが必要になったと認識致しております。

次の10年間、さらに新たな目標をもって活動に取り組んでいく必要があります。我々はこれを「シニアネット・ステージ2」と呼び、協会内部の委員会で「シニアネットの新たなあり方」を検討して参りました。シニアを巡る社会環境の変化と期待される役割が高まる中で、シニアの「生き甲斐からやりがい」、「老年でも衰えの知らない社会貢献の担い手へ」、「新しい公共としてのシニアネット」、すなわち住民主導となった社会において新たな公共を作る市民活動の一環としてのシニアネット、その担い手としてシニアが大きな役割を果たすこと等が提言されました。シニアネットは、新たな地域経済・地域コミュニティを創造する担い手として、時代に相応しい社会基盤としての役割を増していくものと思います。「シニアネット・ステージ2」に関しては、このあとの特別講演、パネルディスカッションで検討結果の報告がなされると思います。会場の皆様からも大いにご意見を頂ければ幸甚です。

私共、協会では、シニアネット及びシニア情報生活アドバイザーの方々の連携を強化するために、ネット上にこれまでの情報の蓄積とアーカイブ化を図ったポータルサイト「シニアネット交流広場」を設営致します。シニアネットの「見える化」です。この広場をご利用され、関係者の方々が地域でのシニアの活躍を更に進める上で、お役に立てればと存じます。

さて、本日は、基調講演として、東京大学特任教授の秋山弘子先生とマイクロソフトディベロプメント代表取締役社長の加治佐 俊一様に、特別講演として徳島大学教授の吉田 敦也先生よりご講演いただくことになっております。そのほか、パネルディスカッション、ワークショップ、シニアネット交流広場など盛りだくさんの催し物を用意しております。この二日間にご参加頂いた皆様におかれましては、多くの方々との交流を深められ、この成果を日頃の生活や活動の御参考にされ、厳しさの増す高齢化時代を豊かに生き抜いていただきたいと存じます。

最後になりましたが、各セッションに御出席、お話しをいただく講師の方々、並びに本日の開催に当たりご協力いただきましたNPO法人自立化支援ネットワーク様、シマンテック様、デジブック様、日本マイクロソフト様始め、多くの関係者の皆様に、心より感謝申し上げ、開会の挨拶と致します。

■オープニング・セッション

来賓挨拶

杉浦 秀明氏

経済産業省商務情報政策局情報政策課 情報プロジェクト室長

おはようございます。

ただいまご紹介に預かりました経済産業省商務情報政策局情報プロジェクト室長の杉浦と申します。よろしくお願いいたします。本日は、ニューメディア開発協会主催の本フォーラムの開催にあたりまして、ご挨拶の機会をいただきましてまことにありがとうございます。

経済産業省では、ご存知の方も多いかと思いますけれども、1989年度から高齢者の積極的な社会参加を図るということで、情報システムが人々の生活に溶け込んだゆとりある豊かな高齢者化社会の創造を目指しまして、メロウソサイエティ構想というものこの推進に取り組んでまいりました。

今回のフォーラムのテーマについて先ほど岡部理事長からもご紹介がございましたけれど、「シニアネット・さらなる飛躍を目指して」ということでございます。先ほどご紹介の通り、シニア情報生活アドバイザー制度は、2001年に開始されてから今年で10年目の節目に当たる年というふうに伺ってございます。

アドバイザーの数は先ほどご紹介にありましたけれども、3,000名強の方がご活躍をされているということでございまして、長きにわたる活発な活動もご参加をされておられますシニアネットの皆様、ご関係者、あるいはニューメディア開発協会をはじめとする皆様のご活動のたまものというふうに承知をいたしているところでございます。

この10年間ですけれども、情報技術もご案内の通り、顕著な進歩、普及が進んできている状況でございます。総務庁の調査によれば、インターネットの利用者は、2000年末には4,708万人ということでございましたが、2009年末には、これが9,408万人ということで倍増しているという状況にあります。インターネットを使用する際に利用する端末の多様化が進んでいまして、最近では、スマートホンをはじめとした、タッチスクリーン型のモバイル端末もいろいろと選択の幅が広がってきている状況にあると思います。

ここで、海外におけますシニアネットの活動状況に少し目を向けてみますと、米国のシニアネットは1986年に設立されたということでございますが、米国の場合もちょうど、25年を迎えるという節目の年に当たっているとございまして、全米で、140を超える学習センターがシニアのボランティアの方々によって運営されているということでございまして、そういったセンターで30を超える新しいコンピュータスキルを学ぶようなコースも開設されているということで



ございます。

またシニアネットのウェブサイトを利用したコミュニティも形成されて、活発な活動が行われているということでございます。先ほど、岡部理事長からもご紹介がありましたけれども、「シニアネット交流広場」が開設されるということですので、ますますそういった場で、コミュニティ形成が今後発展していかれるということを期待したいと存じます。

一方、政府のほうでございますけれども、昨年5月にICT戦略本部で、新たな情報通信技術戦略というものを策定させていただいております。この戦略では、情報公開により市民レベルでの知識情報の共有が行われるということを通じまして、国民の暮らしの質を飛躍的に向上させることができるような社会の実現というものを目指しております。そのためには、3つの柱と我々は呼んでございますが、

- (1) 政府内のICT革命を徹底して、国民本位の電子行政を実現する
- (2) ICTの利活用による地域の絆を再生する
- (3) 新市場の創出と国際展開を図る

という3つの柱に絞り込んだ戦略となっております。

この戦略の一環といたしまして、経済産業省におきましても、インターネットの双方向性を活用するというので、積極的な政府情報の公開でありますとか、行政への市民参加を促進する活動ですとか、オープンガバメントの取り組みを進めさせていただいているところでございます。

こうした取り組みにも是非多くの方々のご参加をお願いしたいというふうに望みます。そうした観点からも、今後ともシニアネットやシニア情報生活アドバイザーの果たす役割というのは非常に大きいものと承知しております。

最後になりましたけれども、ご関係各位のご活躍を祈念いたしまして私のご挨拶とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

■ 基調講演 1

「シニアの更なる飛躍を期待する」

秋山 弘子氏

(東京大学・高齢社会総合研究機構 特任教授)

ご紹介にあずかりました秋山でございます。私もシニアでございまして、みなさまにお話できることを楽しみにして参りました。本日は長寿社会の課題と可能性、そしてシニアネットに対する期待をお話しさせていただきたいと思っております。

1. 急速に進む日本の高齢化 ～長寿社会へ～

【急速に進む高齢化】

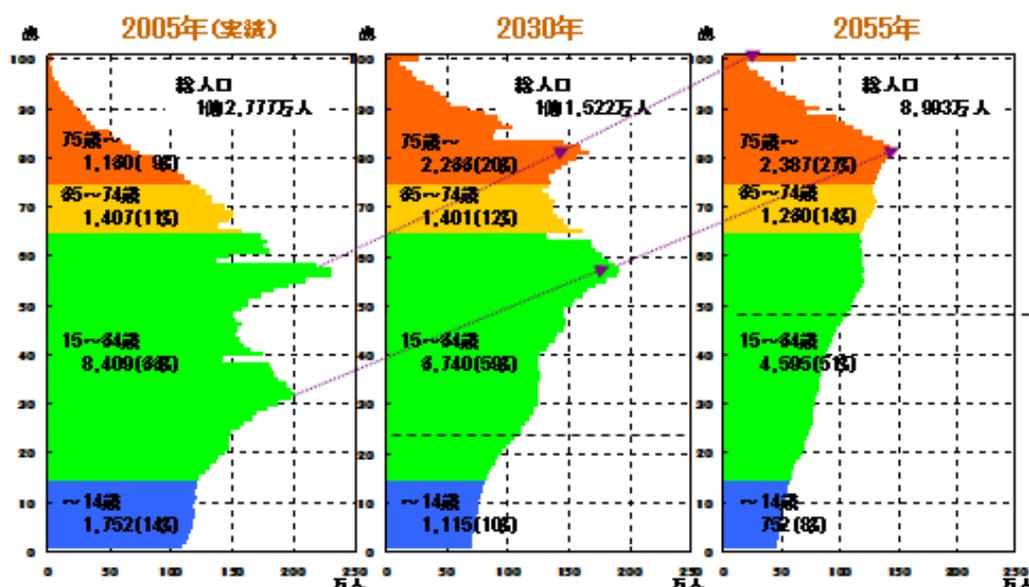
このグラフは日本の総人口の年齢構成です。色々なところでご覧になるかと思いますが、両端が2005年と2055年、真ん中が2030年、これから20年先の話ですが、この時には日本の総人口の約3分の1が65歳以上のシニアによって占められ、75歳以上の人口が2割を占めるということになります。

このグラフを国際学会などで見せると、どよめきが起こります。本当なのか、日本はどうするのだろうかということですが。日本は世界最長寿国で、20年先にはこういう事態になりますが、他の国、例えば中国やインドのような今は比較的若い国でも、少し遅れて同じようなことが起こります。ですから、日本は世界の最長寿国として、こういう人口構成における社会のニーズにどのように対応していくかというモデルを作る役割を課せられているわけです。



高齢者人口の高齢化

—平成18年中位推計—



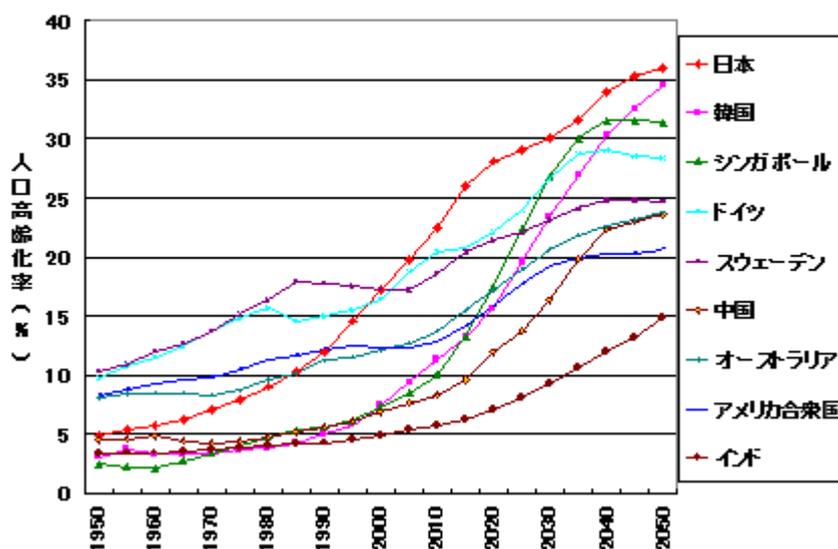
注：2005年は国勢調査結果、総人口には年齢不詳人口を含むため、年齢別人口の合計と一致しない。

2

【注目されている日本の対応】

このグラフは1950年から2050年にかけての国際比較で、縦軸が人口の中で高齢者が占める割合です。2000年あたりから日本が断トツに人口の高齢化が進んでいて、トップランナーとして走っています。アジアの他の国の人口も急速に高齢化しているわけです。ドイツやスウェーデンは、もともとアジアに比べて高

急速に高齢化するアジア



齢化率が高かったのですが、かなり緩やかに高齢化しているのに対して、アジアの国々は非常に急速に高齢化しているのが特徴です。アジアの国は共通の課題を抱えておりまして、日本が人口の高齢化にどのように対応するかというのを非常に注目しております。

【高齢者は首都圏と都市部で増加】

これから高齢者が増加するのは首都圏と都市部です。地方でも、県庁所在地のような中核都市において高齢者の数が増えます。これまで長い間、高齢者の問題は農村部の問題であると考えられていましたが、1960年、70年の高度経済成長期に地方から首都圏に移住した若い人たちが定年を迎えてシニアになるという段階にきています。ですから今後、日本の高齢者は主として首都圏と都市部で増えます。それがひとつの特徴です。

【高齢者人口の高齢化】

また、2030年には65歳以上の高齢者の約1割が認知症を持っているだろうと予想されています。と言いますのは、高齢者人口の高齢化が起きて、75歳以上の人口が増えるわけです。認知症は高齢になると発生率が高くなりますので、約1割が認知症になるだろう。もっと注目しなくてはいけないのは、約4割の高齢者が一人暮らしをしていると予測されていることです。20年先には、80歳、90歳で一人暮らしをしている人たちがとくに首都圏、都市部においてごく一般的になります。そういう社会では、今の社会のインフラ、都市計画や住宅、あるいは交通機関のようなハードなインフラも、医療制度や福祉、教育のようなソフトのインフラも、このままではとても対応できないということで、これをどうするか、ここに大きな課題がありますが、同時に、そこには大きな可能性もあるというわけです。

2. 人生 90 年時代の課題

【人生の第四期をいかに豊かに生きるか】

ご存知のように日本は世界最長寿国です。女性の平均寿命はついに 86 歳を突破して、「人生 90 年」といわれる時代になりました。私はもともと社会心理学が専門ですが、40 年前に私が学部の学生だった頃に習った人生の区分は、子供と大人と老人の 3 つでした。今はそれにもうひとつ新しいライフステージが加わっています。昔からももちろん 80 歳、90 歳



のお年寄りはいらっしゃいましたが、稀な存在でした。今は普通に生きれば 75 歳以上になります。ですから普通の人生の中に、私は後期高齢者という言葉があまり好きではないので人生第四期と呼んでおりますけれども、人生第四期が新たなライフステージとして加わった。その時期をいかに豊かに、生き生きと尊厳を持って生きるか、それを実現する社会環境をどのように作っていくかということが私たちの課題であろうと思います。

【個人の課題 ～人生 90 年をいかに設計するか～】

超高齢社会、長寿社会、人生 90 年時代の課題として、私は大きくふたつがあると思います。ひとつは個人の課題、もうひとつは社会の課題です。個人の課題としては、人生 90 年をいかに設計していくかということです。織田信長の頃から、日本では人生 50 年という時代がずっと続きました。人の生き方は、人生 50 年を想定して大体できていたわけです。学校に行って、20 歳前後で就職をする。結婚をして、子供を産んで育てて、55 歳から 60 歳になるとリタイアして、そのあと人生 50 年、60 年時代はあまり命がなかったから心配する必要もなかったですね。しかも画一的に決まっていた。みなさんは覚えていらっしゃると思いますが、オールドミスという言葉がありました。女性が 25 歳くらいになって結婚していないと、親は大慌てです。オールドミスと言われますから、お見合いの写真を作っているところへ配って、相手を一生懸命見つけるということをやったと思います。結婚するとすぐ、次の年ぐらいから「子供はいつ生まれる」と聞かれるし、2 年たっても子供が生まれないと「どうして生まれないのか」と言われます。就職して、もし途中で転職すると、転職した人の方が何かおかしい、欠陥があるんじゃないかということになります。結婚しなくても欠陥があるし、子供を産まなくても欠陥があるし、転職しても欠陥があるし、ということだったと思います。現在は、結婚するかしないか、結婚しても子供を産むか産まないか、あるいは仕事を持っても転職するかしないか、そういうことは最終的には個人の選択の問題だということになっています。自分の人生を設計する、デザインするという時代になりました。人生 50 年から人生 90 年へ、人生が倍になりました。倍になっただけではなくて、90 年の人生を設計して生きるという時代になりました。特に、人生 50 年以降のライフデザ

インはモデルもないし、自分で本当に設計するというのが今のシニアの状態です。いかに豊かな、多様な人生を設計していくかというのが私たち個人、一人一人にとっての課題であると思います。健康で能力を最大発揮して生きることは皆さんが望んでいます。だけど人生のデザインの仕方は非常に多様である、いろんな生き方ができるということと、もうひとつはその中に、自分の人生をどういうふうに締めくくるといことも人生設計の中に入れておくといいなと私は思っています。

【社会の課題 ～人生 90 年時代のニーズ合うインフラを作る～】

もうひとつの課題は、社会の課題です。先ほど申しましたように、人口の中での高齢者の割合が増えています。今は 23 パーセントですが、20 年後には 30 パーセントになります。今の社会のインフラは人口がピラミッド型をしていた、若い人たちが多かった時代にできたインフラです。交通機関もそうだし、教育のシステムもそうです。しかし、それでは 20 年後の、3 分の 1 が高齢者で、しかも 2 割が 75 歳以上の人たちによって占められる社会のニーズにはとても対応できない。それを今見直して、これから 20 年の間に作り直していかなければいけないというのが社会の課題です。

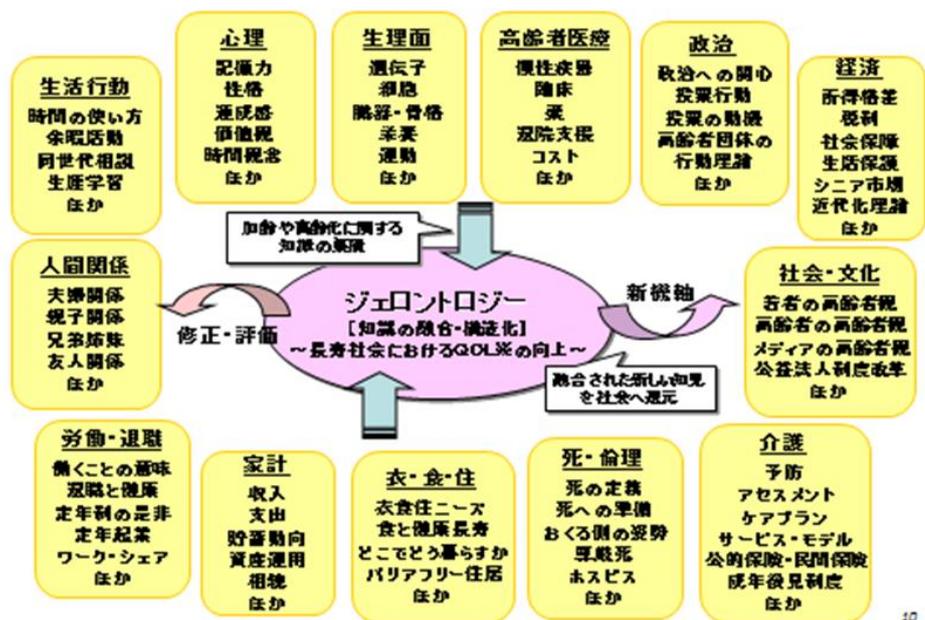
アジア諸国、アフリカも含めて人口の高齢化は人類規模、グローバルな現象です。トップランナーとして走っている日本がうまい解決の仕方をすれば、例えば ICT を使ってうまい社会の運営の仕方を開発すれば、そのモデルは移植できるわけです。他の国でも習いたい、使いたいと思っているわけです。そういう非常に大きな、産業界にとっても大きな市場があるということです。

3. 「サクセスフル・エイジング」の理念

【ジェロントロジー】

“ジェロントロジー”という言葉をお聞きになった方はどのぐらいいらっしゃいますか？ ああいらっしゃいますね。東京大学で、現在の高齢社会研究機構の前身のジェントロジー寄付研究部門が研究設立された頃は 800 人ぐらいの所で手を挙げていただいてゼロでした。“ジェロントロジ

生活のあらゆる側面に関わるジェロントロジー



一”は、「老年学」あるいは「加齢学」と呼ばれておりますけれども、人の生活のあらゆる側面、主要な社会のシステム、制度、そしてさまざまな産業と密接に結び付いた学問です。いろいろな側面において高齢者の生活、あるいは高齢社会の課題を考え、解決していくということを目的にした学問です。

“ジェロントロジー”の歴史を簡単にご紹介します。人は年をとるに従って生物学的にどのように変化するかという加齢による生理的機能の変化、また当時は成人病、今は生活習慣病と呼んでいますが、その克服を目指して始まった、いわゆるバイオメディカルな領域で始まった学問が“ジェロントロジー”です。当時は人生50年とか60年という時代でしたので、人の寿命をどのくらい伸ばすことができるかという共通の研究関心がありました。一方、社会科学の分野では1980年あたりから人口の高齢化による、社会制度や経済、医療機構への影響が顕著になり、社会科学の課題としても取り上げられるようになりました。日本の平均寿命は1950年から2000年の50年間、20世紀の後半に30年延びました。それは驚異的なことで、「寿命革命」と呼ばれています。人の寿命を伸ばすことにある程度成功して、平均寿命が80歳になりました。だけど、まわりを見ると、寝たきりの人や、定年退職後どのように時間を使って良いのかわからず無為に生活している人が多い。そこで研究者の関心は、寿命をどこまで延ばすかという量の問題から、質の問題、生活の質をいかに充実させるかというQualICTy of life—QOLの向上の方向に大きくシフトしました。

【サクセスフル・エイジングの理念】

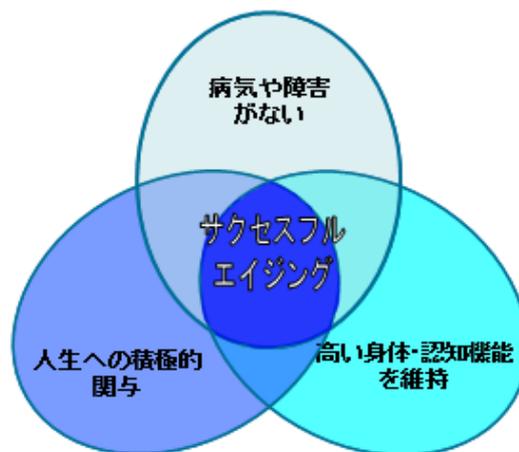
その時に中心になったのが「サクセスフル・エイジング (successful aging)」の理念です。successful aging というのは、それまでの高齢者研究が高齢者の疾病や障害など、高齢期のネガティブな側面に焦点を当てていたのに対して、大多数を占める健常者の生活の可能性に焦点をシフトしました。高齢期の可能性ポジティブな側面に研究が大きくシフトしました。そのためには医学だけではダメなんですね。高齢者のQOLの向上ということになりますと、ICTや建築含む工学であるとか、経済学、社会学、心理学、教育学など、さまざまな領域の学問が関連してくるわけです。個別分野の学問ではなく、学際的に連携して高齢者の生活の質を向上させる努力が始まり、学際的科学としての“ジェロントロジー”が確立されました。

【サクセスフル・エイジングの理念が与えた大きな影響】

“successful aging”という理念は、j ジョン・ロウとロバート・カーンとい二人の老年学者によって、1987年にアメリカのScienceという科学雑誌に発表されました。“usual aging and successful aging”、「普通の年のとり方と successful な年のとり方」という2ページの論文です。

彼らによると

“successful aging”には3つの条件がある。ひとつは、病気や障害がない、そういうリスクが少ないこと。ふたつめは高い身体機能と認知機能を維持していること。それに加えて、これが一番キツイ条件ですけれども、人生への積極的な関与、具体的に言えば社会との



サクセスフル・エイジングの条件 (Rowe & Kahn, 1987)

かかわりを持って生きるということですね。この3つを達成することが successful aging なんだということです。そして、これを目指してみんな努力しようよ。それを実現するために、いかにして高齢者の生活環境を改善していったらよいか、個人のライフスタイルを変えていったらよいかということを目指して提唱されたものです。

この理念に対して非常に大きな反響がありました。アメリカの大きな財団であるマッカーサー財団が何十億円という額を、この successful aging の研究のために10年間寄付しました。そしてアメリカとヨーロッパの大学のさまざまな分野の専門家が共同で、いかにして successful aging するかについて研究しました。その成果が10年後の1998年に、同じ二人の老学者によって本として出版されました。いかにしたら successful にできるかを、非常に分かりやすく書いてあります。クリスマスの前にこの本が出版されたので、年配の方々の間、あるいはお年寄りから若い人へという形で非常に広くクリスマスプレゼントとして贈られたということもありまして、ベストセラーになりました。successful aging の理念は、アメリカや欧米の高齢者政策の基本政策になったと同時に、一般の人たちのライフスタイルにも非常に大きなインパクトを与えた理念です。

【人の能力の発達曲線】

successful aging の研究にはいろいろな研究がありました。工学の研究もあるし、経済学の研究もありますが、私の専門分野である心理学の分野の研究をひとつだけご紹介します。私が学部の学生だった頃、教科書にはこういうグラフがありました。人の能力、たとえば走る能力にしても、計算するという認知能力にしても、生まれた時にはほとんど能力がありません、走れないし計算もできない。そうした能力はものによって少し違いますが、20代にピークに達してしばらくは維持します。そして40歳、50歳くらいになったら能力が落ちるのが人の能力の発達曲線だと習いました。

【高齢になっても落ちない能力がある】

ところがいろいろな能力の発達を研究しますと、必ずしもそうではありません。認知能力ひとつとっても、いろいろな

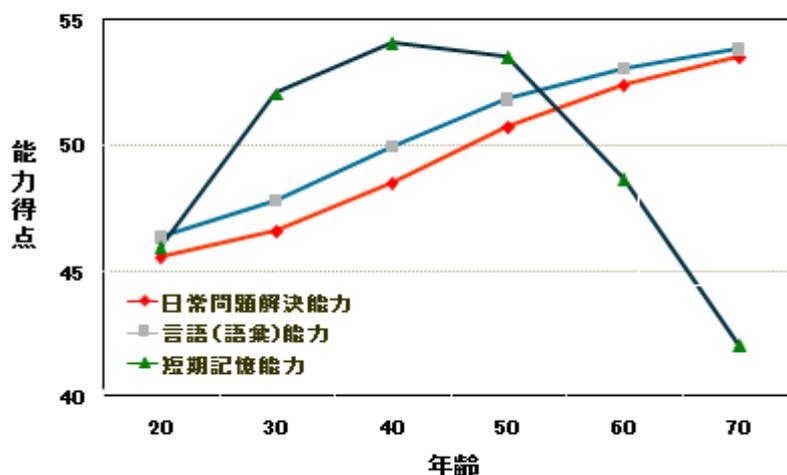
能力があります。短期記憶能力、言語能力、問題解決能力の3つをとりましても、短期記憶能力は先ほどのグラフとほぼ同じような発達曲線をたどる。短期記憶能力とは、たとえば電話番号や無意味な文字のつづりを見せて、5分後に再生してもらうことによって測定する能力です。ところが、言語能力、たとえば語彙の

数、ことばをどれだけ知っているかは非常に重要な認知能力です。あるいは日常の問題解決能力、私たちは小さい問題から大きい問題まで毎日遭遇して、それを解決しているわけです。そのためには情報処理の能力もいりますし、相手の人の気持ちだとか、過去の経験だとか、いろいろなものを総合的に判断して解決していくわけです。そういう言語能力や日常問題の解決能力を見ますと、高齢になっても落ちないだけではなくて、むしろ伸びていきます。亡くなる2年くらい前には、ターミナルドロップといって、そういう認知能力が落ちると言われておりますけれど、基本的には高齢になっても維持していくということです。また、若い人は全部の能力が伸びているかという、必ずしもそうではなくて、例えば異なる言語の音声を弁別する能力などは、生後十何か月から落ち始めます。ですから能力が落ち始めるというのは、何も高齢者の専売特許ではなくて、1歳2歳の時に落ち始める能力もあるし、高齢になるまで伸びる能力もあるわけです。

【人間の能力は多次元】

人間の能力というのは非常に多次元です。たとえば認知能力ひとつとってもいろいろな能力があって、そして、その変化は各段階で多方向です。65歳の時に、能力によっては低下しているものもあるし、まだ伸びているものもあるということです。人間の能力は多次元で多方向であるということです。ですから、人生のどの段階にあっても、自分の持っている能力を最大限に活用して生きるということが重要です。定年制度について考えてみても、高齢者だからといって一律に生産性が落ちる、安全性が心配だということで、使いものにならないというような見方は、人生50年時代の古い考え方です。いかにしてシニアの能力を最大限に活用して、この社会の支え手とするか、それを私たちは考えていかなければならないと思います。

認知能力の年齢による変化



Cornelius and Caspi(1987,p150)より

【高齢者の身体機能は若返っている】

東京都の健康長寿センターが、非常に多くの人を対象にして、身体機能と認知機能について調査した研究があります。身体機能のひとつの指標として、普通に歩いている時の速さがあります。これは老化の優れた指標だと言われています。老化の指標は世界的に研究のホットな課題ですが、一番簡単なのは普通に歩いている人のスピードを見ると、その人が大体あと何年くらい生きるのか分かるとも言われています（笑）。1992年と2002年、10年の間隔で比べると、歩くスピードは速くなっています。平均的には、2002年に75歳の方は1992年に64歳の方が歩いていたのと同じくらいのスピードで歩いていたという結果です。高齢者の身体機能は随分若返っているわけです。同じ64歳と言っても10年前とは違うわけですから、そこもきちんと認識する必要があります。握力や認知能力においても高齢者は若返っています。

4. 年齢による生活自立度の変化

【健康・経済状態・社会関係がどう変化するか】

これは私が20数年かかわっている全国の高齢者の調査です。1987年の第1回調査の時、私はまだアメリカの大学にいましたが、高齢者のデータとして、疾病や精神病のデータというのはありませんでした。それを蓄積しようということで、身体と心の健康、資産や収入などの経済状態、家族関係・友人関係・近隣や地域との関係という社会関係科学、この3つの領域を中心にして、加齢とともに生活がどう変化していくかを調査しました。



沖縄から北海道まで全国の住民基本台帳から60歳以上の方を無作為に抽出して、3年ごとに同じ人を訪問して面接をする。約6,000人の方を対象に、同じ人に同じ質問をして、3年ごとの生活の変化を見てきました。これまでに7回調査しています。

健康の指標の中に、機能的健康と申しますか、生活の自立度の指標があります。ご存知の方が多くと思いますが、ADLとIADLと呼ばれておまして、日常生活の基礎的な動作を一人でできるか、あるいは人の助けや杖がいるかということを知っています。ADLは基本的なこと、お風呂に入る、短い距離を歩く、階段を2、3段上る、もう少し項目がありますが、こういうことが一人でできるかどうかという質問です。IADLは認知能力も関係するもう少し高度な能力ですが、日用品の買い物をする、電話をかける、バスに乗って出かける、これは誰でもするような

日常動作ですね。一人でそれをできるかどうか。ADL と IADL の両方とも一人でできる人は、一人暮らしができる人です。両方できる人に 3 点、ADL はできるけれど IADL はちょっと助けがいるという人は 2 点、両方に助けがいる人に 1 点、途中で亡くなった方がいらっしゃいますが、脂肪はゼロという風に得点化して分析をしました。

【生活の自立度はどのように変化するのか】

私が知りたかったのは、ほとんどの人が生活の自立度を、どの年齢ぐらいまでは維持するのか、その後みんな一緒に落ちるのか、それとも幾つかのパターンがあるのかということです。分析結果を見ますと、男性の約 2 割、19 パーセントの人は 70 歳になる前に急速に健康が衰えて亡くなります。心臓病や脳出血、いわゆる生活習慣病で亡くなる方が多い。これは人生 90 年時代の「若死に」ですね。約 1 割の方は 80 歳、90 歳になってもピンピンしてお元気です。しかし、大多数の 7 割の男性は、70 代の半ばあたりまでは一人暮らしができる程度にお元気ですが、そのころから少しずつ下がってきます。

急に自立できなくなるのではなくて、それまでは坂の上の家から駅まで行って、スーパーで物を買って家まで歩いて帰ったのに、それがちょっと難しくなったとか、電球を取り替えるのがちょっと難しい、ちょっとした助けがあれば普通の生活をやっていける。ほとんどは家で生活している人です。こういう結果が出ました。

【女性は男性と違うパターン】

女性は男性 2 割に対して、1 割強の方がやはり同じように 70 代になる前に亡くなるか、重度の介護が必要な状態で生きています。女性の 9 割は 70 代前半か半ばから、男性よりもっと緩やかに自立度が低下していくという結果が出ました。

5. 自立期間を延ばすことが大きな課題

【自立度が落ち始める年齢を少しでも遅らせる】

この 2 つのグラフから、私たちがこれから何をしなくちゃいけないかということが見えると思うのです。これから 20 年の間に、70 代半ば以降の人たちが 1000 万人増えて 2 倍になります。一番初めのグラフのオレンジの部分ですね。ひとつの懸念は、男性の 7 割、女性の 9 割は 70 代半ばあたりから少しずつ助けが必要になる、自立度が落ちることです。ここを何とかしたい。自立度が落ち始める地点を 2 年でも 3 年でも右の方に動かしたい。自立期間を延ばす、いわゆる健康寿命の延長ですね、これが、ひとつ大きな課題です。これは個人にとっても大きな課題ですね。というのは自立期間が伸びれば、元気であれば生産活動にも従事できるわけですから、個人にとっても非常に幸せなことですね。人に頼らないで、しかも社会に貢献できる。社会にとっても、こういう人たちが、いろいろな援助を受ける立場から社会を支える立場になっていく。医療費や介護費の抑制ということに関しても非常に大きなインパクトがあります。

【生き生きと生活できる環境の整備】

私がグラフを見せると、多くの男性は、俺はこれでいくとおっしゃいます。(笑)。個人の願いとしてはよろしいのです。それがゴールとして努力される。私自身も努力したいと思うのですが、実際には、がみんなこっちに行くということは現実的ではないですね。だから、こういうこともあるかなと一応覚悟しておいた方が良くかなと (笑)。現実問題としては、男性の7割、女性の9割が、70代後半から80代になったら自立度が落ちてきます。そういう人たちがどうすれば安心して、そして快適に、生き生きと生活できるか。そういう生活環境をどのように整備していくか、ということがもうひとつの課題であると思います。

【地域密着人口 ～人が生活している場に仕掛けをすることが重要～】

ひとつは、経産省、厚労省あるいは国交省などの国のレベルで、社会保障制度や医療、介護住宅政策を考えていくのがひとつの方策ですが、もうひとつは人が生活している場に介入する。

千葉大の広井先生は、地域密着人口ということをおっしゃいます。住んでいる地域で1日のほとんどの時間を過ごす人口でさう。子どもとリタイアした人たちですね。1950年から2050年の10年を見ると、子供の数は減りましたが、65歳以上の人口



は急増しています。全体的に見ますと地域で、地域密着人口は増加しているわけです。そうすると私たちが生活している場に介入する、仕掛けをするということが重要ではないかと思ひます。

【エイジング・イン・プレイス ～住んでいる所で自分らしく年をとる～】

これは東京大学の高齢社会総合研究機構で取り組んでいる町づくりの図です。「エイジング・イン・プレイス」とは、住んでいる所で自分らしく年をとる、年をとれる、そういうコミュニティを作ろうということです。そのためにはいろいろなことをやらなくてははいけない。たとえば住宅のバリアフリー化や、移動の問題は非常に大きいですね。首都圏ではまだ公共の交通機関がありますけれど、地方に行くと公共の交通機関がなくなって車社会になっているわけです。いったん車を運転することが難しくなると、医療機関にも、食料品の買い物にも行くのが難しくなりま

す。移動の問題は非常に大きいですね。

それから医療制度です。今は風邪を引いても、膝が痛くても大学病院に行くという、大病院志向がありますけれど、それを改めて地域で 80 歳、90 歳になっても安心して医療を受けられる、必要があれば住んでいる所まで移動してサービスを提供できる、そういうシステムが求められています。高齢者は本当に大きな社会資源なので、それをいかにして社会、地域の支え手にしていくか、人と人とのつながりづくり、すべての局面において ICT をフルに活用して、システムを作ることなど課題はたくさんあります。

6. 柏市における社会実験

【柏市・豊四季台団地における実験】

私どもはコミュニティで社会実験研究をやっております。個人個人の QOL がどのように変化したか、そして、コミュニティの住みやすさがどのように変わったか。コスト、どれだけお金がかかって、経済的な効果がどれだけあったか。たとえば医療費や介護費をどれだけ抑制できたか。地域の産業、経済の活性化がどれだけ図れたかなどを明らかにしていくことが必要だと思っています。

社会実験の場は、首都圏と地方のごく平均的なコミュニティということで、千葉県柏市と福井市でやっております。今日は、柏市での取り組みについて簡単にご説明します。柏市は人口 40 万人で、典型的な東京のベッドタウンです。1960 年、70 年に若い人たちが地方から移住してきた時に、深刻な住宅難が生じ、公団やハウスメーカーが乗り出して一挙に町ができたという所です。そこに若い人たちが住んで、東京に通勤した典型的なベッドタウンです。千葉県、埼玉県、神奈川県から 30 キロ圏で非常に多い、都市近郊の典型的な町です。その柏市に、豊四季台（とよしきだい）団地という UR、昔の日本住宅公団が建てた団地があります。東京オリンピックの年に入居が始まったといいますから、できてから 50 年近く経っています。5 階建てのエレベーターがない建物が並んでいて、5,000 戸あります。できた当時はあこがれの場所でしたが、今は建物も老朽化していますし、住んでいる人たちも高齢化しています。UR はこの団地を段階的に建て直しています。5 階建ての建物を 10 階あるいは 14 階の、バリアフリーでエレベーターがついた建物にする。建物が高層化すると空き地ができます。その空き地を上手く利用して長寿社会の町づくりをしようと、UR と柏市役所と東大、千葉大と一緒にあって、協定を結んでまちづくりに取り組んでいます。

【在宅医療の拠点作り】

これは私たちが描いているコミュニティの構想図です。真ん中に 24 時間対応の在宅ケアの拠点を作ります。24 時間対応する訪問看護ステーション、介護ステーション、訪問リハビリ、在宅のホスピス、訪問診療する歯医者さんもいるような在宅医療の拠点を作ります。

【コミュニティ食堂】

それからコミュニティ食堂ですね。2003 年には 4 割の高齢者が一人暮らししていると予測され

ています。80歳、90歳の一人暮らしになりますと、自分で買い物をし魚や野菜を料理して一人で食べるということをしません。随分聞き取り調査をしましたが、そういう方たちの食生活は本当に貧しいですね。冷蔵庫を見せていただくと、これ1本飲めば一日中の栄養がたりというドリンクみたいなものが並んでいる（笑）。それを信じて毎日飲んで、時々好きなうなぎを食べに行くとか、カップヌードルやきつねうどんのカラ箱が天井まで（笑）。毎日食べていらっしゃる。そういう生活になるわけですね、ですからコミュニティ食堂を町の真ん中に作って、そこで3食きちんと栄養を摂る。そこではあまり高くない食事を提供する。みんなが集まってわいわい言いながら食べるということで、「わいわい食堂」という名前がついています。

【セカンドライフの就労】

もうひとつのプロジェクトは、セカンドライフの就労プロジェクトです。リタイアした方を見ますと、多くの方があまり家から外に出ません。東京都でずっと働いてリタイアされた方なので、柏に知っている人がほとんどいません。名刺もなく外に出ていくことには非常に抵抗があるんですね。柏市にはボランティアの団体であるとか、地域デビューセミナーとか親切な

セミナーもありますが、そういう所へ出ていく人はごく一部です。一部の人はいろんなボランティアで忙しく活躍していらっしゃいますが、多くの方は家においてテレビを見てゴロゴロしている。亭主在宅症候群というのか（笑）、家庭の平和が乱されます。その人たちは、まだ60歳そこそこで



体も元気だし、知識もあるし、スキルはとか仕事関係のネットワークも持っています。そういう人たちはが何かやりたいと思っている、でも何をしていいかわからない、することがないというのでテレビをずっと見ているわけです。使わないと筋肉は落ちちゃいますからね。健康にも良くないし、社会にとっては非常に大きな資源の損失です。私は、家から外に出て、人と交わって活動していただきたいと思っています。そのためにはどうすればいいか。図書館とかジムには行きやすいみたいだから、ジムや図書館を作ればいいのかなど思っていたのですが、話を聞いてみると、今までずっと朝ごはんを食べたら仕事に出かけていたので、働く場所があったら一番外に出やすいとおっしゃいます。でも今までのように満員電車で通勤して、夜遅くに帰ってくるような生活はもうしたくないし、体力的にも限界がある。住んでいる所から歩いて行ける、あ

るいは自転車で行けるくらいの距離になるべく多くの働き場所を作る。それと同時にセカンドライフの働き方ですね、フルタイムでなくてもいいと。自分で決めた時間を働く。リタイアしたら旅行に行きたいとか、カメラの趣味をやりたいとか、いろんな夢があるわけですね。そういう夢を実現しながら働く。あるいは健康状態が少し悪くなってきたら、時間数を減らしても 80 歳くらいまでは働ける。そういうコミュニティを作りたいと思います。家から出てそこへ行けば人がいるわけです、柏の人たちが。そこで交わって一緒に働いて、あとでビールを飲むとか、一緒におそばを食べるとか、そういう形でつながりができていきます。

【就労の受け皿作り】

今、7つの事業を計画しています。ひとつは農業です。柏は元々野菜作りで有名だったところですが、若い人が農家を継がないので休耕地がたくさんあります。柏市役所を通して休耕地を借り上げて農場を作って、そこで野菜を作って東京に出荷するという事業です。空いている部屋がありますので、そこをミニ野菜工場にする、これは棚方式ですから非常にラクな農法です。新しく出来る建物の屋上を農場にするように UR と交渉しております。これから多くの方たちが柏にリタイアされます。その受け皿をどうするかということです。

【生き甲斐の就労】

先ほど申しあげましたように、いろんな活躍のチャンスはありますが、多くの人たちにとって働くことが一番いいのではないかと。しかも今までのように生計のために働くだけではなくて、生き甲斐の就労、社会に貢献しながら収入もあるという、そういう働き方をしようということです。個人にとってみれば生き甲斐になります。また、家から外に出て働く、人と交わって活動するということは、何よりの健康法ですね。ジムに行って、これを 5 セット、あれを 10 セットやるのもいいんですが、自己管理の出来る人以外はなかなか長続きしません。仕事があつて、そこまで歩いて行かないといけないし、働くことによって体を動かしますし、人と交わっているいろいろ認知能力も使うわけですね。それが体の、そして心の健康の維持に一番いい。自立期間を 5 年くらい延ばすためには、これが一番だろうと思います。最低賃金は支払います。1 時間 800 円か 1000 円ぐらいは払うということで。年金プラス収入のアルファがあると、みなさん結構それを使われますよね。一緒にビールを飲みに行くとか。奥さんに遠慮しないで飲みに行けるのが非常に嬉しいようです。孫に何か買ってあげるとか、旅行にちょっと行くとか、地域にお金が落ちます。QOL の向上にもなります。社会にとっては、地域経済にある程度プラスになる。消費を刺激する。医療や介護費の抑制につながるでしょう。個人にとっても社会にとっても効果があるわけです。

【生活支援の事業】

現在立ち上げている 7 つの事業の 3 つは農業、2 つが食の事業です。コミュニティ食堂はみんなが集まって食べるコミュニティのダイニングルームですが、そこは高齢者の雇用の場でもあります。リタイアした人たちが働いて支えるということです。今は両親が働いている家庭がほとんどですね。そして、多くの人たちは東京で働いているので、学校が終わったあとどうするか悩み

の種です。学童保育の強いニーズがあります。それをリタイアした人たちで支える。そのほかには、生活支援です。先輩の高齢者の支援も必要です。毎日幼稚園に迎えに行くなど働いている若い人たちの生活を応援することも重要です。これからは高齢者にもさまざまな生活設計があります。たとえば、2週間外国に行くので犬の散歩と植木の水やりが心配。それぞれの人が設計した人生を実現する、それを支えるのが生活支援です。この事業をシニアでやろうとしています。

【継続性と多くの関係者の協力が重要】

この事業は政府から研究助成をいただいておりますが、そのあとも続けること、継続性が一番重要です。また、社会技術というか、社会の仕組みをどのように作っていくか、そしてそれを誰が支えていくかということに非常に興味を持っております。私は、企業もこれに参加して欲しいと考えています。休耕地の農園事業は地元の若手農家が組合を組合をつくって、休耕地を開墾し、加工工場をつくって高齢者を雇用する。ミニ野菜工場の立ち上げと運営は、地元のプレハブ製造会社引き受けてくださいました。それを千葉大が、高齢者が働きやすい植物工場にする農法を開発してバックアップするという体制をとっています。

【コミュニティ食堂、学童保育、全体総括】

コミュニティ食堂は、大手の外食企業が、学童保育は環境系の塾をやっている株式会社が、子育て支援は地元の学校法人が、生活支援事業は東京海上の系列の事業体がやることになりました。オフィスセブンという全体を統括する組織を作って、組合方式で運営しますが、それもシニアの方たちに担っていただきたいと思っています。

【循環型住宅】

あとは簡単にご紹介します。ひとつは住宅の問題です。50年前の公団住宅は若い人たちを対象にして作ったわけですけれども、これからは長寿社会です。子どもにも、若者にも、中年にも、お年寄りにも住みやすいまちを作る必要があります。一旦済むと、みんなその地域に愛着を持ちます。それで、各ライフステージのニーズに応じて住み替えができるような、循環型の住宅を作ろうとしています。子育てする時には大きなユニットに住んで、子供たちが家を出て夫婦二人になれば小さいユニットに住む。少し一人暮らしが心配だなと思うようになれば、サービス付きのアパートに移る。グループホームや、老人ホームも組み込んで、望むなら一生同じ地域で顔なじみの中で、同じお豆腐屋さんで豆腐を買って、同じお医者さんに診てもらおう。そういう生活ができるような循環型の住宅を作りたいと考えています。

【移動手段】

移動手段については、柏の場合、駅からそんなに遠くないですし、頻繁に循環バスが走りますので、あまり問題ではありませんが、福井では深刻な問題です。福井で取り組みを始めています。

【ICT の活用】

就労事業では、働きたいと考えている人たちのプールがあります。例えば 300 人の人たちが地元で働きたいねと登録されます。しかし、月水金だけ働きます、午前中だけ働きますとか、各自が自由に決めて

働きます。またリタイアされた方々はそれぞれ異なる知識やスキルをお持ちです。一方で、今日はこういう人が何人必要だという、事業者のニーズがあります。それをうまくマッチングしていかねばなりません。徹底したワーク

シェアリングが必要です。みんなで仕事を分担して事業を回していくということになります。雇用する側にも働き手にも最大限の自由があるセカンドライフの就労モデルを目指しています。そのためには、クラウド・コンピューティングなど ICT をうまく活用することが必要です。みなさんは私よりもお詳しいと思いますが、安心のシステムを作ることや、コミュニケーション、楽しみの機会を増やすことに ICT の効果的な活用は今後の重要な課題です。

【医療システム】

健康管理や医療においても ICT をうまく活用したいと考えています。遠隔医療というと孤島など僻地の遠隔医療を想像しますが、これからは都市での遠隔医療が重要になってくると思います。それから、日々の健康管理にも ICT が活躍するでしょう。こういうものをフルに使って住みやすい町を作っていくということを考えています。

医療のシステムは、非常に重要です。今は風邪をひいてもすぐに大きな病院に行きます、MRI など高度医療器機があるから安心ということでしょう。これでは日本の医療制度がパンクします。自宅の近くに診療所があって、慢性疾患の通常の診療はそこに行く。そして必要であれば、訪問医師、看護師、介護師、リハビリの人がお宅を訪問して医療を届けることもできるシステムをつくる。これは 80 歳、90 歳の人が増える社会では必ず必要です。地域の病院やリハビリ施設と連携した体制を作っていく。ここでも ICT が非常に重要な役割を果たします。



7. おわりに

こういう長寿社会のニーズに対応するまちづくりは自治体と市民、そして大学、産業界、これと一緒に連携して初めて可能になります。市役所だけではできません。住民だけでもなかなかできない。無論、大学だけではできません。できれば産業界も巻き込んでやっていくと。

私たちが柏市と福井市というふたつのコミュニティを社会実験の場所として選んだのは、ごく平均的な、どこにでもあるまちだからです。どこの町でも抱えているような問題を柏と福井は抱えています。まちづくりの過程では

いろいろうまくいかないこともあります。うまくいった成果だけではなく、失敗も成功も含めてそのプロセスをホームページで発信していきたいと思います。他のコミュニティでもまちづくりが必要ですから参考にしていきたい。他のコミュニティでは、全く同じようには行かないでしょうが、これを参考にして、それぞれのコミュニティが抱える課題にそのコミュニティの資源をうまく活用してまちづくりが広がればよいと願っています。

まちづくりを支えるのはシニアです。シニアには豊かな経験があります。知識もスキルもネットワークも多様で豊富です。それはコミュニティにとって大きな資源です。みなさんも是非まちづくりに参加していただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

質問者 1

ありがとうございました。提案ではなくて、今思いついたのですが、シニアはいろいろなスキルを持っています。スキルバンクというものを作るというお考えはあるでしょうか。誰が何のスキルを持っているか、どんな情報を持っているかというのは分からないわけですね。

秋山 弘子氏

それはとってもいいアイデアだと思います。就労に関しては、オフィスセブンでそういうことをやりたいと思っています。個々人の方がどういう能力、経験、スキルを持っていらして、どのくらいの時間を就労に使ってよいかという情報を個人別に登録して、仕事とマッチングさせるとい

Multi-stakeholders の協働



うことをやりますので、就労以外のスキルとかいったものも登録できるようにするといいと思いますね。

質問者 1

芸術も文化もあるわけです。働くことばかりじゃないわけですね。俺は川柳を教えてやるとか、俳句の先生だということも必要だと思いますね。

秋山 弘子氏

学童保育で出張講義というのをやっていただきますが、俳句や川柳を教えてくださいませんか。

質問者 1

ありがとうございました。

質問者 2

大変参考になりました。柏と福井の実験の期間、それから予算規模と、その予算がどこから出てきたかを教えていただけますか。

秋山 弘子氏

私たちは一応 5 年間の計画を立てて始めております。5 年間で先ほどのことが大体目星がつくかなと見込んでいます。ただ住宅の問題に関しましては、UR の建て替えの計画にもよります。予算に関しては、いろいろな所から予算をいただいています。就労に関しては文科省の科学技術振興機構から年間 3,000 万円で 3 年間ということで 1 億円弱の予算がつかえましたし、在宅ケア医療システムにつきましては厚労省の地域医療制度の改革を目的とする補正予算から寄付講座という形で助成していただきました。就労に関しては、企業が自分でやりましようと言われたところもあり、計上した予算を使わないですんだ部分もあります。人が生活しているコミュニティでの社会実験はやってみないとどれくらいお金がかかるのか分からないですね。しかし、こういう取り組みを応援する助成金はかなりあると思います。

質問者 2

ありがとうございました。

質問者 3

三鷹のシニア SOHO という NPO です。ジョブマッチングについてシニアネットはいろいろな経験を持っているので、このアイデアに加わらせていただきたいと考えています。

ジョブマッチングは三鷹で 8 年前に「いきいきプラス」という東京都の助成金と三鷹市の予算で始めて以来、ずっとやっています。今 2,000 人の市民が無償ボランティア、有償の活動も含めてマッチングしています。2,000 人がシステムの中に入って、これまで 800 件のマッチング実績を作っています。

楽天のジョブマッチングとかいろんなものを調べて構築したのですが、一番のポイントはジョブの分類を非常に細かく、シニア向けに、しかもボランティアと有償が一緒にある形を構築して、そのノウハウが 8 年間積み上がっています。こういうものをご提案できたら面白いなと思います。

クラウドまでは行っていませんが。ウェブサイトがあるということですので、そのうち書き込みか何かをしたいと思います。ご参考になればということで、提案したいと思います。

秋山 弘子氏

それを是非知らせて頂ければありがたいです。ゼロから出発するよりも、それだけ今までの蓄積があれば助かります。是非柏においでいただき、手伝っていただきたいと思います。

質問者 3

ソフトウェアの提供もできると思います。

秋山 弘子氏

そうですね。ありがとうございます。

■ 基調講演 2

「テクノロジーの進化と新たな展開」

加治佐 俊一氏

(マイクロソフトディベロップメント株式会社 代表取締役社長

兼 日本マイクロソフト株式会社 業務執行役員 最高技術責任者)

こんにちは。加治佐です。

シニアネットフォーラムでお話させていただくのは 3 年振りです。3 年前も木曜日で同じ場所でした。その時私は 50 前だったのですが、今は 50 を過ぎました。今日、秋山先生のお話の中で 50 を境に短期記憶がどんどん衰えていくという話をきいてちょっとハッといたしました。

「今日はテクノロジーの進化と新たな展開」ということで、これまでコンピューターは急激に進化をしてきたわけですが、今は色々なコンピューター、スマートフォンを含めて使われていて、色々なデバイスがあり非常に便利なわけですが、この状態からこの先どういう事が起きるのかについてお話したいと思います。

今「クラウド」ということで色々な事が出来るようになっていますが、マイクロソフトのテクノロジーになりますけれども、途中でデモを交えて紹介させていただきます。



1. 日本におけるマイクロソフト

まずはマイクロソフトのお話になりますが、今年はマイクロソフトの日本法人が出来まして 25 周年になります。従業員が 2,500 名ということでして、「マイクロソフト株式会社」がこれを機に「日本マイクロソフト株式会社」というように名前を変え、より日本に根付くようにいたしました。実はマイクロソフト社にはもう一つの会社、マイクロソフトディベロップメント株式会社というものがあまして開発をやっている、ソフトウェアのエンジニアリングをやっている部隊です。私はそこの代表として両方とも日本で 25 年、気持ちも新たに取り組みを続けようということです。

日本といいますと世界第 2 位の市場とここに書かれていますが、先日 GDP が中国に追い抜かれたという状況が発表されましたが、パソコンですとかソフトにお金を払ってもらえるという点では、まだまだ日本は中国より間違いに大きなビジネスになっているという状況で、弊社の場合には北米アメリカが大きな市場になるわけですが、それに次いで日本が 2 位を保っています。そして社名を変えました。合わせてマイクロソフトは都心に拠点が 5 つあったのですが、それを品川に統合して、新しい設備で従業員だけでなく色々な外部の方々ともコミュニケーションしやすいようにしておりますので、機会がありましたら訪問していただければと思います。

【パートナーエコシステム】

そして日本でのビジネスの仕方の特徴というのは、パートナーエコシステムというものを基本にしておりまして、マイクロソフトは基本的に Windows やオフィスなどを売っている会社ですが、実際には我々が直接売っているということはあまりなく、97%が間接的に我々の製品を扱ってもらっているという状況で、実はマイクロソフトが直接売り買いしているのは 3%だけしかありません。マイクロソフトと業界が一体となりながら、パソコンを作るあるいは周辺機器を作るところから始まって物を売り買いしていく、サポートをしていくというところまで全体のパソコンのビジネスというものを広げてきています。そして今何が起きているかといいますと、これまで色々な進化があったわけですけれども、「クラウドコンピューティング」ということでマイクロソフトは出遅れているのではないかとされているところもあるのですが、実はそんなことはないということが今日のお話を聞けばわかると思います。

今日もスマートフォンの話が出たり、iPhone はじめ Android が非常に話題になっていますが、マイクロソフトもやっています Windows Phone7 というものがアメリカではもう出ております。日本でも今年出るかなという状態で、ここに Windows Phone7 があるのですが、お楽しみにしていただけるといいかなと思います。ネットワークと連携してツイッターとかフェイスブックとか繋がりのあるものが OS レベルで入っているような状況になりますので非常に活用できると思います。

【コンピューティングモデルの変遷】

それではマイクロソフトが日本で 25 周年ということで、もう少し長い歴史を見たときに、どういうふうに進化したのかを一緒に簡単ですが振り返りたいと思います。

ここにいらっしゃる方は今までパソコンですとか新しい機器をたくさん活用されていると思いますが、昔からおそらくコンピューターに取り組んだ方も多いと思います。私が初めてコンピューターにさわったのは、小学 5 年生の時の大阪万博ですけれども、それより前から使われている方もここにいらっしゃると思います。

若輩者ですが古い話をさせていただくと、コンピューターというものが本格的に使われ始めたのは 1960 年代にメインフレームが使われ始めました。ここにある写真を見ますと中央に配置された高価な特別な装置で、今のように何でも処理できるという事ではなく、数値演算をするというような装置。とても高価なものでしたからとても気をつけて先行投資をしていたというような時代であったと思います。これがだいたい 1980 年代まで続いてきました。

2. 未来への出発点 パーソナル コンピューティング

この後どういうことが起きたかということ、80 年代までメインフレームの時代は続くのですが、1975 年にマイクロソフトという会社がメインフレーム全盛の中、将来は「パーソナル コンピューティング」、個人がコンピューターを使う時代になるというビジョン、具体的には「全ての家庭に机にコンピューターを」という大胆なビジョンでマイクロソフトを作りました。当時創業した時に、このビジョンが非常に大きすぎるということで誰も聞いていなかったようなことがあり

ましたが、現実的に今は先進国においてはこのビジョンというのは達成されていて、今後世界を見たときに残り 55 億人位の人たちに私たちが今受けているような恩恵をどのように広げていくか、且つ安く広げていくかが大きな使命になっていると思います。

そして先進国日本において何処にでもコンピューターはあるのですが、誰もが簡単に使えるようになっているかという、まだまだ改善すべきところがあります。アクセシビリティと言いますがコンピューターの基本的な操作が出来るように、人に対してやさしいインターフェイスを持つというところではまだまだ改善すべきところがあるので、後半にお話をしていきたいと思います。

3. マイクロソフト 20 世紀における代表的な製品

当時マイクロソフトが創業してマイクロソフト以外にも色々なベンチャーの会社がたくさん出て、日本ではソフトウェアでいうとジャストシステムさんですとか、たくさんのベンチャーが立ち上がった状態です。パソコンで言いますと日本では NEC さんですとか富士通さんを始めとしてたくさんの日本の個性を持ったパソコンがどんどん出てきたという状況でした。この頃の時代にマイクロソフト 20 世紀における代表的な製品を簡単に振り返ってみたいと思います。

マイクロソフトは 1975 年に創業しましたが、最初はベーシックというプログラミング言語がありますが、これがビジネスのきっかけとなりました。その後 80 年代になって MS-DOS というのが流行って、その上でワープロソフトや表計算ソフトというものが使われ始めて、それと同時に 1985 年今から 25 年ちょっと前にここにあるような Windows のバージョン 1.0 というものがここで出てきました。当時はおもちゃみたいな物でしたので、このインターフェイスが主流になるかはちょっとわからない状態でしたが、大きな可能性は持っていたということです。そして Windows 1.0 から色々改良を続けて 90 年代になって大きくブレイクしたのが Windows 95 ということで、この時にユーザーインターフェイス スタートメニューと共に使い易くなったと共に、インターネットへの接続が大きく変わってきました。そういった時代を経て進化をしてきたと言えます。

4. プラットフォームの統一

マイクロソフトの日本法人 25 周年を振り返った時に、3 つほど大きな転換点になったところがございます。最初に 1993 年日本へのプラットフォームの統一と書かれていますけれど、それまでは日本では色々なパソコンがあって、それぞれのメーカーが MS-DOS というものを出していました。NRC さんも商品として出されたり、富士通さんも出されたり、東芝さんとして出されたり、というような形で出していたがゆえに、その上で動くアプリケーションが、必ずしもそのままちゃんと動くかどうかは、問題がある場合もありました。それがマイクロソフトの Windows 3.1 に統一されることになって、そこから大きくアプリケーションや周辺機器が増えてくる事になります。

次が 95 年のインターネットへの強力なシフトです。当時マイクロソフトはインターネットに対して非常に取り組みが遅れているというような事を言われていました。Windows 95 には、イン

ターネットエクスプローラーという今では必須の物が入っていない状態で出荷されていました。Windows 95 と共にプラスパックおまけというようなものがあり並べて置かれていたのですが、日本の方はそこに置いてあると買って行ってくれるというありがたいことだったのですが、そこにインターネットエクスプローラーの 1.5 という非常にまだまだ機能の低いものが入っていて、マイクロソフトはインターネットへついていかないと不安視されていた状態でした。それがマイクロソフトのインターネット戦略を示した「インターネットストラテジーDAY」で大きく進歩しました。

そして 2002 年信頼できるコンピューティングということで 2000 年前半にウイルスが非常にはびこった時期がありました。使っているコンピューターがウイルスに感染して立ち上がらなくなるというような事故が頻発し、何とかしなくてはいけないということで開発の仕方を根本的にやり直すことにより今最新の Windows 7 というものですが、これを始めとして信頼できるレベルの製品が作り出せるようになりました。

ここに 3 つ挙げていますが、93 年にはプラットフォームが統一されビジネス全体、業界として大きく盛り上がるのが出来ました。そして 95 年おそらくインターネットにマイクロソフトが強力にシフトしていなければ、今マイクロソフトが勝ったというのは疑わしい状況です。2002 年もパソコンというのは役に立つのか立たないのかという瀬戸際に追い込まれたときに、全部やり直して立ち上げ直したという、これもひょっとしてやっていなかったらマイクロソフトはもうなかったかもしれないという大きなシフトになっています。

3 つありましたが、最初に日本でのプラットフォームの統一ということで、色々なパソコンがありました。その時のビデオがあります。どんどん画面が変わっていきませんが見てください。PC98 があつたり、色々なパソコンが各社から出ております。エプソンさんが NECさんと AX という統一規格を作ろうとした状況で、激動の時代がありました。パソコンは当時小さいものから大きなものまで、安いものから高価なものでは 50 万円は平気でしていました。今ではここまでは多様化はされていませんが、ちょっと収斂された状態で安く使えるようになりました。こうした状況の中、日本のパソコンが地デジに対応したり、あるいは楽々パソコンが出たりと色々な工夫がされ、世界からも日本はまだまだ親切さが残っていると言えます。

5. インターネットへのシフト

2 つ目のインターネットへのシフトという話ですが、これは何かといいますと、ビルゲイツが当時インターネットにマイクロソフトが遅れているという状況だったのを、これからは本気でやるぞというようなことを宣言した時のスライドになります。ここに書かれている事は本気で取り組みますと、インターネットというのはものすごく大きな機会があつて、世の中にとって役に立つということをちゃんとやっていく為には開発者と一緒になって作っていかなくてはならず、長期的に取り組んでいくという非常に強力な宣言を社外に対して行いました。当時のマイクロソフトは私が開発にいた中でもインターネットを本気でやるという状況ではありませんでしたが、外に宣言することにより中も変えるということが出来たのはビルゲイツだと思います。これによつ

てインターネットへのシフトをしました。これが 25 年間の 3 つの大きな転換点だと思います。

6. クラウドコンピューティング

そして転換点を過ぎてマイクロソフトは生き残っている訳ですが、今何が起きているかという「クラウドコンピューティング」ということで、これはインターネットの向こう側の非常に大きなデータセンターがあって、そこでこれまでにないような規模でコンピューターが動いているというような状況です。大規模で安く使えるようになりました。あと考え方が根本的に違うのは、昔のメインフレームの時代には

先行投資が必要だったのですが「クラウドコンピューティング」の中では使った分だけ支払いをするという大きなビジネスとしてのモデルの変化があったわけです。

インターネットの向こう側で動いているデータセンターもどんどん進化していて、第一世代というのが今でもパソコンとして存在していますが、こういったサーバーです。第二世代になってラックというものに入ってその中にサーバーがたくさん入るような形になり、今でも第二世代のサーバーはたくさん使われています。今現在移行しようとしているのはコンテナ型のデータセンターということで、普通輸送用のコンテナということで規格が決まっていますが、その中にコンピューターを何千台も詰め込んでサーバーを大規模に動かしていくことになります。これから第四世代ということで、もう少しコンテナでも小さいものにして、たくさんサーバーが入ってもエアコンですとか特別な設備を必要としないで、水とインターネットへの接続と電気があれば、データセンターとして活用できる。しかも外にそのまま置いてしまう、もっと安くなって進化している状況です。

7. Windows Live

そういったデータセンター側の進化があるわけですが、具体的に私たちが今使えるものは何かという話をします。

まず「クラウド」というものを活用するため、マイクロソフトでは Windows 7 というものがありますがこれを使って「クラウド」に繋がる、サービスとして Windows Live というものが提供

されています。これは具体的にどういうものかという、Windows でただで提供されている Web



Windows Live って?

Windows をご利用のお客様に
無償で提供する、コンシューマー向け
ソフトウェア + Web サービス

- 製品がたくさん!
- 全世界で毎月 5 億人以上
- 日本では毎月 740 万人以上が利用

のサービスになります。これには色々な製品がありまして、全世界で5億人以上が使っていて、日本でも740万人以上が利用している非常に大きな「クラウド」のサービスになっています。

その内訳ですがWindows Liveで「クラウド」の側で動いているものとしては「ホットメール」というメールソフトがあります。そして「クラウド」にデータを保存し皆で共有するというような目的として「スカイドライブ」があります。更にマイクロソフトというとWindowsとオフィスというイメージがありますが、オフィスのアプリケーションが「クラウド」で動いているというのが「Office Web Apps」というものです。

スカイドライブ上にマイクロソフトオフィスのファイルをあげて他のパソコンから、たとえオフィスが入っていないなくても読めてしまい、ちょっとした編集も出来る。更にスマートフォンでもiPhoneでも使えるというようなものです。「クラウド」側でのサービスです。そしてPCの上でダウンロードして使うものもあり、メッセージや、写真ソフトのフォトギャラリー、動画を扱うムービーメーカーもあります。ホットメールをWeb経由で「クラウド」側で使うと遅いというものがありますので、

メールソフトを使ってダウンロードした状態で使う、あるいはネットに繋がっていない時でも編集したり読んだりすることがあります。色々なものと同期するようなメッシュというものがあったり、ブログに書き込むライターというものもあります。これらはWindows Live エッセンシャルズという名前で、無償で全体をダウンロードできますのでご活用ください。先ほど「Office Web Apps」というお話をしましたが、インターネットの接続があればブラウザ上でオフィス製品が無償で使えるというものです。

【デモ】

これらは話だけではわかりませんのでデモを交えて説明をしていきます。

一緒にデモしてくれるのは大島友子さんです。



マイクロソフトの大島です。どうぞよろしくお願ひします。今お話がありましたダウンロードして使う商品のご紹介からしていきます。まずこちら

が写真の編集を行うソフト、Windows Live フォトギャラリーになります。もう皆さん使っている方が多いかと思いますが、2011というバージョンが去年の秋に出たばかりですので、今日は最新版を持ってきました。今写真がたくさんありまして、これはマイピクチャに入っている写真を自動的に読んできています。加治佐がいっぱい写っています。加治佐さんは何処の出身かという、バス停の写真があります。(加治佐というバス停の看板)

加治佐は、今は南九州市です。指宿郡というところが統合で南九州市になりました。北九州市に比べると人口は少ないですが、北と南で九州を支えています。たくさん写真がある時に皆さん整理に困ると思いますが、その機能を見てください。女性と一緒に写っている写真がありますが、たとえばこちらに人物タブというものを付けてみたいと思います。これは今デジタルカメラにも顔認識機能が付いていますが、笑顔になると自動でシャッターを切るデジカメがありますが、今フォトギャラリーも、私は何もしていませんが自動的に顔を二人分認識して、この人物は誰ですか？と聞いてくれています。名前を割り当てると既にこのフォトギャラリーの中で名前を割り当てている人が出てきます。これは加治佐だと割り当てると、検索で加治佐の写真だけを出してきます。こうやってタブを付けておくと簡単です。



この上を見ていただくと、これは加治佐さんですか？と聞いてきます。顔認識でキーワードを付けていなくても、同じ人じゃない？とフォトギャラリーが自動的に持ってきてくれます。一件ごとにキーワードを付けたりファイルの名前を変えて整理をするのは大変ですが、まとめて簡単に出来ます。たとえば日付順に並んだ写真もデジタルカメラの写真には自動的に日付が付いてきます。普通の写真をスキャナーで読み込んでも、プロパティに日付が出ますので、月ごとに簡単に整理が出来ます。また編集機能ですが、加治佐さんのアップの写真ですが、直したいところを修正することが出来ます。

顔に付いた汚れや、2枚の写真のいいところ取りで合成写真も自動的に綺麗に作る事が出来ます。写真を何枚か選んで、ムービーを自動で簡単に作る事が出来ます。作ったものはYouTubeやスカイドライブに上げたり、フェイスブックで共有したりすることも簡単に出来ます。



またエクセルやワードでも簡単に表やグラフをスカイドライブに上げることが出来ます。ハードディスクに保存をするのと同じ手軽さで、スカイドライブにアップすることが出来ます。ブラウザで編集という機能を使えば、エクセルやワードが入っていないパソコンでもIE上でエクセルのシートが同じように見られます。(大島さんの説明終わり)

もう少し詳しく見たい、さわってみたい方は、明日パソコンお役立ちコーナー交流広場にお越しください。

3月末にシニア情報生活アドバイザー様向けに、「クラウド活用講座」を新しい品川のオフィスで行いますのでご都合がつけばお立ち寄りください。

8. さらなる飛躍に向けての転換点

「クラウド」のサービスはこれからも色々出てきますが、そういった「クラウド」のサービス

やデータをどのように使っていくのかということが重要になってきます。パソコンだけでなく携帯電話やテレビあるいは大きなスクリーンも今後タッチになっていって進化した場合、デバイスがたくさん出てきた時、それを操作する仕方が変わらなければなりません。「ユーザー インターフェイス」というものはインターネットと繋がりながら洗練された形で進化してきました。今は「クラウドコンピューティング」ということで、パソコンだけではなく色々なデバイスでクラウド上のサービスを使うことが出来る。その先にあるものはNUI（ナチュラル ユーザー インターフェイス）自然なインターフェイスが出てくるということです。

まずマイクロソフトが昨年11月に製品として出したものは、XBOX360 キネクトです。コントローラーが無いので体の動きを読み取りながらゲームを操作するものです。新しいユーザー インターフェイスはこれからもどんどん出てきますが、コンピューターが翻訳をしたり、顔を認識してログインや認証に使ったり、自分のコンピューターを使っている環境を認識して適切な提案をしたりと、コンピューターがより人間に近づく形に進化してきます。

人とコンピューターの関係が変わってくると思いますが、一番大事なことはネットワークを介在して人と人がうまく触れ合うことが大切になると思います。コンピューターが人に優しくなっていくと考えるだけでいいと思います。

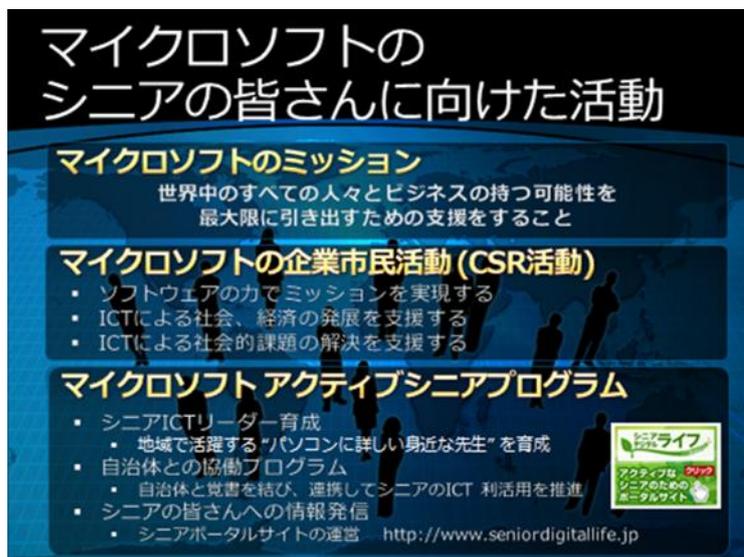
これまではコンピューターの起こすミスは非常に大きなものでしたが、これからはコンピューターが分からないことはもう一度聞き直すような、人間と人間を取り持つような進化をしていけたらと思います。

NUI（ナチュラル ユーザー インターフェイス）の入力として、音声であったり顔であったり、コンピューター側からの情報も、大小のデバイスであったりと、大小交えて連携し適切な情報を送ってくるという形が考えられます。今後5年から10年の間に、誰にでもどのような時にも使いやすい手段を考えた技術が進化してくると思います。

9. マイクロソフトのシニアの皆さんに向けた活動

マイクロソフトの共通のミッションは、世界中の全ての人々やビジネスの持つ可能性を最大限に引き出すための支援をすることです。

人のために役立つというその先にあるものは、マイクロソフトの「アクティブシニアプログラム」というものがあります。シニアのICTAの育成、自治体との連携や、シニアの方たちへの情報発信サイト「シニアポータルサイト」の運



The image is a poster titled "Microsoft's Activities for Seniors" (マイクロソフトのシニアの皆さんに向けた活動). It features a dark blue background with white and yellow text. The poster is divided into three main sections. The top section is titled "Microsoft's Mission" (マイクロソフトのミッション) and states the goal of supporting everyone's potential. The middle section is titled "Microsoft's Corporate Citizen Activities (CSR Activities)" (マイクロソフトの企業市民活動(CSR活動)) and lists three bullet points: using software to realize the mission, supporting social and economic development through ICT, and supporting social issues through ICT. The bottom section is titled "Microsoft Active Seniors Program" (マイクロソフト アクティブシニアプログラム) and lists four bullet points: ICT leader training, training "PC-savvy teachers" in the community, collaboration programs with local governments, and information dissemination to seniors. A small logo for "Active Seniors" (アクティブシニア) is visible in the bottom right corner of the poster.

マイクロソフトのシニアの皆さんに向けた活動

マイクロソフトのミッション
世界中のすべての人々とビジネスの持つ可能性を最大限に引き出すための支援をすること

マイクロソフトの企業市民活動(CSR活動)

- ソフトウェアの力でミッションを実現する
- ICTによる社会、経済の発展を支援する
- ICTによる社会的課題の解決を支援する

マイクロソフト アクティブシニアプログラム

- シニアICTリーダー育成
 - 地域で活躍する“パソコンに詳しい身近な先生”を育成
- 自治体との協働プログラム
 - 自治体と覚書を結び、連携してシニアのICT利活用を推進
- シニアの皆さんへの情報発信
 - シニアポータルサイトの運営 <http://www.seniordigitallife.jp>

営を始めておりました、ブログコミュニティの募集をしております。活用していただければと思います。

今後 ICT を使ってより豊かな人生を送っていただけるよう活動をしていけたらと思います。

【質疑応答】

質問者 1

シニアからのお願いです。私は Windows 95 から XP、つい最近 Windows 7 にしましたが、OE (アウトルックエクスプレス) が XP まで使えていたのに、7 になってからはダメだということで、Live メールを使ってはみたのですがリボンが多くて使いにくい。これは若者向きだと思い、仕方なくアウトルック 2010 に切り替えました。スカイドライブは重宝して使っていますが、7 になっても OE に変わるようなものを開発していただきたい。

加治佐 俊一氏

Live メールは少し良くなったかと思っておりましたが、まだまだということですね。リボンのインターフェイスは、基本的には若者向けというより、リボン自体は大きくなってしまっていて、出来るだけ直感的に作ってはいますが、中々それに馴染めないという方も多いと聞いております。まだ改善の途中ですが、そういった声をもとに進めていきたいと思っております。オフィスの最新版 2010 では新機能のほかに、[ファイル]タブを搭載して、Office 2003 以前の[ファイル]メニューと同じように使っていただけるなど、改善をしておりますので、是非継続して使っていただきたいと思っております。

■特別講演

「シニアネットの 2010 年代の飛躍に向けて ～10 年の節目に将来を展望する～」

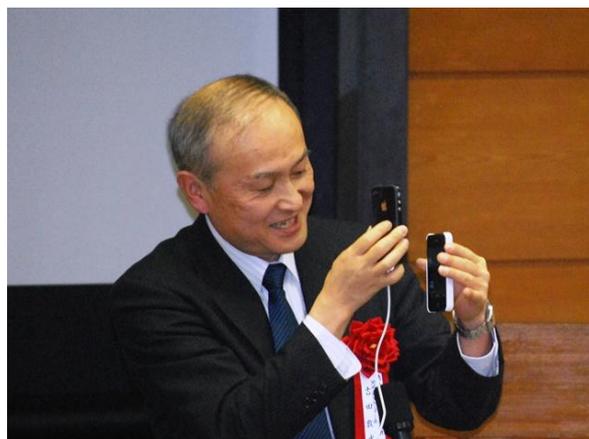
吉田 敦也氏(徳島大学 大学院教授、地域創生センター長)
大熊 勇雄氏(NPO シニア SOHO 横浜・神奈川 副代表理事)

皆さんこんにちは。久しぶりに緊張しています。というのは、去年の5月から、iPhone アプリの開発をするため、Windows をやめマックに替えたのです。つまり、“やむなく” 替えたのですが、そのため、こうした場面で、実演しながら講演しようとする、いろいろ慣れないことが多くこれまでのようにススイいかない実情です。

一方で、大学では、Office を使わないで情報教育するとか、学生との連絡やレポート提出などにクラウドサービスを使うなど、新しいことに挑戦してドキドキな毎日になっています。

1. ICT の衝撃的進化

今日の話その1は、iPhone、スマートフォンです。今、これを使って高齢者の見守り事業に取り組んでいます。専用アプリ「とくったー」というのを開発して、100 人の高齢者に使ってもらっています。画面はこれです。後ろの人には見えなくてすいません。こんなことやりだしたので iPhone をいくつも持っているのですが、もちろんギャラクシーも持っており、バランスよく、皆さんとお付き合いしています。



さて、この iPhone にはフェイスタイムという IP テレビ電話ソフトがインストールされています。ついこのあいだまで、iPhone と iPhone の間でしか使えなかったのですが、それが MacBook (つまりパソコン) でも使えるようになりました。受信側の MacBook の画面を外部出力しておきます。そして、こんな風に iPhone に向かってニコっとすると、自分の顔を大画面で見ることができます。これを使って、高齢者見守りアプリ「とくったー」の画面を大写しにしてみましょ。見えますか? ちょっと暗いですが、プリセットされたフレーズ、例えば、「体調がとても良いです」を「ピッカー」で選んで、ポンとタッチすると、ツイッターにつぶやくことができます。見守りチームの仲間から返事がきたらウキウキ。これまでとは違う「楽しい」見守りです。

話題その2は、つぶやく体重計です。わざわざ飛行機で運んできました。一見普通の体重計です。しかし、体重計には珍しく、URL (<http://www.wICThings.com>) がついています。こちらはいわゆるガラパゴス携帯です。優れもので、アクセスポイントとなります。一般的には、ポータブル Wi-Fi と呼んでいます。フォーマの 3G 回線を使って通信。5 台までインターネット接続できます。体重計はあらかじめこのアクセスポイントに無線接続するよう設定してあります。

体重計に乗ります。今、体重を量っています。69.1 kg。昨日食べ過ぎました。それはともかく、体重は測定した値を携帯のアクセスポイントを経由して、ツイッターにつぶやきます。

昨日、他の所で、予行演習したのですが、その時はなぜか失敗。今日はどううまくいくでしょうか？これは「ふくろう」というツイッタークライアントです。ついでにつぶやいておきましょう。「シニアネットフォーラムなう」。

athuya_y0Shida が私のツイッターアカウントです。これを使って体重計のつぶやきを見てみましょう。来ています。届いています。

「2011/02/17 13:45:04 シニアネットフォーラムなう」、そして「My weight: 69.1 kg. Notteminahare-Program」。

私が、考えたアイデアは、この体重計を商店街のアーケードに置いておきます。デフォルトでは、ひとつのツイッターアカウントに体重を投げる仕様ですが、ICカードなどとの組み合わせで乗った人を識別するシステムに改造できたとします。そうしたら、地域の住民のその日の体重をツイッターで公開アーカイブできます。平均体重をレポートできます。「今日の三鷹は平均 66.5 kg、神宮は 78 kg。神宮の負け！」といった感じです。「全国その日の体重競争」ができます。体重と医療費（例えば、糖尿病の薬の使用量）の関係を街頭分析できます。

「保険料を安くしましょうキャンペーン」やビジネスも可能です。この体重計は、アマゾンで、12,800 円くらいで売っています。デモが無事済んで良かったです。ハラハラしました。

話題その 3 は、クラウドサービスです。クラウドとは、これまでと違って、ひとりひとりがひとつひとつアプリケーションを用意しなくても良いネットサービスです。しかも多くは無料です。

例えば、体重計の会社は、自分たちのサーバーを作って利用者のデータを蓄積／管理してくれます。個々人がそれぞれエクセルに保存するのではありません。データはネット上に保存され、旅先からでも、どの端末からでも、呼び出し可能です。なので、他の人と共有するのが簡単です。比較しながら、競い合いながら閲覧したり利用したりできます。健康づくりの場合、励みとなります。モチベーションが高まり、継続しやすくなります。そういう仕掛けです。

つまり、クラウドを使うというのは、単に、時代が変わったとか、みなが共通に使えて、便利だとか、無料でコスト削減に有利、ということではなくて、ソーシャルな場に生活を持っていく、社会とともに健康作りするということです。こういう新しいライフスタイルに参加、アプローチするということだと思います。

話は少し戻りますが、クラウドサービス利用の視点から、さきほどのフェイスタイムの応用について、今一度、考えてみましょう。

例えば、フロアからの質問の際にスタッフが「マイク」を届けますが、その代わりに、iPhone を回して、このコンピューターの映像と音声の出力を液晶プロジェクタとスピーカーに繋いでおけば、その人の「顔画像つきマイク」になります。もしも質問者が iPhone をお持ちであれば、自前の iPhone で議論に割り込めます。質問の様子をスクリーンに映し出せます。参加者のプレゼンスを高めるために効果的です。ネットで共有すれば、会場外の人にもライブで質問したり議論

ICTの衝撃的進化

ポケットのなかに入ったコンピュータ

◆スマートメディア (iPhone/iPad)

◆モバイルインターネット

「あちら側」から提供されるウェブサービス

◆クラウド・コンピューティング

◆ノマドワーク

本当に必要ことを便利で面白く支援する思想

◆アプリ

◆電子ブック

に参加したりできます。こうしたことは今までもできたのですが、クラウドサービスを基盤にしたスマートフォンを使えば、意見をライブに共有する環境が一瞬にしてできてしまう、というところがポイントです。

もうひとつ、クラウドを活用した市民活動について紹介しましょう。昨晚、小平にちょっと寄り道をしたのですが、そこでMystyle@小平という NPO 主催のソーシャル・ビジネスの勉強会がありました。そこで何をしたかという、私どもの NPO 徳島インターネット市民塾が総務省 ICT ふるさと元気事業のひとつとして実施中の「スマートフォンとツイッターによる高齢者見守り事業 “とくったー”」の一環で行っている「生中（なまちゅう）放送局」を使って、小平と徳島とをネットで結んだ「第1回国際竹けん玉大会」を開いたのです。

参加者は、小平は、ソーシャル・ビジネスを旗印に集まる起業家たち。比較的若い世代でした。徳島からは、見守り事業に参加しているシニアのみなさんが参加しました。

これが竹けん玉です。（吉田先生竹けん玉実演。成功）拍手！ 竹けん玉は、堀池さんに設計図をいただき、手伝って頂きながら、自分でこしらえました。高度な技（わざ）は私にはできませんが、竹けん玉を自作したり、競技のために一生懸命練習したりすると健康になる、ということで見守りコンテンツにしました。

ライブ中継には、ツイットキャスティングという iPhone アプリを使いました。広い意味でのクラウドサービスです。こんなのですが、「ゴーライブ」のボタンを押します。そうすると、出てきたかなあ。さらに「投稿する」のボタンを押します。これが、うまくいったら、この会場の映像が生中放送局のウェブサイトに表示されます。会場のスクリーンの、中央下の方に出ます。多分回線がちょっと、うまくいきませんが、こんな風に「配信中」と書いてありますね…。

こんな感じで、ツイッターやスマートフォン、そして、クラウドサービスを使うことによって、ライブでホットな「遠隔お付き合い」が簡単にできます。難しいことはありません。シニアにも、すぐさまできてしまいます。



発表に移ります。

これが iPhone 用の VGA コネクタケーブルです。今日はパソコンではなく iPhone を使ってプレゼンします。

普通、iPhone の画面は通常外部出力できないのですが、「即プレゼン」というアプリを使うと PDF ファイルやパワーポイントファイルに限ってそれができるようになります。900 円もするのですが、優れものです。開きました。ヒュッとこうすると、次のページに行きます。レーザーポインタ機能もついています。ピッと押すと、ポイントします。やる一でしょう。

今、ここで言いたかったのは、ICT は衝撃的に変化している、進化している。それについて行こう！ということ。一生懸命やるというスピリッツ。努力する、忍耐する。しかし、楽しく

学ぶ。そうすると、デキル。これです。スマートメディアでモバイル・クラウドすることをノマドワークといいます。これからのシニアスタイル、コミュニティライフスタイルです。

2. ソーシャルメディアの台頭

チュニジア、エジプトが崩壊しました。フェイスブック、ツイッターというようなソーシャルメディアが、民衆革命に大きな役割を果たしたということです。それは、仕組みやシステムではなく、人がその利用によって繋がっていくということを実感し、事実、繋がっていったからです。

この会場のみんなが繋がったらどれだけ楽しいことでしょうか。喜びが元気を作っていき、生活を作っていき、それが社会の土台になります。個人が情報発信する、リアルタイムに実名でしゃべっていくという社会です。

一方で、そういいながらも、そんなのについて行くのは大変です。と、マイクロソフトの加治田さんが強調しておられました。その通りです。でも、私たちは、先程紹介した「とくったー」という見守りアプリを使って、つまり、スマートフォンとツイッターを使い、「ゆっくり見守る」社会を逆に創り始めています。

3. スローな社会の希求

わかりやすくするため、見守り事業を例に話を進めましょう。これまでの見守り事業では、見守る側は独居老人のお宅を訪問しなくてはいけない、見守られる側は、お巡りさんや民生委員の人に声をかけなくてはいけないということがあります。それが、ある意味、ストレスになっていました。一方、先程のとくったーの事例では、インターネットの力を使って、遠いところからでも見守れる、地域のどんな人でも見守れる。あるいは、見守られている人が見守ることができる。という図式です。

加えて、このツイッターによる見守りを高齢の皆さんにお教えしたら、「70歳になってツイッターができるとは思いませんでした」という言葉を頂き、とっても喜ばれました。さらに、その人が70歳であっても、学ぶことができたなら、逆に、自分よりはるかに年下の50歳の人を見守ることができます。それも、見守るといって堅苦しい形ではなく、ツイッターの使い方を教えてあげるという形で行います。具体的には、時々集まって、「こうするのよ」、「こうじゃないかな」と言うような一言を交わす。あるいはメールでアドバイスする。それだけでいいのです。

ソーシャルメディアの台頭

ツイッター、フェイスブック

- ◆人と人との「ゆるやかな」つながりを生み出す
- ◆ユーザ数5億人という巨大ネットワーク
- ◆リアルタイムな体験共有
- ◆個人が情報発信
- ◆実名社会

×検索 ○人とのつながりが「良い情報」を探し出す
事故現場ではたまたま居合わせた人による救難体制を組織
腐敗した国のあり方を問い、倒してしまうことさえできる

スローな社会の希求

どうなるんだニッポン!?

国の財政、経済、雇用の状況は悪化の一途
高齢社会の進行は止まる気配が無い
社会の閉塞感が高まるばかり

国家の礎

- ◆癒しの時間、くつろぎの空間
- ◆愉快でゆったりした人間関係
- ◆やりがいある仕事が見つかる
- ◆いくつ何十になっても稼げる社会
- ◆生き甲斐ある生活／人生を送れる

その時の笑顔が、見守られている人の気持ちを温めます、見守る人も暖まります。混ざってどっちかわからない、楽しい見守り、やってみたい見守り、笑顔をつくれる見守り、足腰が不自由で動くことができなくてもできる。なんて今までなかったと思うのです。

ICTをやらなくてはいかんとか、見守りに重い腰を上げるということではないのです。

4. シニアネット・ステージ2委員会：シニアネットのあり方の提言

こんな風に、人生の資産を活かしつつ、そしてICTを梃に、楽しく、ゆっくり、スマートに生きる、交流を楽しむ、社会参加するというのがシニアの力です。広大な可能性に囲まれており、特に、機能するコミュニティづくりという面でポテンシャルが大きい。そのため、シニアネットはステージアップしましょう。これが、今朝、冒頭、岡部理事長がおっしゃられたシニアネット・ステージ2です。

秋山先生のお話の中にあつたように、国や中核となる大学は、シニア社会の構築に向けて大きな一歩を踏み出そうとしています。その時に、一番必要なものは皆が一体となった「力」です。しかも、シニアネットというこれだけの大きな力がすでにあります。それをそのまま使いませんか！？ というのがシニアネット・ステージ2の提案です。

日本のシニアネットは、10年を経て、ルーツであるアメリカのシニアネットをはるかに超えています。日本独自の力を作ってきましたし、生きがい、やりがい、地域貢献などの点では、世界モデルにもなりうるものへと成長しています。



シニアネットはこれからどうなっていくのでしょうか。これについては言うまでもありません。新しい公共の形成、そのための一体化した力の活用、そういうあり方を求めるべきであるということです。その中で、何か仕事を生み出す。そこでのビジネスモデルは何か、です。

中国は間もなく、私たち日本よりもさらに高齢社会となります。中国に限らず、世界の国々はすべて高齢化社会に向かっています。そんな状況のなか、全国に100を超えるシニアネットを持つ私たち日本は、高齢社会モデル構築の面で一歩先に踏み出しています。その100以上のシニアネットが、ハブ化し、ネットワークしていることはさらなる強みとなります。地域の力どころではありません。国の力となります。答えは、やるかやらないか、やれるかどうか、やるためには、小さくても早期に一歩を踏み出すこと。大げさなことを考えていたら進みません。

経産省の室長がご挨拶をされていましたが、認識はしていますということですが、そのことがアクションになるかどうかかわからないという含みを残して帰られましたが…。それに頼る必要は必ずしもありません。私たちはメッセージを送るべき立場です。実践して、実績を積み上げていくことが原点です。それが「サイバーセンター」、あるいは、「シニアネットセンター」へとつながって行きます。

比喩として、言うなら、なぜスマートフォンがこれだけ爆発的にヒットしたのか、その中でもAppleのiPhoneが抜きんでたのか？ 答えの一つは、本当に重要なものが、1個という形で、ここにあったからです。アプリとはそういうものです。

それは、形を変えれば、ここにいる人たちが全員束になって、しかし、それぞれが、情報発信、情報リレー、共有というアプリ的行動を取ることです。それが、本当に必要なことです。

また、例えて言うなら、今、徳島大学では、スペシャルのプロジェクトを作って、入学したての1年生が、iPhoneアプリ開発に取り組み、ネットストア公開できるよう支援しています。

そうすると、無料ユーティリティの部門で2位にランクされる「身長予測」というアプリを作る学生が現れました。「標高ワカール」という自分の位置の標高がわかるというアプリを作って、月間10万ダウンロードを記録し、表彰される学生が現れました。これは素人集団の快挙。そして、これまでの大学教育ではありえなかった成長です。

ここで考えるべきことは、こうした現象は、アップル社が、小学生から大学生まで含めて、若い人たち、あるいは、一般プログラマーの潜在力を引き出す新しいビジネススキームをスマートフォン基盤サービスとして打ち出したことによる、この点です。

これこそを見習うべきであって、地域のニーズ、シニアにとって本当に必要なもの、私たちはそれを掘り起こし、焦点を絞って支援する仕組みを作るべきだと思います。そのためには、ドロッカーが言うシンクアウトするチームが必要です。シニアネットワークシンクタンクです。これがあれば動くのではないかと考えています。

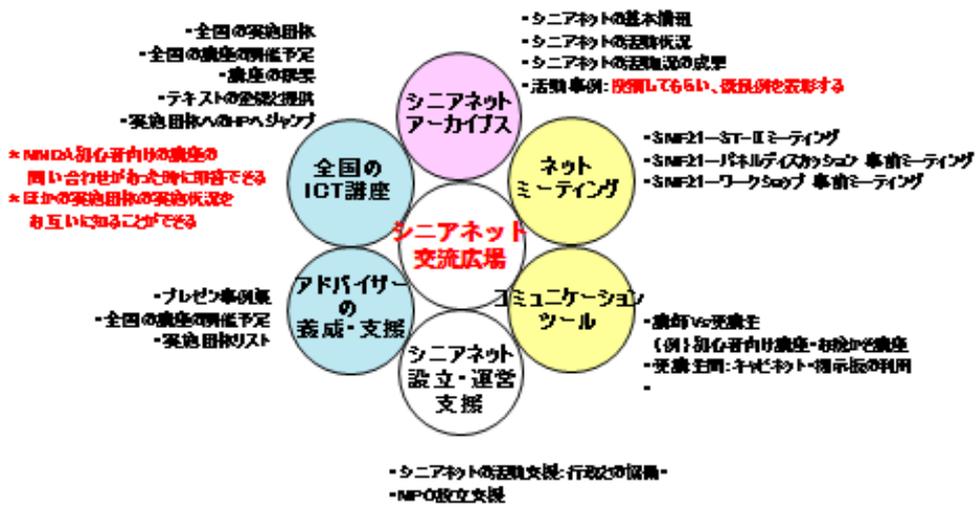
加えて、シニアネットの中では、皆をリードしていける力を持った人たちが育っています。シニア情報生活アドバイザーです。そのライセンスを持った人たちが3,000名を超える状況になっています。今朝

の朝食時に、滋賀の湖南ネットの斉藤さんから、ポルトガルの人が、シニア情報生活アドバイザーになったというもお聞きしました。こんなうれしいことはありません。私たちはこれからポル

トガル語を学ぶことができる。トルティーアを食べながら、ものすごくメランコリックで、情緒のあるシニア情報生活アドバイザー交流ができそうです。サイバー・シニアネット・センターではこうした3,000人をネットワークし、活用し、ますます楽しく元気にやって行きたいなと思っています。

そのサイバー・シニアネット・センターについては、大熊さんがお話いただけますから、この辺にします。

35. サイバー・シニアネット・センター(CSNC) シニアネット交流広場



大熊 勇雄氏：ポータルサイト「シニアネット交流広場」 について

私はシニア SOHO 横浜・神奈川という NPO 法人の副代表を務めさせていただいております大熊です。

吉田先生の非常に楽しいお話を、もっと聞きたいと思っていらっしゃる方も多いと思いますが、せっかくですので、これを機会に 10 分ほどで「シニアネット交流広場」というサイトについてお話をしたいと思います。

これまでにお話にでました「シニアネット・ステージ2委員会」のメンバーということで、端のほうで、いろいろと先生方のお話を聞きながら、どういう形で、お手伝いできるかということで、いろいろ話の進んでいる中で、われわれのシニアのいろいろなスキルやそういうものをもっともっと発信できる場があったらいいよねと、ということで、そういうものを少しずつ、テスト的に作りながら、どんなところですかということですとやってきておりました。



今日お話しするのは、その中の現状の内容です。これは完成形ではなくて、とりあえず、こういうふうな、例えば、家でいえば、モデルルーム的なものを作ってみたと、いうことで、これに対して、3月いっぱいくらいまでにいろいろと実際に希望される団体およびアドバイザーの方に使っていただいて、いろいろと意見をいただきながら、どんどん続けていければなあというふうに思っております。

私は委員の立場でしたけれど、開発の委託を受けまして、作業を続けておりました。実際の内容ですけれど、今日は、モデルルームとこういうウェブサイトについて、一般の方が、このサイトをどう見られるかということ、この時間の中で説明します。ルームに対して、会員制であるということで、一般の方およびと会員という方について説明します。

- 1) 一般の方
- 2) シニア情報生活アドバイザー会員という 4,000 人の会員。共通の ID で中身をみられる方。
- 3) シニア情報生活アドバイザー養成講座を実施団体の管理者に代表で ID を発行する
- 4) アドバイザー養成講座をやっていないが、日本中のシニアネット団体がたくさんありますから、そういう方たちが、ここを使ってみたいという方にも ID を発行する
ということで、4つの見る方たちがいるということで作っております。

配布されている資料の中にネットコモンズというカタログがありますが、それは、国立情報学研究所というところが、4年から5年くらいかけて、オープンソースとしてやっていることで、情報共有基盤システムということで開発しております。文科省の管轄で、予算を細かく教えてくれませんが、相当な金額をもらってやっています。オープンですから、もちろんいろいろ協力している企業等があります。そういう方たちがいろいろとソースを改良して、こういうものができたよ、こういうテンプレートができましたよということで、どんどん積みあがっています。今は、国立情報学研究所とは別に、今はコモンズネットという NPO 法人ができて、そこ

の会員となりますと、いろいろの情報をいただいているということで、今は、私どものNPOもその会員となっております。

先ほどの秋山先生からも柏市のお話を聞きしましたが、柏市の教育委員会などは積極的に使っており、全部ネットコモンズで動いております。埼玉県も教育委員会で使っています。ちなみに、現在、ネットコモンズを使っている方はいらっしゃいますか。手を挙げていただけますか。1人ですね。

簡単に言えば、操作性はブログと同じです。権限が必要ですが、権限を持っていれば、誰でもこのサイトに情報をアップすることができます。吉田先生もお話しされましたように、どこでも、誰でも、いつでもということで、携帯に対しても機能は持っております。それなりのデザインにすれば、携帯からも見るすることができます。

このシステムを作るには、基本的なページ、例えば、トップページだけを作るのでしたら、実際には2時間くらいでできます。ただし、これらは、デザインではなく、どう使っていくかということですので、簡単にできるのではないかと思います。使いながら、使い勝手を良くしていくということでやっております。

こちら見ていただくと、この本ともう1冊の本が発売されています。こちらの本を見ていただくと、インストールから制作まで全部できます。



これは、どなたでも見られるページです。モデルルームということで考えていただければ左側の方にあります、シニアネットニュースとか、パソコン・インターネット講座情報ということで、自分の団体ではこういう講座をやっているよと、こんなことをやっているよと、こういうイベントがあるけれど参加してみませんかとか。とにかく情報を発信するということを目的としています。例えば、この中で、シニアネットニュースということは、各団体の管理者の方はIDを持っていますので、こういうことをやりますよということで入力しますと、その内容が出てくるということです。

家に帰られてから、今日の配布資料の中にURLが入っておりますから、それを見ていただき、ゆっくりと各ページがどういう内容になっているかことがわかると思います。自分の地域では、どういう団体があって、どういう講座をやっているかの検索機能が全部できております。オープンソースの特徴というのは、それを直すのではなく、力のある人たちが、皆で寄ってたかって直るのがオープンソースですので、完成を求めることはせずに、協力するという気持ちでやっていければいいかと思います。

今、活動名、実施団体名、地域、画像内容についてはこのホームページの管理者にあるのではなく、その団体の方が入力していただくことになっています。その団体の方が ID・パスワードをいい加減に管理していると誰が入れているか分かりませんので、ちゃんと管理していただき、パスワードが漏れてしまった場合は、変えていただいて責任もって団体で管理していただくこととなります。レイアウト関連の URL を入れたり、検索キーワードということで入れたり、写真を1枚入れることができます。これのいいところは、ダウンロードしますと、カウンターが表示されますので、この記事に対してどのくらい興味あったか、ダウンロードしたかがわかります。これがないとどれくらい来ているかわからないのです。

ログインの情報はなかなかわからない部分もありまして、サーバーの機能も、もう少し深く調査していくと、できるのですが、現在このサイトはさくらインターネットというサービスの会社を利用し、費用は年間数千円です。そのようなホスティングサービスの会社が、正式に何社か手を挙げて、インストールなどもフォローするサービスが始まっております。

■パネルディスカッション

「シニアのパワーアップとシニアネットのさらなる飛躍！」

■コーディネーター

吉田 敦也氏

徳島大学 大学院教授 地域創生センター長

■パネリスト(50音順)

井上 文雄 氏 NPO 法人仙台シニアネットクラブ 理事長

臼倉 登貴雄 氏 NPO 法人イー・エルダー 理事

斎藤 富士夫 氏 NPO 法人湖南ネットしが 理事長

佐々木 敏夫 氏 NPO 法人あびこ・シニア・ライフ・ネット 理事長

高橋 克司 氏 NPO 法人とかちシニアネット 理事長

1. 吉田敦也コーディネーターの発言

10年を過ぎた日本のシニアネット。次のステップをどうしたらいいかというのが、このパネルのテーマです。

この議論は毎年繰り返しています。そこからどう脱出するかという課題もあります。新しくシニアネットを作ろうとしている人たちへの啓発メッセージとしては、毎年、同じことを繰り返すことが必要です。

一方で、毎年参加しておられる方にとっては発展的・生産的にクリアしていかないといけません。そのあたりを考慮しながら議論していきたいと思います。

登壇くださったパネリストは日本の名門シニアネットの代表者です。それぞれの活動を配布資料1にまとめていただきました。その活動の上にこれからどんなことが必要なのか、また、課題をどう解決していくのかということを配布資料2に書いていただきました。これらを材料に1人5分くらいの時間単位で話を進めていきたいと思っています。後半は質疑応答です。

落としどころは「こんなことをしてきたから次はこうする」「そうするためには何が必要だ」にしたいと思います。そこから「シニアネット同士で手を組みましょう」とか「シニアネットセンターというものを使ってシニアネットをネットワークしましょう」「そのためにはこういう機能が必要だ」というようなところに議論が及べばと思います。それでは、井上さんから、お願いします。



2. 各団体の活動状況と将来に向けての説明

井上文雄氏 (NPO 法人 仙台シニアネットクラブ 理事長)

「仙台シニアネットクラブ」の井上でございます。先ほどコーディネーターから「名門」と言われましたけれども、古いだけが名門であるならば名門かもしれませんが、必ずしもそういうわけではございません。私どものクラブはここに書いてあるとおりでございまして、読んでいただければおわかりになります。

一つは、いままでの沿革とか、歴史とか、活動の状況ということでいいますと、スタートは、「シニアがシニアに教える」という、そういう形でスタートしました。

「活動の特徴」に書いてありますが、これが我がクラブ「仙台シニアネット」の特徴でございまして、2人に1人のサポーターがついているというのは、シニアの弱点をカバーするということでやってきたことです。皆さんも既におわかりのとおり、眼は見えにくくなる、私も老眼鏡を外すとぼやっとしか

見えないということになりますし、耳はちょっと具合悪くなる。物はすぐ忘れてしまう。こうしなさいといっても動作が遅いし、というようなことからなっているのですね。次は、パソコンをせっかく習ったのだから感想文をそのまま入れなさいということで、実感、達成の喜びを与えるということ。それからテキストは、経験に基づいていろいろやりました。

もう一つ、私どもでは「シニア・パソコン・リーダー養成講座」を終わった人から、ボランティアで活動する人いませんかといって募集しているのです。なぜかといいますと、皆さん方も大変お困りじゃないかと思いますが、入ってくる人は思ったほどいませんね。したがって、実際に教えるのを経験した方に我が方に入って一緒に活躍しませんかという呼びかけをしているわけです。入ってくれた方々をまた1、2年も様子を見ながら、これはと思われる方を今度はアドバイザーとして受けさせたりしまして、さらに指導者として、インストラクターとして育てていくというようなことをやっております。

「その他の活動」の中で、これからの我々のやらなければならないことがこの中に含まれている部分もあるわけですが、要は、いろいろなところと手を組んだなかで考えていかなければならない。

私ども、実は2010年、昨年、NPOとして法人認可して、それまでは任意団体で、シニアに教えるということだけをメインにしておりましたが、去年は、NPOを取ったことによってさらにいろいろなほうに発展をしたことをやっていかなければいけないということで、拡大をしようといま努力をしているところでございます。そういう意味からいきますと、本日、吉田先生のお話なども含めて、いろいろな方のお話を聞くことによって、我々も、ビジネス等に向けた問題も何か出てきたのかなと、そんなふうに考えております。



コーディネーター（吉田敦也氏）

仙台シニアネットクラブの要点は、たとえば事業仕訳に遭ったら、残すものは「シニアがシニアに教える」という理念。残していく形は「パソコン講習」ということですね。

井上文雄氏

「シニアがシニアに教える」これはやはり残していかなければいけないと思っています。そして、とりあえず講習は講習として残していき、あとは、これからの発展状況によりますが、教室の形のものにうまくセッティングできるかどうか。そして ICT の技能の講習以外に幅が出てくる可能性があるかもしれません。

コーディネーター（吉田敦也氏）

なるほど。ありがとうございます。それでは、斎藤さん、お願いします。

斎藤富士夫氏（NPO 法人 湖南ネットしが 理事長）

「NPO 法人湖南ネットしが」の斎藤です。私どもは今期で 3 年目の若い NPO です。我々のメンバーはシニアドの会員がすべてです。今日現在 36 名。今月 5 名の、新しいシニアドの養成講座を受講されている人がいて、その方々がまた我々のメンバーに入りますので、41 名。年々シニアド会員が我々のメンバーに入ってきますので、若返り等を含めてどんどん増幅してくるというモデルを考えています。

このなかで、滋賀県の場合、外国人、特に南米系の方が結構おられます。全国でも指折りの外国人の在留人口です。最近の状況では結構帰られる方もいるのですが、お子さんが日本で生まれて定住する方がいて、そのなかの、ペルーの男性の方とブラジルの女性の方 2 名が、シニアドを受講し、皆さんご承知のようにシニアドの認定というのは日本語でやらなきゃいけないので大変なのですが、合格しています。

そういう構成メンバーで、いろいろな事業をやっています。あえて「事業」と言うのは、収益を考えてやっています。そういうなかで、大学との連携はまだないのですが、行政・企業・NPO との協働で、パソコン塾から、幼児教育支援プログラム、これは幼稚園ですが、あとモバイルシニアネット事業として、NPO さんと一緒に携帯電話とかそういうものの講習会をやらせていただいています。

それと、青少年のインターネットの危険を保護者の方に出前で講座をする「e-ネット安心講座」というものもやっています。それと、昨年からやって、全国でも NPO がやるのは珍しいのですけれども、社会経験豊かなシニアが教える職業訓練を、現在、滋賀県で 3 教室やっています。そのうちの一つの、6 ヶ月の外国人専用職業訓練を行なっています。そこに、先ほどの外国籍の ICT リーダーの方にサブ講師として壇上に立ってもらおうということを行なっています。

「未来に向けて」ということで、我々はまだまだ 3 年の法人で、やっと事業的なことができるようになってきたので、「さらなる飛躍」ということで午前中も秋山先生からいろいろお話があ



りましたが、社会経験豊かなシニアの力を社会貢献できるような事業展開をしていきたいと思っています。我々のメンバーも含めて非常に元気で、社会に貢献したいという方々が結構おられるので、以前は会社で品質管理の部長さんをしていたというような経験者もいるので、そういう方を起用して、いま職業訓練をうまく回しているという状況です。

それと、シニアの新しい事業をどんどんやっていきたいと思っているのですが、いかんせん我々のメンバー、養成講座をしても30人や20人の全員が活動できるわけではないので、我々の希望としては、NPOとの連携で、シニアドのネットのほうで、東京でも北海道でもいいと思うのですが、たとえば職業訓練でこういうコースの先生が欲しいといったときに、そういう方に手を挙げていただいて、我々の教室で訓練の先生をしていただけたらとか、人材の不足があるので、横のつながりでできればありがたいなと思っています。

いまのところ、おかげさまでシニアドの養成講座をすると人は集まっているのですが、シニアドの養成講座を受けて、その後どんなことができるのかという、中身の魅力のある事業を考えていきたいと思っています。ということで、行政・NPO・企業、プラス大学との連携を考えて今後事業をやっていききたいと思っています。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ありがとうございます。ペルーとブラジルから来られた人の話、素晴らしいですね。日本在住の外国人がシニア情報生活アドバイザーに興味を持っておられるというのは全国初の事例。もっと発信したいところです。この他、モバイルシニアネット事業とかもやっておられるのですが、一方で、幼児教育支援プログラムとか、職業訓練／雇用促進の観点もあり、ネットが道具として機能しているのがよくわかりました。では、佐々木さん、お願いします。

佐々木敏夫氏（NPO法人 あびこ・シニア・ライフ・ネット 理事長）

NPO法人あびこシニア・ライフ・ネットの佐々木でございます。私たちは、アドバイザー5名で、平成14年3月に任意団体として現在のような活動を始めました。17年にNPO法人に認知を得て現在の活動を続けているわけですが、なにしろ退職後、時間をどういうふうに過ごすかとか、どうしたら元気で暮らせるのかというのを日頃考え、活動する上において資本金がないからどうするとか、どうしたらいいんだろうといろいろ考えました。考えた挙句、資本金が一銭も要らない方法でやろうということになりまして、まず、我々の多少わかっていたパソコンを、各家庭でお困りの方のところを訪問してサポートしようじゃないかという形で最初は始めました。有償で始めまして、ささやかな謝金をもらいながら、活動する人は少しお小遣いをもらえるかなという状況でございます。



シニアがシニアのところへ行くわけですので、パソコンの調子が悪いから来てよとか、ここをちょっと教えてとかあるのですが、その話はお宅にお邪魔しても30分か1時間ぐらいのものな

のですが、それ終わった後なかなか帰してくれないんです。お茶だとかお菓子だとかいっぱい出してくれまして、人が来るのが楽しいのかもしれないけれども、愚痴えお聞いたり、世間話もいろいろするわけですね。その世間話をもう 30 分、1 時間、延々とやっているわけですが、そのなかでいろいろ細かいニーズが出てきます。私のところはここが困っているとか、電球が切れているとか、それから、水道の水漏れがするとか、いろいろなニーズがあるんですね。私たちは立ち上げの理念としまして、「生涯現役 PPK」なんてうたってやっていますけれども、とにかくニーズは断るなど、何でも聞いて帰ってこいと指示はしてありまして、こんな問題があったからどうだろうと。そうすると、だんだん仲間が増えてきて、私はそれならできよ、私はこっちのことはできよということばちばち広げていって、現在の ICT 事業、便利屋活動事業、防犯防災対策というふうな形に広がってきました。

これを、誠心誠意、汗をかいてお手伝いしていますと、喜んでいただけますし、それでまた、そのお宅の奥さん、だんなさんが、自分の友達に紹介するとかとあって、口コミでどんどん広がるわけですね。現在は活動する人が 43 名ぐらい。現在、アドバイザー養成講座を 3 名受講しておりますので、それも加えればもうちょっと増えると思いますが、その他、パソコンはやらないけれどもこれならできよという活動の人がおりますので、そういう方の力を借りながら、細かい何でもかんでも、いわゆる「よろず屋」をやっております。昔のチャイムをテレビドアホンに付け換え、それから盗難予防用のセンサーライトを付けたり、消防法の義務付けになりました火災警報器を付けたり、そんなことをやりながら現在に至っています。

実はつい最近、シニアネットモバイルとかいって、携帯電話の講習会をやるかという話がありまして、それを手掛けたのですが、なにしろ、機種が違う、年代が違う、皆さん持って集まる携帯がバラバラでまとまりがつかないですね。でも四苦八苦しなからやっています、これを活用して事業をやるかというふうな相談を持ちかけましたところ、じゃ、いまお年寄りが買い物とかいろいろなことで困っているから、そういうものをサポートする何か、ネットを活用して宅配なんかをできないかという企画を皆さんから得まして、今年は絶対それを立ち上げるよということを、「ネット事業」なんてかっこよく書いたわけでございます。私たちは、資本金もなし、ゼロからスタートですから、失敗しても怖いことはありません。何でもやってしまえと。1+1 が 2 じゃなくても、0.5 でも、3 になってもいいよというようなざっくばらんな考えで、やらなきゃいけないというより、まず取り掛かれと、そういう心理で事業を行なっております。皆さん方にも、最初のとっつきが大事だと思いますので、ぜひ頑張ってくださいと思います。

コーディネーター（吉田敦也氏） ありがとうございます。

NHK の朝ドラ「てっぱん」の「鉄兄（てつにい）」がお好み焼きの出前に行った先で「おばあちゃん、何か用事ないか」みたいな感じで地域のお手伝いする。これ、「鉄兄モデル」としましょうか。そうすると「あびこ・シニア・ライフ・ネット 鉄兄モデル」ですね。訪問サポートというのはもともとパソコン支援のため。しかし、何でも引き受けることによってシニア情報生活アドバイザーの地域支援に広がりができる。なんと素晴らしいことでしょう。

佐々木敏夫氏

ええ。お茶飲みながら。電気の球を換えてくれとか。ペットの散歩をしてくれというのもあり

ましたね。自身はトシをとりますがペットは元気になるんですね。散歩ができないのでなんとかしてというふうなことがありました。

コーディネーター（吉田敦也氏）

日本のシニアネットで、ペットの散歩を手伝ったという事例はあるでしょうか？ きっと日本初ですね！ これもぜひ記録に残しましょう。シニアネットを特色で区分けをしたいと思っているのですが、例えば、「何でも聞いてくれネット」、「御用聞きネット」？

佐々木敏夫氏

「よろず屋ネット」ですね。

コーディネーター（吉田敦也氏）

「よろず屋ネット」！ いいですね。では高橋さん、お願いします。

高橋克司氏（NPO 法人 とかちシニアネット 理事長）

「とかちシニアネット」の高橋でございます。当会もちょうど 10 年経過しておりまして、今日のフォーラムのテーマにぴったりかなと思って、いろいろと皆さんのご意見を賜りたいなと思っております。いま現在、会員は 220 名で、帯広市の人口が 16 万 9,000 人ですが、そのうちの 0.1% がうちの会員だと自慢しているのですが、そんなことで活動しております。

当会の特色は、帯広の駅前に 80 坪のビルの中を借りて活動しているということです。皆さんから、なかなかこんなとこないよと言われるものですから、自慢しています。講習会場にパソコンを 35 台置いて、それと交流のできるサロンを置いて運営をしているというのが一つの特徴かなと思っております。

もう一つは、できるだけスキルが上がった人を活用したいということで、営利事業にも力を入れております。一般企業のホームページの制作、あるいは各種団体のパソコンの講座を一括受託してうちの会場でやる。そのご指導をアドバイザーの方がやるというようなことに力を入れておりまして、そういったところで収益が上がったものについてはパソコン等の設備の財源にするということをやっております。もう一つは、皆さんのところも同じだと思いますけれども、一応、社会貢献活動とうたっているのですが、行政と、帯広市あるいは商工会議所とできるだけ密接に連携を取りながら、情報収集しながら仕事ももらうということは、情報交換をしているということでもあります。

やっていることは、去年、耳の聞こえない人のパソコン講座をやりました。帯広市でも、シニアネットさんをお願いするのは全国でも初めてだと言っておりましたが、これは非常に勉強になりました。講師が話したことを通訳者が通訳してお伝えするというので、受講された方が非常に、うちの会以上以上に熱心に講義を聞かれたということで、大変喜ばれましたし、講師も、我々も大変経験になったということがご紹介できるかなと思います。



これからをどうするかということで、私どもも10年経っておりますので、北海道の地域を考えた場合に、去年の10月に北海道のフォーラムをやらせていただきました。北海道のシニアネットが集まっているいろいろと議論したのですが、北海道は広いですから、私のところの帯広から札幌へ行くんでも、車をなんぼとぼしても3時間半ぐらいかかります。そういうような地域性もございますので、顔を合わせてお話をするということがいままで一回もなかったということでしたが、そのフォーラムをやりまして少し道が開けたかなと考えております。そういったなかで、結論としては、ポータルサイトを構築しようということをございました。そういったことも含めて今後検討していきたいと考えております。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ありがとうございます。事業内容的には、チャレンジド（challenged、障害者の別称）とか、ハンディキャップの人たちの支援がメインととってもいいですか？

高橋克司氏

事業内容的に言えば、それも一つですね。

コーディネーター（吉田敦也氏）

どちらかひとつを選べと言われたら、どちらですか。健康な人が対象か？ チャレンジドか？

高橋克司氏

どっちか選べと言われたら、やっぱり健康な人でしょう。

コーディネーター（吉田敦也氏）

パソコンの講習会、講座が主なところとっていいのでしょうか。

高橋克司氏

はい、一応はそういうことですね。あとは、サークル活動、ここは皆さん、楽しくやることですから。

コーディネーター（吉田敦也氏）

中央事業としてはパソコン指導ということですね。次は臼倉さん、お願いします。

臼倉登貴雄氏（NPO法人 イー・エルダー 理事）

臼倉です。お手元の資料にも書いてありますように、私はピンチヒッターでございまして、今日は団体のことを紹介ということですが、「イー・エルダー」を代表しているわけでもないで、自分の紹介からということで資料をお配りしてあります。

自分のことで申し上げますと、このシニア情報生活アドバイザーに関わりましたのが約13年くらい前です。作る前から関わり、それ以降もずっと関わってきております。そういった意味では、シニア情報アドバイザーとともに歩んできたということもいえます。

昔の話をしますが、ちょうど20年くらい前にメロウ・ソサエティ・フォーラムという団体が



できました。それは1990年のちょっと前ぐらいに高齢化率が14%になって、これから高齢者の問題が大変だということで経済産業省が民間団体や各自治体の協力を得て作りました（当時は経済産業省という名前ではなかったですが）、この団体の事業に「高齢者の情報化支援」がありました。私は高齢者問題が専門ですので、委員として加わってくれということで加わりました。そこで検討されたことは、情報機器の使いやすさといったハード面のこと、アプリケーションが使いにくいといったソフトのこと、使い方がわからないといったリテラシーのこと、接続料や回線の遅さといったインフラのこと、そして、一番重要なのが人が人を教えるサポート役、アドバイザーが必要だということでした。その結果、アドバイザー制度ができたわけです。そんなことで最初から関わってまいりまして、現在4,000名を越したということですが、非常に関わって来てよかったなと思っています。これからもいろいろと関わっていきたいと思っています。

そういうなかで、私が、トライアルセミナーとかいろいろやりましたけれども、その後、アドバイザー養成講座もやらなきゃならないだろうということで、自分でも始めました。そのときに受講された方々が60人から70人いますが、そのアドバイザーの方々と作ったのが「シニアネット東京」です。「シニアネット東京」というのはどっちかと自分たちで楽しいことをやろうよというグループですけれども、私が最初、代表になって5年ほどやりましたが、代表を長く務めてはよくないということで、私が降りました。

その後、「NPO 法人イー・エルダー」と関係を深めてきています。NPO 法人イー・エルダーは、設立してちょうど今年が10周年です。

「イー・エルダー」の特徴を申し上げますと、まず一番のねらいは何かということ、事業指向です。ボランティアではありません。考え方はボランティアスピリットですけれども、やることは事業型です。どういうふうに違うかということ、まずマーケティング指向というのがあります。いまこれが必要なのかどうなのか、自分たちでやれることなのか。議論してきちんとそれを考えるということ。それから、自分たちが活動した結果に対して顧客サービス度が高かったろうかということなどを常にきちんと調べて活動していくということです。もう一つは、活動は成果主義で、行ったものに対して報酬を得るとというのが私たちの考えです。

そう考え方で10年やってまいりました。どんなことを行ってきたかと申し上げますと、一番メインは、パソコンのリユースです。いまから10年ぐらい前ですから、当時はまだパソコンは高く、30万円ぐらいしたころですから、その頃は非常に人気があり、年間で3,000台から5,000台ぐらい、企業からパソコンを提供していただいて、そしてリユースして障害者団体、あるいは教育団体、それからNPOに提供するという活動をやってきています。今日来ている中の団体のところにもだいぶ渡っているかと思います。

その後、いろいろ状況が変わりました。世の中が変化してパソコンが飛躍的に安くなって誰でもが手にできるようになったということです。それから最近の動向として、OSがWindows7になり、なかなか買い替えがないということです。私どもの場合は企業から寄贈してもらいますから、企業が買い替えないとだめだということになります。それからもう一つは、企業は自分のところで買うのではなく、ほとんどリース物件です。リースした場合はリース会社に戻ってしまいますから私どものところには回って来なくなってきたというのが現状であります。しかしながら、い

までも 500 台くらいのリユースはやっております。それから私どもがやったことは、パソコンのリフォームを障害者団体に全部やってもらっています。そうすることによって障害者の就業労支援になるということで続けております。

あとは Web アクセシビリティという、ウェブサイト、障害者、高齢者、そういった方たちが使えるように、見られるようにしようということで「NPO Web アクセ



シビリティ支援プログラム」というのをやりました。これは 3 年間にわたって、大体、1 年間に 15 団体ですが、30 万から 50 万の資金を提供して、Web サイトをアクセシビリティサイトに変えてほしいということでやりました。これは私どもも提案した事業ですが、企業に事業を提案電話しまして、支援協力に応じた企業からは年間 1,500 万資金提供をしていただき 3 年間そういう支援プログラムをやったというのがあります。

それから、最近、事業型としてやったのは、携帯電話の講習会で、3 年間やりましたが、去年終了しました。それから最近取り組んでいますのは、「子どものインターネットと携帯の安全使用」ということです。これも昨年からはじめまして、年間 70 回くらい実施しています。このフォーラムに参加している団体の方に手伝っていただいております。

そういったことで、私どものやり方としては、NPO と連携して活動するというやり方をとっております。ですから、活動するにしてもいろいろな NPO を巻き込んでやっていくというのがやり方です。

コーディネーター（吉田敦也氏） ありがとうございます。

事業指向／マーケティング指向ということでしたが、マーケティング指向というのは、評価を得るためとか、フィードバックを求めるといことでしょうか。

白倉登貴雄氏

そうですね、いまのこの時期、何が重要かという、そういうマーケティングをきちっとして、それが事業として成立するかどうかという。

コーディネーター（吉田敦也氏）

どのようにしてやるのですか？

白倉登貴雄氏

これはもう、それぞれ調査を、いろいろな企業を回ったりして確認してきます。

コーディネーター（吉田敦也氏）

一般ユーザーではなくて、企業を対象に調査するのですか？

白倉登貴雄氏

企業です。私どもの場合は、対象は企業ですので。ですから、企業のCSR関係の部門にコンタクトを取ります。

コーディネーター（吉田敦也氏）

なるほど。つまり、先程来お話しいただいているシニアネットと違って、マーケットは一般ユーザーさんではなく、企業ということですね。

白倉登貴雄氏

企業でないとお金、出ませんので。(笑)

コーディネーター（吉田敦也氏）

これもまたいい話ですね。そういうところで勝負できるというのはレベルが高いということですから大変素晴らしいと思います。今までのところで何か質問とかありますか。

【席替えの提案】

パネリストの席替えをしようと思います。パネリストのみなさん、お互いの話題提供を聞いて、その内容から、私はこの人の隣に座ったほうがいいよな、とか、いうのありますか？ フロアのみなさん、これまでの話を聞いて、どことどのシニアネットが似ていると思いましたか？ それとも、距離がありましたか？ あるいは、みんなバラバラで分けられませんか？ その場合は、あえて席替えする必要はない。どう思いますか。

対象で分ける、事業内容で分ける、精神で分ける、観点はいろいろあります。僕は「とかち」と「仙台」さんが近いかなと思いますが、あるいは「とかち」と「湖南しが」さんが近いでしょうか。このシニアネットと仲良くなりたいということもあるかもしれません。

井上文雄氏

いままでのところでいきますと、私どもは、中心はパソコンの未来指向ですかね。だからその部分が中心だろう。それで次のステップの部分では、もっと事業の拡大を含めて、いろいろなところともっと手を組み、いろいろなことをやっていきたいという発想ですから、ひょっとすると、「とかち」さんがいまやりかけているのにちょっと近い部分があるのかなという感があります。

コーディネーター（吉田敦也氏）

コーディネーターの言うとおりの、当たりましたね。「とかち」さんどうですか、ああ言うてますけど。

高橋克司氏

以前から井上さんのところとは同じだなと思っていたのです。私のほうも、井上さんのほうのやっていることを学ぼうと思っておりまして、その辺は同じかと思います。

コーディネーター（吉田敦也氏）

なるほど。これで婚約成立。(笑) どこがどう近いのか、思っているほど近くないかもしれない、そのあたりを、将来設計のところで見たいと思います。事業内容は明確なので、軸としては、白倉さんがおっしゃって下さったような、対象、つまり、ターゲット。また、サービスの方向性ということになりましょうか。

3. 論点1：10年の節目に

コーディネーター（吉田敦也氏）

次のテーマに行く前に、「湖南ネット」さんのところは発足後何年でしたでしょうか。

斎藤富士夫氏

3年です。

コーディネーター（吉田敦也氏）

3年、それはヤングですね。それに対して10年級のシニアネットがあります。10年やってきたことに関して1人1分ぐらいコメントしていただけますか。これからも同じような調子で繰り返すのか、次のステップに向けてさらに発展させていこうという意欲に燃えているかについてもお願いします。

井上文雄氏

10年を1分で語れというのは非常に難しいのですが、私ども「仙台シニアネット」は、いまやっていることをベースにさらに拡大・発展しようとしています。これはベ



ースなのですが、「とりまく環境」としては、このベースがだんだん、地方財政がひっ迫していますので、いろいろとお手伝いしてくれる部分が危なくなっていることを2、3年前から感じていたわけです。したがって、NPOにすることによってさらにいろいろな事業に取り組んでいく。そのためにはやはりいろいろな団体、商工会だとかそういった、いわゆるビジネスとしてやっていけるところと手をつなぎ、話をしていくには、やはりNPOにして動いた方がいいということで、初代はいままでのやってきた基礎固めをしたわけですが、実は私は2代目の理事長で、このままではもうポシャっちゃうだろうということで、そういう方向に向けていろいろと始めたところです。

コーディネーター（吉田敦也氏）

佐々木さんのところは10年ですか。

佐々木敏夫氏

まあ、10年近くなりましたけれども、いつも新兵の気持ちで、一兵卒の気持ちで頑張っています。やはり私たちの最初のスタートがパソコンから始まりまして、シニア情報生活アドバイザー中心で活動しましたから、これはもう軸として置いておかなければいけないと思います。ただ、現在も訪問サポートをずっと続けておりますので、いろいろなニーズが出てくると思うからです。できることは何でもやってあげようという、その精神だけは皆さんに受け継いでもらって、活動

していただければありがたいなど、そんなふうに思っています。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ありがとうございます。「いつも一兵卒」というのはキーワードですね。繰り返しの中に新しいことを目指す姿勢。そういう意味にとらえさせてもらいます。高橋さん、どうですか。

高橋克司氏

10年経ったということで、それなりの財源を活用しながら会の資産も作れたと。あるいは会員の方のスキルの財産も上がったということで、大変喜ばれておりますので、これは大変よかったと考えております。ただ、10年経って、これから入会される男性の方が、60歳の定年になってすぐ入ってくるということがなかなか期待できないということがございます。これから入ってくる皆さんは、パソコンを、エクセルだとかそういったことができる方が入ってきますから、そういった方に何か仕事ができ、少しでも報酬がでるような力になれないかというのが、これからの私どもの課題だと思っております。

コーディネーター（吉田敦也氏）

なるほど、時代が進んで、シニアネットの参加する人のスキルレベルも変わってきた。これはちょっと、考えるところですね。白倉さんのところも10年級でしょうか。

白倉登貴雄氏

はい。「イー・エルダー」もちょうど去年、10年を迎えました。「イー・エルダー」の特徴としては、先ほど言いましたように、パソコンのリユースが非常に厳しくなってきたというのは申し上げたとおりです。ですから、軸となるものを新たに何か考えなくてはならないという時期にあります。

実は今日、同じ時間に私どもの総会が開催されています。私は総会を抜けているのですが、そのなかで大きく変わってきたのは、役員が交代してきているということです。これは、新しい血を入れるというのもありますし、やはり新しい人たちに活動してもらおうということです。当初よりメンバーも減っています。活動するメンバーを中心にすることで団体そのものの動きをよくしようという方向性があります。

それからもう一つは、先ほど申し上げました、提案型の事業をやっております。企業の今年の業績を見ますと少しは収益がよくなってきたようではございますけれども、いままでが悪すぎましたので一気には改善されないと思いますが、企業のCSR関係の予算もこれからは増えて出てくるだろうと考えております。

それから新しい展開としては、いろいろな企業と連携して活動していくということも出てきます。「e-ネットキャラバン」みたいに、特定の団体と連携をして進めていく事業なども、これから展開されていくと思います。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ありがとうございます。10年級の先輩たちのお話を聞いてどう思いますか、斎藤さん。

斎藤富士夫氏

白倉さんのところの「イー・エルダー」は私も尊敬しているNPOで、もともと我々も事業型で、NPOを3年前にやるときには、「イー・エルダー」の鈴木理事長さんにいろいろお話を聞いたりし

て、どちらかという、どの団体と似ているかという、我々は「イー・エルダー」さん、臼倉さんのところをお手本に、プラス、我々はいろいろなところと、また幼児教育とかそういうところに興味を持っているということです。シニアネットさんの歴史というのはよく理解しましたし、我々の出発点が、事業をして、シニアの人が、ボランティアはいいのですが、やはり、自分のいままでの経験を生かして、プラス、収入をもらえる、そういう事業を計画しています。そのなかの一つが職業訓練であったりします。

コーディネーター（吉田敦也氏）

はい。それでは、席替えしましょう。

【席替え】

コーディネーター（吉田敦也氏）：会場へ問いかけ

この並び方は正しいと思う人。この並び方は間違っていると思う人。

会場よりの質問

よくわかりません。どうしてこういう配列になさったのですか。

コーディネーター（吉田敦也氏）

よくわかりません、僕は皆さんの意見を聞いているのですよ。僕の意見を聞いちゃだめです。いまは皆さんが問われている立場なのです。答弁しないとイケない。

パネリストの人は、これがいいと思いますか？

パネリスト一同よりの発言

大筋。

コーディネーター（吉田敦也氏）

みなさんから「大筋よい」というご意見を頂きました。私は、言葉が適切かどうかわからないのだけど、佐々木さんのあびこシニア・ライフ・ネットでは、いまの状態がそれなりに心地よくて、淡々と繰り返されて、「いつも一兵卒」みたいな感じで活動されています。初心型ですね。一方、「仙台」の井上さんのところと「とちぎ」は相思相愛の仲。だからこれは、何をコメントしようともひっつかないかん。斎藤さんのところの「湖南ネットしが」は臼倉さんのところの「イー・エルダー」を一つのモデルにした。当然、設立以降、細部は変わってきただろうけども、事業指向であるということモデルにしてきたということなので、その意見をとりました。

会場よりの質問



「しが」さんは臼倉さんのところをモデルにしたのですか。

コーディネーター（吉田敦也氏）

尊敬しているとおっしゃっていたので、私はそれを勝手に「モデル」と称したのです。

会場よりの質問

それなら大体わかりました。

コーディネーター（吉田敦也氏）

この分け方は正しくないと思う人はいらっしゃいますか？ いない。では、この並びは、多数決で、日本のシニアネットのカテゴリーを代表しているとされました。これをたたき台に「あびこネット型」モデル、「仙台、とちぎ型」モデル、「イー・エルダー、湖南ネット型」モデルを見える化できればと思います。細部については、ここからのお話で確認していきましょう。

4. 論点2：シニア情報生活アドバイザーについて

コーディネーター（吉田敦也氏）

未来にいく前に、シニア情報生活アドバイザーについてお聞きします。私なんかはそうなのですが、シニア情報生活アドバイザーというのは、日本のシニアネットの初期の頃にはありませんでした。当時は自分たちでテキストを自作して、なんだかんだ言いながら独自にやっていました。それがシニア情報生活アドバイザー制度の発足により、少なくとも私ども徳島にとっては、より一層に盛り上がったということがあります。

徳島では、養成講座の導入と実施にあたり、1 円の補助も出ず、3 万円の受講料で人が集まるのか！？ という不安が強くありました。しかし、県内唯一の養成講座実施団体として、間もなく 100 人を達成できる状況です。6 年かかりましたがリーダークラスはみんな活躍しています。精いっぱい活躍していると思います。生き甲斐とする人がいます。ネットが支えられてきました。私ども「いきいきネットとくしま」の会員数は 250 名を越えており、毎月増えています。シニア情報生活アドバイザー制度がネットの拡大につながったことは明らかで、養成講座を継続してきてよかったと思っています。

こうしたことは全国のシニアネットである話かと思えます。「シニア情報生活アドバイザーとシニアネット」について 2 分ずつぐらいしゃべっていただけますか。

佐々木敏夫氏

シニア情報生活アドバイザー、名前はいいのですが私はあんまり好きじゃないのです。というのは、こんなことを言ったら怒られるかもしれませんが、アドバイザーの集まりがありまして、そこで話されることは、皆さん、腕の競い合いなのですね。こういうことをしている、私はこんなことをしていると、自慢げに話すのです。本来、シニア情報生活アドバイザーの姿というのは、これからパソコンを習う方に「いろはのい」から教えろというのが目的じゃないかと思うのです。いまのアドバイザーの方の考え方というのは、批判がましいことを言って申し訳ございませんが、ちょっと道が違っているのではなからうかというふうに思っています。

ですから、私たちのアドバイザーに対しては、資格を取っていただくのに 3 万円ほどかかりま

すが、それをなんとか回収してもらうために訪問サポートに行ってもらっています。有償でやっていますから少しずつ回収してもらっているのですが、その時には、絶対に「遅い」ということを言うのではないよと。ともに勉強するのだという話で進めてくれというふうにやっています。

やはり訪問指導の場合は、OSが違ったり、持っている機種が違ったり、バラバラですし、難しいと思います。だから困ったことがかなり出てきますので、その時には、むきになって調整しないで、じゃ勉強してきますということで、すんなりその課題を抱えて持って帰ってきなさいと。それで、みんなでそこを検討して解決つけたら、それをまた持って行って、こうやったらいいですよというふうに教えてあげればいいよということで、教えるという言葉は使わなくて、共に勉強するのだという精神でやってほしい。またパソコンを教える場合に、やたらパソコンのカタカナ英語を使うのじゃないよと。お年寄りはそのでみんなつまづきますので、それはやめてくれというふうなことで進めています。是非そういうふうにしていただきたいと思います。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ありがとうございます。では、井上さん。

井上文雄氏

私どものところは、シニア情報生活アドバイザーというのは一つの目標にさせています。一般の人を対象に、リーダーの養成を受



けた人から我がクラブに入ってもらって、でも、いきなり先生じゃだめですよと。そのためにはちゃんとシニア情報生活アドバイザーに認定されるように勉強しなさいと。アドバイザーは、技法だけでなく、話し方とか、教え方とか、心構えとか、そういうのが全部入っているわけです。技術はあるけど人柄が悪いというのは私どもでは認定しないように、いや、受けさせないようにしています。第一番は、ボランティアをやってもいいという、一生懸命やりたいという指向のある人。その人をまず。その次は、人柄がいい人々をインストラクターとして活用していくということです。

コーディネーター（吉田敦也氏）

はい、ありがとうございます。

高橋克司氏

私どものところは、養成講座で通りますと、半年はサポートをお願いして、半年になった場合には即、講師でやっていただいております。うちは年間に363講座をやっておりますから、毎日講座はやっていて、延べ363人の方がご指導しているということになるわけです。アドバイザーの資格をとりますと、必ずそういった環境になってくるということで、その意味においてはアド

バイザーの方は非常に勉強します。特に女性の方は勉強します。指導の仕方も身に付けていただいて大変喜ばれています。声を聞きますと、アドバイザーになって、ここの講師になって、生き甲斐になっていますという声も聞きますので、その点では大変よかったですと思っております。

齋藤富士夫氏

「シニアが教える職業訓練」というのを紹介させていただきましたが、これの講師は、我々は「シニア ICT リーダー養成講座」と言っていますが、この4日間24時間の、シニアの目線で教えるという内容が非常にマッチしています。職業訓練に来られる方はいろいろな心の病ですとか、職業に長く就けない理由があって、精神的に病んでいる人が多いです。そういうなかで、アドバイザーの人が講壇に立って教えながら、あと休み時間に、社会の先輩として、社会人としていろいろなやり取りをするということで、このシニア養成講座の中身というのは、講師の資質という意味で非常に役立っています。そういう意味で、シニアがないと我々の職業訓練というのは成り立たなかったなと思っています。

コーディネーター（吉田敦也氏）

素晴らしいですね。職業訓練にシニア情報生活アドバイザー制度は不可欠であるということでした。職業訓練に来られるということは、若い人ですね。そういう若い世代にいわゆる資格として取得してもらおう。その際、シニアの目線というものを学んでいただく。職場の状況の把握とか、人の様子を感じ取る意識を学んでもらう。だから、職業訓練としてシニア情報生活アドバイザー制度が有用である。不可欠である。いいですね。次は、臼倉さん、お願いします。

臼倉登喜夫氏

「イー・エルダー」の場合は、設立して10年です。最初の頃はアドバイザー養成講座を行っていましたが、ここのところ2、3年行っておりません。いろいろと理由はありますが、どうしても事業型ですから、会員を集めて講座を開催するというのは最近ほとんどありません。逆に、会員が講座をどこかで開きたいから協力してくれという、お金とか、場所とか、ノウハウを提供するというのが私どものやり方です。「イー・エルダー」は長年活動してきましたから、育った方が他のシニアネットを作ったりして活躍している現状も見受けられます。

もう一つは、「e-ネットキャラバン」では、全国の各小中学校や一高校に行きますから、そういうところに行く講師を養成するときには、アドバイザーの方などを対象にしています。それから、直接イー・エルダーとして行っているやっっているのは、「ワンコイン・セミナー」があります。最近はやりですから、ワンコインでセキュリティの勉強をしようとか、フォトムービーを使いこなそうといったようないろいろな講座を設けてやっております。

それから、先ほどコーディネーターのほうからアドバイザー養成講座の費用3万円の話が出ましたが、この3万円はどうして決まったかという、もう10年以上前の話ですけれども、当時、養成講座の時間が全部で24時間あって、1講座、講師に5,000円払うと大体12万。それを1日2講座ずつやると、会場代が1日5,000円で3万円。そうすると合計で15万。それで、1回の受講人数が大体5人ぐらいだと一人当たり3万円になるということで、決まった経緯があります。

コーディネーター（吉田敦也氏）

3万円の受講料の根拠がよくわかりました。佐々木さんからは「受講料の3万円は訪問サービ

スを担当することで少しずつ取り戻していただいています」というご紹介をいただきました。

つまり、シニア情報生活アドバイザーのビジネスモデルは、受講料の3万円を1回5,000円の訪問サポート6回で回収する。オーバーヘッドが必要だとしたら10回くらい。訪問サービスに6~10回も声が掛かるということは、そのアドバイザーが地域の信頼を得ているということです。訪問サポートは、1人当たり、年に何回ぐらい声が掛かるんですか。

佐々木敏夫氏

行く人はもう、月に10日行く人もいます。でも報酬はそんなに高くないですね。1時間1,000円ですから、5,000円も取れるような料金にもっていきません。お年寄りですからね、やっぱり。

コーディネーター（吉田敦也氏）

そこそこの利益が出ていますね。

それでは、少し目線を変えて、シニア情報生活アドバイザーの社会的な役割、重要性、位置付けについて、1人、1~2分でコメントをいただけたらと思います。シニア情報生活アドバイザー向けのメールマガジンを担当しておられることで有名な白倉さんからお願いします。

5. 論点2の続き：シニア情報生活アドバイザーの社会的な役割・重要性・位置付けについて

白倉登喜夫氏

この後の、たぶん「シニアネットへの提言」というところにも出てくると思いますが、非常にいまニーズは高いと思います。どうしてかといえば、これだけ高齢者が多くなってきたというのと、それからパソコンの普及率がかなり上がってきた。それから今日の話にもありましたように、機種がいろいろなものが出てきて使いやすくなってきた。身近な問題に、情報が自分たちの周りを取り巻いていますから、それを誰かがサポートしなくてはならいだろうということで、後で提案しますが、そういうビジネスが生まれてきています。そういったことで言うと、いま非常にアドバイザーの役割というのが大事だと思います。ただ、私もずっと「シニアネット東京」と「イー・エルダー」に関係してしまっていてわかることは、パソコンを楽しむ、インターネットを楽しむ人は楽しむでいいと思います。そのなかで意識付けをして、ちょっと違うことだけどもやってみてくれないかということで、少しその人を引っ張っていく、それがシニアネットの役割ではないかと思っています。

斎藤富士夫氏

先ほど申しましたように、アドバイザーの制度がないと我々の事業が成り立たないので困るのですが、アドバイザーになるということと、アドバイザーの資格を取って活動を、何か社会に貢献するようなことをするというのは、やはり中間支援的に、シニアネットであるとか、我々は「湖南ネットしが」という法人ですけれども、そういうところがあって、そういう機会の提供をしないと、アドバイザーの資格を取っただけで、それで終わってしまうという人が多いのではないかと思います。それに関わる中間支援のシニアネットが必要ということ。

もう一つは、全国のシニアネットをまとめるところがないと、やはり横の連携がないと、こういう場でいろいろな方とお会いして、いろいろな情報をもらう、それで、いろいろな講師の人に来てもらうとかができないので、その3つが、僕は必要ではないかと思っています。

高橋克司氏

シニアネットがなければアドバイザーはおりませんよね。私のところでいえば、シニアネットの存在感が高まれば、そのなかで生まれるアドバイザーの方がシニアの方を指導して、これがその方の生き甲斐、というのは大げさかもしれませんが、そういうふうになっているわけですので、その意味では大変いい制度だと考えております。

井上文雄氏

斎藤さんの意見と私は大体同じなのですが、現在私どもが行なっている講習や何かでは、シニア情報生活アドバイザーの役割というのはそれなりにシニアネットを通じて社会でいろいろな活動していると思いますが、これをもっと広げた意味でいろいろなことをやっていこうということになりますと、シニアネットのいまの認定の仕方、教え方とか内容をもう一度検討し直していろいろと広げないと、即それが社会に通じてどうこうということにはなかなかかなりにくいのかなと、表現の仕方がうまくないかもしれませんが、そんなような気がします。

佐々木敏夫氏

私たちはパソコンのほうも、市の公民館とか、市の建設公社とか、業者の団体とか、小学校とか、いろいろなところで講習会をやっています。私たちはマイクロソフトの認定講師になっておりますので、そういう講習会をやっているのですが、そこで講師、サポーターを務めたい方はすべてシニア情報生活アドバイザーの資格を取るべしと。それでなかったら従事できませんよというふうなことで、私たちはそういう形で認知をして、皆さんに働いていただく場所を提供して頑張っています。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ありがとうございます。シニア情報生活アドバイザーがそれぞれの地域で活躍し評価されていることは間違いなさそうですが、課題も見えてきました。社会の中での有用度を一層に高めるためには、一つは、シニア情報生活アドバイザーは養成講座実施団体を母体に活動しているけれども、それとは別な、中間支援組織なり、地域を越えた全国的つながりが必要ではないかという点です。

もう一つは、教え方、教える内容についても検討の余地があるのではないのでしょうか。そこまでたぶんおっしゃらなかったのですが、例えば、自分たちのネットの中だけでやっているアドバイザーの養成をもっと広い枠組みで行ってもいいかもしれません。講師についても、もう少し客観的な立場から、スキルレベルに見合った人材が担当する必要もあるのではないのでしょうか。そのためのテキストの整備も重要になってきます。

【会場からの質問】

コーディネーター（吉田敦也氏）

ここまでのところで何か、シニア情報生活アドバイザーに、私もそう思うとか、社会から見てどうかというようなご意見はありますか。

会場よりの質問：A氏

シニアネットクラブの代表の二羽と申します。私どもは頭に地名がついておりませんが、東京

都で認定をされている NPO 法人です。最初に基本的なことをお聞きしたいのですが、井上さんにお聞きします。資料に、延べ人数が「1,300 名/年」と書いてありますが、これは具体的にどんな算出の仕方かを教えて下さい。

井上文雄氏の回答

これは、私どもが仙台市の委嘱を受けたなかでやっている人数です。年間に大体 1,300 人ぐらいが受講しているということで、これ以外にも老人福祉センターなどに出かけて行って教えています。ずいぶん多いと思われるでしょうけれども、これは仙台市と協働でやっているものですから、市の「たより」で募集をかけています。大体 9 時間で、「シニア・パソコン・リーダー養成」だけは 6 日間続けますので 18 時間です。そして、再受講は認めていますので、わからない人はまた来るということです。それともう一つ、一番下の「その他の活動」に書いてございますが、「パソコン無料相談日」をやっております、受講してよく理解できなかった人はその場にまた来て下さいというようなご案内をしてお教えするというフォローをしています。

会場よりの質問：A 氏

わかりました。高橋さんにお伺いしたいのですが、今の質問です。363 の講座で 3,288 名という、この数字の関係です。会員がずっと続けておられるとお聞きしましたが、ある方が固定でずっと、1 年、2 年通してということですか。

高橋克司氏の回答

会員の方はもう 10 年の方もおられますし、1 回受けた方も、年間 90 回受けた方もおられますので、220 名のうちで、延べですから、そこから 46 名の方がゼロということですから、180 名ぐらいの方が受講しているということになります。何回かは別です、1 回から 10 回の人もありますし、先ほど言いましたように 90 回の人もありますから。

会場よりの質問：A 氏

では、年回 180 数名の方が習われた時間で、延べにするとこのぐらいということですね、わかりました。なぜこういう質問をしたかといいますと、私どもの会はやはり同じような事業型で、非常に安くパソコンを高齢者に教えているということで、NPO 法人を取ったのですが、事業型ですから、いただいたお金の中から全部、消費税も払って、税務報告もしています。いま日野と、八王子と、多摩市の 3 ヲ所で行ってまして、年間 700 人ちょっとの市民の方がずっと、1 年、2 年、3 年と、通われ続けているわけですね。もちろん時間の都合で、3 年でやめる方もいらっしゃいますが、とにかくおやめにならないんですよ。ですから、その計算でいきますと我々の場合は 700 名掛ける、年間で、前期・後期で 48 日、それを掛けますと 35,000 人/年間です。そういう形ですので、ちょっと比較をさせていただきたかったのをお聞きしました。

コーディネーター（吉田敦也氏）

年間 35,000 人、いまちょっとひっくり返りそうになりました。すごいですね。

6. 論点 3：シニアネット重要な機能としてのサロン

コーディネーター（吉田敦也氏）

もう一つ、シニアネットの重要な機能として、「サロン」があります。「集う」こと、その支援、場の提供ということです。これまでのお話でパソコン講習の重要性は確認できました。では、「集まり」としてのシニアネットというのはどうでしょうか。シニアネットの今後のところで聞いたほうがいいのかもかもしれませんが、まずは、現状としてどうか。1人30秒～1分ぐらいでお願いできませんでしょうか。

佐々木敏夫氏：シニアネットのサロン機能について

実は私たちのところには、パソコンサロンみたいなものは設定してあります。これは講習を受けたけどわからないところがあるときに、何でもかまわないから、来て、遊んで下さい、聞いて下さいということで、ワンコインで3時間も4時間も粘って帰られる方もいますけれども、サロン形式でやっていおります。それから、そのサロンの横には、NPO法人には珍しいかもしれませんが、囲碁もマージャンもそろっていますし、カラオケの装置もちゃんとそろっています。それで皆さん、音響もいいということで気に入っていただいています。それも有効活用されていると思います。

コーディネーター（吉田敦也氏）

つまり、重要であるということですね。

井上文雄氏：シニアネットのサロン機能について

仙台のほうは、サロンは、いま言ったようないろいろなものはありません。パソコン好きだけが集まっているクラブみたいなもので。最初、そういうワイワイガヤガヤのサロンをやったらどうだと提案してスタートしたのですが、やっぱりパソコンをいじる一つの目的がないとおもしろくないと、来ない人たちが結構いましてね。そんなことがありましたので、私どもは、サロンはパソコンを中心にしたいろいろなことで、勉強に来たり、遊びに来たり、というような形のものを会員対象でやっています。

高橋克司氏：シニアネットのサロン機能について

私のところは講習会場にサロンというか、交流の場所を置いております。ここで入会希望の方、あるいはパソコン相談の方、もろもろの相談を受けるということで、必ず管理当番が1名、毎日担当して、非常に効果的活用をされています。あと、ワイワイということになれば、サークル活動と言っておりますが、マージャンだとか、ゴルフだとか、お汁粉の会だとか、いろいろな会がありまして、そこでそれぞれのリーダーがいて、集まって活動しています。顔を合わせての活動ですので、大変皆さん喜んでやっていただいていると思います。

斎藤富士夫氏：シニアネットのサロン機能について

湖南ネットは、サロンはやっていません。ただ、今回、NPOの連携ということで、NPO法人 コミュニティーリンクさんと、モバイルシニアネット事業ということで、携帯講習をシニアの方に無料で提供しました。習い慣行になって、やはりシニアの、高齢者の方は、1回や2回ではなかなか携帯電話はわからないので、いつも寄れるところがあるとありがたいということで、4月以降、ほとんど無料に近い形で来ていただいて、わからないことがあったら質問してもらっています。来られる方は、やはりシニアの人に教えてもらいたいというのが一つと、同じ年代の人と、同じ参加者とお話をしたいという方もいるので、そういうサロンを4月以降もしていきます。

白倉登喜夫氏：シニアネットのサロン機能について

「イー・エルダー」の場合は特に講座とかいろいろなものを直接設けておりませんので、かつて「シニアネット東京」で活動した時のことを申し上げますと、パソコンのスキルアップ講座をするよりも、旅行に行くとか、お花見に行くとか、そういうほうが多かったと私は思っています。それからパソコンのスキルアップ講座も、講座には来ないで、終わった後の飲み会に来るとか、そっちのほうの人気もあったという記憶があります。他のシニアネットもそういう傾向があるかと思うのです。やはり、パソコンとかインターネットだけではなくて、そういうシニアの拠り所というところも重要なポイントかなと思っております。

コーディネーター（吉田敦也氏）

飲み会だけやって来るというのはなかなかいいですね。（笑） 共通点をパソコンに絞った形でサロンを開催。繰り返し聞かないといけないことを講座の反復ではなくフランクなトークで教え合う。モバイル講座などは特にサロンの。そんな位置付けが成功しているということですね。

7. シニアネットの将来・「夢」について

コーディネーター（吉田敦也氏）

いろいろな形で整理／再認識できました。では、この先私たちはどうしたらよいのでしょうか。日本のシニアネットはどういう方向へ行くのでしょうか。

このことを考えるにあたって、一つ思うことは、シニアネットとは表明していないが、内容的に明らかにシニアネットとみなしてよいと考えられる活動や団体は全国にはたくさんあるということです。

ステージ2 委員会でも頻繁に議論されたことですが、SNF21 にやって来ることはない、パソコン講習会事業はやっていない、主な活動は田畑を耕すこと。だけど、連絡にはパソコン使っている、遠い人たちと連絡をとり、わざわざ会うことなく運営している。平均年齢は70歳、という集まりがあります。これは、まさしくICT活用型のシニアネットと言えます。そんな人たちとうまく連携できたら、シニアネットは一気に増えるのではないのでしょうか。

登録団体数を増やしたいからではありません。資源や場は多様にあるということです。集まり方、命名の仕方、ラベリングは異なるが、手をつなぎ、共に活動／交流するパートナーは多数潜んでいるということです。接点は意味あることです。そのため、私たちに求められることは、柔軟性、方向性の拡大、パソコンを基盤にしながらも広がっていくことだと思います。

コーディネーター（吉田敦也氏）

こんなことも踏まえて、1人2分か3分ぐらいで、将来について、これからの私たちのネットのあり方について語って頂きたいと思います。そのための課題、障壁、やりたいけどできない実情。あるいはこういうことを援助してもらえれば確実にその方向に行ける、行きたい、というような点。ついでに「夢」や国際化についてもお願いします。

佐々木敏夫氏：シニアネットの将来・「夢」について

なかなか難しい課題ですね。私たちは、これが「夢」というのを決めていません。いまの現状

をいかに楽しくみんなで活動していくかというのが「夢」でして、最初に申し上げたように「生涯現役、PPK」で、お医者にかからなく元気よく暮らせる状況ができればいいなという、その観点で一生懸命活動しております。

いまの活動は、動きとしては、私自身はまだまだ満足しておりませんで、もう少し活発に活動ができるようにしたいなと思います。というのは、皆さんのお話を聞いていますと、行政がいろいろバックアップしているようですけれども、残念ながら私たちの我孫子市は非常に冷たい。パソコン事業は民間の人がやっているから行政はやる必要がないということで、パソコンをみな取り上げてしまって、我孫子市でパソコン教室があったのですが、それもなくなりました。そういうような現状のなかでやっています。でも、なんとかいまの ICT 技術の進化に追いつくように少しでもやらなくてははいけませんので、それをもう少し我々なりに勉強して、充実した活動ができるようになればいいなと、それが「夢」です。

コーディネーター（吉田敦也氏）

いまのご発言は、もう少しプラスにとらえて、行政に頼らず自分たちの力で淡々とやる「行政連非連携型」モデルとしてはどうでしょうか。私も「とかち」さんや「仙台」さんみたいな「行政連携型」の事例は羨ましく思います。徳島なんかもある面で非連携型かもしれません。しかし、そのことにあまりこだわる必要はないかと思っています。いろいろなスタイルがあって、それぞれの状況にあわせて選択することになるかと思っています。

井上文雄氏：シニアネットの将来・「夢」について

さらに難しい感じになってきましたが、私どもは ICT をツールとして、何かいろいろなことができないだろうかという進め方をしていくのがいいのではないかと、先に向けて、そういうふうを考えています。いまの時点では特にこういったものがいいとか、あるとかということではないのですが、先ほどコーディネーターの方が言われたように、いろいろな団体と連携して、そこに ICT を上手に使えるような形ができればいいなと思っています。

実は、仙台市で人と話していたら、仙台市もだんだん、買い物が高くなってきている。何かいい方法ないかいなという話があって、じゃ、とりあえずネットスーパーのやり方を教えましょうよというような話をしました。そのときにふと考えたのは、ネットスーパーというのは大きなスーパーだけしかやってないですね。近隣の小売店さんが登録したらできるような大元を商工会議所かなんかにどんと置けないのかと。そんなことでもできれば、そういうものが連合できるのではないかなというような、これは素人発想かもしれませんが、そんなこともあるのかなと思ったりもしています。

だからといって、第一歩を踏み出して、相手と交渉までいっていませんが、そんなこともあるんだなと考えてます。いってみれば、ICT を活用してもう少しいろいろやりたいと。たとえば農園なんかも、最近では、自分で作るけども、野菜が出来すぎちゃって、処分するのに逆に邪魔になっているとか、近所にどんどん配っているとか、そんな話も聞きますが、そういったものをどこかにまとめて買い上げて渡せるようなことが、ネットのお手伝いのできるのかなというようなことも、もう既にやっているところもあると思いますけれども、そういう展開の仕方をしていけばいいのかなと考えております。

高橋克司氏：シニアネットの将来・「夢」について

昨年北海道でフォーラムをやりました。いろいろな市町村から来た方がおられました。そのなかで意見として、シニアネットとして連携するというのはどうだろうねと。我々は一つの地域で、何人かでパソコンで皆さんと交流をしている。それでも満足ですよ。ですから、他のシニアネットと交流をするということまでは考えなくていいのではないかとというのが結構ありました。

北海道の場合広いですから、隣の都市に行くのも時間もかかるし、なかなかそれは難しいのですが、それもネットでなんとかできないのかなというのが私のほうの考え方で、北海道としてのポータルサイトを作ろうと提案したのですが、少数意見でした。

そういったなかで、一つは、「夢」というわけではありませんが、北海道の場合、私のところは十勝、隣が釧路、上の方には北見、これは道東地域と言うのですが、ここで非常にムードが出てきておりますので、ここで連合体といいますか、一つの活動を共通するような団体としてやりたいというのが、いまの私どもの「夢」ですね。

シニアネットをどうするかということでございますが、現状、いま女性が60%、男性が40%です。そういったことで、事業性が非常に難しいといいますかね、なかなか女性の方は仕事をやるという方は少ないです。要するにパソコンを使って楽しいことができればいいという考えの方が多いため、先ほどからお話ししているとおり、これから入ってくる男性の方に魅力のあるシニアネットにする、こういったところに向かっていくのが使命かなと思っております。

齋藤富士夫氏：シニアネットの将来・「夢」について

パソコン塾、幼児教育支援、モバイルシニアネット、e-ネット安心講座、シニアが教える職業訓練、ということで、今後も地域貢献ということで、我々の滋賀県をベースに、我々の団体はいろいろなことをやっていきたいと思っています。

それから、これは昨年からやっていますが、シニアドのメンバーはICTのプロなので、先ほど吉田先生が言われたように、他の団体に対して、行政と連携して我々のICTの力を他の、里山のNPOとか、そういうところへのいろいろなICTの支援を進めていきたいと思っています。そういうのもひとつのシニアネットの方向性かなと思います。

それともうひとつは、我々は、健康者というか、障害のない方に対していままで地域貢献していたのですが、シニアの人がパソコンを介して発達障害の子供たちの育成をしたい、そういうのを我々NPOとしてやっていこうと思っています。これもなかなか行政だけではできませんし、もちろん企業ではできないところなので、我々シニアドのICTを持っている人が少し支援できる場所かなと思っています。

白倉登喜夫氏：シニアネットの将来・「夢」について

申し上げたいことはたくさんあるのですが、幾つかのポイントだけ申し上げたいと思います。午前中、秋山先生の話をお聞きしておわかりになったと思いますが、65歳以上の一人暮らしがこれから40%になります。もう一つは、資料の右のほうに載せておきましたが、61.8%は障害者になります。ですから、皆さんもあと10年か15年後はこちらの中に入ることです。これもやはり意識してほしい

もう一つは、生産人口が46%減ると理事長が言っていました、この生産人口が減るということはどういうことかと、高齢者ばかり増えて、高齢者だけでも大体4,000万人近くになるのですが、そのうちの前期と後期を分けると、後期のほうがはるかに多くなるというのがこれからの10年後の予測です。そのなかで、シニアネットはどのような活動をしていくかということです。

まず一つは、「孤立と孤独」という問題があります。孤立というのは一緒にいながら無視されている、孤独というのは一人暮らしになってしまう、そういうことですが、その人たちにどう手を差し伸べられるかということです。そのやり方としていろいろあると思いますが、それは後ほど結論で申し上げます。障害者が多くなるということは、情報機器を使えなくなる。Webサイトへも行けなくなる、そういう人たちが多くなるということです。これは先ほど申し上げましたように、アクセシビリティであり、ユーザビリティであり、そういうもので解決していかなくてはならないという問題があります。

もう一つは、使いこなすということです。いろいろなものが普及されてきますけれども、それをどう使って活用していったらいいのか、アドバイザーの活動もそういう指向が必要だと思いますし、現実の問題であると思います。それから、今日、全く触れてなかったのは、オンラインコミュニティがいま非常に普及しているということです。多くの高齢者が参加しているので、この問題もあります。

では、なんで解決できるのかというのが今日、午前中・午後、いろいろ話を聞いていましてわかりましたけれども、我々が使う、タブレットにしても、いろいろな情報機器が使いやすくなった。やがてナチュラルユーザーインターフェイス（NUI）が出てくれば、もう何もしなくても、様子を見て、頭で考えればそれを実行してくれるのではないかという時代も来ると思うのです。そういう機器が安くなるというのと、もう一つはそれが使いやすくなっていくということです。これはビジネスモデルとしていけば、それをコマーシャル化し、あるいはどこかに支援してもらって、それを無償で高齢者に配って使ってもらう。これが一つの方向性として私がいま考えていることです。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ありがとうございます。「とかち」さんの「連携は必ずしも必要ないのではないか」というような意見、これはシニアネットの将来ということとはちょっと違うかもしれないですが、あえてモデル化するなら「連携不要型シニアネット」でしょうか。

高橋克司氏

それは、たとえば、うちの近くでも10人ぐらいでパソコン講座をやっているクラブがありますが、一緒にやりましょうといっても、なかなか乗ってこない。そこにはリーダーがいて、構成員がそこで非常に楽しくやっているわけで、こちらからは説得して云々ということは難しいなど思っていますから、そこへはタッチはしておりません。それから、何回も言いますが、北海道の場合、各々遠いものですから、各地域で10人とかそれぐらいでやっている団体はなかなか把握ができないというところがあります。

8. コーディネーター（吉田敦也氏）：パネルディスカッションのまとめの発言（1）

ありがとうございます。臼倉さんのおっしゃったオンラインコミュニティについてはあまり話題になりませんでした。遠いから、地理的に隔たった条件なのでお付き合いしないということの裏には、日本のシニアネットはリアルな対面（じかに顔を見ること）が基本になっているということが根底にあるかと思います。一方で、形はどうあれ、情報を共有し、思考の地平を広げることに意義を見いだすネットもあります。

例えば、私は昨晚、「NPO Mystyle@こだいら」というところのコミュニティ・ビジネスをテーマにした研究会「マイスタイルな夜」での講演を USTREAM で配信しました。徳島の NPO いきいきネットとくしまがそれを視聴しながらツイッターを使ってオンライン交流しました。

この事例は、決まった仲間同士で情報が伝わればよいということからメーリングリストに加入している人から考えると、少し距離のあるものです。なぜなら、ツイッターは、見るのも勝手だし、見ないのも勝手です。ログが残りますので、どこからでも割り込めます。アクセスすれば、その人とつながる。さらに深めたいならフェイスブックに行けばよい。これが基本構造。「ネットワーク」＝「お付き合い」ではないというわけです。

もちろん、そうしたリアルな関係／交流を出発点として事業連携などする。こうしたことはあるでしょう。しかし、ネットワークというのは、情報共有するためのパスを持っていること。それが一方通行でスター型のパスではなくて、ぐるっと回って戻ってくるのです。

ネットワークとネットワーキングというのはまた異なる話です。コミュニティにおける相互作用的な活動という問題が出てくると思います。このあたり、整理して、モデル化していかなければなりません。

また、冒頭に「湖南ネットしが」の活動に注目しましたが、それは、外国語をしゃべる人が入ってくるというのはこれまで聞いたことの無い事例であり、国際化／多文化共生の流れのなかでいろいろな意味で利益が高いと思ったからです。

いずれにしても、いろいろな形があることがわかりました。オンラインコミュニティという話題も出ました。ほっとした感じがあります。

さて、いまこの会場には全部で何人ぐらいいらっしゃるでしょうか。見渡してざっと 120 名くらいですね。では、このなかで、ツイッターをやっている人は何人ぐらいいらっしゃいますか？ 挙手をお願いします。16 人ですね。フェイスブックをやっている人は 14 人。スマートフォンを持っているのは 21 人。ブロードを使っている人は半分くらいですから 60 名くらいでしょうか。こんな形で ICT 利活用のあり方は変化し広がってきています。したがって、シニアネットの活動内容、シニア情報生活アドバイザーの活動もおのずと変化しています。講座内容も新しいものが求められています。事業型というときに、さきほど臼倉さんからもご発言ありましたが、パソコンリユースなどは時代の変化からはやビジネスにはなりません。一方で、農業とか、ソーシャル・ビジネスとかはニーズのあるテーマとなっています。

もう一つ気になったのは、例えば「とかち」の紹介のところで、女性が多いという報告がありました。世界的に有名なグラミン銀行の事例では女性が多いのが特徴です。グラミン銀行では、銀行でお金を借りるということは見方かを変えると出資者であり、出資者ということは株主総会で発言権があって、たくさん借りた人は発言できるという立場の人だということです。つまり、

お金を出した人は雇用されるのではなくて、自らビジネスをやり雇用すればよい、という考え方です。同じように、シニア情報生活アドバイザーについても、見方を変えると、立ち位置が変わってくると思います。そのためにも、母体となるシニアネット自体がスタンスを決めて、役割をわかりやすく示していくということが重要になってきます。近隣のネットについて知り、他との比較から自分たちの特色をより明確にする作業も避けて通れません。そこで見えてきたネット間の差異と共通項。それがシニアネットの将来を設計します。

もちろん事業に関わることだから、公開しづらい部分もあるでしょう。今日の議論がそこまでいかなかったとしたら、材料が出なかったのだらうと思います。そういう意味では、日頃の情報共有、気軽な情報交換が重要で、ツイッターはその役割を果たします。皆が意識化、自覚できる形で情報共有していくソーシャルメディアです。

こじつけるつもりはないですが、だからこそ、シニアネット間でのネットワークが期待されているのではないのでしょうか。データベースの仕組みをつくり、シニア情報、シニアネット情報を集積すること、シニア情報生活アドバイザー活動の「見える化」を図ることの意義がここにあります。そしてこれが「シニアネット・ステージ 2」構築委員会での議論を踏まえて考えるところの一つの結論ということになります。

ということで、それについてどう思うか、その他のこと含めて、ご意見をお願いします。

【会場より発言と応答】

会場より発言：B氏

発言しようと思っていたら、いま吉田さんがまとめてだいぶしゃべられたので、あまり言うことがなくなったのですが、臼倉さんが非常にご努力されて、シニア情報生活アドバイザーがたくさん出て、これは素晴らしくて。私はいま「シニア SOHO 三鷹」の会員で、全く運営に関わっていませんが、「シニア SOHO」ってどういうことをやっているのですかと聞きに来る人がい



ると、私も駆り出されてしゃべっているんです。大体、年間 3,600 人を完全に有償で教えているということで、講師が SICTA（サイタ）とシニア情報生活アドバイザーを含めて 200 何人という状態でやっていることが、「シニア SOHO 三鷹」が 1 億円の収入を年間稼いでいる基礎になっていると私はよく話します。後で詳しく、懇親会で山根さんに聞いていただくといいと思いますが、山根さんのところで年間 2,000 人ぐらい教えています。

いま言いたいのは、シニアド・・・を作るとしたらどんなのをやったらいいかというなかに、

いま先生がおっしゃるように、ブログとか SNS のコミュニティをどういうふうにするかとか、そういうことが出てくると思うんですね。またフェイスブックというシステムを選ぶのかどうか、自分たちのコミュニティの運営をどうするかということですが、そのときに非常にいままでと違ってきているのは、いま、シニア情報生活アドバイザー、1対1で情報技術を教えていくという世界ではなくなっている、地域へその人が入っていくと、一人ひとりじゃないんですね、そこでリアルな活動をする人は。

私も、三鷹の次の地域の課題は何か、そこへシニアをどういうふうに対応するかというのをあさってしゃべらなければならないので、ここでその原稿を書きながら聞いていたのですが、いまボランティア活動が非常に苦しくなって継続できない。人々に余裕がなくなっているわけですね。それに対して起業する人が非常に増えている。グループを作っているいろいろな活動をする人に、どういうふうにするかということと絡めた情報社会対応の学びというのを作っていかねばいけないということで、ブログで例を言えば、ブログにどう発信するかではなくて、ブログのプラグインの構成をどうするかによって、どういうふうにするか「信頼を作っていく発信」をしていくか、あるいは SEO をどうやってやっていくか、こういうことだと思うんですね。そこは非常にいままでやっていることとは違うので、違うのだということを考え出さないといけないのではないかなと思って、その辺の議論がもう少しいただければと思うんです。シニアネットとシニアネットの交流よりも「シニアネットの一人が地域と交流する」ということをどうするということにもっと観点を置く必要があるのではないかなと思っております。感想みたいなものですみません。

会場より発言：C氏

「多摩 ICT 普及会」の吉野と申します。話の中で出ていたかどうかわかりませんが、私は、地域のコミュニティの基本は町内会とか自治会だと思っています。皆さんの団体で、自治会のホームページを作るような、そういうサポートをされているのでしょうか。自治会とか町内会、いま、高齢になったからやめてしまうとか、そういうのが結構多いのですが、その地域の中でどんなことをやっているのかというのはなかなかわからないんですね。ですから、町内会とか自治会のホームページ作りというのはやはり私たちがお手伝いしてできる部分だと思うのですが、皆さんどうでしょうか。

会場より発言：D氏

東京都江戸川区のシニアネット、モリヤと申します。先ほど「仙台」さんのほうから発言がありました、シニアのためのパソコン教室を中心として活動していて、いま危機感も持ってらっしゃることだったのですが、内容は詳しくは伺っていませんが、私どももやはりシニアのためのパソコン入門講座を中心に活動しておりますので、いま大変危機感を持っております。というのは、私ども、シニアネットが始まって大体 11 年ぐらいになりますが、初めの頃は皆さん非常に熱心ですね。熱気に溢れて、教室でも一生懸命勉強なさる。それで、その卒業生でシニアネットに入会してくれた人を集めてシニアネットを大きくしていったんです。会員になったけど去った方に、入門講座より若干レベルアップした講座を組んで、皆さんにまた勉強に来てくださいという講習をやると、皆さん着実に自分のところで勉強してきますから腕が上がっているわけ

です。それで、入門講座よりレベルアップしたカリキュラムにも十分対応して成果を上げていたんです。いま ICT 不況とか、パソコン関係の雑誌が売れない、参考書が売れないというから、講習を受ける方が減るかと思ったら、案外減らない。

ところが講習を受けに来て下さるのはいいのですが、最近はその内容が様変わりなんですね。昔は、パソコンを勉強したいという方が主体で入ってきたのですが、最近、あまりパソコンを勉強する気はないのだけど、まあ、珍しいから来てみようという、そういう関係の方が多いです。そういう方が会員に飛び込んできてもすぐにやめていってしまう。それで後継者に困っています。「仙台」さんが危機を感じていらっしゃると言われるましたが、やっぱりそういう点にあるのではないのでしょうかね。

コーディネーター（吉田敦也氏）

わかりました。要するに、会員の獲得で、離脱率が高いのをどうしたらいいかということですね。いまフロアからご意見やご紹介が 3 つありました。また、堀池さんからは、「信頼」というものをどうしていくか、というご意見がありました。これら全てが関係します。

つまり、シニアネットというのは、団体や組織として活動するのではなくて、会員一人ひとりがそれぞれの機能を果たしていく。その機能を有効に働かせるポイントは「信頼」の形成。これが答えです。

タラ・ハントの「ツイッターノミクス TwICTterNomics」という本を読んだ人、いますか？ そこに、ウッフイー（Whuffie）という言葉があります。要するにネット上でどのぐらい貢献したか、例えば、みんなの役に立つ情報をどのぐらい書いたかということで、ウッフイーは貯金できるというのです。貯金ができてきたら、その貯金をお金に換えることができる。これが「ツイッターノミクス」というわけです。

それは決して「シニアネット何々」とかいう組織が作り出すものではない。ハブになっていく個人がなしえることです。しかし、それは簡単なことで、それぞれにブログを書く、それだけです。そうした個人の情報発信をつないでいくプラグインを装備する。

このことは、さきほどの「多摩 ICT 普及会」さんの、町内会のホームページを作りませんかということにつながっていきます。堀池さん流に言うと、作らなくても作れるんです。それぞれがツイッターで「今日はこんな事業／行事があります」「どんな結果でした」というのを、公共的な意識のもと、つぶやけばよい。それを一覧する枠を作っておけば、それがそのまま町内会ホームページになってしまいます。この人は町内会長さんです、この人は何々、ということを公開しておく。そんなやり方があります。そういう形でやっていったときに、会員とか講座とかいうのも変わってくるのではないかと思います。

齋藤富士夫氏

難しいですね。先ほど、自治会などの支援というところで、私は紹介しなかったのですが、地域貢献ということで我々の団体では、自治会のホームページ支援をしています。2年ほど前から、1年契約で、お金をもらって、あと広報を担当とか、運営委員の人の ICT 支援プラス、ホームページの作成と更新作業。ゆくゆくは、その自治体の人が実際に更新できる、そういうような支援をイベントでやっています。

コーディネーター（吉田敦也氏）

「多摩 ICT 普及会」の吉野さんは、いま言ったような、ネットワークの構造の中で自治会のホームページが機能していくということについて、どう思われますか。

会場より発言：C氏

私の団体が、一自治会のホームページを作って、その自治会の人からいま非常に喜ばれています。いままで ICT をほとんど使っていなかったような自治会だったんですね。日野市で自治会というのは何百とあります。ですから、私たちが持っている ICT 技術を地域に波及をするという一つの事例として、全国自治会というのは何百、何万、あるのでしょうかから、そういうところで私たちが貢献できるのではないかと思っています。

ツイッターというのがありますが、やはり、その地域の中で何をやっているかという、まずは情報を発信して、そしてまた、最近、イメージ社会とか言われていますが、やはりお互いが元気かと声を掛けられるような、そういうことができればいいのかなと思っています。

コーディネーター（吉田敦也氏）

この点で、フロアから何かご意見ありますでしょうか。ソーシャルウェブ、SNS 型の自治会運営、情報発信というものについて、シニアネットでなくて個人的な立場でもいいと思います。

会場より発言：B氏

私、おととしの 6 月からブログを使って、「自分が信頼されるコミュニティを街で作ろう」という講座を始めたんです。ブログを書くということは簡単なことなので、そうでなくて、信頼を得られるためのブログの書き方、設定の仕方というのを、事例をいっぱい学びながらやりました。そういう講座のニーズがあるのはわかったのだけど、3 日間で 8,000 円という高いものに 120 人の人が受講してくれて、いま 70 人の人がブログを作って、毎日更新している人が 70%いるという、そういう状況です。

なんでそんなことができたかといったら、SNS のコミュニティがあったからなんですね。三鷹市が運営している「ポキネット」というコミュニティに 2,000 人の市民が入ってしまっていて、そこに 300 のコミュニティがある。そこに受講生のコミュニティを作ると、SNS で、言ってみればフェイスブックみたいに、自分をさらけ出して書いている人にその受講生になることで初めてダイナミックな自分と他の人、いろいろな人がいるところと付き合えるということ、運営するということになるほどそうかとなる。

オブザーバー側とのフォローアップでわかったのですが、これは相当効果があるので、ぜひいろいろなところで、やりたいなと思っておられれば、テキストもありますので、お伝えできるんじゃないかと思っています。このことは SNS のコミュニティに入らない限り教えられなかったと思うんです。

コーディネーター（吉田敦也氏）

ポイントが見えてきました。他に何かご意見ありますか。

白倉登喜夫氏

オンラインコミュニティーの中には、まだ他にもたくさんあると思うのです。たとえば写真が好きな人だけが集まっているサイトだったり、あるいは、いま話題になっているのは「出会い系

サイト」です。これは中高年の方々が結構使っています。それから、最近、若い人が盛んに利用しているモバゲーとかグリーとかゲームサイトがあります。そういうところを使ってコミュニケーションしている人たちも出てきています。

そういうことで言うと、オンラインコミュニティというのはいま言ったようなものだけじゃなくて、いろいろなサイトにあるということです。例えば、写真愛好家が集まるデジブックはいま、会員数が30万人を越したといます。その人たちがオンライン上だけではなくいろいろな地域で地域活動も行っているというところもあるわけですから、オンラインコミュニティそのものを違う形で見なければいけないということもあります。

もう一つ、ついでに言ってしまいますと、たとえば生涯学習関係の領域でいうと、いま生涯学習関係の講座などに来る人は、シニアネットに来る人もそうですが、そういう人は高齢者の1割です。その残りは何をしているかという、大体、朝起きて、今日は何をしようかなと考える人が大多数です。ですから、先ほどの堀池さんの話で、地域とどうつながっていくかという、シニアネットに来ている人たちは全く問題ないので、シニアネットに来られない人たちをどうするかという別の働きかけも考えなくてはいけないということ、これが私の提案です。

9. コーディネーター（吉田敦也氏） パネルディスカッションのまとめの発言（2）

おわかりでしょうか、いまの「写真」のオンライン・コミュニティはよい事例ですね。言葉によるコミュニケーション、そこで信頼を得るといような側面に限らず、例えば写真でコミュニティを作っているというのは「興味」による集まりです。その昔、niftyとかbiglobeの時代の「フォーラム」とか「SIG:Special Interest Group」というのと同じです。

ブログの書き方を教えても、それはつまらない。そうじゃなくて、ブログを使って自分の興味がどう発信したらいいかを教えると、その人は「はまる」。

堀池さんが出された事例は、そういうことでもあると思います。ネット上での信頼関係とか、人のつながりを作っていくためのブログの書き方、あるいはブログの作り方というのを教える講座を開いたら、120人がワットと集まった。高額の講座でも回転していった。これはごく当然なことだと思います。

もう一つは、そこに経済構造というものを考えていかないと先行きが危うい。自治会ホームページというのは滋賀県のあたりでは非常に盛んなようです。地域によって有用性が異なるみたいですが、情報が飛び交うツイッターなどと違って、情報を整理して、見やすい形にしていくのがウェブサイトです。そのためには管理者／情報デザイナーが要る。それを維持する費用も必要。非常に大きなジレンマがあるわけです。お手伝いするのは簡単ですが、責任を持つのは大変です。



1 回目はボランティアでやってもらったけど、責任を持つボランティアはしたくないという人がほとんど。そこで次は5,000円ですよ、次は1万円ですよと、資金が必要になってくる。そのお金を発生させられるところはいいのだけど、そんなところは少なく回っていかない。

こうしたやり方に対して、ツイッターは、「あなたがこれをつぶやいてくれたら自動的にここに載ります」、「そのかわり、自治会の人たちにわかるようにつぶやいてね」。「よっしゃ」。という申し合わせ、契約が成り立てば、特別な管理体制がなくてもできてしまうというやり方であるわけです。

みんなの代表として情報発信する人のブログにアフィリエイトを設定しておけば、みんなが応答し、どんどんリンクしたら、アフィリエイトがついて収益が発生する。だとしたら、ひと月何千円から始まって何万円まで稼げる「町内会支援ソーシャルブログビジネス」としてやっていけるかもしれない。「ええっ!? 町内会の情報を書いただけで稼げるの」と、やったことがない人は多分わからないですけども、それは可能なわけです。

いま私は徳島でツイッターアプリによる高齢者見守り事業「とくったー」をやっています。これも同じ発想で、見守りのために会員が毎日アプリを使えば、その頻度に応じて収益が自動的に発生する仕組みを前提にしています。これがうまくいけば、アプリを作ってくれた人に保守料を支払えます。しかも、運営者が謝金とかの形でわざわざ事務処理して支払うのではなく、ネットストアを管理するアップルからダイレクトに振り込まれます。手間賃を最大限省略した地域支援ビジネスモデルです。地域でお金を還流させるソーシャルビジネスモデルを新たに生み出していく試みです。こういう工夫をして、シニアネットでないといけない情報発信であるとか、あるいはシニアネットならではの仕組み作りをしたら、それが大きな流れになって、「新しい公共」と呼んでもいいものになり得る可能性があります。

午前中から、講演やパネルディスカッションで、宝は眠っていることがわかりました。SNS がいいか悪いかという議論は十分詰めたらいいい。何を使うかという道具の議論はしっかりしたらいいい。

「合う、合わない」は言ってよい。スローであるということはもちろん大切にしましょう。でも、あり方というものに対して新しいステージ、第2ステージに行かなければなりません。設計図はもうできています。みんなで前進しましょう。

ということで、終わらせていただきます。

■ワークショップ

テーマ1:「社会に目を向けた自己実現へ」

課題提供者:

小池 達子氏(メロウ倶楽部 元会長)

コメンテーター : 斎藤 富士夫氏(NPO 法人湖南ネットしが 理事長)

コーディネーター : 羽澄 勝氏(NPO 法人自立化支援ネットワーク 理事)

1. 趣旨説明 (コーディネーター)

多くのシニアは、地域での活動を通して、シニアライフを豊かで実りあるものにしたいと切望されております。それを実現する場としてシニアネットは大きく期待され、その役割を果たして参りました。多くのシニアがシニアネットに参加し、生き生きと活動できる魅力あるシニアネット像を皆で考え、実現させていくことは意義深いことと思います。

そこで、我が国のシニアネットの老舗であり全国ネットで活動を続けております「メロウ倶楽部」の元代表小池達子様より、団体として、また個人としてのお話しをして頂きます。小池様の課題提供に対して、「NPO 法人 湖南ネットしが」理事長斎藤 富士夫氏のコメントを頂いた後、参加者全員と一緒にシニアが喜んで参加する魅力あるシニアネットとはどのようなものか、今後の姿を探って参ります。

2. 課題提供 : 小池 達子氏

2-1 自己実現について

この言葉を調べたところ、心理学の一学派にユダヤ系のゲシュタルト心理学というのがあると知りました。これはゲシュタルト心理学の学者クルト・ゴールドシュタインが初めて使った言葉です。

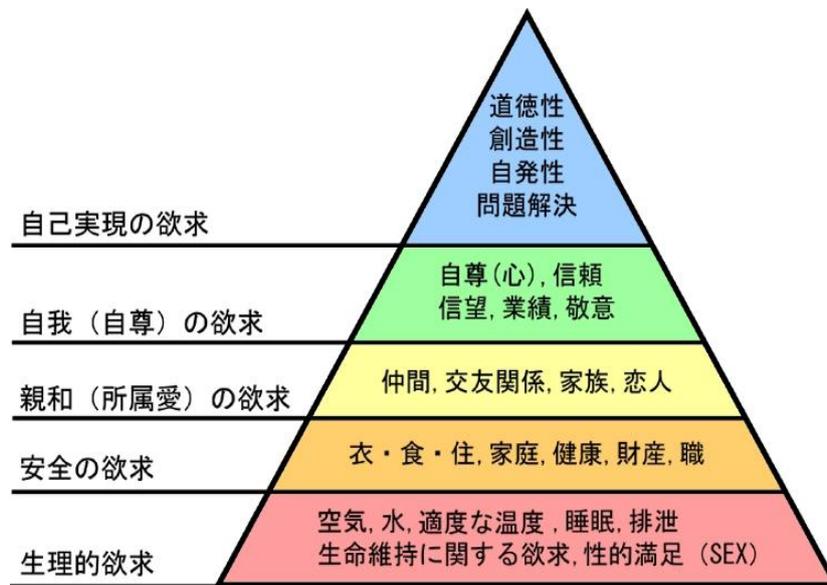
彼の教え子の一人、カール・ロジャースはこれを概念化し、健全な人間は人生に究極の目標をさだめ、その実現のために努力する存在であるとしたことで、この言葉が世に知られるようになったそうです。

また、この説を元に、人間の欲求を5段階で理論化したアメリカ合衆国の心理学者・アブラハム・マズローの「欲求段階説」によれば 人間の基本的欲求は

- ① 生理的欲求
- ②安全の欲求
- ② 所属と愛の欲求
- ③承認の欲求
- ⑤自己実現の欲求



の5段階に分類され、満たされない欲求があるとそれを満足させようと行動する。



①生命維持のための食欲・睡眠等の本能的な欲求が満たされないと人間は生きて行けない

②安全性・経済的安定性・良好な健康状態など、予測化の中で秩序だった状態を得ようとする欲求

③情緒的なもの、人間関係や他者に受け入れられているか、何処かに所属しているという感覚、これが満たされない時、人は孤独感や社会的不安を感じる

④自分が集団から価値ある存在と認められ、尊重されることを求める。しかし、他者からの尊重、地位への渴望、名声、利権、注目を得るなどの低次の尊重欲求にとどまり続けることは危険

高いレベルの尊重欲求は、他人からの評価よりむしろ自分自身の評価が重視され、技術や能力の習得、自己信頼感、自立性などを得ることで満たされる

⑤自己の持つ最大限の能力を発揮して具現化したいと思う欲求

全ての行動の動機が、この欲求に帰結されるようになる。5段階の欲求は底辺から積み上げられ、高次の欲求へと段階的に移行する。

例えば病気になるなどして2段階目が満たされなくなった時は、一時的に階段を降りて欲求の回復に向かい、それが満たされればまた元居た段階に戻るといのように、この段階は双方向に行き来できる。最高次の自己実現欲求だけはそれが充足しても、より高い充足を求めて行動するようになる。平たく言えば「好きなことをして」「それで食べていかれ」「それが他人に高く評価される」、これは煎じつめれば「理想的な人生」ではないか。

ではこの理想を実現させるために、シニアの自立をどうはかるか・・・と考えた時

- ・趣味や楽しみ、好きであることを持っている
- ・人生に目的を持っている
- ・何か夢中になれることがある

・人のために遣りたいことがある

などの点に丸が・・・できれば花丸が付けば最高ではないでしょうか

そこで、ごく限られた私の周りを眺めてみて、自己実現を果たしていると思える(Aさん、Bさん、Cさん)の例を紹介します。

Aさんの自己実現

趣味の音楽を活かしてセミプロのジャズバンドを結成、ビブラフォン演奏、ピアノ演奏、声楽など



定年後、自宅を音楽スタジオに改装し、ウクレレ教室、ボーカル教室を開催

Bさんの自己実現

趣味のホームページ作成技術を買われて「武相荘」のHP管理をしている



ホームページを作って14年：

撮った花の写真を一枚の写真として毎月1日に欠かさず更新を続け、その数は今や168枚になる

Cさんの自己実現

趣味のゴルフを活かしてR&AのRules Official資格を取得、日本及び関東ゴルフ連盟の競技委員として活躍



2-2 メロウ倶楽部に於ける会員の自己実現に果たす役割について

それでは、シニアネットとしてのメロウ倶楽部は、会員の自己実現にどのような役割を果たしているかお話させていただきます。

a. PhotoSalon の例

会員が写真を投稿しお互いに称賛や批評をしあう場としてのコンテンツ

b. 電腦音楽サロンの例

音楽作成ソフトを利用し、更には自分の演奏をこれに加えたりして自作の音楽を投稿できるコンテンツ

c. 課題提供者自身の自己実現

最後に、自分の自己実現はと聞かれたら、甚だ覚束ないことではあるが、世界的な SNS の、Facebook を利用していく内に、ネット世界の広さを感じた。

各国に既に 500 人以上の線友ができ、自分の所属するシニアネットでは、会員の詳しいプロフィールが分からないのに、Facebook では、会員の顔は勿論、家族構成や居住地、生まれたところ、出身校、職業などが分かる仕組みになっていて、会った事の無い線友なのに親近感を覚える。

広大なネットの世界を知るにつけても世界共通語である英語のブラッシュアップの必要性を痛感し、目下「音声学」から入る英会話の勉強を始め、近い将来に留学を実現させたいと思っている。これが実現した時が私の自己実現と言えれば嬉しい。

最後に、長寿と健康、そして経済的安定が、幸福な老いの前提条件であることはまず間違い無いと思われるが、問題は、これらの条件のうえに、どのような高齢期の生活を作り上げるかで、それには各自の努力が必要であろう。人類未到の長寿社会を実現してしまった 21 世紀初頭に生きる私たちシニアは、経済的に安定した長い高齢期を可能にしながら、望ましい高齢期の生活像を見失ってしまったのではないか。

自由で、長い、自立した高齢期を手にして、そこにどのような内実を与えていくかは、人類がまだ経験したことのないまったく新しい課題、私たち自身で取り組まなければならない課題であろう。

高齢者は、身体的老化という現実を受容しつつ、精神的には自己実現を志向し、積極的に生きてゆく潜在力を持っており、その実現を目指す行き方ができると信じたい。

まずは「自分らしく輝いて生きること」を目指そうと思う。

3. コメンテーター（齋藤 富士夫氏）コメント

小池様のパワーポイントを駆使しての説明から、表題のサブタイトルにある「生き生き活動できるシニア像」のイメージが鮮明になりました。体力は若い時に比べれば衰えたものの、精神は若い時以上に元気で、意欲的で、はつらつと毎日を楽しんでいる・・・そんなイメージです。

アブラハム・マズローの自己実現の欲求段階説は、シニア世代の自己実現のヒントにぴったりの紹介で良く理解できます。パワーポイントにある自己実現の欲求「自分の持つ能力や可能性を最大限発揮して、具体化したいと思う欲求」は、生涯学習でもよく使われ、学びを通して得た知

識や技能に満足するだけでなく、その学びを活かすことで自己実現が達成できると云われます。

- ・シニアの自立の尺度で説明されている
- ・趣味や楽しみ、好きであることを持っている
- ・人生に目的を持っている
- ・何か夢中になれることがある
- ・人のために遣りたいことがある

最後の「人のために遣りたいことがある」は学びを活かし、具体化したいという欲求であり社会に目を向けた自己実現だと言えます。本日ワークショップに参加されている方からも、それぞれが思うシニアの自立の尺度を是非聞かせていただきたいと思います。



自己実現されている3人の紹介は、感動しました。自己実現して終わりではなく、また更なる自己実現に向けて日々努力されている内容がわかります。シニアの方が皆さん、このような素敵な自己実現ができるとは思いませんが、その人、その人の中に自己実現できるテーマがあると思います。

メロウ倶楽部の役割の説明で PhotoSalon と 電脳音楽サロン例を挙げていただきましたが、インターネット普及の先駆けから、このような仕掛けを作って、自己実現のできる機会を提供し、主な活動をネット上で、さらに全国規模でしていることに大変驚きました。写真展や演奏会などオフ会で顔が見える活動もされています。

本日参加されているシニアネットの皆さんから、ユニークな運営をしているところがあればその例もお聞きかせ下さい。

メロウ倶楽部のHPから会員の年齢構成を見させていただきました。70才以上のメンバーが全体の約80%と、まだまだ元気なシニアが頑張っていると率直に感じました。これからの10年を考えた時、若いシニア世代が増えると良いと思います。若いシニア世代に魅力的なシニアネットは、どんなところか？ これからの課題でしょうか。

小池様の自己実現の紹介、ワールドワイドですね。語学留学まで目標設定しているのは素晴らしいです。人生の目標設定・・・これもキーワードですね。

自己実現するためには？
自分の好きなことを見つけ夢を持つ
夢の実現に向かって一歩を踏み出す
自分自身の成長の可能性を信じる
困難に直面しても取り組んで乗り越える
自身で物事を決定し、それに責任を持つ
一歩をたゆまず続ける

夢が実現した時 → 自己実現

説明の最後のスライドの『自己実現するためには？』。この内容も、本日の参加者に聞いてみたい内容です。

欲求段階説で説明されたように「最高次の自己実現欲求だけはそれが充足しても、より高い充足を求めて行動するようになる」とあります。まさしく自己実現には終わりがなく、さらなる自

己実現のために新たな夢、目標をもとめて行動します。いつまでも勉強をしなければダメなのかと、言われそうですが、これも生涯学習と通じる所があります。

私の好きな絵言葉作家の たかい たかこさんの作品にこんな素敵ながあります。

その時代、その年にしかできないことも確かにあります。

でも、逆に今からでもできることもたくさんあるんじゃないかなあ。

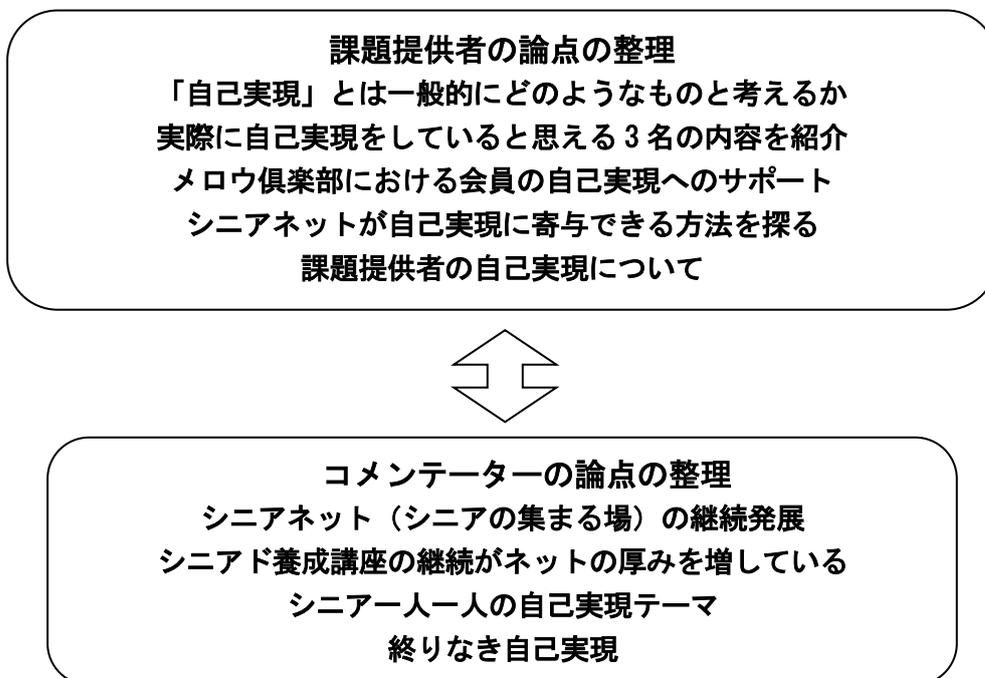
その中に、今だからこそできる。今からしかできないってことも

あるんじゃないかなあ

シニア世代でできる事、シニア世代だからできる事は、本当にいっぱい有るという事を改めて痛感しました。

4. 課題とコメンテーターコメントの整理

課題提供者の論旨とコメンテーターのコメントを、コーディネーターの解釈で整理しました。



5. 参加者の発言から

次に、このコーディネーターの整理に拘らず、ご参加の皆様のご意見をお聞かせいただきたいと思います。

Aさんの発言

突っ込み方がむつかしいテーマ。個人の観点からいけば、一人一人は百花総覧で個々の自己実現をそれぞれもっていると思っている。自分自身が満足感をもたないと進まない、それが基礎的である。

社会との繋がりをどう考えるか。組織として存在した場合、組織の自己実現があるのではないかと、次の段階と①自分自身の生きがい、②会員への貢献、③社会貢献があるのではないかと。

Bさんの発言

“社会に目を向けた自己実現”というテーマ。組織として自己実現できるかどうか、こういう切り口はこれまでのフォーラムではなかったと思った。ネットに所属しなくてもできるが、ここで取り上げた意味はあったと思う。個人に焦点を置いた所にフレッシュさを感じた。

Cさんの発言

所属していたネットは、月曜から土曜日の間講座ある。勉強ができるだけでなく、サークル活動があって、自分たちで立ち上げてやりたいことを、仲間を募って色々活動している。撮った写真を発表する場がある。自由に発表する場もある。おしるこ会、居酒屋で安く食べ放題で楽しむ会、パソコンでわからないことがあったら教えてあっている。海外への仲間と一緒にいける。自己実現ということに関しては良かったとおもっている。

Dさんの発言

2年ほど前に退職、これから価値観を変えて人の為に来れることはないかと思って。でもなにをやっていいか分からない。年越し派遣村で一緒に働いていてみた。サークル、ワークショップを聞き回る。

社会貢献を支えるように使いたいと思っている。これからの若者の負担に対する活動。弱者に対する提供。インター



ネット、携帯による被害に対する活動をしている。学校へのイーネット安心ネットの講師をやっている。

まず、一歩ずつというのが大事、そこでまた考えていけばいい。継続が大事。なせばなる。あきらめなければ実現する。

Eさんの発言

仕事をやめて個人参加。音楽サックスを始めた。実際活動はしていないが、世代間の組み合わせがないような感じがする。シニアの中のみターゲットを置くのではなくて若い世代とのパイプが勉強になる。

Fさんの発言

経験のない高齢化社会でシニアネットが先導する意味があると思う。

自分自身の人生の豊かさを求めている。写真、音楽をかじっているので、それを活かして皆さんが楽しんでいただけるような事をしたい。“自分自身に豊かさを、メンバーにも豊かさを”というのを自己実現と捉えている。いろんな知恵をもっていかなければならないと思う。

Gさんの発言

手足障害という不自由さをパソコンやったおかげで、楽しみながら貢献できるような事してみたいと思った。Facebookでもお世話に。HPコンテンツのお手伝いをしている。アクセシビリ

ティのコンテンツ作りに、勤しんで楽しんでいる。

Hさんの発言

シニアへのパソコン指導をしている。以前は会社をやめてから、外国人に日本語を教える仕事をしてきた。会社を離れて個人的で生きていくには、社会との繋がりが必要だろうと感じ始めた。日本語を教えること自体、日本語の風習や疑問を探って、自分自身で調べて教えるという事に興味があることに気がついた。知らず知らずに自己実現をしていたとに気がつく。

小池 達子氏のコメント

“輝く”というキーワードが重要。自分を発信、表現する。それを認められて生きがいになる。好きなことを見つけられる人はまれ、道具をシニアネットなどでお手伝いする、仲間で、無縁化社会を少しでも繋がっていける社会へ。

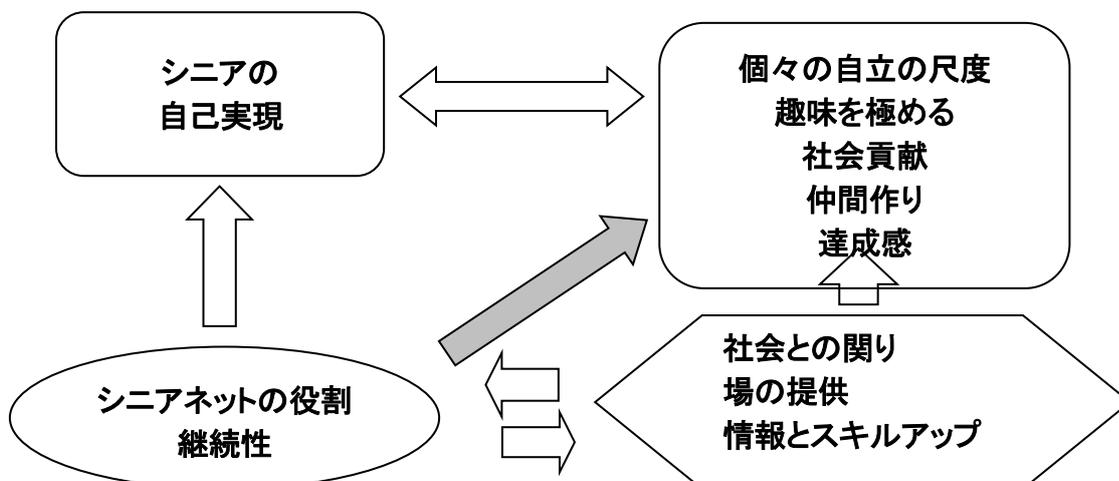


齋藤 富士夫氏のコメント

自分がなにをしたいか。分からないから勉強したい。必要だから学ぶ。やりたいことを見つける。

6. まとめ：コーディネーター

課題提供者とコメンテーターのお二人の自己の信念に裏づけされた、夫々のシニアネットワークの運営の中から生まれてきた課題提供とコメント、それをベースに進められた討議は、参加者全員の発言もあり、シニアの「社会に目を向けた自己実現へ」の一つの道筋を生み出すことが出来たのではないのでしょうか。



シニアの「社会に目を向けた自己実現へ」を支えるために重要なことは、

- ① 場の提供、
- ② 情報とヒントの提供と共有、
- ③ 場の永続性、継続性

であるといえよう。

最後に、コーディネーターを務めさせていただき、シニアネットの為のシニアネットではなく“輝きを模索するシニア”の為のシニアネットであることが、不可避であり究極の課題であることを学ぶことが出来たことを、ワークショップ参加者全員にお礼申し上げたい。

■ワークショップ

テーマ 2:「ICT を学び地域を活性化させる」

課題提供者:

森田 出氏(シニアネット水戸 会長、茨城 NPO センター・コモンズ)

コメンテーター : 金田 和友氏(ダイヤネット 副代表)

コーディネーター : 坂井 幸男(NPO 法人自立化支援ネットワーク 理事)

1. 趣旨説明 (コーディネーター)

シニアネットは、シニア情報生活アドバイザーの養成や ICT 講習をとおして、地域社会の情報化、とりわけシニアの情報リテラシー向上を促進し、社会に活力をもたらしております。しかしながらシニアの ICT 人口は残念ながらまだまだ十分とは言えません。シニアネットならではのきめ細かな教え方や仲間同士で楽しく、気楽に学び合える雰囲気をつくるのが、ICT 普及に必要な不可欠な存在であります。シニアへの ICT 普及はこれからどうすればよいか、より良い ICT 講習の方法等も含め、全員で考えていきたいと思っております。そこで、

- ① 本日の課題提供者の森田 出氏から茨城県水戸市の「シニアネット水戸」の活動状況や問題点をお聞かせいただいた上で、
- ② 次に、コメンテーターの金田 和友氏から、今後 ICT 普及活動を一段と飛躍させるためにはどのような視点から展開すればいいかというご意見をご提示いただきます。
- ③ 上記①②から論点を提示、本日ご参加の皆様のご意見をお聞かせいただきます。

2. 課題提供 (森田 出氏 : シニアネット水戸 会長)

シニアネット水戸は 2009 年 9 月設立の任意団体であり、現在の会員 29 名です。シニア情報生活アドバイザーの茨城県におけるベースとなっており、コモンズからシニア養成講座の講師を受託しています。また、2010 年 8 月から水戸市協働事業としてシニア向け ICT 講座を実施中です。これらを通して活力ある高齢化社会づくりの一助として、シニア層が、パソコンやインターネットを、生活、趣味、社会参加のために役立てるようになる支援が、当面の目的です。



2-1 シニアネット水戸の活動状況

2010 年、水戸市が初めて市民団体との協働事業を募集しましたので応募し、以下の提案事業が採択されました。

『水戸市シニア ICT リーダー(仮)養成並びにシニア初心者 ICT 普及推進事業』、水戸市高齢福祉課/シニアネット水戸(シニア情報生活アドバイザー)がパートナーとなって推進しています。

事業の目的は以下です。

- ①地域の高齢者の ICT を活用した生きがいづくり
- ②高齢者層の ICT 利用促進
- ③市民活動団体等（町内会・自治会を含む）の ICT スキルの向上を図り「まちづくりのパワーになること」

シニアネット水戸の講座の特徴はシニアがシニアに教えるとの立場から以下です。

- ①使命感、指導力を備えたシニア情報生活アドバイザーによる講義体制とシニアに合せた丁寧でゆっくりした講義
- ②10～20名の受講生に対し講師陣は5～7名とひとりひとりに対応できる体制
- ③技術の学習に加え、模擬体験、実習を中心としたカリキュラム、活用、楽しみ方を実際に体験
- ④了者に対するしっかりしたフォロー体制

2-2 水戸市シニア ICT リーダー養成講座

シニアド講座の準備講座という位置づけとし、地域の ICT リーダーになりたい方を募集しました。第1回（8～9月）は7名が、第2回（2～3月開催中）は14名が受講しています。修了者には水戸市が修了証を授与し、5名がシニア初心者講座で研修、2名がシニアドを受講しています。2期生は講座が進行中ですが意欲的に取り組んでいます。

2-3 シニア初心者パソコン教室(水戸市生涯学習センター)

パソコン設備が整っている水戸市生涯学習センターで2回開催。受講生同士が名前呼び合う雰囲気づくりをし、仲間づくり、活動の場づくりの始点となるような場にしていきます。1回の講座に125名の応募があり（抽選で22名の方が受講）、ニーズの高さを改めて認識しました。応募者の6割以上がパソコンに触ったことがないような方で、65歳以上の高齢者が6割、70歳以上の方も多くいました。

本講座における反省点として

- ①抽選漏れの応募者の扱いをどうするのか？
- ②シニアに対する教え方？（サブ講師が多ければよいというものではない）
- ③次のステップ（専科コース）やサポート体制（相談会、電話相談など）が必要であることなどが挙げられます。

シニアネット水戸と 水戸市の協働事業の内容

『水戸シニアITリーダ(仮)養成』並びに 『シニア初心者IT普及推進』事業

対象は、ともにシニア層

ふたつの柱

ITで引っ張っていけるリーダ候補生と
取り残されがちな方を含めた初心者
それぞれを対象とし、スパイラル拡大を目指す。

8

高齢福祉課／シニアネット水戸シニア情報生活アドバイザー

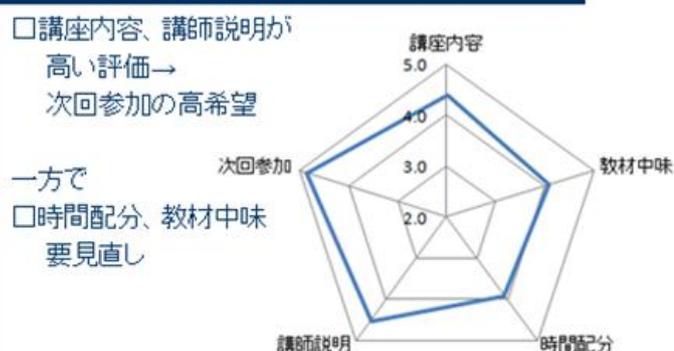
2-4 シニア初心者パソコン教室（市民センター(公民館教室)

パソコンなど必要設備がない施設のため、受講者にパソコンを持参してもらいました。このため、インターネット接続の整備、OS やアプリ（Word のバージョン）などがバラバラであるなど講師陣は苦勞をしました。しかし、公民館はその地区での仲間づくりを始める点としてふさわしい場所、各地で開催可能な場所、さらに受講生同士がつながりやすい場所などの利点がありますので今後も続けたいと思っています。

2-5 初心者教室でのアンケート結果(3回/54名)

講座内容・講師の説明は高評価を得られ、次回の参加の高希望につながっています。反面、時間配分や中味については見直しが必要であるとの結果でありました。

初心者教室3回のアンケート結果(54名) 平均4.4/5.0満点



2-6 講座の課題と今後の展開

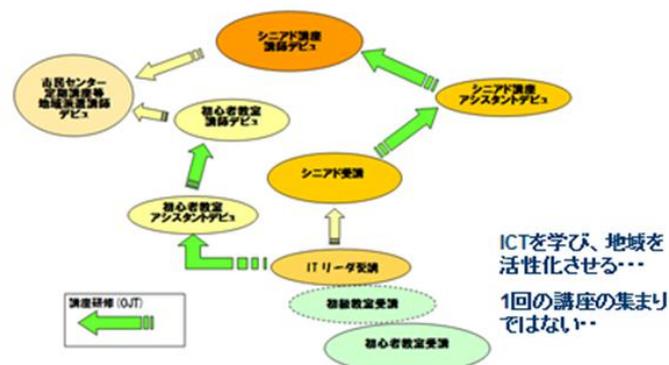
- ①座の教材、時間配分・総時間の見直し
- ②より独自性のあるシニア向け講座の創出
- ③市民センター教室では、同所での次回開催への具体化（最初の受講者が幹事役、地域のICTリーダーが参加）に取り組んでいきます。

2-7 講師研修と仲間づくり

シニア情報生活アドバイザー養成講座及びICTリーダー養成講座の修了者は、初心者講座等の講座に講師研修(OJT)として参加を重ねることで、アシスタント講師、メイン講師へと活動の場を広げていきます。初心者講座を修了したシニアが、ICTリーダー養成講座をも修了し、初心者教室へのOJT参加からシニア講座の受講へと進みます。

このように初心者講座は1回の集まりではなく、地域のシニアとつながる始まりの集まりであり、地域の活性化に寄与します。

講座での講師研修(OJT)と 仲間づくり、活動の輪の広がり



2-8 今後の活動

基本的には平成 22 年度事業の踏襲・充実化を図るとともに、新たな取り組みとして市民センターからの要望を具体化する、市民活動団体（自治会、町内会含む）の ICT 活用の支援、独自性講座の創出や仲間づくりをより具体的な形にしていく予定です。

2-9 おわりに

シニアネット水戸はまだまだ駆け出しの小さな団体ですが、シニア層への ICT 普及を目的に

- ・楽しく、パソコン・インターネットを広める活動
- ・地域の活性化に繋がる ICT 活動

を模索していきたいと考えています。皆様方のお知恵を拝借したいと思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。

3. コメンテーターの意見（金田 和友氏）

- ・行政との協力が地域社会に根付くには不可欠ですが、シニアネット水戸は非常にうまく行っていると思います。行政との協働では会場や設備の確保、受講生の募集など大変助かることが多いと思います。
- ・シニアネット水戸はシニアドの活動の場を提供している点も素晴らしいです。一人では賄いきれない要望にはいろいろな特技を持った講師陣を組み合わせ対応することが重要と考えています。シニアネット水戸は着々とその体制を作り上げています。

シニアドは PC を教えるのではなく、PC の面白さを教えるのが、その役割だと思います。

- ・講座に参加すると素晴らしい人に会える場となるような工夫が必要です。講師と受講生の関係を超えてお互いの素顔を引き出すには、オフ会を行うことが有用であることを体験しています。シニアネット水戸はこれが課題と聞いています。
- ・シニアの第三の居場所となれば素晴らしいなと思います。パソコンを通して楽しみの場、勉強の場、人と出会える場とし、明るく元気なシニアを増やしていきたい。シニアネット水戸の皆さんにも心掛けて、ご活躍いただきたいと思います。
- ・シニアネット水戸は非常に良くやっぴらっしやる。大変参考になる事例と感じ入りました。



4. 論点の整理と提示（コーディネータ）

本ワークショップにご参加いただいたみなさんからご意見なりお考えなりをお聞かせいただきたい点について以下のように提示いたします。

論点-1 シニアに対するより良い ICT 講習の方法

- 1) シニアに対する教え方・体制について

シニアネット水戸の講座の特徴である「シニアに合わせた丁寧でゆっくりした講義」、「10名～20名の受講生に対して講師陣は5～7名、ひとりひとりに対応出来る体制」から取り上げました。

2) シニアに対する講座内容について

技術の学習に加え、模擬体験、実習を中心としたカリキュラム、活用や楽しみ方を実際に体験するなどの工夫を凝らしています。みなさんが行っている工夫をお聞かせください。

3) 修了者に対するフォロー体制

修了者に対するしっかりしたフォロー体制（ステップアップ体制）や相談会・電話相談などのサポート体制も必要とのお話から論点としました。みなさんどうされていますか。

論点-2 参加している講師生徒の人的な触れ合いを深める工夫について

参加している講師生徒の人的な触れ合いを深める工夫についてコメンテーターのご意見にもありましたように、シニア向け講座は、技術面と併せて、忘れてはならないこととして、参加している講師生徒の人的な触れ合いを深める工夫（楽しみながら学び、且 素敵な人たち触れ合えるシニアの居場所にするため）が必須です。みなさまの工夫なりお考えをお聞かせください。

5. 参加者全員による意見交換

論点-1 の1) 「シニアに対する教え方・体制について」

課題提供者：森田 出氏

シニアネット水戸は、「ひとりひとりに対応できる講師体制」を掲げましたが、「サブ講師が多いほど良いというものではない」という反省をしています。メイン講師がコントロールできるサブ講師の人数、サブ講師が受け持てる受講生の人数についてバランスが大切であり、今後勉強していきたいと思っています。



【参加者よりの発言】

A氏の発言

マンツーマン指導（個別指導）、パソコンの活用面（作って覚える）を重視しています。

B氏の発言

シニアには講座（集合教育）は向かないと考えています。講座で使用するパソコンと自分のパソコンが異なると使えない例が多いです。したがって、訪問サポートによる

個別指導を実施しています。

C氏の発言

シニアがシニアに教える場合、得てして「教えたがり屋」の講師が多く、受講生側は一步引いてしまいます。講師はポイントを教えて、生徒ができるまで待つ必要があります。この「待ち方」がポイントで難しいです。集合講座でも教えたがり屋のサブ講師はどんどん先へ行ってしまいます。講師はその辺のコントロールが重要です。

D氏の発言

シニアに教える場合、技術的な面と受講生への接し方が重要です。受講生のプライドを傷つけるような接し方は厳に戒める必要があります。講師陣はシニアの資格を持っていますが、教え方・人との接し方も研修しています。

E氏の発言

1回10名程度の受講者を募集していますが、1対1で対応しています。最初に、受講生ひとりひとりに「パソコンで何をやりたいか？」をお聞きし、「それをどうやるか？」を教えています。受講生は女性が6～7割であり、女性は比較的やりたいことが明確で、学習の手ごたえも大変良好です。一方、男性は目的があいまいで、「パソコンを習いたい」という方もいます。また、女性は仲間づくりも上手で、隣の方を見て「私も覚えたい！」となるなど大変積極的です。

F氏の発言

シニアへのパソコンの教え方には、カリキュラムを組んで同じことを教える講座方式と受講生のやりたいことに1対1で対応する個別指導の2つがあります。後者はやりたいことができるようになるまで繰り返し教えます。進度は千差万別ですがそれでよいと考えています。

論点-1の2)「シニアに対する講座内容について」

コーディネーター

シニアに対する講座内容を考えるには、シニアのニーズをとらえる必要がありますがその調査方法を含めてご意見をお聞かせください。

G氏の発言

主催する側がやりたい方向で講座を組み立てがちですが、お客様視点で考えて「作って覚えるパソコン講座」から年賀状作成、音楽CD作成、ビデオ作成などワンポイントに絞った講座を開催しています。しかし、シニアがパソコンで何をやりたいかというニーズをつかみきれていないのか、参加者が少ない点が悩みです。

H氏の発言

講座内容を考える場合、初心者コース、中級者コースとは何かを教え、何を覚えていただくのか具体的に示して議論する必要があります。たとえば、「インターネット講座」と称した場合、インターネットに接続する方法を学ぶのか、インターネットを見る・楽しむ方法を学ぶのかを明確にし、チェックシートでどこまでできるようになったかチェックしています。

I氏の発言

昨年5月に発売された「iPad」がシニアに使いやすい機器と判断し、無料体験講座を開催し、さらに学習したい方には有料講座も準備してあります。講師はソフトバンクの講習会で研修しています。

コーディネーター

昨日のパネルディスカッションの中でブログ・ツイッター・フェイスブックのようなネットで人とつながる新しいツールがでてきていますが、こうした新しいツールに関する取り組み方をお聞かせください。

J氏の発言

スマートフォン、スカイプ、iPad、クラウド、フェイスブックなど最近のICT動向に関して会員向け交流会で体験講習会を実施していますが、シニアの関心は薄いものと感じています。

K氏の発言

新しいツールを説明する場合、使い方だけでなくどんな楽しみ方や広がりがあるかなどに踏み込んだ内容を盛り込む必要があります。

論点-1の3)「講座修了者に対するフォロー体制について」

L氏の発言

養成講座に合格したら、アドバイザーとして何でも挑戦してもらっています。パソコン教室で講座が修了した方には、補習、無料相談でフォローしています。

M氏の発言

講習会、相談コーナーに来られた方に、出来れば、スカイプやメッセージとリモートアシスタンスを活用して、行き来しなくても良いようにしてフォローしています。

論点-2「参加している講師生徒の人的な触れ合いを深める工夫について」

N氏の発言

一人で参加しても「わからないわ!」といえる相手を見つけられるような雰囲気づくりをする必要があります。

O氏の発言

教える側(講師)は、受講者の様々な要望に応えるため絶えず勉強が必要です。

オフ会(旅行など)を実施し、交流を深めるとともに、旅行記・写真集・ブログ・ホームページなどを作成する素材提供の場としても利用しています。



6. まとめ

まとめとして、課題提供者の森田 出氏及びコメンテーターの金田 和友氏のご感想を頂いた。

課題提供者：森田 出氏

本日はありがとうございました。私たちは、はじめてから8か月走ってきました。人に教えるということは半端なことではないという思いを強くしています。一方、ニーズも非常に高いので何とかしていきたいと考えています。受講生の皆さんが楽しんでくれていることで心強く感じています。

本日の皆さんのお話を伺い私どもの思いとつながる点があり心強く感じました。また、私が考えていなかった新鮮なお話もたくさん伺い参考にして頑張っていきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

コメンテーター：金田 和友氏

シニアの方に教えるには、例えて云えば自転車に乗れない方に自転車の乗り方を教える段階とサイクリングの楽しさを教える段階の2段階があると思っています。パソコンも使い方だけを教えるのでは楽しくなりません。楽しみ方を教えてください。

「できた時の楽しさを味わさせたい！」

マンツーマンの場合、最初の30分間で「できるとこんなに楽しいですよ！」という内容をスクリーンでお見せしています。例えば、お孫さんとメールのやりとりができる、インターネットで天気予報を調べることができるなどの楽しさ・喜びを体験させてあげます。是非「楽しさを教える」ことに心掛けてください。

■ワークショップ

テーマ3:「コミュニティ・ビジネスを創出する」

課題提供者:

杉浦 裕樹氏(NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ 代表理事)

コメンテーター:吉田 敦也氏(徳島大学 大学院 教授 地域創生センター長)

コーディネーター:安田英人(NPO 法人自立化支援ネットワーク 運営委員)

1. 趣旨説明 (コーディネーター)

永年培ってきた知識・経験・ノウハウや知恵を生かして社会の役に立ちたい、出来る限り生涯現役でいたいというシニアの期待があります。そうしたシニアの強い意向を反映して、コミュニティ・ビジネスを追及する「事業型」のシニアネットが増えつつあります。厳しい世情のなかで、こうした「事業型」シニアネットへの関心はますます高まっていくものの、その実現に高い壁を感じているシニアネットも多くあります。

そこで、「事業型」シニアネットとして多方面の活躍をしておられる「横浜コミュニティデザイン・ラボ」の具体的な活動をとおした問題提起と実践に向けた提言をお話しして頂き、参加者全員で「事業型」シニアネットやコミュニティ・ビジネスへの取り組み方について考えて参ります。

2. 課題提供: 杉浦 裕樹氏

2002年から横浜で“まちづくりのNPO”、特にICTを活用したコミュニティ作りに取り組んできたので、皆様の活動に役立つような話題、ノウハウを提供いたします。

2-1 経歴

元々は舞台監督という仕事に携わり、音楽やダンスや芝居という舞台上で監督やディレクターといった役で場をつくることや、2000年前後のICTバブルの頃、渋谷でビットバレーの仕掛けづくりや裏方で投資家やベンチャー同士がふれあう場づくりを実践した。

2003年に横浜のまちづくりや地域情報化を実践するNPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボの活動を開始。ICTを活用した「協働・連携」のための手法や地域の情報デザインを実践型で研究をしている。

2004年にネット媒体「ヨコハマ経済新聞」を創刊。「クリエイティブBizフォーラム」、横浜都心部活性化研究会などの活動を通じて、地域資源のマッチングによる社会課題解決型のプロジェクトの推進、ソーシャルメディアの活用や、多様な主体が連携して公益的な事業に取り組んでいくための「共創の舞台」づくりに取り組んでいる。



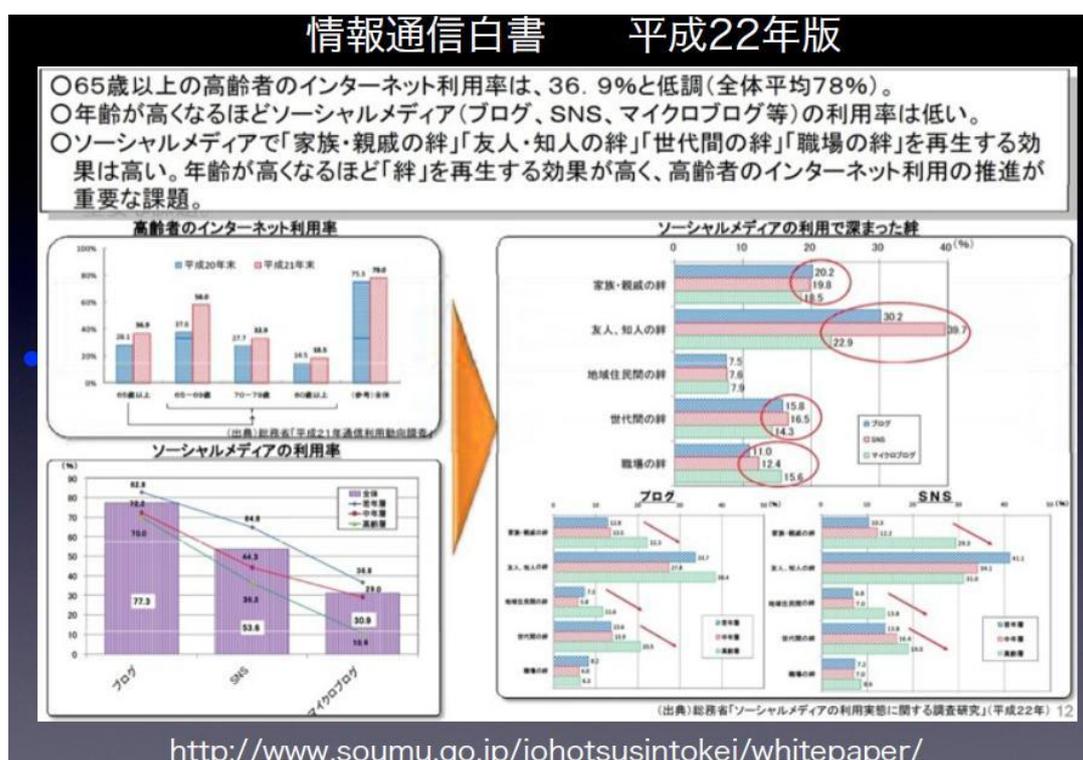
今、横浜をベースに中区関内にある事務所で“まちづくりの NPO”を運営。自分のキーワードは、社会企業、情報デザイン、メディア経済アウト、たまに舞台監督。軸は“地域情報化”で、一昨年より総務省の地域情報化アドバイザー、関東 ICT 推進 NPO 連絡協議会の神奈川県への幹事も兼務。

2-2 事業型 NPO としての活動

2002 年 4 月、「横浜みなとみらい」にあるワールドポーターズという商業施設、NPO スクウェアで立ち上げた時期、当時の中田市長が「新しい公共、共同」というコンセプトを提唱されたので、横浜市やその外郭団体や古くからの活動団体との連携型でいろいろなお手伝いから始まりました。

ここ数年は事業型 NPO として売上高 2000 万程度、価値ある活動を経済的に成り立たせてゆくことと ICT を活用することが活動の目的です。

ICT 活用に関して、総務省の情報通信白書（資料 1）を用意しました。



「65歳以上の高齢者のインターネット利用率が約37%で低調」とありますが、自分としてはかなりの方々が使い始めていると感じています。年齢が高くなるほど SNS やブログ等のソーシャルメディアの利用率は低いが、使われている方は、家族や親せきの絆、知人・友人の絆を繋げる機能が強いので、ソーシャルメディアを使うことで絆が強まったという声をお聞きします。

ICT を使った地域型のプロジェクトが各地で行われています。総務省もここ数年手厚く各地域のいろいろな事業に予算を付けており、地域同士の更なる連携も始まっています。ICT の場合、

一つ作った仕組みやその運営ノウハウはいろいろなところで共有できます。具体的に他の地域に転用したり、交換している事業が進んでいます。

横浜でどうやっているのか紹介します。これはWEBサイト（資料2）ですが、“横浜経済新聞”、“港北横浜新聞”、“tvk 横浜TV”等。テレビ神奈川というローカル局と連携し、横浜発の身近な情報やマスメディアが取り上げない情報を市民がビデオカメラを持って簡単にパソコンで動画コンテンツ作成しています。



地域SNSの“横浜はまっち”は3500人程度が参加。“イベントナビ”では、単に日時・場所だけを書いたテキストではなくイベント情報を上手に活用する方法（サーバにイベント情報を蓄積し、それを他のWEBサイト・ホームページでも活用したり、検索・テーマだけ絞り込み、グーグル等のカレンダーに簡単にインポートする仕組み）を作っています。“みんなで作る横浜写真アルバム”では、シニアが地域に参加しやすくするために古い写真をデジタル化しています。

2-3 組織を運営していくためのポイント

特に“横浜経済新聞”というメディアをやったことが当NPO事業を継続するためのベースとなっており、メディアを運営する中からいろいろな繋がり、関係、価値（所謂、ソーシャルキャピタル）が生まれています。当NPOスタッフが毎日記事を発信し、一日4本、累積で6000本です。6,000回取材することで地域との繋がりができたことの例はTwICTterです。2007年から始め、10,000人近いフォロワーを獲得しています。これは宝とっていますが、これまで300人が直接お手伝いしたいと訪問に来られました。マスコミ志望の学生、退職された元新聞記者、子

育てて戻ってきた若い主婦（元出版社のライター経験者）等。

“ヨコハマ経済新聞”は、2004年から始まったブログサービスや SNS、 MIXI の仕組（RSS やトラックバック等）を取り入れ、地域の新聞として形にしたのは横浜が初です。翌年から六本木、福岡の天神、秋葉原と続き、「同じ仕組をいろいろな都市で共有してやってゆく」、「取材のノウハウ、記事の書き方・作り方のノウハウを各地域で共有して全体でかかるコストをみんなで分担しあう」、所謂、組合型のモデルで運営します。組合費でサーバーを借りたり、技術者の給料を賄うなど各地域で共有すると安くなるという運営の仕組をネットワークの繋がりで展開し、全体で 60 箇所（国内は 56 箇所）となりました。

次に 2004 年に作った“みんなの経済新聞”は、自分のものであり、また地域のものであるという意味でコミュニティです。地域のコミュニティには、地縁型、テーマ型、職員型（横浜市の職員 3 万人の多くは市民）があり、このようなコミュニティの人と人を繋げるプラットフォームづくりが当 NPO 活動のベースです。その例が SNS を取り入れた“みんなで作る横浜写真アルバム”というサイトで、2009 年横浜開港 150 周年という節目の年、商工会議所と横浜市が構築し、その WEB サイトを運営しています。2009 年から約半年で 6,000 枚の古い歴史的な写真が集まり、うち、1000 枚はクリエイティブコモンズ（注 1）という著作権マークを付けて、他の WEB サイトへの転用や流通ができるようになっているし、また、写真に写っている物と地図上の座標データをリンクしてその場所がわかるようにしています。今、このような活動を統合する形で“横浜ストリーム”という事業に取り組んでいます。

“横浜ストリーム”は、総務省の交付金事業を当 NPO と TDK さんや横浜市中でコンソーシアムという協議会をつくり申請しています。さまざまなホームページには価値ある情報が埋めこまれているが、なかなか見たいものが簡単に見られるようになっていない。クローリングという技術でいろいろな情報を取り込んで自分の興味あるものに絞り込み、新しいものが来たら「お知らせ」が来るとか、街の中でどこでも情報が見られるように、デジタルサイネージ（電子看板）という仕組づくりに取り組んでいます。

この基盤作りとともに、ICT の人材育成、つまり、インターネットで発信できる人（地域レポータ）を増やすことも目的です。今は、誰でもメディアを持つ（携帯電話を 1 個か 2 個持つ）ことができる時代なので、TwICTter を使う人が急激に増えています（本会場での使用率は 25%）。最近では Ustream、YouTube の動画サイトもよく使われます。放送局を作ろうと思ったら、TwICTter を使用して「ある企画についていつどこで放送します」と発信し、ホームページに接続したパソコンと USB カメラで始められます。

2-4 地域情報化のポイント

最後に地域情報化のポイントを申します。

1) 地域の情報を編集して発信すること

当 NPO と皆さんと共通することは、シニアのパワーを活用して世の中に役立つことやること。シニアの方は、自分の関心やキーワード（写真、水彩画、スケッチ、ウォーキング、山登り等、“タグ”と呼ぶ）をお持ちなので、そのタグを軸に情報を編集する。編集マインドを持って発信

すると、よく言われるように、発信するところに情報が集まってきます。ヨコハマ経済新聞は 6000 本の記事を発信したが、6000 の繋がりができている。

一度発信すると繋がりができて、今度はそこに新たな情報がやってきます。そういう循環を作ってゆくことがすごく大事です。それと新しいネットの仕組みを活用することも大事です。その仕組みも道具も進化し、そのほとんどは無料で、それらを上手に組み合わせるだけで一つの新しいネットのサービスが作れてしまいます。

2) 同じ志、同じ関心を持った人たちの横の繋がりのパワーを大事にすること

熊本県のやまい村での全国市民メディア交流集会、地域 SNS の横浜はまち、ヨコハマ経済新聞では、同じネットの基盤を使いながら事業を進めています。全国は北から南まで、「その都市で今なにが面白いのか、このテーマのキーパーソンは誰か」とか、自分は知らないがその編集部の人は知っているのでワンクッションおけば繋がることができます。そういう関係価値・仕組みを上手に組み合わせることで関係を維持しながら、その地域の人が持っているノウハウや知識や繋がりをみんなのものにすることができます。

注 1. クリエイティブコモンズライセンスはインターネット時代のための新しい著作権ルールの普及を目指し、様々な作品の作者が自ら「この条件を守れば私の作品を自由に使って良いですよ」という意思表示をするためのツール。

3. 会場から質疑応答

会場から A さんの質問

シニア SOHO 三鷹は横浜に事務所があるので、何か関係ありますでしょうか？

杉浦 裕樹氏の回答

堀池さんは 2000 年前半から存じていますが、具体的に一緒にプロジェクトをしたことはありません。

会場から B さんの質問

横浜コミュニティデザイン・

ラボの事業について、18 の事業の事業規模の順にならべたらどうなりますか？

杉浦 裕樹氏の回答

最大は#18 の総務省の交付金事業、次に#9 の経済産業省の事業、後は細かな受託事業と続きます。件数的には補助金や交付金事業は少なく受託事業が大部分です。

同 B さんの質問

受託事業が継続できなくなったとき、どういう影響がありますか。常に意識していますか。



杉浦 裕樹氏の回答

“横浜はまち”の事業では当時でも参加者が2000名となり、業務委託がゼロになっても止められませんでした。そこで、民営化で運営する志を持つ者同士で非営利型の会社を設立しました。新たな広告収入やそこで作った基盤の使用権を販売し、そのノウハウを地域にコンサルテーションしながら昨年4月から運転し、今は会社とNPOが両輪となっています。

会場からCさんの質問

お金をくれる人は誰ですか？

杉浦 裕樹氏の回答

行政からの受託事業、ヨコハマ経済新聞は独自の企画で「記事の通信社モデル」です。内訳は、記事の転載権を販売、講座やセミナー講師料、著作物、ホームページ作成、イベント事業、現場作業。残りは会費です。

同Cさんの質問

横浜コミュニティデザイン・ラボは、事業型NPOとして目的は何ですか。

杉浦 裕樹氏の回答

コンセプトは「発露せよ、横浜」です。基本的に、情報は受けるだけの方が多くなりますが、その情報の受け手の想いを発信しようということ。一人一人が発信すると、小さな水の一滴が大量に集まると流れになるように、例えば、「子育て」、「国際交流」、「政治」について発言する一滴が多く集まると世の中を動かす原動力になるという考え方です。

同Cさんの質問

今仰ったコンセプトを実現する手段を提供することが目的ですか。

杉浦 裕樹氏の回答

国の言葉ですが「情報化社会の推進」で、世の中の多くの人が情報化の恩恵を被ることが活動の柱です。

4. コメンテーターの発言（吉田 敦也氏）

横浜コミュニティデザイン・ラボが事業型NPOとして成功したポイント

1) 「横浜」という舞台の舞台監督ができるプレーヤ（杉浦さん）の存在

これは、東西統一後のベルリン市の活性化策と似ていないのでしょうか。時期的にも同じ頃にスタート。ベルリン出身のハリウッド監督マイケル・バルハウス（Michael Balhaus）に依頼して、映画の視点で街の景観を点検、ロケーションを世界に紹介し、映画誘致に成功、

地域ブランディング開発と総合力向上に貢献しました。つまり、ベルリンでの地域再生／まちづくりは、生活シーンや住民マインドといったもの（地域の環境を文化）を原資に、その一体化か



ら新しい価値を創造(Creative CICTy 活動)すること。ベルリンマラソンに行ったときその一端に触れ、感激しましたが、杉浦さんの取り組みが創り出す新しい価値としての横浜にも期待したいところです。

2) 横浜写真アルバムをデータベース化しようとする

これは、グーグルの成功モデルに似ています。世界中の本を図書館まるごとデジタルアーカイブし、それをもとにオープンでクラウドな知の集合／拠点を形成する戦略と同じく、「横浜」という視点で住民が撮影した写真を集め、アルバム化、データベース化する。その API サービスが新たなビジネス創出となると感じます。

<課題>

杉浦さんは、例えて言えば、ルーカスとスピルバーグを二人集めたような活躍をしておられます。簡単には真似できませんが、ビジネスモデルの共有、つまり、ビジネスの土俵、収益構造などについて公開できる部分があればより有用です。補助金モデルか？ 入場（あるいは購読）料金モデルか？ “アフィリエイト”型のビジネスモデルか？ ただ、走りながら考えている面も多く、今の段階ではご本人にも見えないところがありそうです。

もう一つは、リーダークラスのプレイヤーが増えればもっと大きな成果をあげられるかもしれません。ルーカスとスピルバーグの二役はできても、それにプラスして、バルハウスからグラミン銀行の社長まで1人4役は難しそうです。都市経済、社会企業経営の専門家が必要です。シリコンバレービジネスの成功の秘訣は、異分野のパートナーでした。

<横浜ストリームの潜在力>

徳島大学地域創生センターによる iPhone 用「カレンダーアプリ」というのがあります。文部科学省の国立教育政策研究所のプロジェクトで開発されたもので、小学校行事、校区内行事、校区内の地域イベントなどを一覧できる仕様です。入力、地域選出の学校支援コーディネーターが学校の先生と連携して行います。利点は、一つの小学校だけではなく校区内すべての行事やイベント予定が簡単に見えること。例えば、兄と弟が別々の学校に通っていたら、両方を閲覧できます。地域に有益な情報をもたらす学校の取り組みが可能です。校区内の弁当屋さんがその日の弁当の売れ行きを予測できるかもしれません。同じ原理で「ボランティア管理」のアプリも開発しました。スマートフォンの登場と普及により、情報共有のあり方、ツールは大きく変化しており、機能性、機動性が高まっています。地域ニーズに合わせたツールの作りこみを地域社会が自ら行う形で地域情報化が進みます。こうしたシステムはスマートフォンだけではなくパソコンでも連動できます。

横浜ストリームの活動とそれによる地域情報化の推進は、こうしたソーシャルメディアの活用によるモバイル・インターネット社会の深化、そして、スマートコミュニティ形成の基盤となるものです。

5. 討議

質疑応答の中から論点を二つに絞った。

論点1：事業型 NPO としての社会への役割、ミッションは何か？

論点2：継続的に事業として成功させるための仕組み

論点1：事業型NPOとして社会への役割、ミッションは何か

コーディネーター

昨日の基調講演の秋山先生の話にも事業型のモデルの話がありました。シニアで70歳以上になると急速に自立能力が衰えるがこれを維持するためには社会参加すること、その受け皿となる地域のNPOはボランティアだけでは参加したシニアが生きがいを持続できないことが課題です。そのため、事業型のNPOになるべく、今全国2箇所の実証実験をやっています。柏木市と福井市ですが、柏木市の事例はシニアが地域にある「野菜工場」で野菜を作って同じ地域にある「コミュニティ食堂」に供給し、同じシニアがそこで食事（消費）するという事業モデルでした。皆様の感想は如何でしょうか。

会場からDさんの発言

今年初めて参加です。半年前にシニア情報生活アドバイザー資格をとり、会社にいたときは大分違う感じ。昨日の講演にあった野菜工場は形が見えるので参加しやすいが、横浜の事業型NPOの場合はそういう形ではなく、仕組みを作ったりイベントを企画したりということなのでなかなか難しく、実体として見えにくいことがあります。テンプレートとか雛型でこういう項目は抑えなさいというある程度の形があれば、私も参加したいという気持ちになってきました。

杉浦 裕樹氏

たまたま“まちづくり”ですが、当時はインターネットに強い人が多くいたのですが、どのように社会に繋がっているのかわからないという課題がありました。ICTでそういう人を社会に役立てるようにしたいのです。

会場からEさんの発言

シニアアドバイザーの資格を昨年取得し、一年間講師をやってきて、だんだん慣れてくると「こんなものかな」と思う。事業をやれるとすれば、教えることから始めたいのですが、事業を立ち上げる際、同じ志を持つ仲間づくりが難しいと考えますので、そのあたりでアドバイスをいただければ。

杉浦 裕樹氏

自分の体験ですが舞台監督をしていたので場づくりは何度もやってきてリアルな面で大事だと思います。オンラインのコミュニティでも同様で、投稿



サイト、イベントナビでも嬉しいことがないと長続きしないという意味で共通です。インセンティブは、お金ではなく、投稿した内容に返信があったり、ファシリテーション、人のために場

を作ること。入場料を払った客には入場から退場まで満足して帰ってもらうというプロ意識の感覚が大事です。

同 E さんの発言

シニアライフ全般のアドバイザーをやっており主に電話相談ですが、事業性を持ってない。横浜の事業型 NPO の場合は、クリエイターという専門家がいるから受託という仕事がもらえ、事業化できたと思います。自分たちは専門家ではないシニアの集まりなので、事業性を持つことは難しい。カウンセラーという専門家はいるがなかなか事業に結びつかない。徳島県上勝町の葉っぱビジネスの例もありますが、二面性が必要で、事業をリードする役割とボランティアとして喜ばれる存在になること。杉浦さんのように会社と NPO の両輪を持つことが終局的な姿ではないでしょうか。

会場から G さんの発言

ここに参加している理由は、一昨日“ヨカライブ”というシニア向け情報サイトを立ち上げた所で勉強中。シニアの方に情報を発信される場所を提供したいが、そこに到達できない人が一杯います。ブログがあることも知らない、如何にインターネットの存在を教えることが自分のミッションと感じています。

会場から H さんの発言

長年パソコンの使いやすさを研究しています。最近シニアに注目し、勉強中です。デイケアセンターにボランティアで参加して驚いたことは、携帯を持っていない、パソコンを知らないシニアが多いこと。自分はほんの少ししかシニアの実態を知らないと感じています。杉浦さんの話からそのようなシニアでも繋がりたい発信したいという想いはあるので、そういう方にノン PC のような今よりもっと簡単なパソコン、あるいは、PC 操作のサポーターを増やす仕組みが必要ではないでしょうか。

論点 2：継続的に事業として成功させるための仕組み

コメンテーター（吉田 敦也氏）

次は、シニアネットはどういう役割を果たせるかを考えることです。横浜の事業型 NPO は、若い杉浦さんがリーダーですから、それをそのまま真似をすとかモデルとして取り込むことはシニアネットの特性と照らし合わせた判断が必要です。もう一つ、シニアネットは自分たちが直接仕事をしては



いけないと思う、何故かと言えば、長い年月、働いてきて、知識と知恵と資産を蓄積している。そして年金をもらっている、これからの若い人は年金がもらえない。その観点からは、シニアネットが事業化に向けて留意すべきことは、自分たちの知恵を使って若い人に仕事を作ることではないでしょうか？ 雇われる側であってはいけない。人を使う事業を起し、専門家がいなかつ

たらその専門家を雇う。ボランティア事業の場合は、シニアでないとできない仕組みを作ることがシニアネットの役割ではないかと思います。

杉浦さんの話を聞いて、自分たちのシニアネットにどう取込めるのか、自分たちの知識を生かして地域の若い人にどう仕事を与えられるのか、杉浦さんと連携したら今までの社会にない、強い力のある新しい産業を創出できるかもしれないと考えたらどうでしょうか。

会場から I さんの発言

吉田先生のご意見に全く賛成します。一つ、最近のニュースの中で、「過疎化の村にパソコンを配ったら食料や食品がもっと売れるという仕組みを考える」という話ですが、自分の町では ICT のことを知らなくても端末を叩かなくても、電話で「誰々さん今日スーパーにこういう牛が入りましたとか、あきたこまちが入りました」と言ってもらった方がいい場合もあります。ICT という道具を使うか使わないのかを判断していかないと、まず初めに ICT ありきではシニアは一生できないのではないかと思います。

会場から J さんの発言

いろいろなことをやる上で大事なことは、学ぶこと。私は 2 点実行しています。読書とラジオを聴くことでは、ラジオ深夜便の録音と再生には ICT を使っています（タイマ設定して録音し、パソコンに落として再生）。ICT は使わなければ駄目です。知っていることではなく、やってみること、外へ出てゆくこと、実行するのみ。ただし、人間は万能でないので、方向が間違っていたら謙虚に見直せばいいのです。

吉田 敦也氏

シニアネットはツイッターやフェイスブックなど SNS を使うべきだと考えます。別な言い方をするとソーシャルウェブ機能の活用です。理由は、シニアネットはシンクタンクの機能を発揮しなければならないからです。本当に世の中でやらなければならないことを「見える化」する取り組みです。

例えば、「いま、どこそこのお年寄りがこんなことで困っている」、「この地域でこんなことに困っている」などを、SNS を使って共有する。言い換えれば、問題解決コミュニティをつくり、課題を实名でつぶやくわけです。それを見た他の人が「うちのアプリを使ったら解決できる」とか、「それなら技術を使わずに電話でこんな風にやったらいいですよ」とアドバイスを返す。やって見せなければならぬとしたら、「代わりにやりましょう」という方が現れるかもしれません。パブリックコンサル、あるいは、パブリックソリューションです。名乗り出て、やってみせたけど、くたびれたたら、助けを求めることも SNS では可能です。素直にそのまま「もうくたびれた」とつぶやく。「それでは交代して私が手伝いに行きましょう」ということが起こるかもしれません。

会場から K さんの発言

もう 10 年前くらいになりますが、それまでは NPO はボランティアで無償の奉仕と考えていたが、

SOHO 三鷹が登場したときに事業をやるということで堀池さんに根掘り葉掘り聞いて自分のNPOに持ち帰って話したところ、やはりボランティアは無料の奉仕であるべきという意見が多く事業化は失敗しました。

吉田 敦也氏

SOHO 三鷹の最大のポイントは、一人一人が勝手に（自立的に）やっていることです。このワークショップで事業型ということに勉強しました。これを持ちかえって、「事業化をみんなでやりませんか!？」と理事会に図り、会員に呼びかけたが誰も賛成してくれなかった。というのは三鷹モデルではありません。

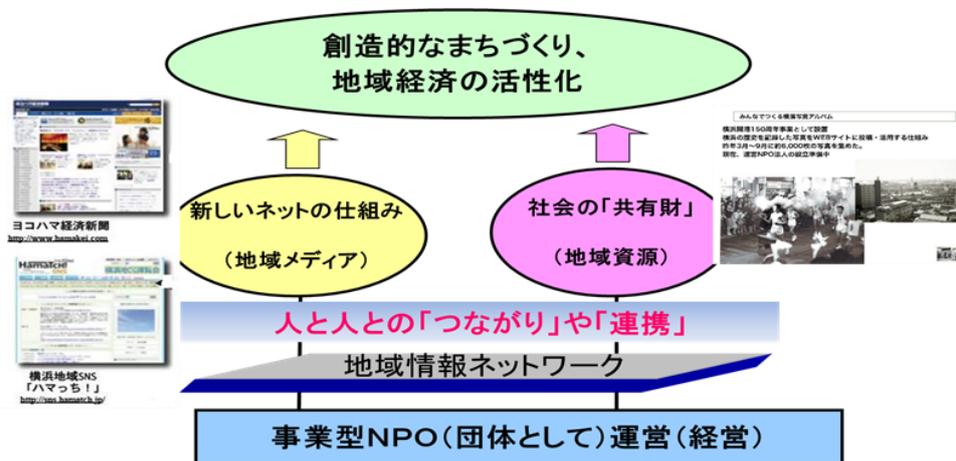
本来の三鷹モデルは、ある一人が、事業型でやりたいと言い出す。すると、それを応援する仲間がいて、その仲間は、また、直接事業参加するということではなく、各々の得意領域で知恵を出したり、適材、適任を探したり、つまり、コネクティングやコーディネートして手伝ってくれた。そのおかげでできましたというスタイルが三鷹モデルです。それは厳密には、シニアネットというよりは、シニア活動のためのネット型“プラットフォーム”です。これまで 10 年来のやり方を否定するわけではありませんが、事業型に変えるということは、シニアネットの構成・構造・機能をプラットフォーム型に移行させる、そのための意識変化を起こす、ということになります。

6. まとめと提言

6-1 事業型 NPO として成功するポイント

横浜コミュニティデザイン・ラボの杉浦さんお話は、事業型 NPO として成功するポイントが二つありました。

- ・ヨコハマ経済新聞や地域 SNS のような



新しいネットの仕組みを共通基盤として構築し、人と人との繋がりや連携を実践したこと。

- ・横浜という舞台で、地域の知的財産を写真アルバムのような形にして共有データベース化したこととその情報をインターネット上で合理的に転用・流通する仕組みを構築したこと。

6-2 提言：コーディネーター

これからの 10 年を見据えてシニア NPO が事業化を進める場合、シニアネットの NPO 同士がソーシャルメディアを活用して相互に連携できるような仕組み、プラットフォームを作ることを提言します。

■ワークショップ

テーマ4:「企業・行政との協働で地域に活力を」

課題提供者:

中村 俊二氏(宇治市役所総務部次長 兼 NPO 法人まちづくりねっと・うじ理事)

コメンテーター:井上 文雄氏(NPO 法人 仙台シニアネットクラブ 理事長)

コーディネーター:安部 洋一氏(NPO 法人自立化支援ネットワーク 運営委員)

1. 趣旨説明 (コーディネーター)

今回の SNF21 は、ICT を活用した生活がシニアにとって如何に重要なものであるか、そしてシニアネットとその中で活躍するアドバイザーの役割がいかに大きいものであるかについて、認識をさらに深め、今後のシニアネットの活動のあり方を議論する場であります。

当ワークショップ4では、まず「行政との協業」をテーマに自治体として ICT を活用した市民との協業に積極的に取り組んでおられる宇治市の総務部次長の中村様に課題を提供いただきます。ついで、仙台シニアネットクラブの井上理事長にコメントをいただきます。

高齢化の進む中でのシニアに対する行政の期待と、シニアの「まだ頑張れる」という想いを『行政との協業』という観点から触れていただけたらと思います。

最後に、皆様から忌憚のない意見をいただき討議を進めて、シニアネットの皆様が関係の自治体や企業等と協業し、社会貢献を進める一助になれば大変ありがたいと考えております。

中村様には、20 分程度で課題提供していただき、井上様から 5 分の目安でコメントをいただきます。そのあと私から、お二人のお話から論点を 2 点程度に整理させていただき、皆様と討議を重ねて最後にまとめをさせていただく予定です。全体で 2 時間の予定ですが、皆様のご協力を得て、円滑に進められればありがたいと存じます。

2. 課題提供: 中村 俊二氏

2-1 役所は困っています

今地方自治は少子高齢化や核家族化、また自治体を取りまく財政の問題等により、大きな転換点にあると感じています。それは地方自治にとどまらず、国も含めた行政全般にわたり、住民、国民ひとりひとり、そして地域そのものの役割や責任が重くなってきています。

昔は、役所に存在する課は、課名を見れば何をするか部署かわかりましたが、今は新たに設置された課が多くあり、「男女共同参加課」「歴史街づくり課」「生涯学習課」など、課名では施策的にはわかりますが、具体的に何をする部署なのか分からない状況です。

以前と比べて、かなりわかりにく状況となっています。昔は、地域でセーフティーネットが形成されていました。しかし、この 20 年で様変わりし、役所は人やお金で解決してきました。その



結果地域の人的資源の枯渇を招いたこともあるのではと考えます。そして、役所もその体力を失い、財政の状況から限界に来ており、市民の力を積極的に活用したいという状況です。

2-2 地域情報化政策のもとで

このような社会変革の中で、市民力と ICT が結びつき、地域を想う心で、地域の活性化に向けた事業を展開すれば、これまでにない新たな地域の絆が芽生えると考えています。宇治市では、地域情報化政策の下で、平成 15 年に地域ポータルを目指す団体を立ち上げ、GIS と CMS で市民がホームページにコンテンツを掲載するなどの活動をスタートさせました。10 団体くらいでいいかなと思いましたが、スタートして翌年には 42 団体から 90 団体まで増えました。ホームページをワープロ感覚で簡単に作ることができます。

地域情報化政策のもとで



- 平成15年に市民参加の地域ポータルを目指す
 - 国の補助事業にて、2,000万円で、
 - 市民の感覚で事業が進む、
 - GISとCMSで市民がコンテンツを掲載……
 - 市民団体ポータルサイト「eタウン・うじ」スタート
- 平成16年5月に市民団体結成
 - 42団体が集まり宇治大好きネット結成
 - 「eタウン・うじ」を運営
- 平成18年11月「お茶っ人」スタート
 - 住民運営の地域SNS



2-3 何かが変わるシニアの手応え

この活動の中で、シニアの手応えを感じました。地域拠点において、デジカメ教室などの活動や地域住民との交流活動や紙のメディアを作るなどの活動を行い、NPO 法人（まちづくりネット・うじ）を設立しました。この NPO が受託した事業は、観光客に携帯端末を貸出し、観光情報を流す事業、宇治川花火大会で、老人ホームにライブ中継する、e-ラーニングで、スクーリングをライブ中継するなど

何かが変わるシニアの手応え



- 地域拠点での市民活動
 - デジカメ教室
 - 健康教室
 - 環境講演会
- 地域住民との交流活動
 - わいわいあつまるフェスタ
 - お茶っ人庵
- メディアとの連携
 - お茶っ人新聞の発行
 - コミュニティFMとの連携



です。地域住民との交流で、人の集まる場所でのリアルな活動も大事だと思います。

まちづくりは、シニア層を中心に、人づくりからです。人が集まる、交流から市民力・地域力への観点で、しっかり地域を見ています。また、シニア情報生活アドバイザー養成講座、PCなんでも相談やスキルアップセミナーなどを行いました。これから新たな団体を設立し、高齢者と商店街を結ぶ御用聞きネットを作ります。また、福祉公社の依頼で、ネット上で高齢者福祉サービスを紹介することもあります。

2-4 最近の動き

この状況の中で、市民力を活用して地域を活性化させていくにあたって、経験のあるシニア層の

力を活用していくことが必要だと思います。新たな活動をしようとするとき、シニア層の活動が大きな意味を持ちます。地域伝統文化を残す事業で、一部の役割は若手のスキルのある人に任せられる部分がありますが、その他はすべてシニアで行っています。

2-5 最後に

いい話ばかりではありません。思うようにいかないこともある、最初からあきらめてもいけません、のりしろも必要です。

役所の中で、どうにもならない状態があるので、NPO・企業へ従来とは一歩踏み込んで、これまで役所が行っていた公共の部分を担当、そんな立ち位置で臨むことが必要なのではと思います。

具体的には地域により異なると思いますが、生涯学習や大きな地域イベントなど、この時、しっかりした組織であれば、役所も喜んで委託する。役所の情報をつかみ、状況をしっかり見据えて、進めてほしい。経験することが大事です。そうすれば、シニアのやりがいや芽生え、楽しくやれる、充実感を得られると思います。

3. 井上 文雄氏のコメント

・まず、中村さんのお話を聞いて、気がついたことを述べます。

①政の立場の人が音頭をとって団体を作るという中村さんを大変素晴らしいと感じました。

②個々人のスキル・想いを上手に引出して団体を運営されています。

③政や地元のマスコミの人を巻き込んでいる。

・シニアネットが求められていることは、組織を強化する、しっかりとした組織とすること、単なる集まりではなく、次の指導者をきっちり作っていくこと、行政からみて、頼む方としては継続して頼める組織であることが必要です。

・企画力、行政の状況をつかむこと、情報をしっかりつかむこと、ホームページを見る、行政の人に会うということをやらねばなりません。

・シニアは現役の時代にそれぞれやってきた、そういう方々です。その特徴を活用し、融合させていることがよいと思います。

・最後に、中村さんのお話の最後に失敗したということがございましたが、私自身も失敗はしています。シニアは頑固で思いが強すぎる。この方々をコントロールすることは難しいが、その人の言わんとしていることをよく聞いてやるのが肝心だと思います。



3. 討議・質疑

コーディネーターが、論点を次の2点に絞り、全員で討議した。

論点1：変革する地域行政において重要となる市民との協業

論点2：地域の活性化とシニアの役割

論点1：変革する地域行政において重要となる市民との協業

コーディネーター

地域のために何かしたいと考えているシニアが、行政と協業するには、まず、行政のニーズをいかにとらえるかが、論点となった。参加されたNPOのみなさんの関心がここにあることが明白である。

課題提供者の中村氏は、地域のニーズ・課題を行政と一緒にやっていくことを提唱された。中村氏以外にも行政の方が2名参加されており、行政側の考えもよく理解できたといえよう。

A氏の発言：役所のどちらへ行くのかよいか

行政がシニアネットをうまく活用していることがわかりましたが、シニアネット側としてどう行政と接していくのか、ネットを通じてどこまで伝えられるのか、役所のどちらへ行くのがよいか？

中村 俊二氏

役所の中に「市民協働」（名称はいろいろだが）というセクションがあると思うのそちらに行ってもらえばよいと思います。そこが窓口になります。

井上 文雄氏：どういう手順で進めればよいか

先ほど別の自治体の方から、市民団体の提案は、具体性がない、整理したものがないといわれました。シニアは、ある一つのことに精通しているが、実際にやっていく広がりがありません。できる人が連携して仲間がいなければならないと感じました。そこで、行政からみて、どういう手順で進めればよいか、案内していただくと有難い。縦割り・横割りとセクションが分かれ、課が多くなってわかりにくい。行政が連携して受け止めていただけるか、提案していただけるかをお聞きしたい。



縦割り・横割りとセクションが分かれ、課が多くなってわかりにくい。行政が連携して受け止めていただけるか、提案していただけるかをお聞きしたい。

中村 俊二氏

行政は今も縦割りで、職員は他の課のことはよくわかっていない、勉強が必要です。この（フォーラムのような）場に来て聞くことも大事だと思う。

自治体には、現状に立ち向かう意図はある。市民サイドにも周りが見えていないこともある。そこで、ICTが大きな意味を持つ。ICTの御用聞きで、ICTに関係のなかった人が動いてきている。ICTが第二の役所になればと考えている。今は発展過程だと思う。

B氏（行政の方）の発言

行政としては、難しい部分だと思う。いろんなセクションがあつて同じことをしているセクションがあるといわれてもしょうがないと思う。

C氏（行政の方）の発言

縦割りの時に相談を受けた時に、どこが責任を持つかが問題になる。なんでこんなに時がかかるかと思われるが、行政は多種多様にわたるので、時間はかかる。根気強くお付き合いいただければと思います。

D氏（行政の方）の発言：実績主義なので組織力も重要

福祉課で高齢者福祉を担当しています。区民と共同して事業を進める予定ですが、NPO の情報は区民共同推進担当からもらわないと分からない。NPO の情報は関係する部署しか知らない。行政としては、(NPO の) 組織力も実績主義なので重要です。また、行政の活動をよく知って対応してもらいたいと思います。

コーディネーターからの質問

行政と市民との協働というのは、市民の側からはどう捉えるのですか。

D氏（行政の方）：ニーズのくみ上げ

当方は、地域性のさまざまな区域で、一人ひとりのニーズをくみ上げるのは難しい。市民団体が提案して、プレゼンテーションして決めます。市民団体は、サロンやセミナー開催で、ニーズをくみ上げています。

E氏の発言：行政とどうかかわるか

行政とどうかかわるかが課題と思います。私は、行政の「子育て支援課」とのかかわりでひとり親の就職支援をしています。就職支援のためにパソコン教室を開き指導しています。

ほとんどはじめての人で、まず4級取得をめざし前半はWord・Excel、後半は仕事につかえるもの、メールは携帯メールを使う人が多く興味を示さないが、ネットは使えるし、武器にもなるという状況です。

しかしパソコン指導で手一杯で、今後どう広げていくかが課題です。組織がしっかりしていることは当然で、今後行政とどうかかわっていくのが課題です。中村さんは素晴らしい活動をされていると思います。

F氏の発言：行政から声がかかる

私は、区の高齢者センターで英会話教室の先生を5年続け、その後シニア情報生活アドバイザーの資格をとったところ、区からパソコン教室をやらないですかと言われ、行政の施設を使つてのパソコン教室を立ち上げた。希望者が多く、個人的な指導も行っている。

シニアライフアドバイザーのグループでNPOをもちホームページを立ち上げたところ、行政から声がかかった。NPOという団体は行政とかがかわっていくことが大切で、組織を作る大切さを感じた。

(注) 行政から信頼を受けられた好例と思います。

H氏の発言：行政と関係がないと難しい

私のところの団体は、シニア情報生活アドバイザー養成講座を受託している。12名の定員で応募が56名であり、面接で決定しました。ところが、アドバイザーの働く場が得られませんでした。行政と関係がないと難しいと感じています。

I氏の質問：NPO立ち上げの参加の度合い

私の所属している団体は、任意団体で、パソコン講座を受託して活動しています。市民団体側から行政が何を考えているかは、「地域振興課」に聞いています。行政としてある課題を抱えたとき、受け皿としてNPOを考えるが、受け皿としてNPOがない場合はどうするのか。中村さんは、NPOの立ち上げに参加されたがそのかわりの度合いをお聞きしたい。キーマンを見つけられたのか。

中村 俊二氏の回答

私が言い出し、「eタウンズ・うじ」と「お茶っ人」の2つのサイトの運営をめざして、市民のみなさんと（最初は10人ほどで）始めましたが、最後は市民のみなさんで運営してください、5年で自立してくださいということで始めました。

結局、私の携わったNPOで

はなくて別のNPOが現在2つのサイトの運営をしています。NPOでは想いのある人が多い、ただ、想いだけが先にいくと層が広がらりません。



論点2：地域の活性化とシニアの役割

行政として、市民と協業していくに当たり、求めることは、協業の相手が信頼に足るか否か が問題であると、提起された。そこでは、シニアを中心とした組織の在り方が議論された。コメンテーターの井上氏から次の質問があり、中村氏より回答があった。

井上 文雄氏の質問

行政として、企業に頼ってきたところを市民力・シニアネット等を活用するという時に、公平性・透明性を求める等のルールがあると思う。そこで、シニアネット等を活用するに際して、行政として求めるポイントはなにか？

中村 俊二氏の回答

シニアとしてどうあるべきかは、組織としてしっかりしていること、楽しみだけではなく、地域を担うのであれば、お金を出せる相手かがポイントになる。そうでなければ、本当のパートナー

にはならない。NPO としてのほんとの形を作ってもうら必要があります。

G氏の発言：仕事をくれくれだけではダメ

中村さんの活動は素晴らしい。(わが市にもほしい) NPO を立ち上げたすぐには何もすることがなく、こちらから小学校へ出かけて、パソコン指導のボランティアを始めた。その後市からさらに市内全小学校のパソコン指導の手助けとホームページ更新を引き受けている。ただ、NPO としては組織が弱く、組織的に弱く、人材が少ないが、組織も人材を評価していかなければならない。「仕事をくれくれ」だけはダメ。また、定年になったら地域とかかわってほしい。そのためには定年になる前から準備をしていただきたい。

J氏の発言（行政の方）：想いを端的に整理して行政に伝えてほしい

市民の人からは、行政とどうかかわるかが出てきていると思います。役所の中において思うのは、NPO の人は想いが強い、想いが先行していて中身ははっきりしない。想いをきちんと説明する、ペーパーを作る、データで示す、具体的に説明するということが必要です。端的に整理して行政に伝えてほしい。

H氏（女子大3年生）の発言：団体・行政の人が動く手助けをする

私は、大学で、視覚障害の人のために Web アクセシビリティを研究している。今日は市民としての意見を述べたい。

市民が情報を得ることが大切ということはわかりました。私の父は定年退職して、家で読書するのみ。本人が動かなくても、周りが動かして、地域貢献する人材となるべきだと思います。団体・行政の人が動く手助けをすることが重要と思いました。

4. まとめ

論点1：変革する地域行政において重要となる市民との協業

- 1) 行政は、市民のニーズの多様化に応じ、新しいセクションを設けて市民のニーズの把握に努めている。しかし、まだ、シニアを含めて市民が協業を考えて役所に出かけても、窓口がわかりにくという認識が市民には強い。行政としては、縦割りのセクションからまだまだ変わりにくく、努力中であり、これからも努力を続けるとの意向を示された。
- 2) 行政がニーズを掲げ、市民力を頼るときに有効なのが、ネットの情報である。市民が団体を結成し、ネットを通じて活動を訴えていくことが行政との協業につながる。行政として、シニアを中心とした市民の想いが強いことは理解しているが、その想いを行政が受け止められる形が必要であるということとは了解された。

論点2：地域の活性化とシニアの役割

- 1) 行政としては、企業などに代わって、市民に業務を委託していくには、相手にお金を渡すので、信頼に足るか、組織の信頼度が大きな問題になる。
- 2) NPO などの組織力が求められるし、NPO としても、役所の情報をしっかり掴む対応力が必須である。

3) 行政からの意見として、NPOの人は、想いは強いが、趣旨のまとめが弱い。行政からは、文書に簡潔にまとめることを求められる。

最後に、コメンテーターの井上氏から、仙台市の手引きから「協同を進める際のルール」をお示しいただいたので、参考までに付記した。

1. 対等性・自主性の尊重

互いに対等な関係のもとで、相互の自主性を尊重しあう。

2. 相互理解

互いの行動原理や価値観の違いを認め合い、特性を理解し尊重する。

3. 目的・目標の共有

何のために協働するのかという「目的」と、いつまでにどれだけの成果を上げるのかという「目標」を共有する。

4. 役割分担・責任の明確化

役割分担と責任を事前に協議し、できるだけ文書化し明確にしておく。

5. 透明性の確保・情報公開

公正で透明性を確保した手続きで協働事業を進め、協働相手及び第三者に対して情報の公開を行い、説明責任を果たす。特に協働相手の選定において、なぜその相手と協働するのか理由を明確にする。

■ワークショップ

テーマ 5:「シニアネット間の交流による相互支援」

課題提供者：

中西 建策氏(NPO 法人おおさかシニアネット 理事長)

メンテーター:高橋 克司氏(NPO 法人とちぎシニアネット 理事長)

指名発表者:大熊 勇雄氏(NPO 法人シニア SOHO 横浜・神奈川 副代表理事)

コーディネーター:鈴木 友里氏(NPO 法人自立化支援ネットワーク 運営委員)

1. 課題提供者と発表者の紹介：コーディネーター

中西 建策氏

大阪市を8期32年間務められた後平成15年4月に「おおさかシニアネット」を設立され、健康フォーラムやスポーツ振興などに力をいれられ、大学や行政との連携も含めてシニアに活動しやすい場所を提供され人材支援に力を入れています。

高橋 克司

2001年「とちぎシニアネット」を設立され、帯広市との協働でシニアのパソコン体験講座を通じてインターネットの普及に取り組まれています。昨年には「シニアネットフォーラム in 北海道」を開催され、実際に北海道のポータルサイトを構築されて相互支援を進められていらっしゃいます。

大熊 勇雄氏

「シニア SOHO 横浜・神奈川」副代表理事。ニューメディア開発協会の「シニアネットⅡ構築委員会」メンバーであり、そのアウトプットとして、ポータルサイト「シニアネット交流広場」の制作を担当されています。

2. 主旨説明：コーディネーター

現在、それぞれの地域においてシニアネットの活動というものが、シニアを元気にし、地域に活力をもたらすものとして展開されており、それぞれのシニアネットは独自に努力を重ね社会貢献というかたちで様々な成果を生み出してきております。

今後、益々シニアネットを活性化させ進歩させるためには、それぞれのシニアネット内での活動にとどま



らずシニアネット間のネットワークの構築が重要になると思われます。このネットワークを構築することによって、お互いを支援し合っていくことがまたそれぞれのシニアネットの活性化と進展にもつながるのではないかと思います。

「おおさかシニアネット」の中西様から活動をお話しして頂き「とちぎ シニアネット」の高橋様、「シニア SOHO 横浜・神奈川」の大熊さまから経験談とポータルサイトに関してのお話をし頂き、その後本日まで参加の皆様からもシニアネットのより良いネットワーク化のあり方についてのご意見をお聞かせ頂ければと思っております。

3. 課題提供：中西 建築氏

8年前におおさかシニアネットを設立。現在会員 3500人を擁する。主な活動としては、①パソコン教室を主催と受託で運営。年会費 2,100 円。延べ 30,000 人が受講。②健康フォーラムを年 1 回開催。「健やかに老いる」をメインテーマ。毎回 200 人参加。③スポーツ振興。行政と連携して Tour of Japan「堺ステージ」を主催。④緊急人材支援事業を中央職業能力開発協会から認定を受け高齢者雇用や有償ボランティア制度の確立を目指して展開した。



3-1 シニアネット間の相互支援の現状

団体間の交流はあっても支援は難しい。その大きな要因はどの団体も潤沢な資金があるわけではないこと。自己の団体の利益につながらないと連携が生まれず、と言うのが現状である。

3-2 相互支援が成功した例

① NPO 法人関西イー・エルダー（技術力）とおおさかシニアネット（営業力と会員数）とで互いの長所を活かして、中古パソコンの整備と販売を行い、また老人福祉センターや行政関連機関のパソコンの OS アップグレード作業受託など、利益につながる連携ができている。

シニアネット間の相互支援について

◇成功例◇

- ▶ 現在、NPO法人関西イー・エルダーとお互いの長所を活かし、また利益に繋がる連携
 - ・ 関西イー・エルダーの**技術力**
 - ・ おおさかシニアネットの**営業力・会員数**

3つの連携

- ▶ パソコン教室(大阪市内24区の受託講座)
 - ・ 老人福祉センターなどの受託講座による講師及びサポーターの依頼
- ▶ シニア情報生活アドバイザー
 - ・ メイン講師依頼、会場提供など
- ▶ 環境整備
 - ・ 老人福祉センター及び行政の関係機関に対するパソコン等の修理及び整備

② 大学と連携し、会員に治

験ボランティアを紹介、健康フォーラムの共催、講師の提供などを行っている。

3-3 NPO と行政との連携

行政が運営しにくい市民サービスを受け継ぐ NPO の役割が重要となってくると思う。また、NPO 同士が互いの長所を活かし、企業とも連携して行政から受託を受けるようにして行きたい。

4. 高橋 克司氏のコメント

帯広・十勝の面積は東京都の 5 倍もあり、更に、北海道内の都市間の距離は離れていて、交流は簡単ではない。人口ははるかに少ない（帯広は 169,000 人）。

とかちシニアネットは帯広駅前のビルを借りてパソコン教室を 2 つ、毎日開講している。年間延 3300 名受講、管理は当番制で対応している。年会費 12,000 円、講座は 1 日 200 円。他に各種団体のパソコン講座受託やホームページ作成など行っている。

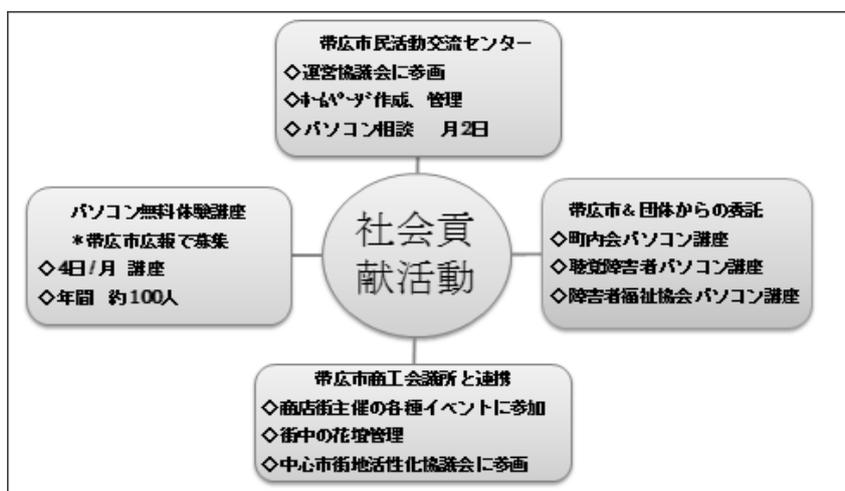
社会貢献活動として市の要請を受け耳の聞こえない人向けの講座を受託。また、市の活動交流センターのホームページを作成及び運営・管理を行っている。

2010 年 10 月 NMDA の依頼を受け札幌でシニアネットフォーラム 2010 北海道を札幌で開催した。

これまで面識のなかったシニアネットが集い、開催への協力が得られた。フォーラムでは「いちおし講座」の紹介をしたが評判がよかった。市町村の職員も参加してもらえた。これからもこのようなフォーラムを続けて行きたい。

北海道内のシニアネットのポータルサイト構築の動きが出ている。

このページにアクセスすれば北海道のシニアネットの活動が分かるようにしたい。全国的な交流サイトの展開もあるので連携して行きたい。



5. 大熊 勇雄氏の発表：ポータルサイト「シニアネット交流広場」

昨年からニューメディア開発協会のシニアネット 2 構築委員会のメンバーになり「交流広場」の制作を担当している。シニアネットがつながって誰が何をやっているかがわかるサイト作りを目指している。

団体の活動情報・講座情報などの投稿は団体ベースで発行されるログイン ID・パスワードでログインしてその団体の担当者が行う。団体の登録内容は随時更新可能。講座の説明と検索の仕組

みに工夫してあるので使いやすい。シニア情報生活アドバイザーのためのログイン ID も用意してある。

情報の溜まり場として、シニアネット・ニュース、パソコン・インターネット講座情報、講師やります！、活動事例、講師募集します、な

どがありそれらの最新情報は RSS 購読をすれば手軽に入手できる。

シニアネット交流広場 <http://nmda-snr.saloon.jp> はスタートしたばかりなのでその効果はまだ不明だが、シニアネットの皆さんにログイン ID の申請をしていただき、大いに活用されるようお願いしている。

4. 討議・質疑

コーディネーター

3 名の方々からお話しいただきました内容からワークショップ 5 で皆様にご検討いただく論点を 2 つ策定いたしました。

論点 1：ネットワークが出来ない・出来にくい

論点 2：ポータルサイトをどのように役立てるか

会場の皆様のご経験なりご意見なりをお聞かせいただければと存じます。論点に対する討論の所要時間はそれぞれ 35 分とさせていただきます。

4-1 論点 1 ネットワークが出来ない・出来にくい

A 氏の発言

三鷹では何年か前に 10 団体が集まり交流を検討したが、結局お金が絡むと先へ進まなかった。その後三鷹ではブログ中心でコミュニティを作ること成功したが、このことを聞いた北見の人たちが北見市の協働推進課に話して、北見の講演会に呼ばれて出向いた。そのときとからシニアネットの高橋さんにも来てもらってシニア情報生活アドバイザーの話をしてもらい、大きな反響があった。

B 氏の発言

日野・多摩・八王子でパソコン教室を開催している。他の地区でもやってほしいといわれるが、自分たちの活動範囲を広げる気はない。ICT 以外の活動をしている組織とはつながりがうまく行か

シニアネット交流広場

シニアネット専用ログイン

Welcome to シニアネット交流広場

「シニアネット交流広場」とは

日本各地で元気に活躍しているシニアネットの情報交換と共有の場としてこのサイトを設置しました。

予めこのサイトに登録したシニアネットは自らの操作でパソコン・インターネット(ICT)講座情報やニュース、活動事例などを発信することができます。

これからシニアネットに参加して活動したいと考えている方にとっては、どのような活動が行われているか、このサイトで知る事ができます。

パソコンやインターネットの利用が苦手な方は各地のシニアネットが開催しているパソコン・インターネット講座を探す事ができます。

詳しい説明は [シニアネット交流広場操作説明書\(第1版\).pdf](#) をお読み下さい。

平成23年2月 財団法人ニューメディア開発協会 シニアネット交流広場事務局

webmaster?nmda-snr.saloon.jp ※送信時は?を@に変えてください。

ない。老人に教えるため講師は受講者の中から育てている。シニア団体でパソコンが使えない人たちがいるので、そういう人たちにパソコンの使い方を教えて使えるようにすることも大事だ。

高橋 克司氏の発言

会員のほとんどが他の団体との交流に消極的である。また、他の団体のために資金を使うことに会員内に抵抗がある。このあたりをどう解決するかが問題である。

4-2 論点2 ポータルサイトをどのように役立てるか

大熊 勇雄氏の発言

1つのプロジェクトを他のネットに紹介して、相互に援助ができるようになるといい。人と人のつながりができることが大切だ。



高橋 克司氏の発言

とちかシニアネットではホームページ部会が毎月地域を決めて2~3のシニアネットのHPを縦覧しながら他の団体の運営形態・活動状況・社会貢献・講座内容などをチェックして参考にしている。珍しいテーマの講座があれば参考にしたい。

中西 建策氏の発言：

おおさかシニアネットでは会員3,000人の中で会費を払うのは500人程度。未納者には督促せずその分を社会へ還元してくださいと言っている。マウス (Manager ActivICTy Work Seeker) というSNSを会員間の情報交換のために始めてみたが教室単位のセクト主義があつてうまく機能しない。

5. その他の参加者の意見

コーディネーター

ここでまだ発言されていない参加者に一言ずつ発言をお願い致します。

C氏の発言

品川スマイルネットというポータルサイトを持っている。パソコン関連の団体・ボランティアセンターなど多くの施設が参加。全国展開のものよりも地域限定のサイトを利用したい。

D氏の発言

交流広場は情報交換の場として有意義と思う。自分たちの組織の目的を把握した上で他の組織と比較してみる必要があると思う。

E氏発言：

交流広場は賛成だが以下に利用できるかが重要な鍵。パソコン中心になりがちだが、それ以外のテーマでも交流ができる。三鷹の例では、わくわくネットを訪問しそこの料理教室でジャム作りの講座を知り三鷹に教えに来ていただくことになった。

F氏の発言：

社会福祉協議会の要請でシニア向けのパソコン教室を2年前から開いている。

各自がPCを持参。皆の希望を聞きながらテーマを決めている。

インターネットを利用していない人が半数いるのでポータルサイト以前の段階と言うのが現状だ。



G氏の発言

私の所属団体イー・エルダーは特殊な団体、全国70名の会員で10年経過。ICTに関心ある人たちの集まりである。他のネットは会員のため何かをしているが、イー・エルダは中古パソコンのリユースの仕事をしている。

具体的には企業から中古パソコンと寄付金をもらいNPO等の団体に提供している。また、ある企業の社会貢献事業に登録して携帯電話の使い方教室を開催。

プロジェクトにお金がつながり活動の仲間が集まると交流もうまく行くようだ。交流ポータルサイトは情報源として有効に活用したい。

H氏の発言

会員300人の赤字団体。交流ポータルサイトは個人ではなく団体のリーダーが利用すればいいと思う。

I氏の発言

シニアネットが発足して10年、NPOに今年なった。会員250人。いろんなサークルがある。年会費3000円の他すべて無料。会としてはやるべきことはほとんどやりつくしている。今は次のテーマをどうするか、と無償ボランティアにどう報いるかを模索している。

J氏の発言

会員数1400名、年会費3,000円だが会費を払う人は600人。督促はしない方針。メールは学園大学のサーバーを利用させてもらっている。

月2回パソコン教室を開いている。メールシステムを有効に活用している。たとえば病気について相談のメールが入ると会員に流して意見を求めるといろんな意見が集まる。

K氏の発言

交流ポータルサイトに賛成。会員60名の団体で全員はシルバー情報生活アドバイザーの資格を持っている。会員以外には友の会というホームページで教室案内をする。新しい講座を計画する必要があるがその観点から交流ポータルサイトが利用できそうだ。

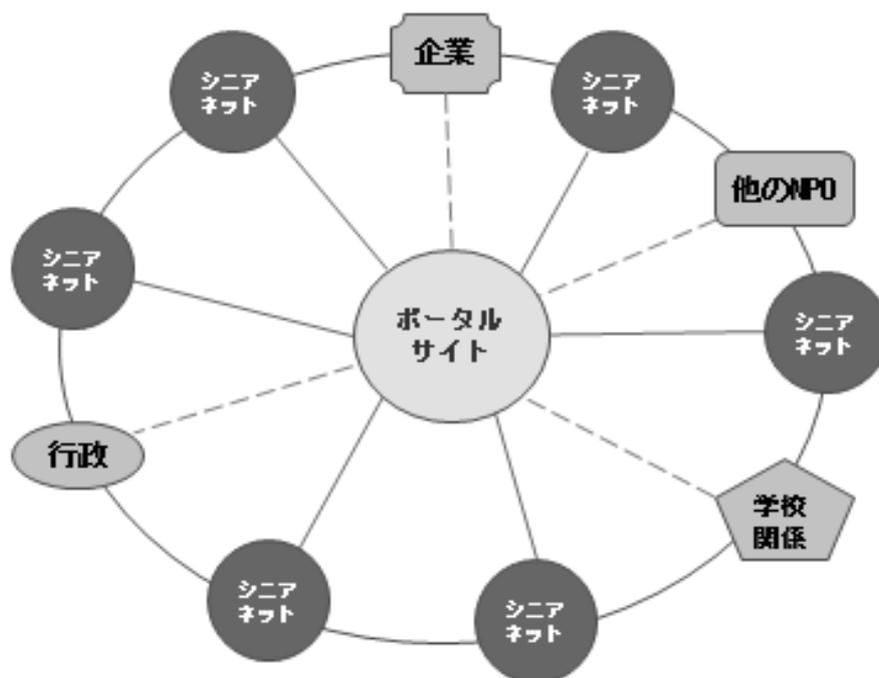
L氏の発言

私は5箇所の教室に教えに行っている。ポータルサイトはこれからの参考にしたい。

6. 今後の展開

ニューメディア開発協会が構築した全国のシニアネットのリーダーが情報交換をする場としてのポータルサイト「シニアネット交流広場」を地域のシニアネットに活用できるように展開したい。

シニアネット間の交流による相互支援



■特別セミナー

「進化するICTを安全につかっていただくために」

風間 彩氏(株)シマンテック コンシューマ事業部門
リージョナルプロダクトマーケティングシニアマネージャー)

皆様、本日はどうもありがとうございます。

私はシマンテックで家庭向けのセキュリティ製品「ノートン」、ご存じの方も多いたと思いますが、の日本の総括しております風間と申します。

今、ご紹介がありました通り、パソコン、インターネットをシニアの皆様にも毎日楽しく使って頂きたいと思っておりますが、その裏でセキュリティに関して深刻な問題が起っております。こういった対処をしたら良いかを説明させていただきたいと思っております。

【ネット犯罪の現実】

まずネット犯罪については、こちらのグラフを見ていただいてもわかります通り、2009年時点で2008年と較べて約71%増えています。その中でシマンテックでも3億近い悪質なプログラムを発掘しております。こういう形で2年前に較べてウナギ登りにアジアのネット犯罪が横行していることがわかるかと思えます。

実際のネットの脅威の現実ですが、2008年時点でシマンテックが検出したオンラインの脅威はなんと160万件あります。

保護されていないパソコン、つまりセキュリティソフトを入れていないパソコンがネットにつないでから感染するまでの時間がおおよそ平均4分くらい。パソコンを感染させる恐れのあるWebサイトの割合は10個のうちひとつとなっています。

過去2年間でサーバー犯罪の被害者になったオンラインショッピングの割合は、5人に1人となっています。サイバー犯罪やオンラインネット犯罪は、犯罪者にとって今や麻薬密売より利益が大きくなっているのです。

何故こんなにネット犯罪が増えているのかというと、ネット犯罪をしかけるプログラムを開発する人、販売する人、その販売されたものからアカウントをひっぱってきてその情報を売りさばく人がいます。

実際の市場経済と同じ形です。アンダーグラウンドのブラックマーケット、つまり闇のマーケットで組織化された犯罪グループがあるのです。パソコンの裏に機械があつてそれを操作している訳ではなく、あきらかに人が金銭目的のためにこういったネットのウイルスやフィッシュウェア



をしかけているのです。それが今一番問題になっているところです。

今から 5~6 年前にソ連の少年が、愉快犯的に自分の名前を高めるため、企業のサーバーに入り込んで、パソコンを何度も再起動させたり、ブルースクリーンにしたり、ということがあったのですが、今の脅威は、個人が全く気付かない内に脅威を仕込んで個人情報だけを抜き取るといったものが一番多い状況です。

実際に自分のクレジットカード

の番号を盗まれるということは、個人にとっては大損害だと思いますが、それが、ブラックマーケットでどのくらいの価格で売買されているかという、カードの情報は 1 件 100 円未満なのです。何十万、何千万もの数に一つのプログラムを仕込むことによって、それを取得して犯罪者は闇で売りさばくという状況になっているのです。

今の生活からネット生活を切り離せない中で、安全に使いたいのに、犯罪者はユーザー、つまり不特定多数を狙って金銭、最終的には個人の資産を狙っていくので一番注意していかなくてはならないのです。

先程もありましたが、具体的には、アンダーグラウンドで行われている組織犯罪が社会問題になっていますが、実際ネット犯罪では年間 1 千億円以上を儲けている人がいるのです。何故かという、このような不況下になると若いプログラマーは、ICT 会社に開発者として新入社員で勤めた場合、年間約 400 万円の年収であるとしたら、犯罪者として儲けた場合は年間約 4,000 万円が自分の手許に入ってきます。金銭目的であり、不況になればなるほど他人のことを考えずに安易に犯罪に手を染めてしまうということがとみに増えている傾向にあります。個人としてはたまらないと思います。

【日本でも発生し始めた偽セキュリティ】

これは海外の話ではなく、インターネットは日本を含め世界中どこにでも繋がっているので、どこでもプログラムをしかけられる可能性があります。

さらに最近では、偽のセキュリティソフトが出てきています。これはどういうことかという、セキュリティソフトを入れていない場合で、実際には感染していないのに、「貴方のパソコンは感染しています。」—たいがいは動画なのですが—というプログラムを埋め込み込んで、「何か感染しましたよ」とサインを出します。

ユーザーにセキュリティソフトを買わないと貴方のパソコンはずっと感染し続けることにな



りますよ、とメッセージを出すのです。悪質な場合は1年経ったら、普通のセキュリティソフトと同じように更新を迫るのです。その時個人情報を入力するということになるのです。無料のセキュリティソフトではこういうものは抽出し辛い状況です。

【シマンテックのセキュリティソフト】

世界中の家庭で使っているセキュリティソフトの約50%近く、つまり2人に1人は私共シマンテックのセキュリティソフト「ノートン」を使っています。これはこれだけ沢山売っているということではなく、これだけ多くの方が利用して下さっているということなので、大変責任を感じ、万全を期すために24時間365日途切れることなくウイルスの解析を行っております。

偽のセキュリティソフトがあり、組織化した犯罪がある中で、「ノートン」はどのようなところが強みであるか、何故「ノートン」が多くの方に利用していただき、セキュリティの効果を発揮しているかといいますと、世界中のユーザー5,800万人の方から任意の匿名データを提出していただく仕組みを持っているのです。

例えば0.0001%の脅威、本当にわずかな脅威としても、5,800のサンプルがシマンテックに集まります。それを解析すれば、十分非常に早い段階で、脅威を特定できますので、大変画期的な技術をユーザーの皆様のご協力のもと、私共は達成することが出来ております。こういったいわゆる評価ターゲットをやっているのは、「ノートン」だけです。

【従来のセキュリティの限界】

従来のセキュリティと今のセキュリティのことについて少し話をしておきます。従来は、こちらの赤いところが悪いファイル、完全にブラックリストのファイルです。緑のところは全く問題のないファイル、例えばマイクロソフトのパワーポイントなどなどです。2005、6年までのセキュリティソフトはここだけをブロックしていたのです。

では実際、犯罪者はどこを狙っ

てくるのでしょうか。セキュリティソフトでブロックされているところや信頼されているところをわざわざ狙ってはきません。この様なところはセキュリティソフトでブロックされてしまうので、そうではなくて、多種多様なファイルがある中で、まだ蔓延していない本当に少数なファイルではありますが、そこを犯罪者は狙ってきてプログラムを仕掛けて、個人情報を知らない間に盗んでしまうというのが今の傾向です。

先程申し上げた5,800万人から色々な情報をいただいているということは、いわゆる犯罪者が



狙うけれども分かり難い、見付け難いというところを採取できるセキュリティソフトが大変重要になってくるからです。

こういう定義ファイルや、ブラックリストやホワイトリストに入っていないものは、見逃したり、誤検知があったりするのです。セキュリティソフトによっては、大変検知率は高いが、検知率だけではなくて、誤検知率も高い。検知率が高いということは、積極的に正しいファイルも検出してしまうという場合もあるのです。

セキュリティソフトを選んでいただく時には、ウイルスの検知率と誤検知率の両方バランスが取れているものを選ばれるのが一番いいと思います。海外の研究機関で言うところのフォールスポジティブ・ネガティブです。

もう少し説明しますと、シマンテックは 5,800 万人から集めた膨大な情報のどういうところを見ているかという、

①ファイルがいつ生まれたか。これが大変重要で、最近生まれたものなのか、随分以前から普及しているものなのか。最近生まれたものなら、感染している率も高い可能性があると言えるのです。

②多くの方が利用しているファイルなのか、少しの方しか利用していないものなのか、ということも規準になります。

この様に多くの情報を集めさせていただいて、精度の高いウイルスの検知を行っております。

【ノートン 360 とは】

私共としてお薦めしたいは、「ノートン 360」というものです。—このパソコンにも入れていただいておりますが—360 度全方位と言う意味です。

最近のセキュリティソフトはウイルスを検知したり、インターネットのフィッシングの詐欺を検出出来たりするものは沢山あります。いわゆる黄色のエリアですね。パソコンのセキュリティ、ウイルス対策、ファイア対策と、グレーのエリアで個人情報の保護等です。

このソフトを買っていただくと、オンラインバックアップを 1 年間無償で、2 ギガまで使っていただけることが出来ます。パソコンにデータを保存しなくても、写真等を自動でオンラインバックアップが出来ますので、パソコンが壊れた場合でもデータを取り出すことができる非常に便利な機能です。パソコンを使っていると段々重たくなってきます。シニアの方でも結構中古のパソコンをお買いになっている方の多いですね。新しいパソコンよりも安いし、状態が良ければネットも出来ます。皆さん新しいパソコンを使っているという訳ではないと思います。

今の「ノートン」は世界最速・最軽量です。これは私共が調査したのではなく、第三セクターの情報として、世界中のセキュリティソフトをスピードやパソコンに対しての負荷等で調査した結果、「ノートン」は 2009 年のバージョンから最速・最軽量となりました。

さらにそれだけではなく、パソコンを速くしようという、PC チューンナップという機能があります。例えば、ウインドウズ XP でパソコンを起動すると結構時間がかかります。なぜ時間がかかるかというと、パソコンを立ち上げる時に、色々な実行ファイル、エクゼといわれるものですが、

一緒に立ちあがってくるのです。実はそれは起動時に立ち上がる必要はないのです。複数のアプリケーションや実行ファイルが一緒に立ちあがってくることを避けることによって、パソコンの立ち上がりが早くなります。

そういうことで、「ノートン」は一緒に立ちあがってくるものを遅延させたり、立ちあがってこないように起動管理が出来るようになっていきます。

不要なエクゼファイル、添付ファイルを削除したり、レジストリー部門をクリーンアップしたり、「パフォーマンス警告」といってパフォーマンスに影響のあるものをダウンロードした時に警告を出したりと、積極的にパソコンを速くするという機能が入っています。これらは、殆どの機能が自動設定されているので、ユーザーがいちいち細かくやる必要はなく、ネットに接続してクリックするだけです。

またノートンの場合、他のセキュリティソフトとはっきり違うところは、パソコンを使っていないスクリーンセーバーになっている時、「out of time」というのですが、この時にパソコンをきれいにしたり、軽くしたり、ウイルスのスキャンをしたりしています。

本来パソコンの目的は、ビデオの編集やデジカメの写真を見たりメールをしたりということなので、その時はセキュリティソフトは仕事をしない設定になっています。恐らく古い「ノートン」を使って下さった方は、「ノートン」は重いと思われる方もいらっしゃると思いますが、2009年以降のバージョン、今は2011年バージョンです、は世界最速・最軽量となっております。

【最近よくされる質問：無料のセキュリティ ソフトで十分保護できるか】

実は、私共も色々な質問を受けます。その一つとして、今の経済状態を考え、インターネットで検索すると無料のセキュリティソフトがあります。そういうもので十分保護されますか、という質問です。

国内で提供されている無償のセキュリティソフトは、機能は限られています。どのソフトでもセキュリティ機能はある、とかウイルス対策が出来るとあるのですが、今一番重要な機能は、有害なサイトをブロックするというものです。毎日インターネットを見ないという方は殆どいませんが、そのブロックが基本的に出来なかつたり、テクニカルサポート、電話の窓口がなかつたりします。フリーではないということもあるのです。何週間とか1年くらいまではフリーで、その後は課金されたりします。

今、経済界で「フリーのモデル」というのが少し流行っているのですが、フリーソフトはあくまでユーザーへの認知・広告の為の無償提供が主な企業側の目的であるので、そういう背景も知っているといいと思います。また、無料のソフトは機能が限られているということです。無料であるということは、開発投資に当然高額なお金をかけてリサーチをしているわけではないので、選ぶ際には十分に注意をしていただきたいと思います。

「最近よくされる質問：インターネットにつながってなくても感染することはあるのか」

皆様からよく質問がありますが、インターネットに繋がってなくてもUSB スティック、フロッ

ピー等からウイルスに感染するということは本当ですか？「ノートン」はそういうウイルスからも保護することは出来ますか、というものです。

インターネットに繋がっていなかったら感染しないのではないかと考えていらっしゃる方が結構多いのです。皆様はシニアの方々に教える立場の方々ですので、是非知っておいていただき

と思います。基本的なことですが、インターネットに接続していなくても、取り外し可能なメディアがあればウイルスに感染します。USB スティック、フロッピーディスク、SD カード、最近デジタルカメラ等によく使います、から感染します。

どういう風に普段から保護すればいいか、ということですが、自動的に USB 等の脅威を禁止する高度なセキュリティソフトが絶対に不可欠になります。例えば「ノートン」の場合ですと、USB を差した（マウンドした）瞬間から悪意のある動作を行うようなものは自動保護機能（オートプロテクト）が反応してウイルスの検知を行います。USB のフォルダを開いただけで、実際に自動保護機能が反応するので、ファイルを開く前に検知することになります。その際に、ファイルを開いた場合なのですが、どのファイルが対象になるかということ、全てのファイルが対象になります。

これは、先程申し上げた通り、USB スティックに限らずどんな取り外し可能なリムーバブルメディアにも同時に適用されます。ネットに繋がっていても、メモリスティックには気を付けていただくと同時にマナー的なこともあります。自分の感染しているデータを他人に渡して感染させてしまうということは、人間関係も悪くするし、自分が意図していなくてもそういうことが起ってしまうので、マナー面でも良くないことです。是非注意していただければと思います。

【スマートフォンにもウイルスの脅威が】

昨日、徳島大学の吉田先生から色々なスマートフォンのご紹介があったというお話をお聞きしましたが、最近のスマートフォンはウイルスに感染しないのですかと質問されました。現在、通信会社、いわゆるキャリア側であるドコモや KDDI 等から、「週刊ダイヤモンド」等、様々な雑誌でスマートフォン特集をやっており、売り切れるほどの人気です。今やシニアも若い人も皆さん一番の関心がある中で、キャリア側である通信会社は絶対にウイルスの事は話したがりません。自分達のデバイスに何か感染する恐れがあるかもしれない、と言うとユーザーは買わなくなるということがあるので、我々セキュリティ会社がきちんと皆さんへ説明していかなければいけない

・USBスティックやフロッピー、SDカードからもウイルスには感染します
(インターネットに接続していなくても取り外し可能なメディアあれば)



・どのように普段から保護すればよいのか？

- ・自動的にUSBの脅威を検出する高度なセキュリティソフトが不可欠です。例えば、ノートンのセキュリティソフトは、USBスティックを挿した瞬間に悪意のある動作を行うようなリスクがUSBメモリの中にある場合、自動保護機能(オートプロテクト)が反応してウイルスの検知を行います。
- ・また、USBメモリの中にあるフォルダを開いただけで自動保護機能が反応しますので、ファイルを開く前に検知することになります。
- ・フォルダを開いた場合に自動保護機能が動作するのはすべてのファイルが対象です。
- ・これらの動作はUSBスティックにかぎらず、どんな取り外し可能なリムーバブルメディアであっても基本的に同じセキュリティが適用されます。



Presentation Identifier Goes Here

Norton 15

と思っています。これからはこのことがキーになってくると思います。

最近出回っているスマートフォンの中で、2010年から2011年にかけてOSとして一番増える、日本でも国外でも今までの販売数の3倍のOSマーケットとなると言われているのが、「アンドロイド」です。今、私の手許にもドコモの「アンドロイド ギャラクシー パブ」というのがあります。吉田先生が使われていたのは「アンドロイド ギャラクシー S」だと思います。こういったタブレット型のものやスマートフォン等パソコンでないものは、「アンドロイド」という「グーグル」が提供しているOSを使っているのが多いです。

それ以外ですと、iPhone や iOS、最近発表された windows phone の OS 等がメジャーなものです。これから一番採用率が上がるであろうと言われているのは、グーグルが提供している iPhone 向けの OS である「アンドロイド」の OS です。

実はこの「アンドロイド」の OS については、シマンテックでは非常に注意をしているエリアです。サイバー犯罪者の次の標的は「アンドロイド」ではないかと言われています。実際に起っている例もあるので、後ほどご紹介致します。

「アンドロイド」は windows と同じオープンソースのため、脆弱性があり、サイバー犯罪者に狙われる可能性が高いのです。「アンドロイド」端末市場の技術的成長のためには、

セキュリティアプリの訴求が不可欠です。これは、我々セキュリティ会社だけではなく、「アンドロイド」のセキュリティリーダーもそう言っています。「アンドロイド」はオープンプラットフォームなので、例えば少し開発の知識があれば、小さなボールゲームや、アプリケーションを作って、フリーで上げる事が出来るので、自分達が作ったものを何百人、何千人の方がプレイするのを見る事が出来ます。

セキュリティリーダーのリッツさんは、「グーグルは開放的であって、開発者に自由な場所を提供しています。」と言っています。でも、そこが誤用される可能性があります。どういうことかと言いますと、グーグルでは開発が誰にも邪魔されずにアプリケーションをアップロード出来ることになりましたが、残念なことに、これは犯罪者にも門戸を開いているということです。実際に「アンドロイド」の OS を作っているグーグルも同じようにおっしやっています。

まずは、オープンソースであることを知っていただく。ネット犯罪者がどういうところを狙うかという、より多くの方が使う OS なのです。これだけスマートフォンが普及され、「アンドロイド」がこれだけ普及されている中で、次の攻撃者がここにしかけてくるということ、高い

アンドロイドOSはサイバー犯罪者の次の標的



アンドロイドOSはオープンソースのため、脆弱性(欠陥)があり、サイバー犯罪者に狙われる可能性が高いです。

アンドロイド端末市場の持続的成長のためには
セキュリティアプリの訴求が不可欠です

Norton

確率でシマンテックは考えています。

【アンドロイド端末を狙った実際の脅威例】

実は、残念ながら、既に「アンドロイド」の端末を狙った実際の脅威が、2010年の8月11日を皮切りに色々なものが出てきています。

- 1) 最初に出てきたものは、「Movie Player」というソフトに見せかけて配布されたウイルスがインストールされると有料SMSにショートメッセージを勝手に送信して課金されてしまうものでした。
- 2) 同じく8月17日に出てきたものが、ゲームに見せかけたウイルスをインストールすると自分の位置情報を第三者に送信してしまうというものでした。これはスネークゲームという一つのゲームの種類だったのですが、ユーザーはまさか自分の位置情報を送られているとは思っていません。こういったものも出てきています。
- 3) あとは12月に出てきた「ボット」です。

「ボット」という言葉をお聞きになったことがあるかと思いますが、自分のパソコンがある日おりのパソコンになって、遠隔から操作され、犯罪に巻き込まれてしまうのです。自分のパソコンが知らない間に悪意のあるものをしかけさせられてしまう。それと同じようなことが「アンドロイド」の中でも起っています。

- 4) 更にこれは世界の話だけではなくて、1月21日に yahoo や NSN のネットの情報にも出ていたと思いますが、経済産業省の外郭団体である ICTA が、「アンドロイド」をターゲットとした「ボット」を発見した、と情報を流しました。これは凄くポイントになることなのですが、どういうところが感染源であるかという、アプリケーションのダウンロード時なのです。今までパソコンと言うとインターネットということが多かったのですが、勿論それは一つの感染路になります、「アンドロイド」マーケットと言われているフリーでダウンロード出来るアプリケーションは10万個くらいあります。

ユーザーがダウンロードして楽しむ、iPhone が出たり、「アンドロイド」の端末が出たりして、一番の楽しみなのです。そういう所を狙って、それを経路として感染させるのが、一番多い例になっています。

それではこういった時に、どうやって対処したら良いのかというと、ICTA は、「信頼出来る場所から正規版アプリの入手」「提供元の不明のアプリの設定のチェックを外す」「アクセス許可に注意」「セキュリティソフトの導入」を推奨しています。

私共も ICTA から呼びかけがあり、「もうちょっと説明してほしい」とか「ノートン」ではどのようなことをやっているのか」とか「国民に対してもっと情報を出せないか」とか「情報を提供してほしい」等と言われ、1カ月に1回は定期的に説明に出向いています。

スマートフォンを楽しく使っていただく、吉田先生のお話のように、シニアの方々に自分も使ってみようかな、とお考えの方もいらっしゃると思いますが、セキュリティの部分で気を付けていただければと思います。

ちなみに、先程吉田先生の個人のスマートフォン「ギャラクシィ S」に「ノートン」のモバイルセキュリティの「データ版」をインストールしていただきました。先生から「割と軽快だね」とおっしゃっていただきました。皆様もスマートフォンをお買い上げいただいたら、モバイルセキュリティの「データ版」（無料）をお試しただけたらと思います。「ノートン」、「アンドロイドマーケット」で検索していただくと、「ノートンモバイルセキュリティ」とカタカナではいつている日本語版があります。

【スマートフォンユーザーのセキュリティ】

スマートフォンユーザーのセキュリティについて、もう少し詳しく説明したいと思います。スマートフォンユーザーのセキュリティで、パソコンと違ったところはどういうところがあるかというと、タクシーの中や電車の中、公共の場でデバイスを忘れてしまうことがあるということなのです。

私も会社の「ブラックベリオ」を忘れたことがあります。大変叱られたのですが、これは情報の盗難に繋がる可能性が非常に強い。これをきちんと守れるかということが重要な要素になります。

「アンドロイド」の端末のセキュリティをニーズに合わせるということが必要で、「ノートン」は先程お話しした「ノートンモバイルセキュリティ」を今開発しています。「データ版」といって開発途中版をいうのを無料で「アンドロイドマーケット」からダウンロード出来ます。

今申し上げましたように、情報の盗難を、盗難に遭った時点や、喪失した日に他人に悪用されることなく防ぐということが出来るのです。このデバイスをタクシーの中に忘れてきてしまった、とすると同じ通信会社の携帯でもスマートフォンでも何でもいいのですが、そこから予めこのアプリケーションで設定しておいたパスワードを「lock 半角開けて パスワード」で入力すると、遠隔でこのデバイスがロックされるようになります。この端末に入っている情報が他人に見られることがなくなります。これは大変重要です。また今は個人で使っている方も多いですが、企業で働いている方は企業の情報をシンクロナイズさせるということが出てきます。その場合はロックだけでは困るのです。その為、データを末梢させることができる「リモート・ワイプ」という機能があります。

また悪意があった場合、「SIMカード」を抜き取るということもありますが、それを抜き取った瞬間、このデバイスにロックがかかりますので、内容をみることはできません。望まない着信とかショートメッセージをブロックする機能もあります。

先程も申し上げましたが、重要なのがウイルスの感染です。「ノートン」は、アプリケーションをインストールする時にスキャンをします。まず、インストールした時点で中にある全てのアプリケーションを問題ないかどうかウイルススキャンします。一個一個アプリをダウンロードした時点でスキャンするので、問題のあるアプリをインストールすることはありません。

インストールするアプリだけではなく、接続した SD カードを差し込んでマウントしただけでもスキャンされますので、ウイルスを防げるようになっています。現在無料の「データ版」

をダウンロードしていただければ、簡単なアプリなので、ダウンロード時で 1.2 メガちよつと。常時ご使用いただいても 2.2 メガちよつとですので、ダウンロードして是非使っていただきたいと思います。

【ノートンをすすめる理由】

先程少しお伝えした通り、第三者機関でテストした結果、2007 年 11 月以降全体スコアで 8 回連続最高評価を受けました。世界最速・最軽量です。現在は世界の有名メーカーの中で良い結果が出ております。シニアの皆様の中でも「ノートン」を使って下さっている方から「ノートンは最近軽いね」という声が多く聞かれます。以前使っていた方の中



中で、「ノートン」は「重い」とか「重かった」とおっしゃる方がいらっしゃいますが、最新の「ノートン」をご利用いただければお分かりになりますので、是非使ってみて下さい。パフォーマンスが大変軽くなっております。

先程ご説明致しました通り、ユーザーの使用していない時、スクリーンセーバーになっている時にウイルススキャンしたり、起動を早めるために色々な不必要なファイルを削除したりしております。ユーザーがパソコンを使っている時は、出来るだけ負荷をかけないということを念頭においております。

実は世界最強・最軽量は、たまたまこうなった、というのではないのです。「ノートン」は本社アメリカで開発していますが、開発チームが毎年、パフォーマンスに関わるおおよそ 300 項目を必ず見直しているのです。ということはどういうことかということ、パフォーマンスを世界最速・最軽量にするというのが、開発の一つの目的となっているからです。日本でも沢山の調査を行いました。ユーザーからいただいた一番大きな声は、「じゃましないでくれ」ということでした。それがユーザーにとって効果があることでも、セキュリティソフトがパソコンにとって重いということは「嫌だ」ということです。

我々は、結果的に速くなりました、ということではなく、パソコンに「重い」とか「負荷がかかる」ということを避けるために開発リソースを費やし、それを毎年大きな目的にしております。独自の評価技術と多くのユーザーから色々な情報をいただいて保護技術をあげております。

第三者機関「AV-comparatives」、ここはオーストリアにあるセキュリティの効果を測る世界的権威機関ですが、ここでいろいろな調査・チェックした結果、シマンテックは、2009 年に最高評価である「プロダクト オブ イヤ 2009 ゴールド」を受賞しました。多くの人に利用していただいているので、我々は「質」ということでこのままずっと進歩して行きたいと思っております。

す。

最後になりますが、先程、無償のセキュリティソフトは、少し心配なところがありますよ、と説明させていただきましたが、「ノートン」は自信をもって世界最大規模の開発をしていると申し上げます。

色々のメーカーがありますが、私共は売上の13%を開発投資に充てております。マーケティングからすると、広告を打ち出せないという辛い面もありますが、毎年約800億円をかけて製品の開発、質の向上、ウイルスの解析等を行っております。ネット犯罪者がどのような手口でウイルスを仕掛けてくるのか、彼らも頭がいいので、その先をいく技術でブロックするのが大変重要になってきます。そういう技術開発に我々は一番お金をかけています。世界最大規模のセキュリティ情報網で24時間365日分析して、皆様をお守りしております。

先程も申し上げました通り、今後、アンドロイドやスマートフォンのセキュリティが重要になってきます。我々は新しいデバイスやパソコンだけではなく、家庭の中でもワイヤレスで繋がっているもの、例えばテレビ、パソコンと電子レンジなどのセキュリティが担保されているのかが、今不安材料になってきています。携帯端末等もそうですが、家庭の中で繋がっているデバイスを守っていくのが、今後の課題です。

現在開発途中のものに「ノートン everywhere」というものがあります。これは、パソコンだけ、スマートフォンだけ、というのではなく、ネットワーク全てに繋がっているものを守ることが出来ないかという構想です。こういう仕組みを先に先にシマンテックは模索しています。

セキュリティソフトを選んで頂く際に、我々の「ノートン」をお薦めする理由は、今までの説明の通りです。パソコンに対する負荷がどれくらいか、軽い方がいいのは当然ですし、個々の技術も重要です。アンドロイドのOSの脅威にも着目しているか等は、セキュリティ会社にとって非常に重要なことです。

セキュリティソフトで、聞いたこともない英語のメーカーのもので、アンドロイド向けのフリーソフトを見つけたとしても、盗難対策が入っているか、セキュリティだけではなく統括的なものが入っているか等十分に考慮して下さい。

【質疑応答】

会場からの質問

江戸川区の森谷と申します。ウイルスには困ったものですが、クラウドが登場して、これはよかった。クラウドを使えば、クラウドの中は専門家がセキュリティチェックをしてくれるだろうと思ったところ、なかなか上手くいかないようです。オンライン情報では、クラウドの中でこそウイルスが繁殖しやすいので、ネットの安全性に各メーカーも困っている、という情報がありました。技術的にクラウドの中ではウイルスの安全対策は解決したのでしょうか。まだ、解決したという情報はなかったようなのですが、いかがでしょうか。

風間 彩氏の回答

最近の「クラウド」という言葉ですが、基本的には、クラウドコンピューティングとか、サーバー上とか、ネットの上にある環境だと思います。他社で「クラウド」という名前をつけてセキュリティソフトを販売しているところもありますが、基本的にはインターネットの環境であったり、サーバーであったりする場合、企業向けのセキュリティソフトの中で解決しなければならない問題です。



「クラウド」というのがよくありますが、クラウド上にどういう情報が載っているかということの方が重要です。クラウド上に載っているものが単にブラックリストに載っている定義ファイルであれば、どこの会社でも提供出来るものであり、そこにはいつている情報がどれだけいいものであるかということが重要になります。

シマンテックとしては、一つのクラウドの例としては「ノートン 360」という、オンラインバックアップのついているものがあります。これはクラウドの一例だと思います。当然ですが、オンラインバックアップにいく場合は必ず全て「ノートン」でウイルスを検出してからでないとオンラインバックアップにはいきません。

あとは、暗号化の技術です。256 ビットの暗号化をやって安全な状態で保護しております。「クラウド」というだけで、セキュリティを担保されるものではありません。どの様なセキュリティソフトを使用するかということが問題であり重要です。問題が解決出来るか出来ないかは、使用するセキュリティソフトによるところが大きいと思います。

会場からの質問 2

私は「ノートン 360」を使用していますが、「ノートン」にも色々種類があるようですが、その違いを教えてください。

風間 彩氏の回答

「ノートン」には3種類があります。

- ① ノートン 360」はバックアップ機能やPC チューンナップというパソコンを積極的に軽くする機能等があり、一番包括的なものです。
- ② ノートンインターネットセキュリティ」は標準的なもので、バックアップは不要だけれど、インターネットの脅威やウイルスから守りたいというものです。
- ③ ノートンアンチウイルス」はご自分でファイアウォールをたてることができるような人のため、「アンチウイルス」という名前はついていますが、ネットの脅威はみていません。一番

ベーシックなものになります。

シニアの方には「ノートン 360」をお薦め致しますが、価格的には「ノートン 360」、「ノートン インターネットセキュリティ」、「ノートンアンチウイルス」の順になりますので、価格でお悩みの方には、「ノートンインターネットセキュリティ」がお薦めです。

会場からの質問3

私は「ノートン」を使用しておりませんが、「スパイウェア」について、自信のあるレベルで検知できているのでしょうか。

風間 彩氏の回答

「スパイウェア」はリスクのエリアになりますが、ブラインドをあけて人を監視するというソフトであり、非常にいいものと悪いものがあります。いいものとしては、監視ソフトとして使っているものです。悪質なものに対して高い検知力があります。セキュリティソフトには100%というものはありません。それはどこのメーカーさんでも同じです。100%というところがあったら気を付けたほうがいいです。というのは、色々な手口があるので100%という言い方はしません。先程申し上げて通り、第三者機関の評価でも、「スパイウェア」に関して非常に高い確率で検出していますのでご安心いただいてもいいのではないかと思います。

スマートフォンのご購入をお考えの方、また、通信費用がかかるので1台に絞ろうかなという方も増えているかと思います。現在、セキュリティソフトのベータ版を無料配布しておりますし、正式版は今春発売予定ですので、アンドロイドの対策にも関心を持って下さい。昨年12月末に1回、「ワールドサテライトビジネス」で取り上げられましたので、メディアも少しずつ「アンドロイド」は注意しなくてはいけない、ということは分かってきましたが、先程申し上げました通り、通信会社は積極的に情報を出しません。

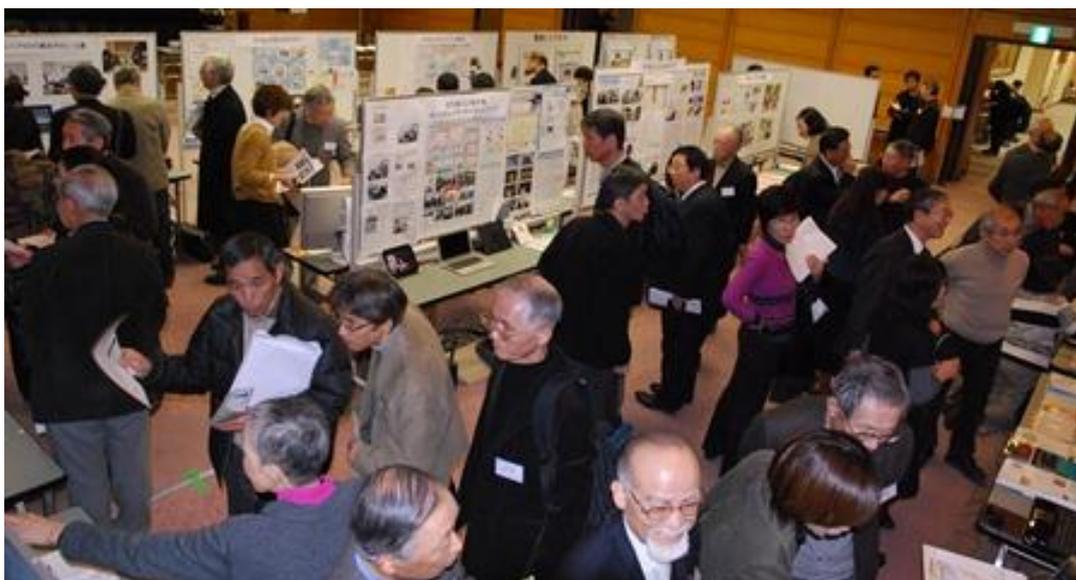
ウイルスの脅威やデバイスの紛失による情報の盗難等には注意していただければと思います。今日お話をさせていただいた内容は、最先端の情報となりますので、皆様のネットワークの方々にもお伝えいただければと思います。

本日はまだ少しこちらにおりますので、ご質問等ございましたら、是非お声をおかけ下さい。どうもありがとうございました。

■シニアネット交流広場

全国各地で活躍している 17 のシニアネット、3 つの企業および財団法人 JKA より、活動状況などの展示がなされた。2 月 18 日の 12 時より 14 時まで交流広場が開催され、多数のフォーラム参加者が訪れた。日ごろ顔を合わせることの無い者同士がフェース・ツー・フェースで意見交換し、相互交流を深め、それぞれの活動のための知見を得る場となった。

1. 会場風景



2. 各団体の展示内容-1



①東葛インターネット普及会



②NPO 法人仙台シニアネットクラブ



③一般社団法人 シニア社会学会



④向陽スポーツ文化クラブ・向陽 PC サロン



⑤マイクロソフト株式会社
富士通株式会社



⑥メロウ倶楽部

各団体の展示内容-2



⑦ ゆうゆうネット塾PCサロン



⑧NPO 法人 シニア SOHO 横浜・神奈川



⑨ NPO 法人シニア SOHO 普及サロン・三鷹



⑩NPO 法人 すぎと SOHO クラブ



⑪NPO 法人ちばインターネット普及会



⑫熊本シニアネット

各団体の展示内容-3



⑬ 財団法人 JKA



⑭ 株式会社デジブック



⑮ NPO 法人あびこ・シニア・ライフ・ネット



⑯ NPO 法人 湖南ネットしが



⑰ NPO 法人 沖縄ハイサイネット



⑱ NPO 法人シニアネット相模原

各団体の展示内容-4



⑱ NPO 法人シニアネットクラブ



⑳ NPO いぬやま e-コミュニティナーネットワーク



財団法人ニューメディア開発協会

3. シニアネット交流広場 出展団体

場所	団体名	URL
①	東葛インターネット普及会	http://www.geocities.jp/toukatsu_i/
②	NPO法人仙台シニアネットクラブ	http://www.zundanet.co.jp/seniornetclub/
③	一般社団法人 シニア社会学会	http://www.jaas.jp/
④	向陽スポーツ文化クラブ 向陽PCサロン	http://www.kscj.jp/ http://kscj.web.fc2.com/
⑤	日本マイクロソフト株式会社 富士通株式会社	http://www.microsoft.com/ja/jp/default.aspx http://jp.fujitsu.com/
⑥	メロウ倶楽部	http://www.mellow-club.org/
⑦	ゆうゆうネット塾PCサロン	http://business1.plala.or.jp/uunet-a
⑧	NPO法人シニアSOHO横浜・神奈川	http://svyk.jp/
⑨	NPO法人シニアSOHO普及サロン・三鷹	http://www.svsoho.gr.jp/
⑩	NPO法人すぎとSOHOクラブ	http://www.sugito.com/
⑪	NPO法人ちばインターネット普及会	http://www.tele-fit.com/
⑫	熊本シニアネット	http://ksn1.huu.cc/
⑬	財団法人JKA	http://www.keirin-autorace.or.jp/
⑭	株式会社デジブック	http://www.digibook.com/
⑮	NPO法人あびこ・シニア・ライフ・ネット	http://www.abikosln.org/NPO/
⑯	NPO法人湖南ネットしが	http://www.konan-net-shiga.jp/
⑰	NPO法人 沖縄ハイサイネット	http://www.e-haisai.net/
⑱	NPO法人シニアネット相模原	http://www.snsagami.org/
⑲	NPO法人シニアネットクラブ	http://snc.npgo.jp/
⑳	NPO法人いぬやまe-コミュニティネットワーク	http://www.inuyama.net

■クロージングセッション

総括

生部 圭助(NPO 法人自立化支援ネットワーク 理事長)

ご紹介いただきました自立化支援ネットワークの生部圭助でございます。

今回は、昨日来、長い時間大変ご苦労さまでした。そして本日最後まで参加していただきましてありがとうございます。昨日来、基調講演・特別講演・特別セミナー・パネルディスカッション、そして、本日の午前中のワークショップで活躍していただきました皆様に対してお礼申し上げます。今回予定しました行事が、滞りなく終わることができたことを大変うれしく思っております。

最後にご挨拶ということで、私自身といたしましては、非常に気が休まらない状態が昨日の朝から今まで続いているわけですが、私なりの感想を申してみたいと思います。

今回お集まりいただいた皆様がたは、ひとりのシニアとしてのお立場ですとか、シニアネットを運営されている責任ある立場の方、いろいろな立場の方がいらっしやっただと思います。私もひとりのシニアであり、NPO 自立化支援ネットワークの理事長ということで、一つの団体の責任者という立場を持っております。そういう立場で、2日間過ごさせていただきまして、感じましたことを手短かに4つほど申してみたいと思います。

実は、この絵を2年前もお示しいたしました。左上はシニア個人、右上こちらが地域および社会。個人のシニアは何らかの形で自分の生きがいか楽しみとか自己実現をしながら社会に貢献したいと思っております。こういう位置関係を描いてみました。シニアネットがあって、シニアの力を集結して地域と関わっていくという模式とご理解いただきたいと思っております。



1. 自立期間（健康寿命）の延長

私の感想の第1番目はシニア（個人）についてであります。高齢になって、知的、身体的に自立期間を延長したいとの希望は皆にあります。今回、秋山先生の話の中に自立期間の延長というお話がありましたが、これは昨年秋に、東北で開催されたフォーラムで、辻一郎先生が講演されて、似たようなお話を伺いました。シニアネットに参加して頑張っていると、自立期間を延長す

ることに役立つということが、まず私が感じました第1点であります。

2. ICTの技術の進歩や新しいサービスの活用

マイクロソフトの加治佐氏、吉田先生、シマンテックの風間さんのお話等々で、ICTの技術が進歩し、サービスが多様化され、我々の環境が急速に変わっているということを実感いたしました。その進化を享受して、自分の生活に生かしていくことはできることであります。さらに、この技術およびサービスという道具をアクティブに使って、社会に貢献していこうという気持ちに切り替えるべきではないか、そのためには、新しい技術やサービスへの対応力の向上が必要であるというのが、今回感じました2番目であります。

3. シニアは新しい公共の担い手

社会に地域に貢献をするという意識から、「新しい公共」というキーワードの担い手としてシニアネットが役立っていくべきではないかということを感じました。以前は私も社会や地域に貢献をするという気持ちでいたのですが、今回、シニアネット・ステージ2の委員会等を通して、シニアネットは、よりアクティブに、地域社会を作るというもっと積極的な立場が求められているのではないかと、それが日本を、世の中を変え、良くしていくということにつながるのではないかと、シニアネットには、今までパッシブだったものをもっとアクティブに、地域社会を創造するという積極的な立場が求められていると感じました。

4. サイバー・シニアネット・センターとしての「シニアネット交流広場」の活用

第4番目は、サイバー・シニア・ネットセンターに関してです。これを広く認知してもらい、これから広く使っていただくということでもあります。これからの10年の発展を考える時に、シニアネット間のネットワーク化が大きな要素となると思います。

サイバー・シニア・ネットセンターに関しましては、昨日も岡部理事長からのお話、特別講演の中での吉田先生と大熊さんのお話があり、先ほどワークショップのテーマ5番でもかなり突っ込んだ議論をしていただきました。

シニアネットのこれまでの10年を振り返った時に、各団体は、10年の間にそれなりに頑張ってきて大きくなって、幅を広げるという活動をしてきました。近くのシニアネットとコンタクトを持つことやってまいりました。これは「独立型」と言えると思いますが、これが、絆をもっと強くする「相互支援型」の活動もしてまいりました。

これからの10年を展望した時に、これまでのつながりが線であったものを面的なネットワークによるつながりになることが望まれます。

このような期待に応えるために、サイバー・シニアネット・センターとしての「シニアネット交流広場」が提案され、サイトが作られ、動き出せる状態となっております。「シニアネット交流広場」では、情報発信のサポート、情報共有のサポート、シニアネットの運営支援、シニアネット間のコミュニケーションの道具、などの役割ができるように設計されております。

これまでいろんな議論をしてまいりましたが、具体的な形としてできた今日の時点から、今後

の展開をどうするかが課題となります。

大熊さんが、短い期間でこのサイトの中にいろいろな情報を入れてくださいました。それをまず皆さんがご覧になって、こんなことができるのか、こんな役割があるのかということをご理解いただきたいと思います。

次に、これを利用する立場でお考えになっていただいて、お互いに有効に使って、全体として発展していけるようになることを期待しております。

このフォーラムが終わったあと、フォーラムの速報のホーム

ページや、ニューメディア開発協会のメルマガの中にも URL をお知らせします。まずは、よく見て、次に使ってみようかと考えていただきたいと思います。



また来年も、皆様とお目にかかることができて、1年前とこんなに変わったね、こんなによくなったね、とというようなことを議論できるような機会がありますことを期待いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011

付属資料

- シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011 案内状
- シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011 来場者用アンケート表
- シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011 来場者用アンケート調査結果
- シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011 参加者データ

シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011

◇シニアネット・さらなる飛躍を目指して◇

平成 23 年 2 月 17 日(木)～18 日(金)

日本青年館(東京都新宿区)

主催:財団法人 ニューメディア開発協会 (<http://www.nmda.or.jp>)

現在、我が国は 65 歳以上の老年人口が約 2946 万人、人口比率で 23.1%となっており、71 歳以上が 11.2%を占めています。さらに 20 年後には、65 歳以上の人口が 31.8%を占めるであろうと予測されており、高齢化が進みつつあります。

高齢者が数の上でメジャーとなる時代になり、高齢者が社会の主役として、新しい文化形成の担い手としてさまざまな形で活躍されることがますます重要となって参ります。そこでは、高齢者の方々自身の意識や生活様式等自らの生き方を変えていくことが大切になっていくのではないかと思います。

そうした中、好きな ICT を生かして充実したシニアライフをおくりたい、そして少しでも社会のために役に立ちたいとする高齢者同士が集う「シニアネット」が各地にあって、高齢者への ICT 講習を行ない、長年培ってこられた知見・ノウハウや ICT を駆使して地域に還元し、仲間と共に楽しく、生き生きと、地域に根差したさまざまな活動を展開しております。

シニアネットは、高齢者に“地域デビュー”の機会をもたらし、シニアライフを豊かで楽しいものにするなど、高齢者の生きがいの創出に大きな役割を果たしております。そして、少子高齢社会にあって、高齢者の持つ豊かな知識・技術・経験等は、自治体等と協働(コラボレーション)することで、地域の情報化促進はもとより、街づくり、地域振興等に大きく貢献するものであります。このようにシニアネットは、高齢者にとっては勿論、自治体・企業の方にとっても重要な組織であると言えます。

当協会は、旧通商産業省(現経済産業省)が提唱された「メロウ・ソサエティ構想」の実現を目指すにあたり、こうしたシニアネットの活動は極めて重要で、欠くべからざるものと認識し、シニアネットを強力なパートナーと位置づけ、連携を強化して参りました。さらに、シニアネットが全国津々浦々、至る所にあつて、高齢者が生き生きと活躍している、そうした姿を創出していくことが急務と考えております。

その為、シニアネット普及・拡充を図るべく、これまで経済産業省や財団法人日本自転車振興会(現財団法人 JKA)のご指導、ご支援を得る中、シニアネット諸団体等と協力しあつて「シニアネットフォーラム 21」を全国で開催して参りました。

この度は、シニアネットの活動 10 年目の節目をむかえるにあたり、「シニアネット・さらなる飛躍を目指して」と題し、「シニアネットフォーラム 21 in 東京 2011」を東京で開催することにし、シニアネットのより一層の普及と活性化を図ることに致しました。

既にシニアネットに加わつて活動されている方々は勿論、「地域デビューをしてみたい…」「シニアネットに参加したい…」「何か地域のために活動してみたい…」等々お考えの高齢者や団塊世代の方、そして「高齢者と協働して施策や事業に取り組みたいが…」とお考えの自治体や企業の関係者の方など、幅広い分野の方々にご参加頂き、熱い議論と交流を通して、シニアネットのあり方を考え、活力ある高齢社会の創出につながる有意義なものにしていきたいと切望しております。そして、参加された皆様のご発展につなげて頂ければと思います。

このフォーラムがきっかけとなつて、シニアネットの普及・拡充と活性化が一層加速され、高齢者の充実したシニアライフや豊かな高齢社会の構築に貢献できれば、これに勝る喜びはありません。

多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

開催概要

日時 平成23年2月17日(木) 10:30～17:15
 18日(金) 10:00～16:15
 (懇親会 17日(木) 17:30～19:30)

会場 日本青年館
 〒160-0013
 東京都新宿区霞ヶ丘町7番1号

主催 財団法人ニューメディア開発協会
 後援 経済産業省(予定)

協力 株式会社 シマンテック
 NPO 法人 自立化支援ネットワーク
 株式会社デジブック
 マイクロソフト株式会社 (五十音順)

定員 約200名

参加費 無料

参加対象 ・シニアネットへの参加や新規設立等
 シニアネットに関心のある方
 ・シニアネットのメンバーの方
 ・団塊の世代の方
 ・シニア情報生活アドバイザーの方
 ・自治体で高齢者問題やコミュニティ
 ビジネス、NPO 活動推進をご担当の方
 ・企業で社会貢献、シニアマーケティング、
 バリアフリーなどシニア向け商品・サービ

ス

の企画開発等に携わっておられる方
 ・コミュニティ・ビジネスやNPO 活動に取り組
 んでおられる方 等々

【参加申し込み先 / お問い合わせ先】

シニアネットフォーラム21 事務局
 〒231-0012 横浜市中区相生町1-3
 (株)ソフトジャック(担当:安藤、中村)
 TEL:045-222-6220 (080-5540-0164)
 FAX:045-222-6221
 e-mail: idn-snf@NPO-idn.com

申込方法

下記ウェブサイトへアクセスして頂き、お申込み下さい。
 URL: <http://www.NPO-idn.com/snf21-2011tokyo/annai/>
 検索キーワード: シニアネットフォーラム21 2011

FAXまたは郵送でのお申し込みの場合

同封の参加申し込み用紙に必要事項をご記入の上、FAXまたは郵
 送にて「参加申し込み先」までお送り下さい。

申込締切:平成23年2月4日(月)(郵送の場合、当日消印有効)

定員に達した時点で締め切らせていただきますのでご了承下さい。
 申し込み締切り後、「参加証」をお届け致します。

懇親会 どなたでもお気軽に、ご参加下さい。

新しい出会いをつくり、お互いの親交を深めて頂ける場です。ご
 参加頂いた皆様同士、親しく、そして楽しくご歓談頂きながら、有
 意義なひとときをお過ごし下さい。どうぞ、どなたでもお気軽にご
 参加下さい。

- 会場 : 日本青年館 4F 宴会場『アルデ』
- 会費 : 5,000円

ご昼食 初日のお昼には、お弁当をご用意致します。
 どうぞご利用下さい。

- 料金 : 1,100円

懇親会・ご昼食をご希望の方は、事前に下記口座に所定の
 金額をお振込みください。尚、振込手数料はご負担下さい
 ますようお願い申し上げます。

お振込み先 三菱東京UFJ銀行 四谷支店 普通口座
 口座番号:0091784
 「特定非営利活動法人
 自立化支援ネットワーク」

お振込み期限 :平成23年2月4日(月)



- JR 信濃町駅より徒歩9分
- JR 千駄ヶ谷駅より徒歩9分
- 地下鉄銀座線 外苑前駅3番出口より徒歩7分
- 地下鉄大江戸線 国立競技場駅A2出口より徒歩7分

※徒歩の方は-----線に沿って下さい。

日本青年館へのご案内

- JR 信濃町駅より徒歩9分
- JR 千駄ヶ谷駅より徒歩9分
- 地下鉄銀座線 外苑前駅3番出口より徒歩7分
- 地下鉄大江戸線 国立競技場駅A2出口より徒歩7分

※徒歩の方は地図の点線に沿ってご来場下さい。

※会場及びその周辺は駐車場が少ないため、
 当日は公共の交通機関をご利用下さい。
 ※車でのご来場はご遠慮いただきますよう、
 お願い致します。

プログラム

2月17日(木) 日本青年館

10:00～10:30	受付	
10:30～10:45	開会 オープニングセッション	・主催者挨拶 岡部 武尚(財団法人 ニューメディア開発協会 理事長) ・来賓挨拶 経済産業省 商務情報政策局(予定)
10:45～12:00	基調講演 1	「シニアの更なる飛躍を期待する」 秋山 弘子氏 (東京大学高齢社会総合研究機構 執行委員 特任教授)
12:00～13:00	休憩(昼食)	
13:00～14:00	基調講演 2	「テクノロジーの進化と新たな展開」 加治佐 俊一氏 (マイクロソフト ディベロップメント株式会社 代表取締役社長 兼 マイクロソフト株式会社 業務執行役員 最高技術責任者)
14:00～14:40	特別講演	[シニアネットの2010年代の飛躍に向けて ～10年の節目に将来を展望する～] 吉田 敦也氏(徳島大学 大学院教授、地域創生センター長)
14:50～17:15	パネルディスカッション	シニアのパワーアップとシニアネットの更なる飛躍！ ・コーディネーター 吉田 敦也氏(徳島大学 大学院教授、地域創生センター長) ・パネリスト(五十音順) 井上 文雄氏(NPO 法人 仙台シニアネットクラブ 理事長) 斎藤 富士夫氏(NPO 法人 湖南ネットしが 理事長) 佐々木 敏夫氏(NPO 法人 あびこ・シニア・ライフ・ネット 理事長) 助川 泉氏(ダイヤネット 代表) 高橋 克司氏(NPO 法人 とかちシニアネット 理事長)

2月17日(木) 日本青年館 4F 宴会場『アルデ』

17:30～19:30	懇親会	
-------------	-----	--

プログラム

2月18日(金) 日本青年館

9:30~10:00	受付	
10:00~12:00	ワークショップ	<p>【テーマ1】 「社会に目を向けた自己実現へ」 課題提供者:小池 達子氏(メロウ倶楽部 元会長) コメンテーター:斎藤 富士夫氏(NPO 法人 湖南ネットしが 理事長)</p> <p>【テーマ2】 「ICTを学び地域を活性化させる」 課題提供者:森田 出氏 (シニアネット水戸 会長 茨城 NPO センター・コモンズ) コメンテーター:助川 泉氏(ダイヤネット 代表)</p> <p>【テーマ3】 「コミュニティ・ビジネスを創出する」 課題提供者:杉浦 裕樹氏 (NPO 法人 横浜コミュニティデザイン・ラボ 代表理事) コメンテーター:吉田 敦也氏 (徳島大学 大学院教授、地域創生センター長)</p> <p>【テーマ4】 「企業・行政との協働で地域に活力を」 課題提供者:中村 俊二氏(宇治市総務部次長 兼 総務課長) コメンテーター:井上 文雄氏 (NPO 法人 仙台シニアネットクラブ 理事長)</p> <p>【テーマ5】 「シニアネット間の交流による相互支援」 課題提供者:中西 建策氏(NPO 法人 おおさかシニアネット 理事長) コメンテーター:高橋 克司氏(NPO 法人 とかちシニアネット 理事長)</p>
12:00~14:00	シニアネット交流広場 休憩(昼食)	シニアネットの成果展示による相互交流の場
14:00~15:00	特別セミナー	「進化するICTを安全に使っていただくために」 風間 彩氏(株式会社シマンテック コンシューマ事業部門 リージョナル プロダクト マーケティング、シニアマネージャ)
15:10~16:10	ワークショップ発表	各テーマの討議内容発表(発表者:各コーディネーター)
16:10~16:15	クロージングセッション 閉会	「総括」 生部 圭助氏(NPO 法人 自立化支援ネットワーク 理事長)

実施予定プログラム

2月17日(木)

基調講演 1(10:45~12:00)

「シニアの更なる飛躍を期待する」

秋山 弘子氏

(東京大学 高齢社会総合研究機構 執行委員 特任教授)

我が国の高齢化は急速に進み、2055年には総人口の41%が65歳以上になると見込まれています。シニアのあり方がこれからの社会を変えていく、と言っても過言ではありません。シニアが主役になって社会で活躍することがますます重要となって参ります。

そうした中、多くのシニアが「シニアネット」に集い、ICT講習などをはじめボランティア活動に邁進し、豊かで充実したシニアライフを目指しております。シニアネットは、このようなシニアの生きがいづくり、地域の振興に重要な役割を果たしています。「シニアネット」は、大変有意義な組織であり、シニアが主役で活躍するために、その普及拡大が急務であります。

高齢化社会におけるシニア個人の人生設計というミクロな課題や社会システムに関するマクロな課題に取り組んでおられる学識経験者に、シニアは今後、どう生きるべきか、シニアの社会参加・市民活動の意義などについて語っていただきます。

基調講演 2(13:00~14:00)

「テクノロジーの進化と新たな展開」

加治佐 俊一氏

(マイクロソフト ディベロップメント株式会社 代表取締役社長

兼 マイクロソフト株式会社 業務執行役員 最高技術責任者)

高度情報化社会が進展する中、ICTはますますシニアの生活に深く関わってきております。シニアにとって、パソコンをはじめとする情報機器、インターネットや電子メールの利活用は今やシニアライフを更に豊かにするものとして日常生活に欠かせない存在になってきております。

そこで、ICTの最前線でご活躍されている専門家より、テクノロジーの進化と新たな展開を紹介していただき、急速な発展を続けるICTがシニアの生活にいかなる影響をもたらすのか、そしてシニアライフにいかなる夢をもたらすのかを展望していただきます。

特別講演(14:00~14:50)

シニアネットの2010年代の飛躍に向けて ～10年の節目に将来を展望する～

吉田 敦也氏(徳島大学 大学院教授、地域創生センター長)

我が国にシニアネットが誕生してから10年余りが経過し、古くから活動されている多くのシニアネットが創立10周年を迎えました。この間、シニアへのICT普及等地域の情報化や活性化に大きな成果を挙げて参りました。これからはシニアパワーが社会を牽引し、変えていくことが期待され、このような状況の下に、シニアネットもまた進化することが求められております。

そこで、シニアネット等市民活動に大変造詣が深く、自らもシニアネットの責任者としてその設立や運営に関わるなど実証的な研究活動も行ってきておられ、この分野の第一人者であります学識経験者より、この10年を振り返り、新しい時代に相応しいシニアネットのあり方について展望し、この後に開催されるパネルディスカッションに対する問題提起をして頂きます。

パネルディスカッション(14:50~17:15)

【テーマ】シニアのパワーアップとシニアネットの更なる飛躍を！

(コーディネーター)

吉田 敦也氏(徳島大学 大学院 教授、地域創生センター長)

(パネリスト・五十音順)

井上 文雄氏(NPO 法人 仙台シニアネットクラブ 理事長)

斎藤 富士夫氏(NPO 法人 湖南ネットしが 理事長)

佐々木 敏夫氏(NPO 法人 あびこ・シニア・ライフ・ネット 理事長)

助川 泉氏(ダイヤネット 代表)

高橋 克司氏(NPO 法人 とかちシニアネット 理事長)

我が国にシニアネットが誕生して以来、10年余りが過ぎ、この間多くのシニアネットが全国に誕生し、各地で地域の活性化や情報化促進等有意義な活動を展開し、大きな成果を収めてきております。少子高齢社会だからこそ、シニアが主役となって地域を盛り立てて行くことが求められている中、多くのシニアが集う「シニアネット」が、その牽引役を担うことが期待されております。

この時期に、過去の10年を振り返り、これからの10年におけるシニアネットのあり方について議論することは極めて意義のある重要なこととであります。

今回は、長期間にわたって各地で活躍されているシニアネットの代表者にお集まりいただき、これまでの経緯を振り返り、次の10年に向けて、シニアは、そして「シニアネット」はどう変わり、どう進化すべきか大いに論じて頂きます。

ワークショップ(10:00~12:00)

【テーマ1】「社会に目を向けた自己実現へ」

課題提供者:小池 達子氏(メロウ倶楽部 元会長)

コメンテーター:斎藤 富士夫氏(NPO 法人 湖南ネットしが 理事長)

多くのシニアは、地域での活動を通して、シニアライフを豊かで実りあるものにしたいと切望されています。それを実現する場としてシニアネットは大きく期待され、その役割を果たして参りました。

多くのシニアがシニアネットに参加し、生き生きと活動できる魅力あるシニアネット像を皆で考え、実現させていくことは意義深いことと思います。

そこで、我が国のシニアネットの老舗であり全国ネットで活動を続けております「メロウ倶楽部」の元代表より、団体として、また個人としてのお話しいただき、シニアが喜んで参加する魅力あるシニアネットとはどのようなものか、今後の姿を探って参ります。

【テーマ2】「ICTを学び地域を活性化させる」

課題提供者:森田 出氏(シニアネット水戸 会長 茨城 NPO センター・コモンズ)

コメンテーター:助川 泉氏(ダイヤネット 代表)

シニアネットは、シニア情報生活アドバイザーの養成やICT講習をとおして、地域社会の情報化、とりわけシニアの情報リテラシー向上を促進し、社会に活力をもたらしております。

これまでの様々な活動によりシニアのICT人口は年々増加しているとは言うものの、残念ながらまだまだ十分とは言えません。シニアネットならではのきめ細かな教え方や仲間同士で楽しく、気楽に学び合える雰囲気をつくるのが、ICT普及に必要な不可欠な存在であります。

シニア情報生活アドバイザーの養成を軌道に乗せ、自治体との協働をはかり、活動を展開しようとしている、「シニアネット水戸」および「茨城 NPO センター・コモンズ」の活動の実情を紹介していただき、シニアへのICT普及はこれからどうすればよいか、より良いICT講習の方法等も含め、全員で考えていきたいと思っております。

【テーマ3】「コミュニティ・ビジネスを創出する」

課題提供者:杉浦 裕樹氏(NPO 法人 横浜コミュニティデザイン・ラボ 代表理事)

コメンテーター:吉田 敦也氏(徳島大学 大学院教授、地域創生センター長)

永年培ってきた知識・経験・ノウハウや知恵を生かして社会の役に立ちたい、出来る限り生涯現役でいたいというシニアの期待があります。そうしたシニアの強い意向を反映して、コミュニティ・ビジネスを追及する「事業型」のシニアネットが増えつつあります。厳しい世情のなかで、こうした「事業型」シニアネットへの関心はますます高まっていくものの、その実現に高い壁を感じているシニアネットも多くあります。

そこで、「事業型」シニアネットとして多方面の活躍をしておられる「横浜コミュニティデザイン・ラボ」の具体的な活動をとおした問題提起と実践に向けた提言をお話して頂き、参加者全員で「事業型」シニアネットやコミュニティ・ビジネスへの取り組み方について考えて参ります。

【テーマ4】「企業・行政との協働で地域に活力を」

課題提供者:中村 俊二氏(宇治市総務部 次長 兼総務課長)

コメンテーター:井上 文雄氏(NPO 法人 仙台シニアネットクラブ 代表)

多くのシニアネットは自ら持てる力をシニアのために、地域のために何かお役に立ちたいと活動を展開しています。シニアネットがその活動をとおして社会に貢献しようとするとき、関係自治体や企業等と協働(コラボレーション)して事業を展開することは極めて重要であります。

一方、自治体にとっても、電子自治体や地域の情報化促進等の諸政策を進める上で、シニアネットやシニアの豊富な経験や優れたノウハウを活用することは重要な要素となってきました。シニアネットの提案を政策として実現することも増えてきており、協働による相乗効果は計り知れないものがあります。

そこで、自治体として積極的に協働に取り組んでおられる「宇治市」から課題を提供していただき、参加されているシニアネットの皆さんと、コラボレーションを一層促進するための方策等を考えて参ります。

【テーマ5】「シニアネット間の交流による相互支援」

課題提供者:中西 建策氏(NPO 法人 おおさかシニアネット 理事長)

コメンテーター:高橋 克司氏(NPO 法人 とかちシニアネット 理事長)

シニアネットの活動がシニアを元気にし、地域に活力をもたらすものとしてこの10年間活動を継続してきました。この間、各シニアネットはそれぞれに努力を重ね成果を生み出してきました。

これからも、各シニアネットは当該団体のネットワーク化をはかり活動を活性化させることは重要ですが、これからの10年を展望するときに、シニアネット間のネットワークが重要になると思われます。また、このネットワークを介してシニアネットを支援する仕組みを構築することもシニアネットの活性化と進展に有効かと思われます。

「おおさかシニアネット」から課題を提供していただき、コメンテーターの意見もいただき、参加者全員でシニアネットのより良いネットワーク化のあり方について議論をしたいと思います。

実施予定プログラム

2月18日(金)

特別講演(14:00~15:00)

テーマ「進化するICTを安全に使っていただくために」

風間 彩氏(株式会社シマンテック コンシューマ事業部門
リージョナル プロダクト マーケティング、シニアマネージャ)

高度情報化社会が進展する中、ICTはますますシニアの生活に深く関わってきております。シニアにとって、電子メールやインターネットの利活用は今やシニアライフをより豊かにするものとして日常生活に欠かせない存在になってきております。

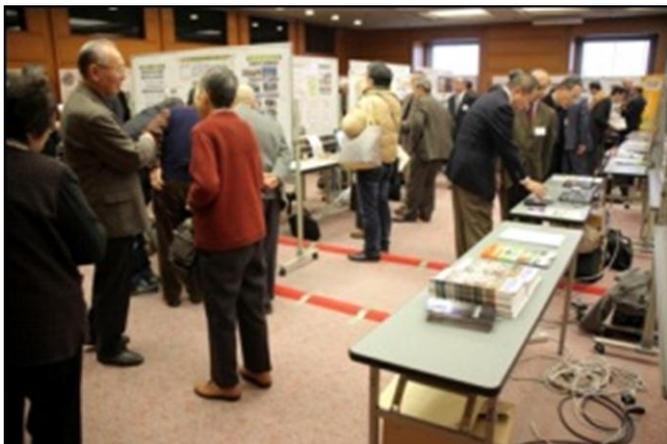
しかし、情報機器におけるウイルス、インターネットや電子メールを利用するときに外部よりの攻撃にさらされる機会も増加してきています。

そこで、日々、パソコンやインターネットの安心と安全に取り組んでおられる専門家から、セキュリティに関する最新の情報提供していただき、今後の技術動向を踏まえながら、安全にユビキタス時代のICTライフを送るための示唆をいただきます。

シニアネット交流広場(12:00~14:00)

全国各地で活躍しているシニアネットの活動状況を展示し、参加者同士フェース・ツー・フェースで意見交換することにより、相互交流を深めていただく場と致します。また、協力企業のお役立ちコーナーも設けております。これまで多くの参加者から大変ご好評を頂いており、皆様の今後の活動に必ずお役に立つものと確信いたしております。自治体や企業の方も是非、お立ち寄り下さい。

なお、全国のシニアネット等におかれましては、出展のご応募をお待ちいたしております。



毎回、約20のシニアネットや協力企業に出展していただき、参加者同士の熱い意見交換や相互交流が行われています

シニアネットフォーラム 21in 東京 2011 アンケート

財団法人 ニューメディア開発協会

より良いフォーラムにするためアンケートにご協力をお願い致します

1. どのプログラムが参考になったでしょうか。参考になったものに○をつけて下さい。

- イ. 基調講演 1
- ロ. 基調講演 2
- ハ. 特別講演
- ニ. パネルディスカッション
- ホ. ワークショップ (参加されたテーマ: 1 2 3 4 5)
- ヘ. シニアネット交流広場
- ト. 特別セミナー

2. 「シニアネットフォーラム 21in 東京 2011」に参加された動機についてお聞かせください。あてはまるものにひとつだけ○をつけてください。

- イ. ご自分のシニアネットでの活動に役立てるため
- ロ. シニアネットの設立に役立てるため
- ハ. シニアネットに参加するにあたって役立てるため
- ニ. シニアネットについて詳しく知るため (以下にその目的等をお聞かせ下さい)

.....
.....
ホ. その他 (出来るだけ具体的にお聞かせ下さい)
.....
.....

3. 「シニアネットフォーラム 21in 東京 2011」に参加されて、シニアネットという組織とその活動について、理解は深まりましたか。あてはまるものにひとつだけ○をつけてください。

- イ. シニアネットについての理解が非常に深まった
- ロ. シニアネットについての理解が深まった
- ハ. あまり理解が深まらなかった (下の欄に具体的に理由をお聞かせ下さい)

.....
.....
.....
ニ. 全く理解できなかった (下の欄に具体的に理由をお聞かせ下さい)
.....
.....
.....

7. 「シニアネット交流広場」(展示コーナー) はいかがでしたでしょうか。ご意見やご感想をお聞かせ下さい。

.....
.....
.....

8. 今後、シニアネットの活性化や普及拡大を図るため「シニアネットフォーラム 21」は、どうあるべきか、具体的なご意見をお聞かせください。

.....
.....
.....

9. 今後、シニアネットの活性化や普及拡大を図るため「シニアネットフォーラム 21」を含め、どのような活動を行う必要があるか、ご意見を具体的にお聞かせください。

.....
.....
.....

10. あなたご自身にとってシニアネットはどのような存在でしょうか。一言で結構です。お願い致します。

.....

11. あなたご自身のことについてお聞きします。

- ①性別： 男 女 ②年齢： 歳
③ご住所(市区町村まで)： 都・道・府・県 市・区・町・村
④所属(該当するところを○で囲んで下さい。職種は差し支えない範囲でお願いします)
イ. シニアネット(含むNPO法人)
ロ. NPO法人等各種団体、グループ(シニアネット系以外)
ハ. 行政機関(ご担当分野：)
ニ. 民間企業(ご担当分野：)
ホ. 自営業(職種：)
ヘ. どこにも係わっていない(個人)
ト. その他()
⑤パソコン経験年数：約 年
⑥生活の中でパソコンをどのように利活用していますか。また利活用したいですか。ご自由にお書き下さい。

.....
.....

⑦あなたはシニア情報生活アドバイザーですか(はい いいえ)

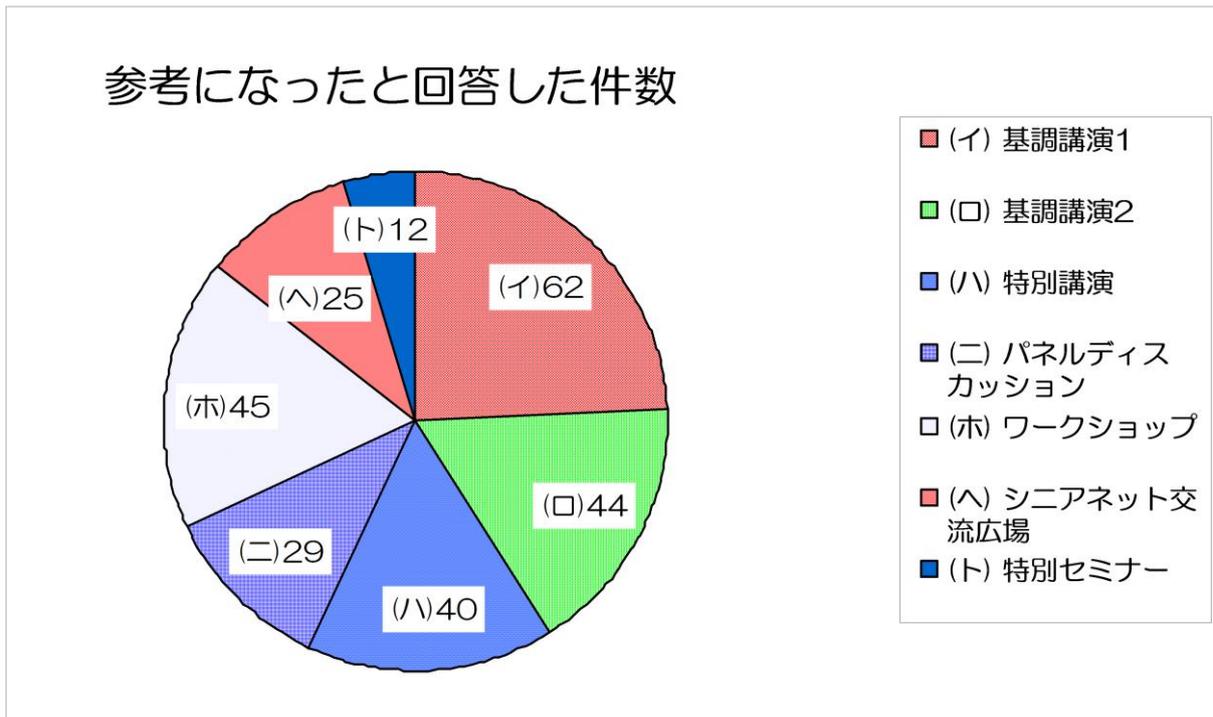
アンケートはこれでおしまいです。どうもご協力有難うございました。

シニアネットフォーラム 21in 東京 2011 アンケート集計結果

※ アンケート回収部数 94部 (男性 73部・女性 14部・未記入 7部)

【設問と集計結果】

1. どのプログラムが参考になったでしょうか。(アンケート1)(複数回答)



【基調講演 1】『シニアの更なる飛躍を期待する』

【基調講演 2】『テクノロジーの進化と新たな展開』

【特別講演】『シニアネットの 2010 年代の飛躍に向けて～10 年の節目に将来を展望する～』

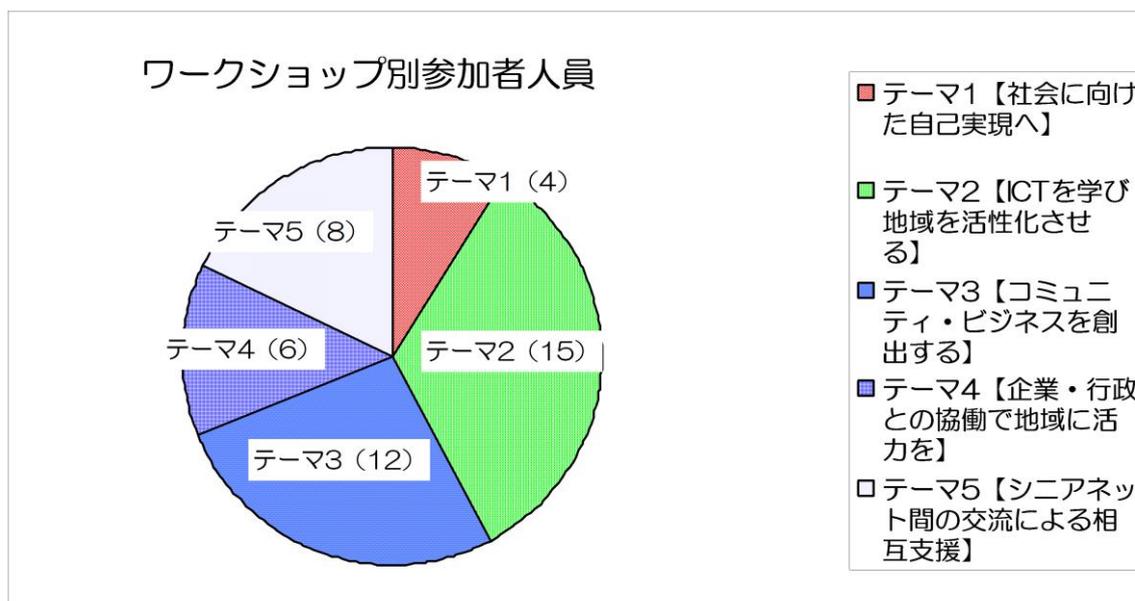
【パネルディスカッション】『シニアのパワーアップとシニアネットの更なる飛躍！』

【ワークショップ】

- テーマ 1 「社会に目を向けた自己実現へ」
- テーマ 2 「ICT を学び地域を活性化させる」
- テーマ 3 「コミュニティ・ビジネスを創出する」
- テーマ 4 「企業・行政との協働で地域に活力を」
- テーマ 5 「シニアネット間の交流による相互支援」

【特別セミナー】『進化する ICT を安全に使っていただくために』

ワークショップ（参加されたテーマ）への参加者人員（アンケート1のホ）
（アンケート提出記載者のみ記載）



テーマ1【社会に向けた自己実現へ】

課題提供者 小池 達子 氏（メロウ倶楽部元会長）

コメンテーター 斎藤 富士夫 氏（NPO 法人 湖南ネットしが理事長）

テーマ2【ICTを学び地域を活性化させる】

課題提供者 森田 出 氏（シニアネット水戸会長 茨城 NPO センターコスモ）

コメンテーター 金田 友和 氏（ダイヤネット副代表）

テーマ3【コミュニティ・ビジネスを創出する】

課題提供者 杉浦 祐樹 氏（NPO 法人 横浜コミュニティデザイン・ラボ代表理事）

コメンテーター 吉田 敦也 氏（徳島大学大学院教授・地域創生センター長）

テーマ4【企業・行政との協働で地域に活力を】

課題提供者 中村 俊二 氏（宇治市総務部次長兼総務課長）

コメンテーター 井上 文雄 氏（NPO 法人 仙台シニアネット理事長）

テーマ5【シニアネット間の交流による相互支援】

課題提供者 中西 建策 氏（NPO 法人 おおさかシニアネット理事長）

コメンテーター 高橋 克司 氏（NPO 法人 とかちシニアネット理事長）

2. 「シニアネットフォーラム21in 東京2011」参加された動機。（アンケート2）

イ. ご自分のシニアネットでの活動に役立てるため。 54人

ロ. シニアネットの設立に役立てるため。 0人

ハ. シニアネットの参加するに当たって役立てるため。 10人

ニ. シニアネットについて詳しく知るため。 19人

その目的等をお聞かせ下さい。

- ・ 地域情報ネット設立に対する情報を得るため。
- ・ 定年退職により、少し世の中を知りたく参加。
- ・ コミュニティ・ビジネスについて、参加の皆さんのお考えを聞きたかった。
- ・ これからシニアネットに加入して活動したい。その準備。
- ・ シニアのPC利用の現状、課題を知り、仕事に役立てるため。
- ・ 地域を活性化するためにICTをどう絡めて行くかを知るため。

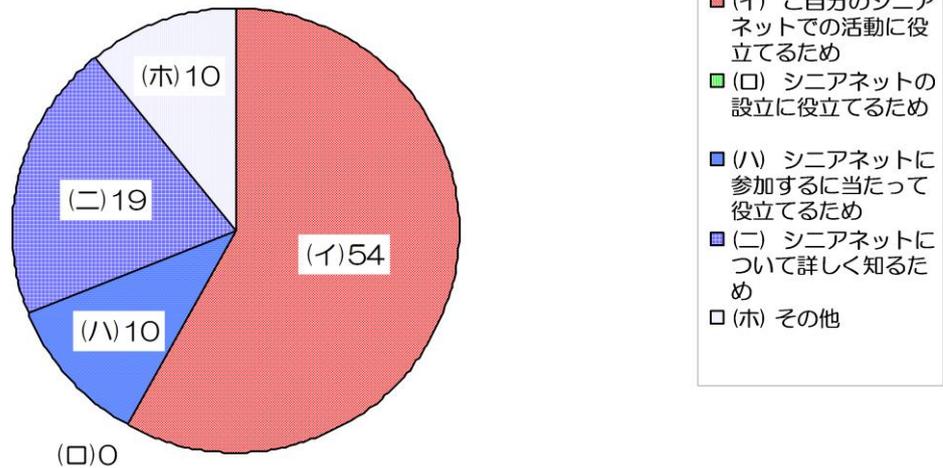
- ・ シニア情報生活アドバイザー取得の講座を受講するため。
- ・ シニア向け情報サイト運営にあたり参考にするため。
- ・ シニアというものの存在を知らなかったため。

ホ. その他 10人

出来るだけ具体的にお願いいたします

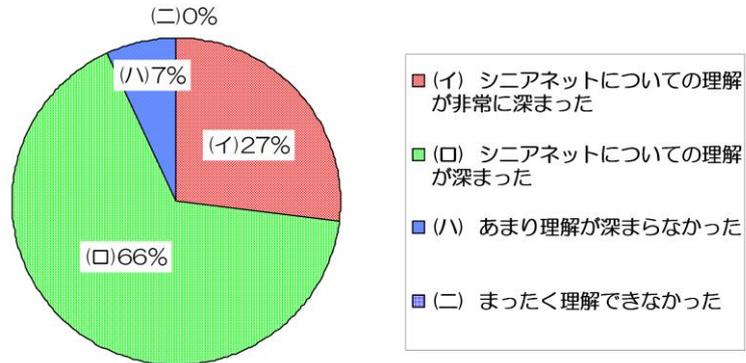
- ・ 先進例を知りたい。
- ・ 他団体との情報交換。
- ・ 新しい事を企画するきっかけとして毎年参加している。
- ・ 担当事業を拡大していく上で参考にするため。
- ・ これから始める高齢者向けサービスを考えるため。
- ・ ICT を活用してシニアがどのような活動をして、社会に役立っているか知るため。
- ・ シニアサービスに従事しているため、シニア生活実態等学ぶため。
- ・ 仕事の情報やアドバイスが得られればと思い参加。
- ・ PC やクラウドの動向を知るため。

参加の動機について (人数)



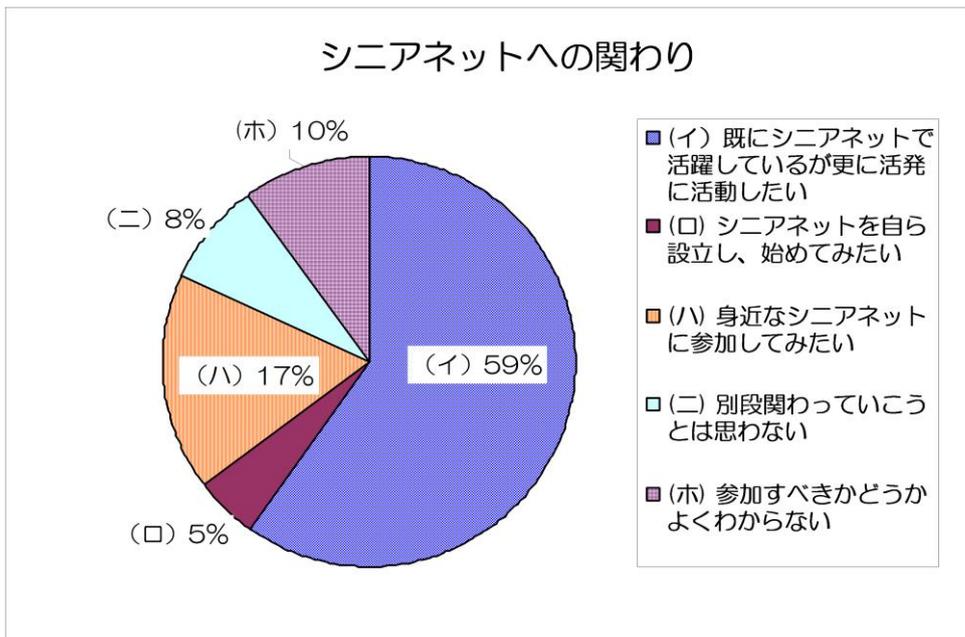
3. 「シニアネットフォーラム 21in 東京 2011」に参加されて、シニアネットという組織とその活動について、理解は深まりましたか。(アンケート 3)

シニアネットの組織と活動の理解度 (%)



- (ハ) あまり理解できなかった。具体的に理由をお聞かせ下さい。
- Web Online に対する考え方について不満であった。
 - シニアネットの定義が判らなくなってしまった。
 - 一日目に参加できなかったため。
 - 前回と同じ。
- (二) 全く理解できなかった。具体的に理由をお聞かせ下さい。
- ビジネスコミュニティの進行中のテーマと目標が見えなくなってしまった。

4. 「シニアネットフォーラム 21in 東京 2011」に参加されて、ご自身シニアネットにどのように関わっていきたいと思われましたか。(アンケート 4)



- (二) 別段関わっていいとは思わない。
具体的に理由をお聞かせ下さい。
- 参加しているがシニアネットが必要かどうか不明。
 - 状況によって考える。
 - 自身が参加ではなく、区民への情報提供等での参考にする。
 - 今日初めて参加、徐々に理解し参加できれば良い。
 - 自分のできる範囲でやっていきたい。
- (ホ) 参加すべきかどうか、よくわからない。
具体的に理由をお聞かせ下さい。
- 内部事情で難しい。
 - 得てつかめない。
 - シニアネットについてまだ理解できていないため。
 - シニアネットワーク作りなどハードルが高そう。今すぐは難しい。
 - チャンスがあり自分の経験が活かせるなら参加したい。
 - 時機を見てシニアネットに参加していきたいと考えている。
 - シニアネットの情報を広く発信する様、お手伝いしたいと思います。
 - 退職後ゆっくり考えます。
 - 参加の場合のメリットがまだ十分理解出来ていない。

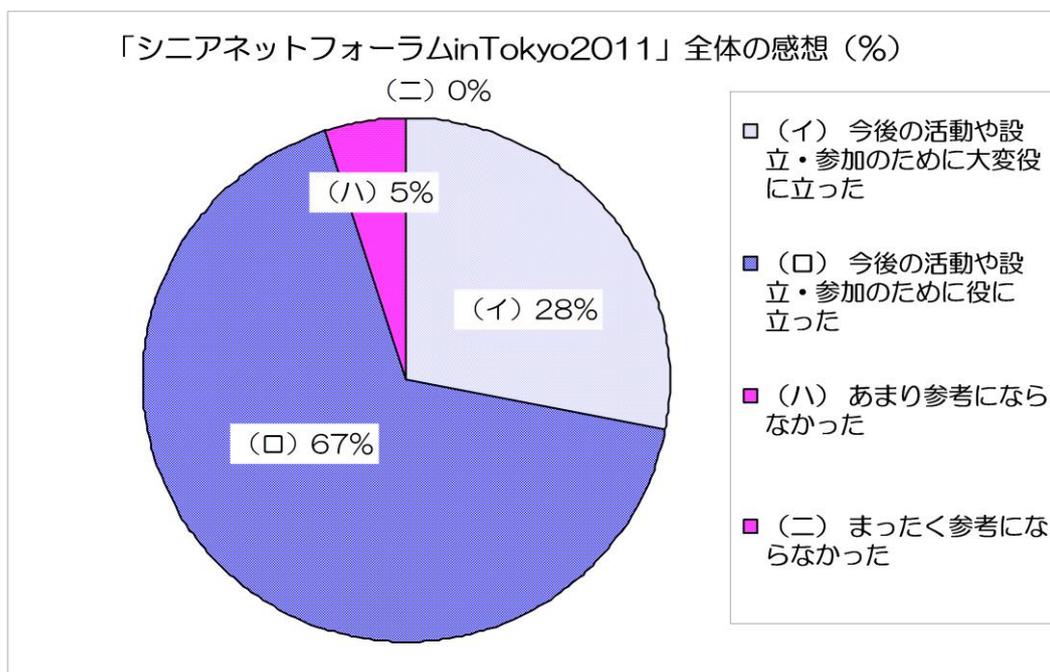
5. 「シニアネットフォーラム 21in 東京 2011」全体について、ご感想をお聞かせください。(アンケート5)

- | | |
|---------------------------|-----|
| イ. 今後の活動や設立・参加のために大変役立った。 | 24人 |
| ロ. 今後の活動や設立・参加のために役立った。 | 58人 |
| ハ. あまり参考にならなかった。 | 4人 |
| ニ. 全く参考にならなかった。 | 0人 |

(ハ) あまり参考にならなかった。

具体的に理由をお聞かせ下さい。

- ・ 2nd Stage に対する考え方がまとまらないまま、終わってしまったのが残念。
- ・ 自分が行動を起こすきっかけにならなかった。
- ・ どんなことが行なわれているかについて少しわかった。



6. 行政や企業関係者の方をお願いします。今後の、諸施策、諸事業を展開するにあたり、シニアネットとの協働（コーポレーション）をどのようにお考えでしょうか。(アンケート6)

- | | |
|-----------------------|-----|
| イ. 是非、協働したい。 | 7人 |
| ロ. 協働出来る場所があればしていきたい。 | 12人 |
| ハ. 今のところ、考えていない。 | 6人 |

シニアネットとの協働についてのご意見。

- ・ シニアネットにつて精査した上で検討したい。
- ・ 現在具体的な ICT での協働は難しいと思っておりますが、様々な法人様を参考にして、今後の方向性によっては、協働は十分に可能だと思います。
- ・ 同業種の交流の場を作り、協働が出来るように進めて頂きたい。

7. 「シニアネット交流広場」(展示コーナー) はいかがでしたでしょうか。

ご意見やご感想をお聞かせ下さい。(アンケート7)

- ・ 両日開いて欲しい。
- ・ もう少し展示期間を長くして欲しい。
- ・ 最新版の機能(クラウド他)を見せてくれたのは良かった。
- ・ 各シニアネットの活躍ぶりが理解できました。
- ・ もう少しスペースが欲しい。
- ・ もっと多く出品しても良いのでは。
- ・ 他のシニアネットの活動状況が良く解った。
- ・ 求職中なので主に仕事として今後どのように対処していけば良いのかを、聞かせて頂き情報収集することが出来た。
- ・ 新しい技術、シニアネットの方向を知る。
- ・ ipadなどで活動動画を展示するのが、これからのやりかたのようです。紙だけではインパクトがありませんでした。
- ・ 興味深い展示もありよかった。
- ・ 個別に聞けて、人脈が広がり良かった。
- ・ 実際の活動の様子が解り、説明もあったので参考になりました。
- ・ 良い雰囲気よかったです。
- ・ 各法人様の内容が理解し易かった。
- ・ アドバイザーの交流かネットの交流か良く解らない。
- ・ 地域での活動としては、参考になる事例もあった。
全体的には同じパターンの展示と感じた。
- ・ 各団体の活動が一目で見ることが出来、大変良かったと思う。
- ・ シニアネット毎の特徴を見ることが出来大いに参考にした。
- ・ 具体的な活動が可視化され、各団体の工夫も好印象。
- ・ 良かった。新しい知識が得られた。
- ・ 本当に楽しい催しでした。
- ・ 日本各地のシニアネットの活動情報を得ることが出来ました。
- ・ 他の会の活動内容が判り良かった。
- ・ 大変多くの情報と他団体との交流が出来て良かった。
- ・ 場所別に確保して、2日間通して展示できればなお良かった。

8. 今後、シニアネットの活性化や普及拡大を図るため「シニアネットフォーラム21」

はどうあるべきか、具体的なご意見をお聞かせ下さい。(アンケート8)

- ・ パネルディスカッションで、吉田座長のような考え方と進め方は、素晴らしかった。
今後もこのようなパネルディスカッションを続けられることを切に願う。
- ・ 住宅地・団地は高齢者社会になり、いろいろな問題をかかえています。
これの打開の一つの方策として、ICTを使っていったらどうかと思う。
- ・ 各シニアネットの活動状況、意見交換がためになる。
特に今回の司会(コーディネーター)の吉田氏の問題の掘り下げが良かった。
- ・ 開催する曜日が決まっているので、仕事上参加できない多くの人があります。
- ・ パソコンを活用して、生活を楽しくすることの提案。
- ・ 内容的には良いと思う。
- ・ 全国的シニアネット組織の拡大連携。
- ・ 次の世代の育成の為に、40代、50代への告知も必要かと思えます。
- ・ 企業でシニアサービスに従事している人と、シニアの交流の場もあると良い。
これだけのアクティブシニアと話せる機会は中々ないので。
- ・ ネットのTV電話を利用して、地方からの活動事例発表を期待したい。
- ・ 新しい情報を求めてやってきました。マイクロソフトの加治佐さんの講演は良かった。
- ・ 全国組織化。情報の共有化。ネットを利用すればそれほど予算は必要ない。

- もう少し意見交換が行なえるような時間を取り入れ、団体間のリアルなつながり等を造っていかねばと思います。
- 会員の拡大に努める。
- 現行のフォーラムの継続が前提。
- シニアネットを通じて社会貢献、特にシニア社会の高齢化が進むなかでのテーマを設定。（例えば生涯現役・生涯就労の共通性を持たせたら良いと思う）
- シニアを中心として講師や情報発信を進める団体と、直接一般シニアを対象にし現場で活動する団体の2種類の方が集まっている。分科会等でその二つの団体を区分してはどうか。
- 事例発表のセクションが欲しい。
- 市民、学術界、官庁、産業界が連携して、取り組んでいかなければ、どれが欠けても普及拡大は難しいと思います。
このような面でシニアネットフォーラム21に期待します。
- 特別なポータルではなく、既存のツールを利用したらどうか。作ることが目的化しているような印象がありました。シニアネットを名乗っていない同種団体にも目を向けてもいいのではないかと。
- ワークショップは、シニアネットがどうあるべきかを考えるのに良い。
参画型の企画ですが、コーディネーターをはじめ論点を明確にした上で、ワークショップを開催するのが良いのではないかと。
- 定期的を開催して下さい。
- フォーラムを定期的に継続して欲しい。
- 目的・目標をどこかで統一すべきでしょう。
- 社会に対して何が貢献出来るかが問題。つまり現在の社会の問題を捉えられているかと思う。これに対する活動が求められる。パソコンに囚われているのでは。
- シニアネットというものの周知の仕方。興味のある人とか、実際にやっている方しか情報が入っていないのではないかと考えます。
- より多くの実例を聞きたい。
- レベルが高いように感じました。
- 今後とも進めていただいて結構。
- 例えば「新しい公共」に対する取り組みなど、その年度で大きなテーマになりそうなものを特集的に取り上げて議論する場も作って欲しい。
- より多くの事例発表や、各団体が抱えている悩みなど、発表の場があると参考になる。
- 全国レベルでなく、地方でのフォーラムからスタートできないだろうか。
- 初めて参加し、内容が斬新だったのは予想外であった。第3の人生入り口は明るい光を感じる。
- シニアネットを活用している実践や紹介する場にして、これから実践するため参考にしたい。
- フォーラムに一度も参加されていない会の方を参加できるよう対策が必要なのは。
- シニアネットとの交流が出来る機会であり、今後もフォーラムを続けていただきたい。
- 秋山先生のような専門家の話をもっと聞きたい。あと2~3人。
- パネルディスカッションは長過ぎて散漫なように思う。

9. 今後、シニアネットの活性化や普及拡大を図るため「シニアネットフォーラム21」を含め、どのような活動を行う必要があるか、ご意見を具体的にお聞かせ下さい。(アンケート8)

- 自治会の総会等でシニアネット活動の成功例の紹介等よいのではと思う。
- 行政、企業との協働。
- 知名度アップの広報活動。
- 企業行政とのつながりを強めて、普及拡大を図るために、関わり方を考える必要があると思いますが、中々その足がかりが掴めない。

- ・ パブリシティへのアプローチ。活動の認知度（存在）を広める。
- ・ シニアネットの認知度を上げるべきだと思います。
- ・ 今回も偶然フォーラムの存在をしりました。情報発信をもっと行なってもらいたい。
- ・ 積極的な広報に努めるべき。
- ・ アドバイザーのHP で新技術他更に内容を充実。
- ・ 今後、若いシニア層を含めた討論の場が必要かも。
- ・ メディアの積極的な取材や報道がされるような運営があれば、更に認知が広がると思う
- ・ 市民、学術界、官庁、産業界の連携を推進して、役割を荷って欲しいと感じています。
- ・ ストリーミングによる活動内容配信（今回のセミナーでやっていただきかった）
アドバイザーのフォーラム（PC での）での情報交換。アドバイザーの働き場所の共有、シニアネットアドバイザーの外への働きかけ。活用セミナーなどの実施。
- ・ 新情報・新たな気付きの発見に大変良いフォーラムだと存じます。
是非今後とも続けていただきたい。持続的発展が出来るようお願いしたい。
外国人を呼んで、外国のシニアネットの状況を知ることが出来る機会があればと思う。
- ・ 秋山弘子氏のような活動されている方の講演を希望します。
- ・ ICT の今後の動向を。
- ・ 地方都市に拠点を作り、このフォーラムに参加できるようにしてもらいたい。
- ・ 都市部だけでなく、人口過疎地にも陽が当たるような活動になれば良いですね。
- ・ 自らPCをやろうとしない人に対して、バリアを低くする施策も必要だと思います。
- ・ あまり構えず皆がやっている事を集めて知ることかな。
- ・ 現在の社会の問題は、1.高齢化少子化。2.個人化・自己責任化。3.無縁化・ひきこもり化。シニアの問題は認知症状対策です。
- ・ 活動しようか迷っているシニアや、活動したいがどうすれば良いか分からないシニアへの周知。
- ・ 沢山の方が参加し、学習したことの報告会をもち、底辺を広げていく必要があるのではないかと思います。是非帰ったら報告会をもちます。
- ・ 準備も大変と思うが、現状ぐらいで良いのでは。
- ・ 情報の共有化と活用の容易化。
- ・ まだ、十分にシニアネットについて知られていないので、PR 活動が必要では。
- ・ 地方に出向いて、シニア情報生活アドバイザー向けの講座をどんどんやって欲しい。
- ・ 活動がお金に置き換えられるような仕事があると、より多くの方が活動に参加すると思います。目的型NPOとして収益の出る活動を推し進める必要があるのでは。
- ・ 新しいICT 機器（パソコンに限らず）の活用方法を紹介していただき、より効率的な方法も作って行きたい。
- ・ 事業型シニアネットがどんどん増えてきて、ボランティアでもお金を稼ぐ事にも抵抗がなくなっているのでしょうか。時代の流れを感じます。多分今後は事業型でないと発展は望めないような気がします。
- ・ 情報の共有化。

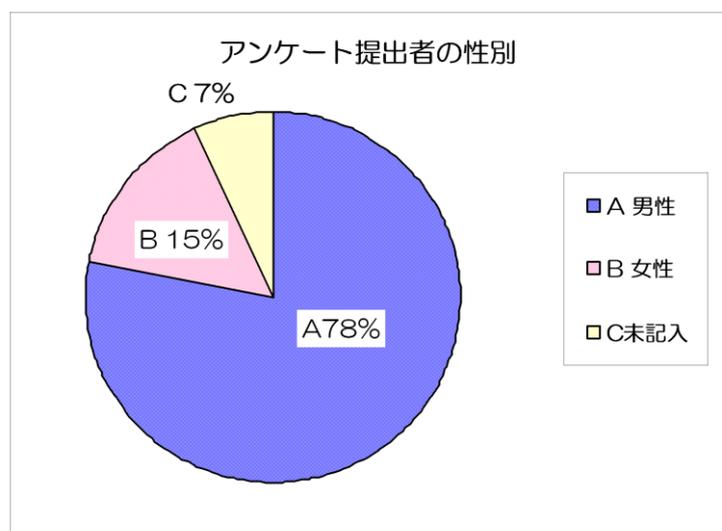
10. あなた自身にとってシニアネットはどのような存在でしょうか。一言で結構ですので、お願いします。（アンケート10）

- ・ これからの可能性。
- ・ 自分の退職後の活動選択肢の一つ。
- ・ 片田舎でひっそり暮らしている者にとって、社会や世界を覗く窓。
また、多くの友人とメール交換をするツール。
- ・ 他の団体との交流の場になる。
- ・ 教室へ来ると楽しい・交流の場づくり。
- ・ 今後の活動への一つの展望と考えます。
- ・ 生活環境の一部。

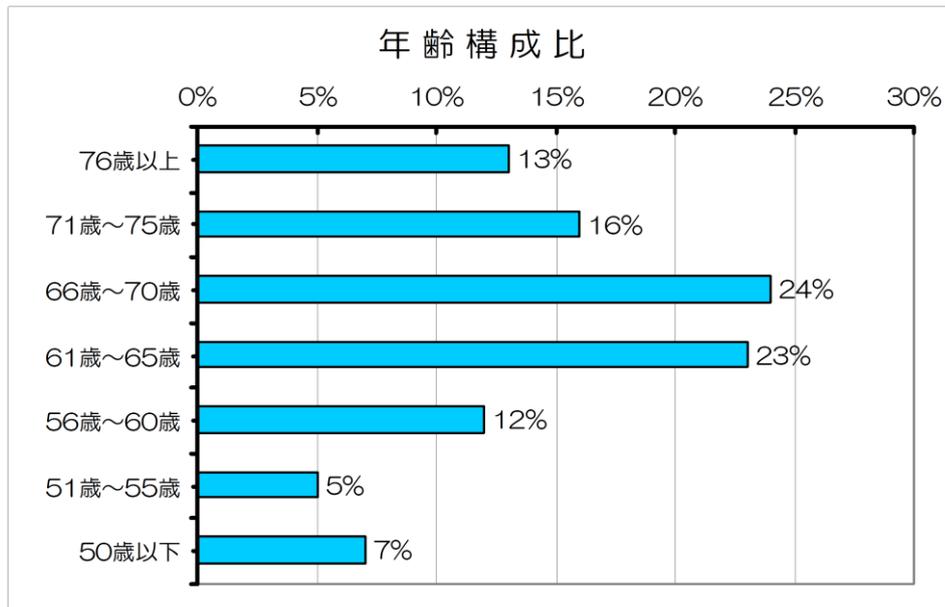
- 会がしている事はわかるが、個人としては何ら存在意義を感じない。
- 社会とのパイプ役である。
- 今後の社会参加へのツール。
- 初期の頃から参加させて頂いていますが、一昔の変化を実感しています。
- これからの可能性をまだ秘めている団体。
- 生甲斐の中の一部
- 自分の持っているスキルを伝えることが出来る良い機会である。
- シニアの社会生活への参画を支援する。
- 社会貢献を果たすことにより、社会参加して充実した人生を送りたい。
- 情報源。
- 勉強の場。人的交流の場。出来る範囲での社会へのお手伝い。
- 毎回新しい気付きを発見する機械です。
- 活動を通して、人とのふれあいを含め元気をもらってます。
- この活動も有用ですが、年齢に関係なく社会活動を続けたい。
- 生甲斐・喜び・宝物
- 元気が出そう。
- 同年代で社会貢献の意欲のある人たちのグループ。
- 分からない存在です。得体が分からない。
- 無くてはならない存在。
- 未知の領域ですが更なる拡大の可能性を秘めているもの。
- 生活の一部として継続させたい。
- 推進役。
- 仲間。人を繋げる。
- 自分の関心を実現する活動。
- 全国ネットワーク化すれば、大きなビジネスチャンスが生まれるでしょう。
- 自分の役割を探す道しるべ。他の人は何を知っているかの発見の機会。
- 自分を生かせる場。
- これから自分の生き方の参考とさせていただきたい。
- 生甲斐。

11. あなたご自身のことについてお聞きします。(アンケート11)

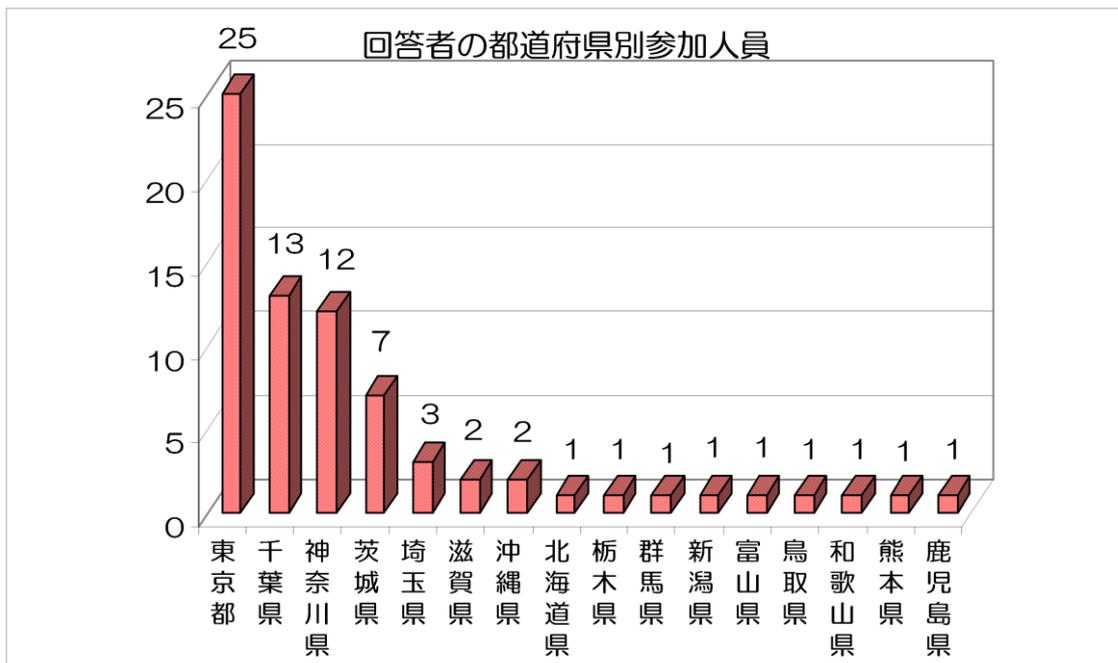
① アンケート回答者の男女別 (男性 73 名・女性 14 名・未記入 7 名)



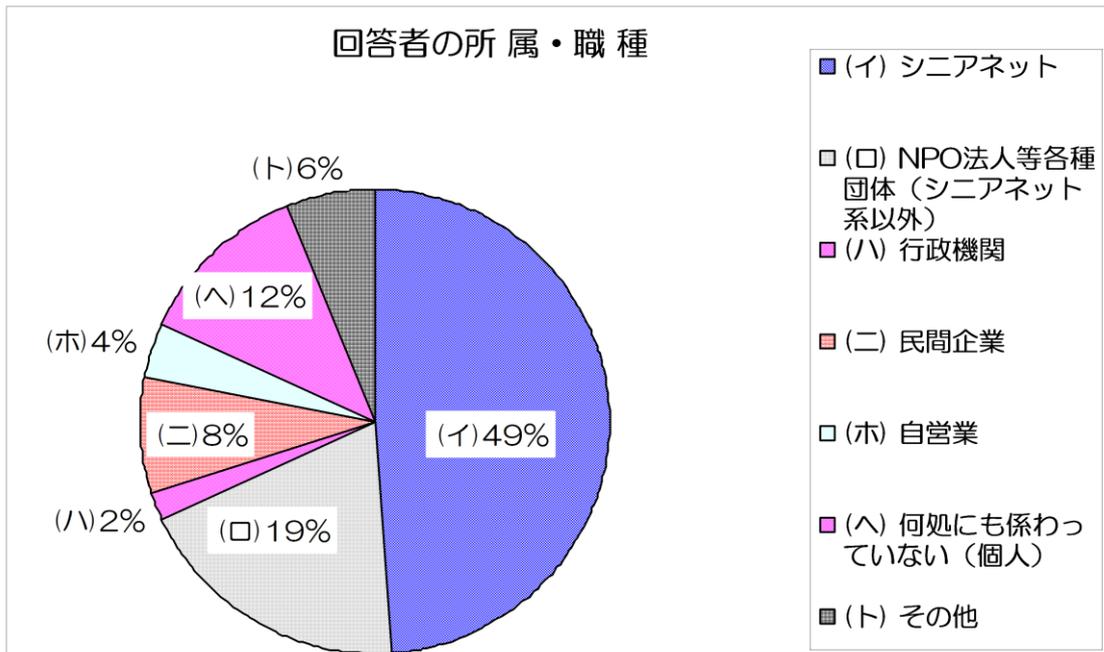
② アンケート回答者の年齢構成



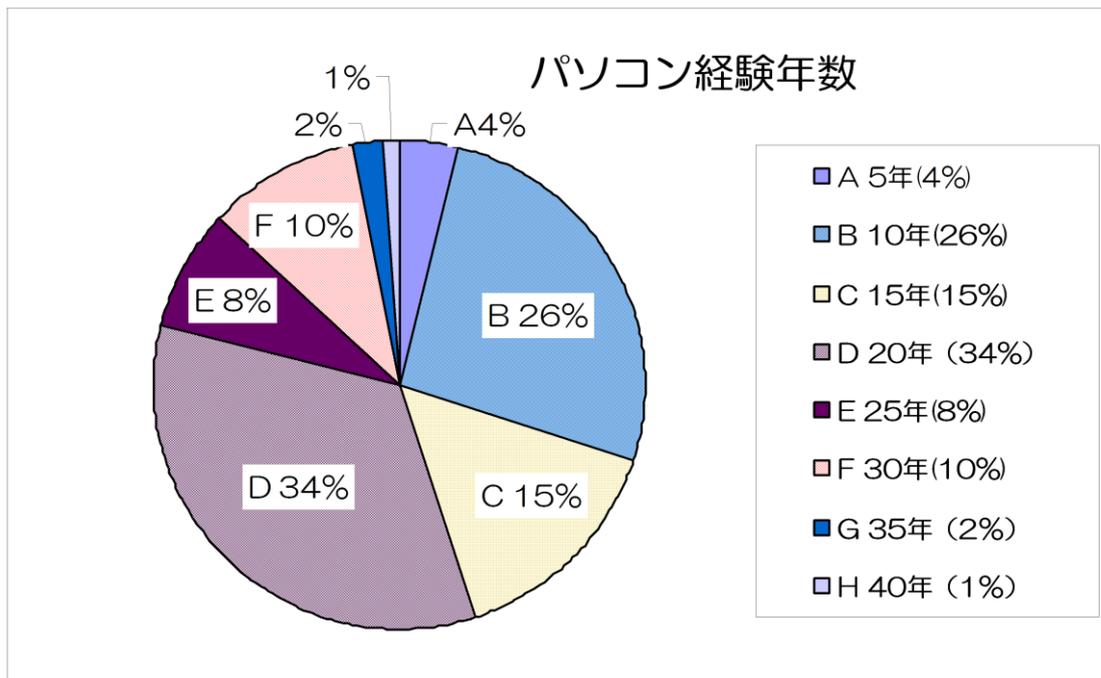
③ アンケート回答者の出身県



④ アンケート回答者の所属



⑤ アンケート回答者のパソコン経験年数

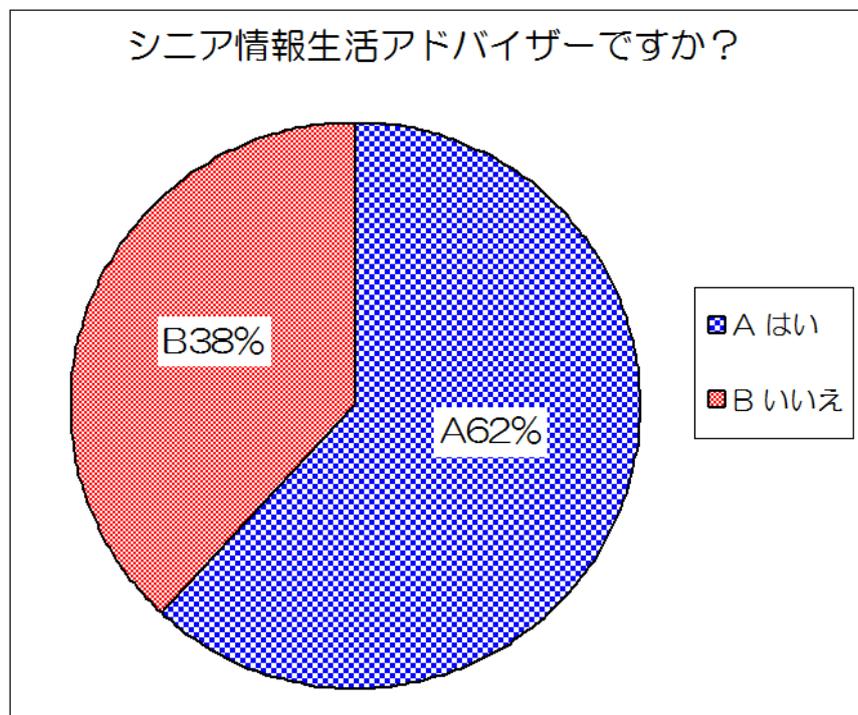


⑥ 生活の中でパソコンをどのように利活用していますか。また利活用したいですか。ご自由にお書き下さい。

- ・ 無し of 生活は考えられない。
- ・ 生活上の目的でパソコン（ICT）を利活用している。
- ・ 現在は Java で簡単なシステム（会計）開発。

- EXCEL でシニアが楽しめる作品作り。
- ・ インターネット情報検索・ブログ・動画視聴。
 - ・ メール・Web・ワード・エクセル・パワーポイントなど使用
 - ・ 日常生活に欠かせない道具。
 - ・ シニアネット情報・メール他
 - ・ 仕事と個人的な写真加工など。
 - ・ バンキング・証券。
 - ・ 生活の一部として意識せずに活用するコミュニケーションツール。
 - ・ 生きていく上で空気のようなもので、年賀状、暑中見舞い、メール等。
 - ・ メール・名刺・会計事務・報告書等。
 - ・ スカイプ。動画編集。ビデオ編集。
 - ・ ホームページ・趣味・仲間作り。
 - ・ パソコンを活用することにより、地域のシニアの方々と楽しさを共有している。
 - ・ パソコンを文房具のように使える、環境づくりに取り組みたい。
 - ・ 自分と家族の記録。
 - ・ 効率よくより便利な使い方を増やしていきたい。
 - ・ 日常生活の細部にまで関わり合ってきたので驚きです。
 - ・ シニアの方の指導に。パソコン講師のアシスタント。
 - ・ 高齢者との社会的つながりのパイプ役として活用していきたい。
 - ・ 極めて広範囲に活用しています。
 - ・ 音楽・プログラミング。

⑦ あなたはシニア情報生活アドバイザーですか。(はい・いいえ)



平成22年度 シニアネット構築研究会

『シニアネット・フォーラム21 in 東京 2011』

報告書

編集・発行

財団法人 ニューメディア開発協会

〒112-0014 東京都文京区関口一丁目43番5号 新目白ビル6階

発行日 平成23年年3月

